若宮宮田工業団地関係
埋蔵文化財調査報告

第 2 集

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群の調査

1980

福 岡 県 教 育 委 員 会

若宮宮田工業団地関係
埋蔵文化財調査報告

若宮町・宮田町所在遺跡群の調査

若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告 第２集

正　誤　表

頁	行	誤	正
目次１	7	小形彷製鏡	小形仿製鏡
2	8・11	汐井掛遺掛	汐井掛遺跡
6	3	186号土拡墓	186号土坑墓
6	6・7・8	太刀	大刀
7	9	第81図	第31図
本文１	4	丘　稜	丘　陵
1	13	本調書	本調査
3	3	丘稜部	丘陵部
7	5	小口	木口
9	7	鉄鏃がずかに	鉄鏃がわずかに
9	16	両小口	両木口
9	30	裾え	据え
10	1	小口板	木口板
10	15	棺内	棺外
11	1	小口板	木口板
11	19	両側枚	両側板
26	第35図	土壙墓	木棺墓
66	2・4	少片	小片
68	1	素環頭刀子，刀	素環頭刀子・刀
68	表６	186水棺墓	186木棺墓
71	5	徐いた	除いた
71	6	下半	中央
73	註１	異なるのを	異なるものを
74	1・2	葬身具	装身具
77	1	D186棺内	D186棺外
77	6	平縁片	縁部片
81	16	設明	説明
81	21	1.4m南	1.4m，南
81	23	小口	木口
82	4	推積	堆積
82	第107図	青庄色	青灰色
82	26	裾え	据え
85	11	裾え	据え
85	13	小口	木口
90	4	不整方長形	不整長方形
90	16・20	少片	小片
90	22	間隅	間隔
90	23	あった推定	あったと推定
93	4	汐井掛遺構	汐井掛遺跡
93	20	石蓋基	石棺墓
93	12・14	DI	DI
98	註１	得る，棺内法の主軸上	得る。棺内法の主軸長
99	23	左り	在り
100	2	S20場合	S20の場合
100	4	小口板	木口板
101	13	られ例	られる例
103	第122図	白佐原	臼佐原
104	8	掘田	堀田
104	33	田頭喬一	田頭喬
105	15	田頭喬一	田頭喬
107	24	により	より
107	32	白佐原	臼佐原
109	26	素環類	素環頭
110	1・3	掘田	堀田
112	4	掘田	堀田
112	29	未から三	トル
112	30	後漢	三
113	18	遂	逆
114	23	樋	桶
116	6	孤	弧
116	30	掘田	堀田
117	9	孤	弧
117	14	小型	小形
118	1・5・6 15・26・28	小型	小形
118	24	小蕨化	小形化
118	32	三角形式	三角型式
120	10	小型	小形
120	14	三角形式	三角型式
123	5	掘田	堀田

頁	行	誤	正
123	7・15 19・22	蒲鉾型	蒲鉾形
124	7	三日月型	三日月形
125	12	鞍	しおで
127	註1	立岩遺跡	立岩遺蹟
127	註6	田頭喬一	田頭喬
128	註38	樋田山	桶田山
129	註47	論攻	論攷
130	註④	④	⑤
130	註⑤	⑤	④
130	註⑯	水島稔夫	水島稔夫氏
131	註㉚	論攻	論攷
131	4・9	少片	小片
131	6	復元	復原
132	21	水晶玉10	水晶玉10の
136	2	方棺	方格
139	4	黒淡色	漆黒色
139	13・19	平縁	縁
139	24	平縁	斜縁
141	10	銅銅鏡	銅鏡
141	11	面径も	面径の
142	29	方棺	方格
143	註17	高倉洋彰	高島忠平
144	6	第図―1	第132図―1
148	28	樋田山	桶田山

頁	行	誤	正
図版	付・2・3	太刀	大刀
表17	8・40	掘田	堀田
表17	39	臼佐原	臼佐原

序

地域振興整備公団宮田工業団地造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査は，昭和51年度に始まり昭和54年秋に終了いたしました。工業団地は東西に走る九州縦貫自動車道の南北に沿って同一丘陵に造成されるため，両方の用地内にまたがって存在する遺跡が多く8地点17,700㎡について発掘調査を実施しました。

本書は調査報告書の第2冊目にあたり，汐井掛遺跡・天神の上遺跡についての発掘調査報告書であります。

発掘調査の記録としては，満足のゆくものではありませんが，本報告書を通して埋蔵文化財に対するなお一層のご理解，ご協力をいただければ幸いです。

なお発掘作業に従事していただきました地元若宮町・宮田町の方々をはじめ，関係各位のご援助とご配慮により本書を発行するはこびになりましたことを心から感謝申し上げます。

昭和55年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　浦　山　太　郎

例　　言

1. 本書は，地域振興整備公団による若宮・宮田工業団地造成によって破壊される遺跡について，福岡県教育委員会が受託事業として発掘調査を実施したもののうち，昭和52年度に調査した汐井掛遺跡・天神の上遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は福岡県教育庁管理部文化課技師児玉真一・池辺元明が担当し，調査の実施にあたっては，若宮町・宮田町教育委員会・及び町内在住の多くの方々の助力を得た。
3. 本文の執筆については，各文末に氏名を記して文責を明らかにした。
4. 遺物整理にあたっては，九州歴史資料館の岩瀬正信氏の協力を得た。
5. 遺構実測・地形測量は調査補助員がこれにあたり，とくに地形測量については調査補助員日高正幸氏の多大な助力を得た。
6. 遺物実測は，鉄器を児玉，石器を平ノ内幸治，他は池辺が担当した。
7. 製図は，児玉・池辺・日高・豊福弥生が分担して行なった。
8. 掲載写真のうち，遺物写真は，九州歴史資料館の石丸洋主任技師・平島美代子・豊福明子岡紀久夫氏の協力を得た。遺構写真は調査担当者が担当した。また，日本道路公団・毎日新聞社撮影の航空写真を借用した。
9. 鉄器のX線透視については，小倉南ライオンズクラブ小野和典氏（外科医），豊田尚武氏（小倉南病院），三善淋氏（歯科医）の協力を得た。
10. 汐井掛遺跡の調査区は，20m方眼で地区を設定し，東南隅の杭でその地区を代表させた。本文中の地区の表示もこれにしたがった。
11. 繊維製品の分析・執筆には元京都繊維大学教授布目順郎氏の協力を得た。また付録として勝浦41号墳出土の繊維製品ついての分析結果を掲載させていただいた。
12. 本書の編集は，児玉の援助をうけて池辺が担当した。

本　文　目　次

頁

Ⅰ　調査の経過…… 1

Ⅱ　位置と環境…… 3

Ⅲ　汐井掛遺跡の調査 …… 5

1.　遺構の内容…… 5

2.　出土遺物…… 66

3.　小　　結…… 79

Ⅳ　第186号木棺墓出土の小形彷製鏡の
鈕孔内にあった繊維製品…… 80

Ⅴ　天神の上遺跡の調査 …… 81

1.　遺構の内容…… 81

2.　出土遺物 …… 90

3.　小　　結…… 93

Ⅵ　ま　と　め…… 94

付　勝浦41号墳出土の繊維製品について…… 150

図　版　目　次

本文対照頁

図版１　宮田工業団地内遺跡航空写真（公団提供）…… 3
２　(1)　汐井掛遺跡遠景（北方靡山山頂から）…… 3
(2)　汐井掛遺跡航空写真（南から）…… 3
３　(1)　汐井掛遺跡標石（北東から）…… 5
(2)　汐井掛遺跡標石（南西から）…… 5
４　(1)　汐井掛遺跡遺構確認状況（北から）…… 5
(2)　汐井掛遺跡発掘調査状況…… 5
５　(1)　汐井掛遺掛北半全景（北から）…… 5
(2)　汐井掛16号墳盛土除去後の土壙墓群出土状況（西から）…… 5
６　汐井掛16・17号墳および汐井掛遺跡発掘後全景（北東から）…… 5
７　汐井掛16号墳および汐井掛遺掛発掘後全景（北西から）…… 5
８　(1)　153号 木棺墓…… 7
(2)　156号 木棺墓…… 7
９　(1)　157号 木棺墓…… 8
(2)　158号 土壙墓…… 7
10　(1)　159号 木棺墓…… 7
(2)　160号 木棺墓…… 8
11　(1)　160号 木棺墓西側木口部…… 8
(2)　160号 木棺墓東側木口部…… 8
12　(1)　161号 木棺墓…… 8
(2)　162号 木棺墓…… 8
13　(1)　163号 木棺墓…… 7
(2)　164号 木棺墓…… 8
14　(1)　165号 木棺墓…… 8
(2)　166号 木棺墓…… 9
15　(1)　167号 木棺墓…… 9
(2)　167号 木棺墓遺物出土状況……69
16　(1)　168号 木棺墓…… 7
(2)　168号 木棺墓遺物出土状況……71

図版17 (1) 169号 木棺墓…… 9
(2) 169号 木棺墓遺物出土状況……69
18 (1) 170号 木棺墓…… 9
(2) 172号 土壙墓…… 9
19 (1) 上173号木棺墓・下174号木棺墓…… 7
(2) 176号 土壙墓…… 9
20 (1) 175号 土壙墓…… 9
(2) 175号 土壙墓遺物出土状況……77
21 (1) 178号 土壙墓…… 7
(2) 180号 木棺墓…… 9
22 (1) 181号 木棺墓…… 7
(2) 182号 木棺墓…… 7
23 (1) 184号 木棺墓……10
(2) 184号 木棺墓遺物出土状況……68
24 (1) 183号 木棺墓…… 7
(2) 186号 木棺墓……10
25 (1) 186号 木棺墓…… 7
(2) 186号 木棺墓遺物出土状況……10
26 (1) 186号 木棺墓……10
(2) 187号・207号土壙墓…… 7
27 (1) 188号 木棺墓標石……10
(2) 188号 木棺墓……10
28（上）189号 木棺墓……10
（中・下）遺物出土状況……68
29 (1) 190号 土壙墓……10
(2) 191号 土壙墓…… 7
30 (1) 192号 木棺墓…… 7
(2) 193号 土壙墓…… 7
31 (1) 194号 木棺墓……10
(2) 195号 木棺墓…… 7
32 (1) 196号 木棺墓…… 7
(2) 197号 木棺墓……10
33 (1) 上200号土壙墓・下199号木棺墓……11

図版　(2)　上200号土壙墓・下201号木棺墓……11
34　(1)　203号土壙墓……11
(2)　203号土壙墓遺物出土状況……7
35　(1)　205号・206号土壙墓……11
(2)　210号木棺墓……7
36　(1)　211号木棺墓……7
(2)　213号土壙墓……11
37　(1)　212号木棺墓北西側木口部……7
38　(1)　215号木棺墓……11
(2)　216号木棺墓……7
39　(1)　217号木棺墓……7
(2)　218号土壙墓……11
40　(1)　219号土壙墓……66
(2)　219号土壙墓遺物出土状況……7
41　(1)　220号土壙墓……7
(2)　221号土壙墓……7
42　(1)　222号土壙墓……7
(2)　223号土壙墓……11
43　(1)　224号土壙墓……7
(2)　225号土壙墓……7
44　(1)　226号土壙墓……51
(2)　228号木棺墓……51
45　24号箱式石棺墓……51
25号箱式石棺墓……51
46　26号箱式石棺墓……51
27号箱式石棺墓……51
47　28号箱式石棺墓……51
29号箱式石棺墓……51
48　30号箱式石棺墓……51
31号箱式石棺墓……51
49　15号石蓋土壙墓……61
16号石蓋土壙墓……61

図版50　17号石蓋土壙墓……61
18号石蓋土壙墓……61
51　19号石蓋土壙墓……61
20号石蓋土壙墓……61
52　(1)　天神の上遺跡標石出土状態（北から）……81
(2)　天神の上遺跡調査区全体写真（北東から）……81
53　(1)　1号木棺墓……81
(2)　1号木棺墓……81
54　(1)　3号土壙墓……82
(2)　1号箱式石棺墓……85
55　(1)　2号箱式石棺墓……85
(2)　2号箱式石棺墓……85
56　(1)　3号箱式石棺墓……85
(2)　3号箱式石棺墓……85
57　(1)　1号石蓋土壙墓……88
(2)　1号石蓋土壙墓……88
58　(1)　2号石蓋土壙墓……88
(2)　2号石蓋土壙墓……88
59　(1)　縦貫道関係調査地点航空写真（南東から）……94
(2)　縦貫道関係調査地点航空写真（北から）……94
60　汐井掛遺跡出土土器……66
61　素環頭刀子・刀……68・103
62　素環頭刀子・刀……63・103
63　鉄　鏃……69・113
64　鉄鏃・鉋……71・113・121
65　工具・馬具……73・103・125
66　工具・剣・鎌……103
67　平遺跡出土鉄鏃・X線透視……115
68　鉄鏃・鉄斧・素環頭刀子・刀子X線透視……103
69　素環刀・鏃X線透視……103
70　勾玉・管玉・ガラス小玉……74
71　鏡　1……77
72　鏡　2……140

図版73　天神の上出土土器・鉄器……90
74　D 186 出土鏡鈕拡大写真……80
第 1 図汐井掛 186 号土拡墓出土の繊維製品……80
付　録
1　第 1 図　勝浦41号墳出土半円方格帯神獣鏡面の平絹…… 150
2　第 2 図　勝浦41号墳出土太刀の鞘外面の平絹…… 150
3　第 3 図　勝浦41号墳出土太刀の柄外装の平織物…… 150
第 4 図　勝浦41号墳出土太刀の柄外装の一種の繊維製品…… 150

挿　図　目　次

頁
第 1 図　若宮・宮田工業団地用地内調査地点図（縮尺1/3000）……2—3
第 2 図　若宮・宮田町主要遺跡分布図（縮尺 1/50000）…… 4
第 3 図　汐井掛遺跡地形図（縮尺 1/600）…… 6
第 4 図　汐井掛遺跡遺構配置図 1（縮尺 1/300）……6—7
第 5 図　汐井掛遺跡標石面地形実測図（縮尺 1/300）……6—7
第 6 図　汐井掛遺跡標石・墳墓配置図（縮尺 1/300）……6—7
第 7 図　汐井掛遺跡遺構配置図 2（縮尺 1/300）……6—7
第 8 図　汐井掛遺跡遺構配置図 3（縮尺 1/100）……8—9
第 9 図　第153号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高正幸実測）……14
第10図　第154号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（近沢康治実測）……14
第11図　第155号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……15
第12図　第156号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……15
第13図　第157号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……16
第14図　第158号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……16
第15図　第159号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……17
第16図　第160号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……17
第17図　第161号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内幸治実測）……18
第18図　第162号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……18
第19図　第163号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……19
第20図　第164号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……19
第21図　第165号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（大石昇実測）……20
第22図　第166号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……20

第23図　第167号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……21
第24図　第168号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……21
第25図　第169号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……22
第26図　第170号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……22
第27図　第171号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……23
第28図　第172号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（渡辺健二実測）……23
第29図　第173号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……24
第30図　第174号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……24
第81図　第175号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……25
第32図　第176号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（高田一弘実測）……25
第33図　第177号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（高田実測）……26
第34図　第178号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……26
第35図　第179号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……27
第36図　第180号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……28
第37図　第181号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……28
第38図　第182号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……29
第39図　第183号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……29
第40図　第184号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……30
第41図　第185号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……30
第42図　第186号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……30—31
第43図　第187号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（渡辺実測）……30
第44図　第188号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（大石実測）……31
第45図　第190号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（渡辺実測）……31
第46図　第189号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……32
第47図　第191号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……33
第48図　第192号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（渡辺実測）……33
第49図　第193号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（渡辺実測）……34
第50図　第194号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……34
第51図　第195号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（大石実測）……35
第52図　第196号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（渡辺実測）……35
第53図　第197号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……36
第54図　第198号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……36
第55図　第199号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……37

第56図　第200号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……37
第57図　第201号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……38
第58図　第202号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……38
第59図　第203号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……39
第60図　第204号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……39
第61図　第 205号・206 号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（渡辺実測）……40
第62図　第207号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（小池史哲実測）……40
第63図　第208号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（渡辺実測）……41
第64図　第209号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……41
第65図　第210号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……42
第66図　第211号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……42
第67図　第212号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……43
第68図　第213号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……43
第69図　第214号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（高田実測）……44
第70図　第215号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（児玉・高田実測）……44
第71図　第216号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……45
第72図　第217号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……45
第73図　第218号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（平ノ内実測）……46
第74図　第219号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（大石実測）……46
第75図　第220号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（大石実測）……47
第76図　第221号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（高田実測）……47
第77図　第222号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（渡辺実測）……48
第78図　第223号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（大石実測）……48
第79図　第224号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（大石実測）……49
第80図　第225号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（大石実測）……49
第81図　第226号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（高田実測）……50
第82図　第227号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（高田実測）……50
第83図　第228号木棺墓実測図（縮尺 1/30）（大石実測）……51
第84図　第 23 号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）（児玉・大石実測）……53
第85図　第 24 号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）（大石実測）……54
第86図　第 25 号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）（大石実測）……55
第87図　第 26 号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）（池辺・渡辺実測）……56
第88図　第 27 号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……57

第89図　第28号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……58
第90図　第29号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）（近沢実測）……59
第91図　第30号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）（大石・近沢実測）……60
第92図　第31号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）（渡辺実測）……61
第93図　第15号石蓋土壙墓実測図（縮尺 1/30）（高田・大石実測）……62
第94図　第16号石蓋土壙墓実測図（縮尺 1/30）（児玉実測）……63
第95図　第17号石蓋土壙墓実測図（縮尺 1/30）（大石実測）……63
第96図　第18号石蓋土壙墓実測図（縮尺 1/30）（大石実測）……64
第97図　第19号石蓋土壙墓実測図（縮尺 1/30）（日高・大石実測）……65
第98図　第20号石蓋土壙墓実測図（縮尺 1/30）（渡辺実測）……65
第99図　土器実測図（縮尺 1/4）（池辺実測）……67
第100図　D167鉄器出土状態（縮尺 1/5）（平ノ内実測）……69
第101図　鉄器実測図①（縮尺 1/2）（児玉実測）……70
第102図　鉄器実測図②（縮尺 1/2）（児玉実測）……72
第103図　玉類実測図（実大）（池辺実測）……75
第104図　D 175出土鏡・D186出土小形仿製鏡（実大）（池辺手拓）……78
第105図　D203出土鏡（縮尺 1/2）（岡撮影）……78
第106図　砥石実測図（縮尺 1/3）（池辺実測）……79
第107図　D 1土層図（縮尺 1/20）（池辺実測）……82
第108図　天神の上遺構配置図（縮尺 1/200）（高田・日高実測）……82—83
第109図　第1号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（池辺実測）……83
第110図　第2号～4号土壙墓実測図（縮尺 1/30）（日高・高田実測）……84
第111図　第1号・3号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）（池辺・高田実測）……86
第112図　第2号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）（日高実測）……87
第113図　第1号石蓋土壙墓実測図（縮尺 1/30）（池辺実測）……88
第114図　第2号石蓋土壙墓実測図（縮尺 1/30）（高田実測）……89
第115図　土器実測図（縮尺 1/4）（池辺実測）……91
第116図　鉄器実測図（縮尺 1/2）（児玉実測）……92
第117図　石鏃実測図（縮尺 1/2）（平ノ内実測）……92
第118図　尾根線に平行するものと直行するもの（縮尺 1/900）……95
第119図　箱式石棺墓・石蓋土壙墓分布図（縮尺 1/900）……96
第120図　小児棺分布図（縮尺 1/900）……97
第121図　汐井掛遺跡遺構副葬品配置図（縮尺 1/300）……102—103

第122図　素環頭分布図 …… 103
第123図　素環頭関連資料１ …… 106
第124図　素環頭関連資料２（縮尺 1/2） …… 107
第125図　素環頭関連資料３（縮尺 1/2） …… 108
第126図　素環頭関連資料４（縮尺 1/2） …… 109
第127図　素環頭関連資料５（縮尺 1/3） …… 110
第128図　汐井掛遺跡出土素環頭（縮尺 1/2） …… 111
第129図　鉄鏃関連資料（縮尺 1/2） …… 114
第130図　京都郡豊津町平石棺墓出土鉄鏃一括（縮尺 1/2） …… 115
第131図　汐井掛遺跡出土鉄鏃集成（縮尺 1/2） …… 118
第132図　刀子実測図（縮尺 1/2） …… 120
第133図　鉋関連資料（縮尺 1/2） …… 121
第134図　汐井掛遺跡A地区出土鉋（縮尺 1/2） …… 123
第135図　汐井掛D200出土馬具（縮尺 1/2） …… 124
第136図　池ノ上６号墳出土馬具（縮尺 1/2） …… 125
第137図　汐井掛遺跡出土玉類（実大） …… 137
第138図　次場・古崎遺跡出土小形仿製内行花文鏡（実大） …… 138
第139図　D28出土鏡・Ｓ６出土鏡 …… 139
第140図　伊加利出土鏡 …… 140
第141図　日佐原出土鏡 …… 140
第142図　前田山出土鏡 …… 140
第143図　舶載品を副葬する埋葬施設 …… 144

付　　石室奥壁 …… 150

表　目　次

表　1　発掘調査工程表……2
2　土壙墓・木棺墓一覧表……12
3　箱式石棺墓一覧表……52
4　石蓋土壙墓一覧表……64
5　出土土器一覧表……66
6　出土鉄器一覧表……68
7　出土玉類一覧表……74
8　D 188 出土ガラス玉計測表……76
9　S31出土ガラス玉計測表……76
10　ＩD19出土ガラス玉計測表……77
11　D 224 出土管玉計測表……77
12　出土鏡一覧表……77
13　土壙墓・木棺墓一覧表……85
14　箱式石棺墓一覧表……87
15　石蓋土壙墓一覧表……90
16　汐井掛遺跡出土遺物一覧表……102—103
17　素環頭地名表……102—103

付，
表　1　勝浦41号墳出土の絹製品とその繊維についての調査……152

I 調査の経過

宮田工業団地関係埋蔵文化財の発掘調査は，昭和51年に始まり，有木地区１ケ所・若宮地区７ケ所，計約17,700㎡について発掘調査を実施した。

昭和49年に開始された当団地若宮地区を東西に貫通する九州縦貫自動車道関係の発掘調査で当団地若宮地区の占める丘稜には広大な面積にわたって遺跡の遺存することが予測され，地域振興整備公団の依頼により若宮地区の詳細な分布調査を実施した。その結果，遺跡の主要部分は九州縦貫道が占めるが，隣接する当団地用地内にもなお広大な遺跡があることが確認された

昭和51年度の調査では，若宮地区の縦貫道北側の第３・４工区を対象とし，遺跡の範囲を確定するとともに内容を確認するために，トレンチを設定し予備調査を実施した。このトレンチ調査によって，周知されていた汐井掛遺跡・柳ケ谷遺跡に加えて，新たに天神の上遺跡・高平古墳群を確認することができた。

汐井掛遺跡・古墳群については先行して実施した縦貫道関係の調査で墓地群が確認され，かつ重要な遺跡であるため当初から保存の要望を打ち出し協議を重ねた。

本調書は昭和52年度から実施した。当団地内全体の調査の経過は，「若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告第１集」に述べられている。また個々の遺跡の発掘調査工程については第１表にあげるとおりである。ここでは本報告書に記載する汐井掛遺跡と天神の上遺跡の概略についてふれる。

汐井掛（しおいがけ）遺跡の調査経過

汐井掛遺跡は，縦貫道建設に伴う事前調査で53基の古墳が確認され予定地内の38基について調査が実施された。（註１）また丘陵鞍部に密集して土壙墓・木棺墓・箱式石棺墓・石蓋土壙墓計280基が検出され（註２），弥生時代・古墳時代の大規模な墓地であることが判明している。今回調査した当団地用地はこのすぐ西側に隣接しており，当初から現状保存の要望を打ち出し協議を重ねた。しかし工事の先行している九州縦貫道と当団地用地とは10数mの段差があり現状保存が非常に困難であるという理由から発掘調査を行ない記録保存の措置を講ずるに止まった。

汐井掛遺跡の発掘調査は昭和52年４月１日から開始した。まず調査区全体の伐採作業を行ない調査前の地形測量・写真撮影の後表土剝ぎを始めた。丘陵頂部において標石が確認され実測を開始。さらに16号墳の調査終了をまって遺構検出作業を行なう。この結果前回の調査と同様に丘陵鞍部と南側斜面に墓地群は集中することが判った。しかし標高74m以下では検出できなかった墳墓を標高73mの等高線上まで確認できた。さらに後世の溝をはさんで標高71mの付近では標石をもたない９基のグループを確認した。墓地群はさらに未調査の部分に広がるが，今回

の調査でほぼ全容を明らかにすることができた。調査は6月30日に終了し，7月1日から有木地区の南ケ浦古墳群の調査に移動した。

天神の上遺跡の調査経過

51年の予備調査で丘陵の凸部で礫群を確認し周囲の表土剝ぎを行った結果，箱式石棺墓を2基検出した。このため昭和52年11月1日から約800㎡の本調査を開始した。箱式石棺墓を確認した地面では他の墳墓は確認できず全体を掘り下げるとともにトレンチを設定し精査した結果，土壙墓4基・箱式石棺墓3基・石蓋土壙墓2基からなる墓地群であることが明らかになった。12月15日に調査を終了し，今年度調査分の出土遺物の整理作業を実施した。

なお調査関係者は「若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告第1集」を参照されたい。

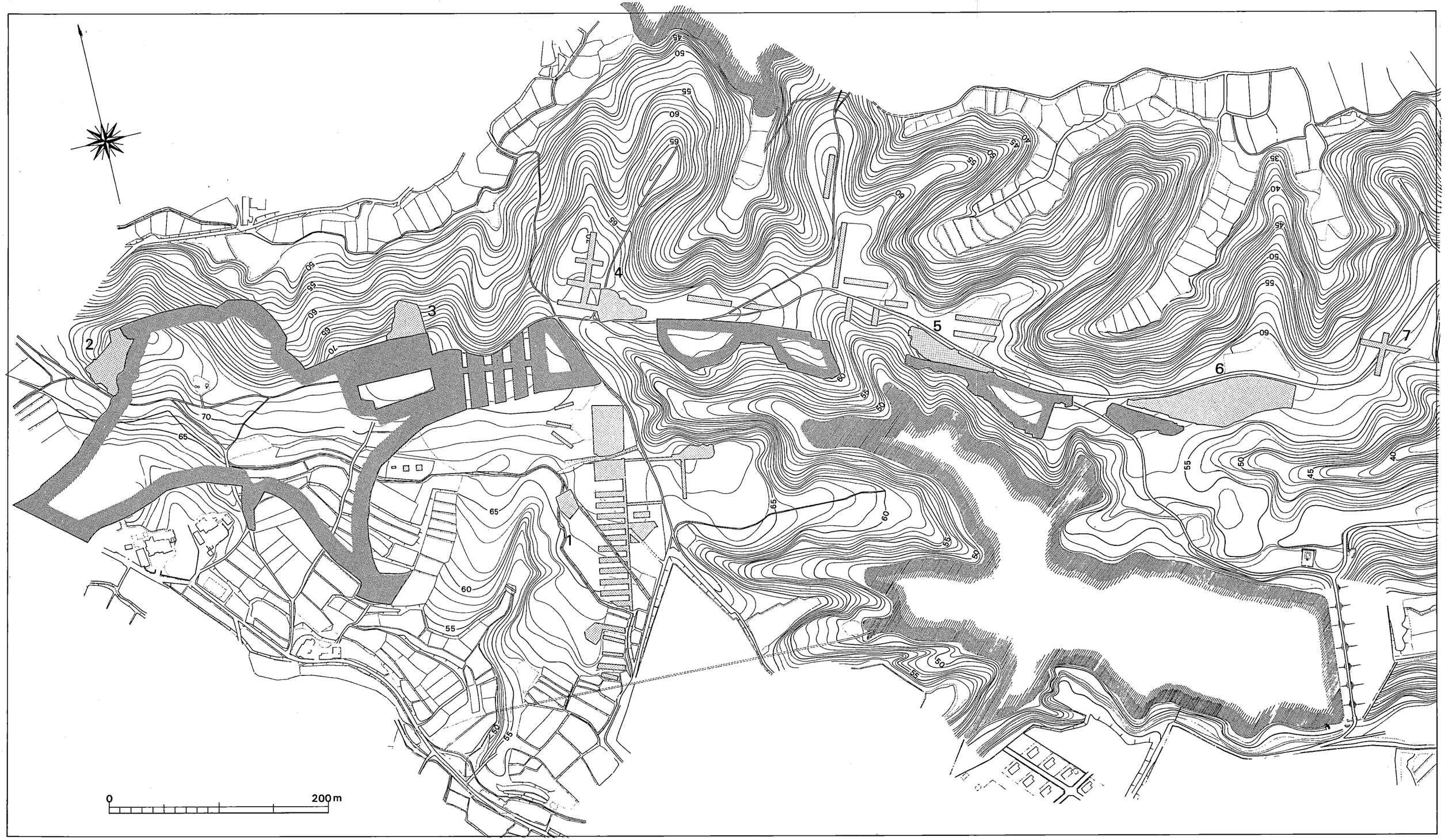
（池辺元明）

註1　上野精志編「汐井掛遺跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXII　1978
福岡県教育委員会

2　池辺元明編「汐井掛遺跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXVIII　1979
福岡県教育委員会

表　1　発掘調査工程表

地点	遺跡名	内容	所在地	調査面積・期間				備考
				51年度	52年度	53年度	54年度	
1	都地	散布地・古墳 3基・小石室3基	若宮町 大字沼口字都地			4.17～9.15 4,000㎡	10.29～12.1 900㎡	
2	汐井掛	土壙墓・木棺墓 箱式石棺墓 石蓋土壙墓 円墳2基	若宮町 大字沼口字汐井掛 宮田町 大字上有木字高平		4.1～6.30 1,260㎡			
3	高平	円墳3基	大字上有木字高平		9.4～10.31 900㎡			
4	天神の上	土拡墓・木棺墓 箱式石棺墓 石蓋土壙墓	大字上有木字坂元	1.17～2.25 1,245㎡	11.1～12.15 800㎡			51年度 トレンチ調査
5	柳ケ谷西区	住居跡・貯蔵穴 土壙墓	〃	11.24～1.14 1,960㎡	8.1～9.16 1,035㎡			51年度 トレンチ調査
6	柳ケ谷東区	住居跡・掘立柱 建物	〃	7.26～10.30 4,227㎡				
7		散布地	〃	11.1～11.20 415㎡				遺構ナシ
8	南ケ浦	円墳6基	大字中有木字 南ケ浦		7.1～8.11 932㎡			
計				7,847㎡	4,927㎡	4,000㎡	900㎡	


1
2
3
4
5
6
7
0
200 m

Ⅱ 位置と環境

若宮・宮田平野は，遠賀川の形成する筑豊平野の北西部に位置し，犬鳴山（584 m）に源を発する犬鳴川流域にある。若宮町は，鉾立山（663m）・犬鳴山を西南に，西方は西山（645m）と西と南を山地で限られ，北も靡山（293 m）などの山々に限られているうえ，低平な丘稜部が広く分布しているために平野部は狭小なものとなり盆地をなしている。その中を，黒丸・山口両川を合して犬鳴川が東流している。汐井掛遺跡は，見坂峠付近に源を発する山口川が山間から平野部に入るあたりの左岸の東西に伸びる丘陵上に位置する。この丘陵は町境を走り，東端は金丸まで達する。丘陵の北の宮田町側には有木川の形成する狭小な平野がある。

平野部が狭小なうえに盆地状をなす地形のため大規模の開発は行なわれずにいたが，昭和47年から始まった山陽新幹線の建設を契機に，九州縦貫自動車道の建設，さらに工業団地の造成，水田の基盤整備事業，県道・町道の整備等の事業が急速に増えてきた。

これによって周知されていた古墳群以外の遺跡も多く発見されるに至った。これらの遺跡は低丘陵・台地・河岸段丘に集中して発見され，弥生時代から歴史時代にわたったている。

若宮町・宮田町所在の遺跡群については，すでに数度報告されているので（註1），ここでは汐井掛遺跡の存在する丘陵及び対岸の丘陵に限り取上げる。

弥生時代の遺跡としては，汐井掛遺跡・天神の上遺跡の墓地群，柳ケ谷遺跡・都地原遺跡（註2）の集落跡がある。古墳群は，西から汐井掛古墳群（註3）・都地古墳群（註4）・高平古墳群・片ノ熊古墳群・西の浦古墳群・浦原古墳群・金丸古墳（註5）がある。対岸の丘陵には，弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である小原遺跡・古墳は小原古墳群（註6）・里古墳・東側端には八幡塚古墳・国指定史跡の竹原古墳等がある。河岸段丘上には古墳時代後期の集落跡である田尻遺跡（註7）・中世の土壙墓等を検出した竹原遺跡（註8）がある。　（池辺）

註1　池辺元明「鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群」『九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅷ　1977　福岡県教育委員会
上野精志「犬鳴川流域の古墳の分布」『九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告』XⅫ　1978　福岡県教育委員会

2　池辺元明・酒井仁夫・上野精志・松村一良「平原・柳ケ谷・都地原遺跡の調査」『九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅷ　1977　福岡県教育委員会

3　上野精志「汐井掛古墳の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XⅫ　1978　福岡県教育委員会

4　児玉真一「都地古墳群の調査」『若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』第3集　1980　福岡県教育委員会

5　浜田信也『金丸古墳』　1975　若宮町教育委員会

6　児玉真一編「小原遺跡・小原古墳の調査」『九川縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XI　1977　福岡県教育委員会

7　靏久嗣郎・小池史哲・宮崎貴夫「田尻遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集　1976　福岡県教育委員会

8　児玉真一『竹原遺跡』若宮町教育委員会　1979

第2図　若宮町・宮田町主要遺跡分布図（1/50000）

1　都地遺跡	2　汐井掛遺跡・古墳群	3　高平古墳群	4　天神の上遺跡
5・6　柳ケ谷遺跡	7　南ケ浦古墳群	8　平原古墳群	9　下有木古墳群
10　都地原遺跡	11　咲花遺跡	12　北田遺跡	13　小原遺跡
14　小原古墳群	15　茶臼山城跡	16　里古墳	17　平原遺跡
18　片ノ熊古墳群	19　竹原古墳	20　八幡塚古墳	21　金丸古墳
22　田尻遺跡	23　剣塚古墳	24　高野古墳群	

Ⅲ　汐井掛遺跡の調査

汐井掛遺跡の墳墓群は東南から北西に延びる長さ約120mの尾根線上に集中して分布している。今回の調査地点は，前回縦貫道関係で調査した地点の西側にあたり汐井掛丘陵の最西端にあたる。丘陵頂部の平担部で標高76.8mを測る。西側および南側は緩斜面を呈し，北側の斜面は有木側の水田に達する。山口川が流れる南側の水田面との比高は37m程ある。検出した遺構は土壙墓・木棺墓76基，箱式石棺墓9基，石蓋土壙墓6基である。

またこれらの墳墓群の墓壙上面には標石の存在が確認できた。

以下本文中では，土壙墓・木棺墓はD，箱式石棺墓はS，石蓋土壙墓をＩＤとする。

1. 遺　構　の　概　要

(1)　標　　石

この標石の配石・置石についての形態は，九州縦貫道関係の報告でイ～ヘまでの分類を行なった。

イ　墓壙主軸に対して直行し，礫を横一列に並べたもの

ロ　墓壙主軸に対して平行に，礫を縦一列に並べたもの

ハ　墓壙の長辺と短辺に礫を，「L」型に並べたもの

ニ　墓壙の3辺に礫を「コ」型に並べたもの

ホ　墓壙上面に板石を置いたもの。

ヘ　墓壙上面に数個の礫を部分的に集石したもの，又は数個の礫を墓壙上面に置いたもの。

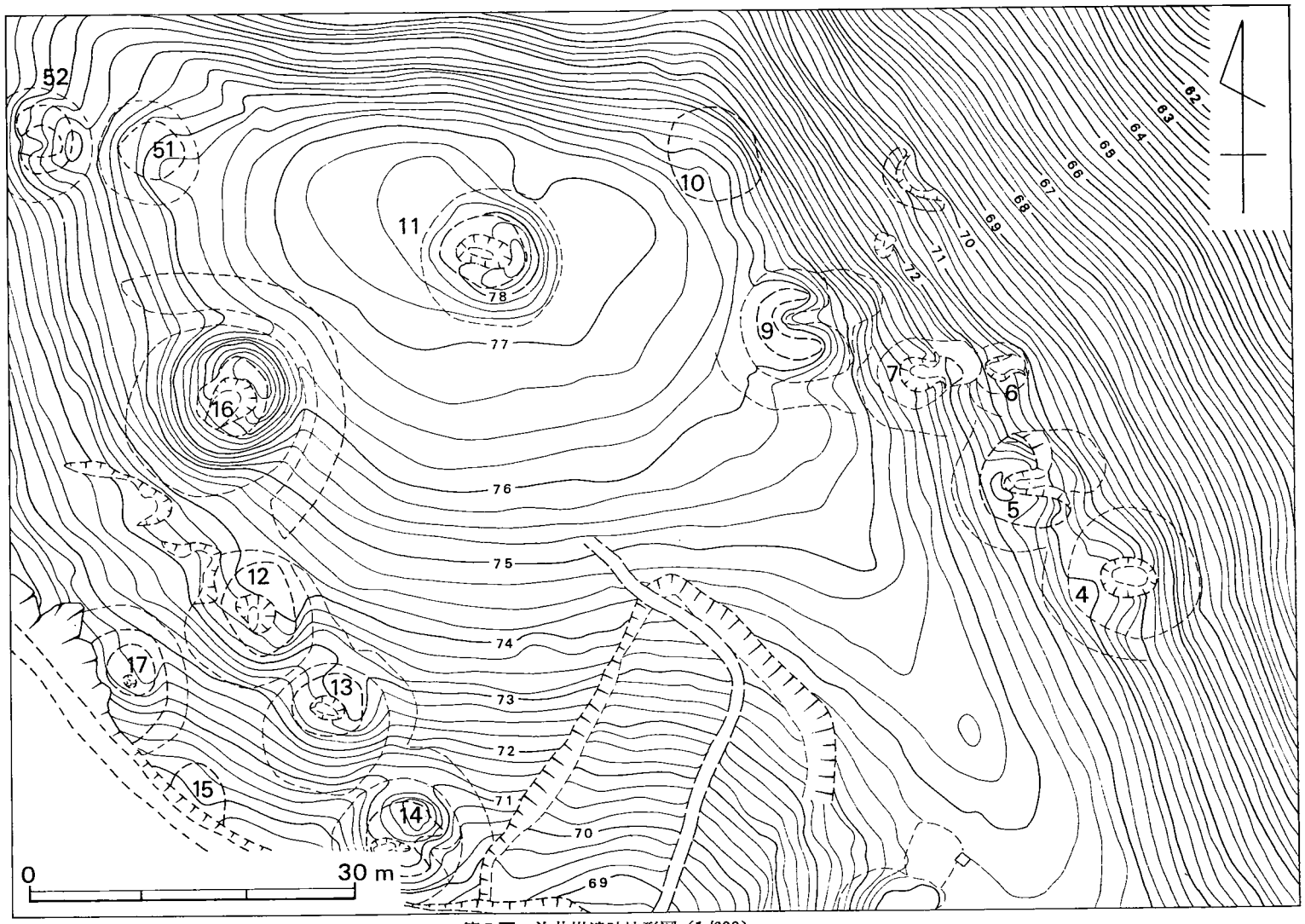
墳墓群のうちいずれかの形態の配石・置石されているものは25基を数える。

イの形態をとるものはD180・D189・D201・D211にみられる。

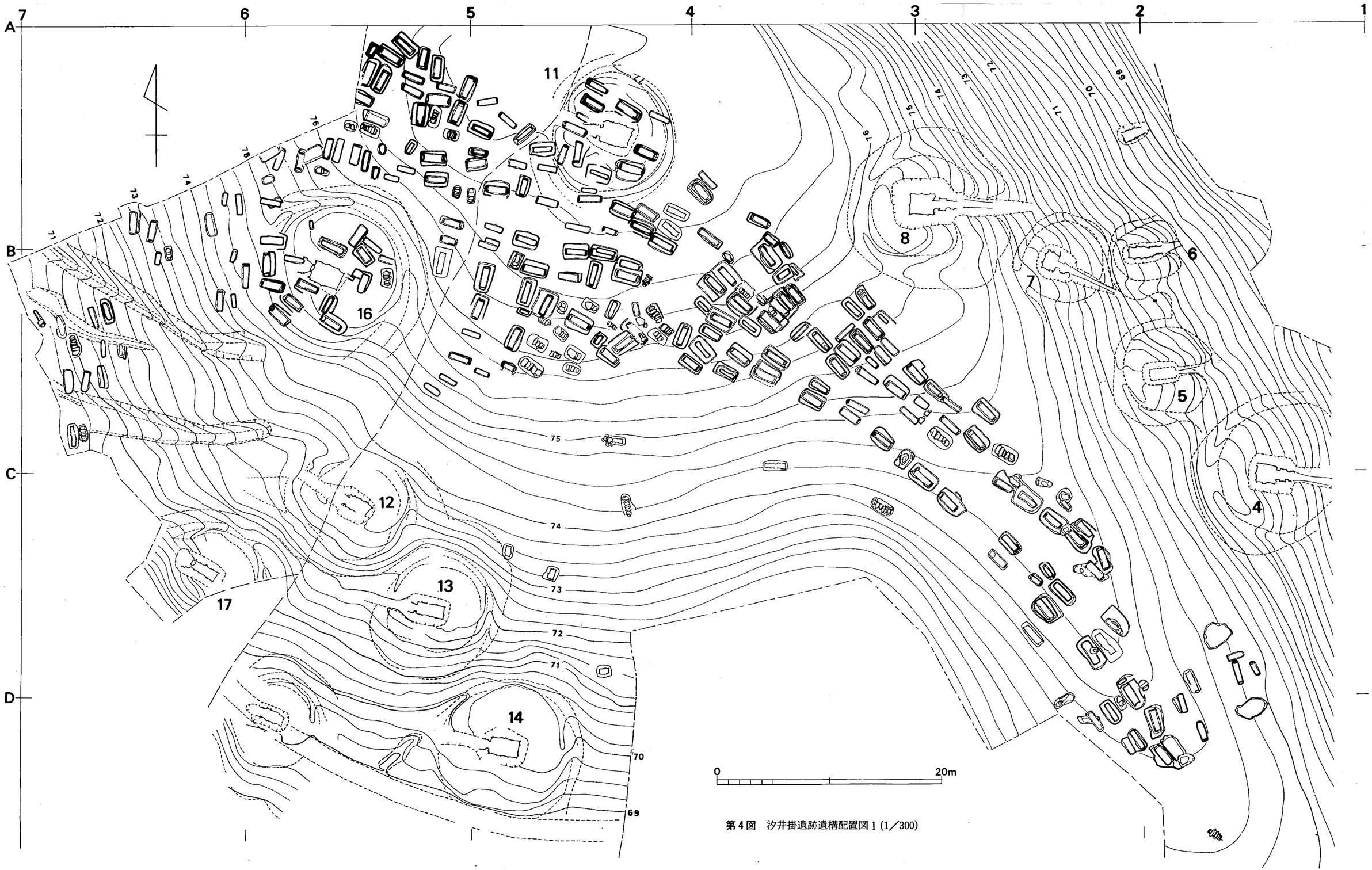
方格蕨手文鏡が出土したＳ4や，2基（S17・S18）の石棺に跨がって配列されたような例とは若干異なる。D180は3個の礫を頭位と推定される側に石例を配している。D189の場合は，イ・への両方の形態がみられる。D201は3個の礫を3列に配している。D211場合は，足位側に石列がみられる。

ロの形態をとるものは，D188・D195・D200の3基にみられる。D188は墓壙北東側側壁上面にロの形態，墓壙の頭位部・足位部上面にへの形態がみられる。D 195は他に比べて小礫を用いて墓壙南側壁上面に石列を配している。D 200はD199と切り合い関係がありD199より新しく上面の石列はD200のものと考える。墓壙南側に沿って石列がみられる。

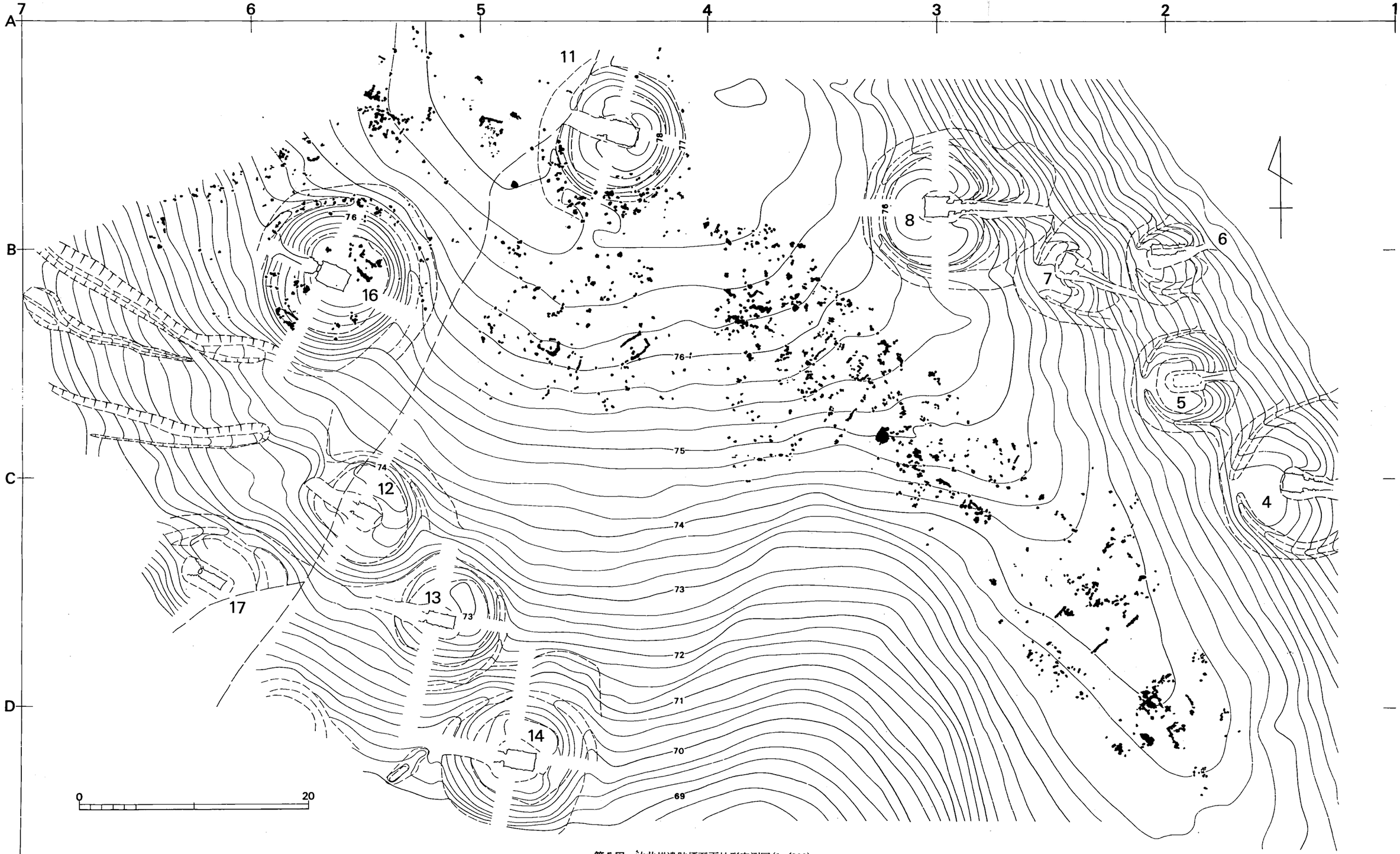
ハの形態をとるものはD156・D 170・D217の3基に確認された。D 156は形よく配列されている。D170は石列が雑である。



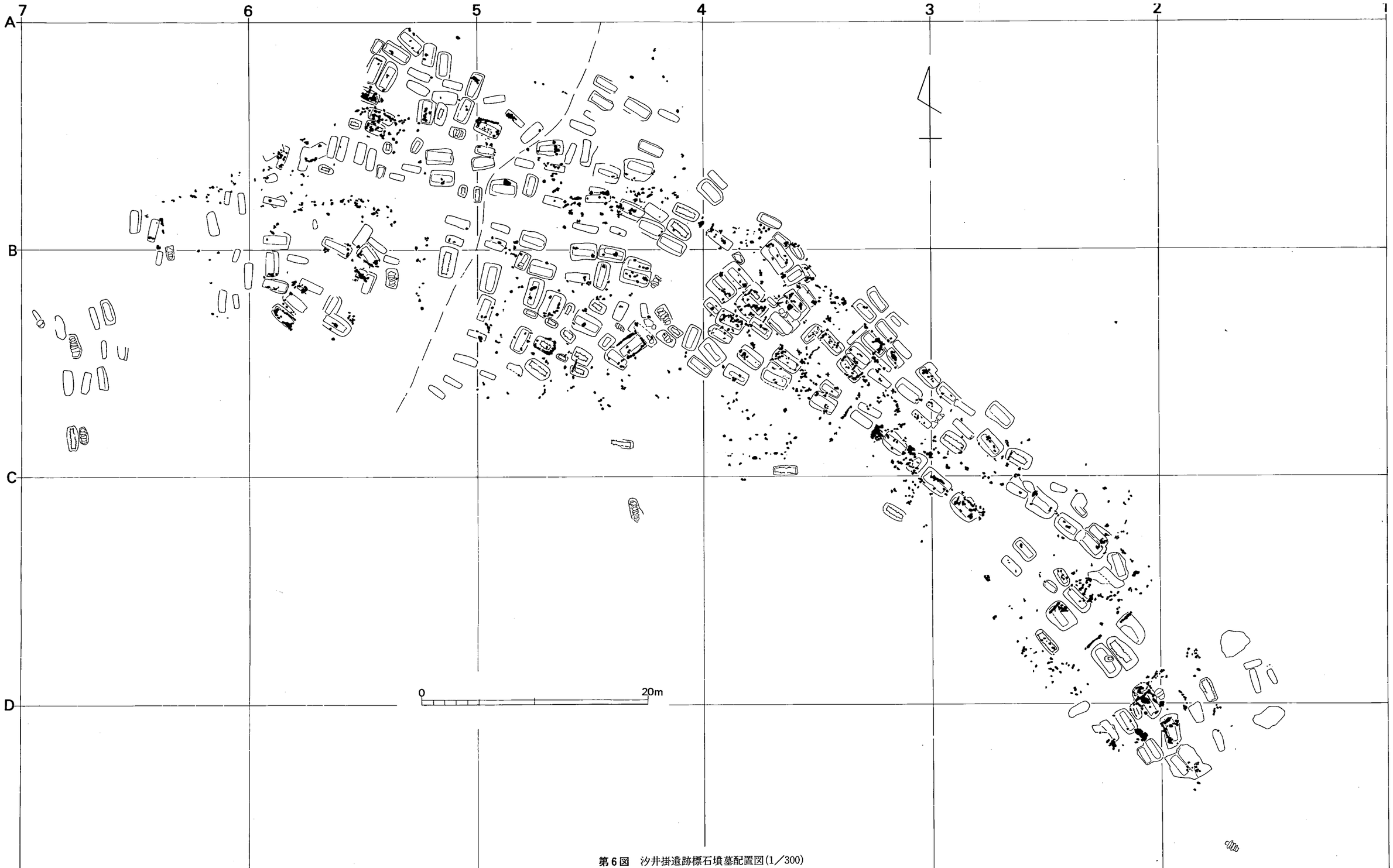
第3図　汐井掛遺跡地形図（1/600）



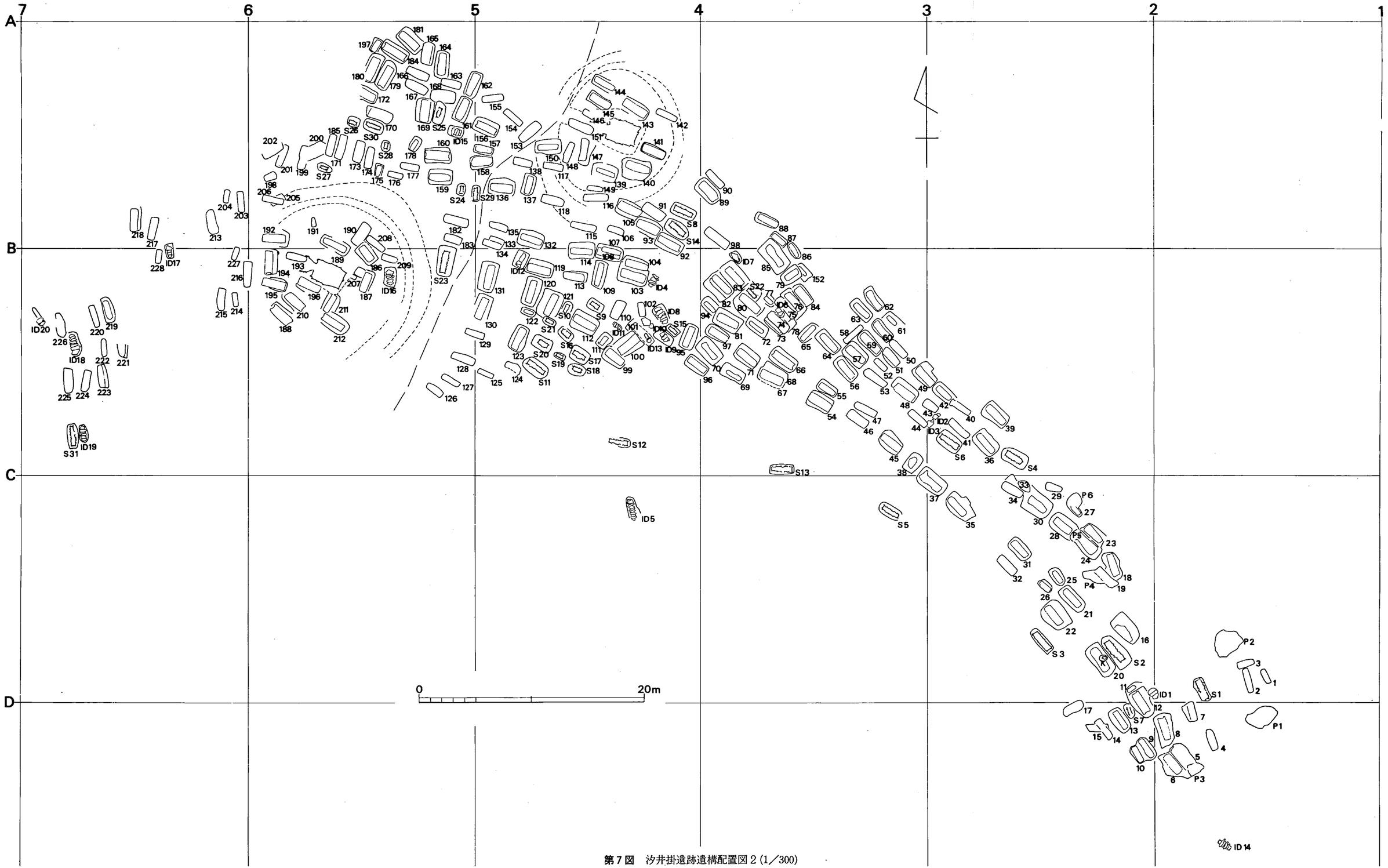
第4図　汐井掛遺跡遺構配置図1 (1／300)



第5図　汐井掛遺跡標石面地形実測図(1／300)



第6図　汐井掛遺跡標石墳墓配置図(1／300)



第７図　汐井掛遺跡遺構配置図２(1／300)

ニの形態をとるものは，D 186の1基だけに認められた。小形仿製鏡が棺外副葬されていた木棺墓で配列の1部を16号墳の盗掘壙により破壊されるがほぼ当時の状態をとどめていると考える。

ホの形態はD206・D216・D219に認められた。D 206とD216は頭位と推定される墓壙上面に置かれ，D219の場合は両小口上面に置かれ，D219の場合は両小口上面に置かれていた。D 218でも板石が確認されたがこの場合は蓋石として使用された可能性がある。

への形態を示すものは，D159・D161・D165・D169・D172・D179・D183・D188・D194・S30に認められた。この形態は遺跡全体に分布し，当遺跡においてもっとも普偏的な形態である。

また南斜面・第16号墳の周溝にもかなりの礫が散在しており，16号墳に破壊されたものや土砂とともに流出したものと考えられ，本来はいずれかの形態で配石されていたものであろう。

（池辺）

(2) 土壙墓・木棺墓

土壙墓は29基出土した。丘陵の鞍部には数が少ない。第16号墳の周溝にかかる標高76m付近から南西側の緩斜面に広く分布している。主軸方向は等高線に沿ったものがほとんどで等高線に直行するものは，D178・D187・D193・D198・D200・D202・D205の7基である。

土壙墓のつくり方には，まず長方形の墓壙を掘り，その中央部に死体を入れるための土壙を掘り込む二段掘の土壙墓（D158・D178・D187・D192）と，地山に長方形プランの墓壙を掘込んだだけの（D171・D176・D177・D191・D193・D202・D205・D206・D207・D208・D203・D 204・D213・D227・D220・D221・D222・D223・D225）二種がある。前者の場合には一段目に蓋板を使用した可能性も考えられるが，棺材・目張り粘土等の痕跡が認められないものをここでは土壙墓として上げた。この内（D175・D198・D191・D204・D205・D207・D214・D227）は規模の点から小児用と考えられる。

土壙墓の切り合い関係は，D 205とD206が切り合いD206が新しい。他の埋葬施設との関係で，D 157がD158を，D200がD199を，D201がD202を切っている。出土遺物については後述する。

木棺墓はこの遺跡の埋葬施設の主体をなすもので，今回の調査で47基，前回調査分を加えると計151基を数える。分布状態は丘陵頂部の平坦面と第16号墳に集中して検出され，南西側斜面の12基で構成する小グループの中には2基の木棺墓が存在するだけである。

木棺墓の作り方には前回の調査で確認した，

Ⅰ　まず長方形の墓壙を掘り，その中央部に棺を組立てるための壙を掘り込む二段掘込のもの。

Ⅱ　直接木棺を組み立てる壙を掘り込む一段掘込のもの。

二通りの方法と今回新たにD175・D189で判明したものに，

Ⅲ　一段目の掘り込みを深く行ない，二段目の掘り込みは10数cmにとどめ，棺を組み立てた後に蓋のレベルまで裏込めするもの。

の３通りがある。

木棺の組合せ方には，

A　木口板を両側板で挟みこむもの。

B　木口板で両側板を挟みこむもの。

C　A・B型式の折衷形態で井桁状をなすもの。

D　木口板・両側板の端を合わせて箱式に組み合せるもの。

に分類できるが今回の報告のものにはC型式のものはない。

箱式石棺墓との切り合い関係は，D168はS25に，D170はS30に切られている。逆に木棺墓や土壙墓が箱式石棺墓を切った例はない。

D　156（図版８－２，第12図）　二段掘込のA型式の木棺墓である。両木口壁面には側板の切込が明瞭に残る。床面にも両木口・両側板の掘込がある。後者の掘込には粘質土が堆積していた。床面は頭位と考えられる北西側が若干高くなっている。

D　157（図版９－１，第13図）　B型式の木棺墓でD 158と切り合い南側墓壙の一部を破壊されている。棺の内法は長1.17m，幅36cmを測る小形のものである。床面には木口板と側板の掘込があるが，棺材の痕跡は残さない。床面は中央から頭位にかけて高くなっている。

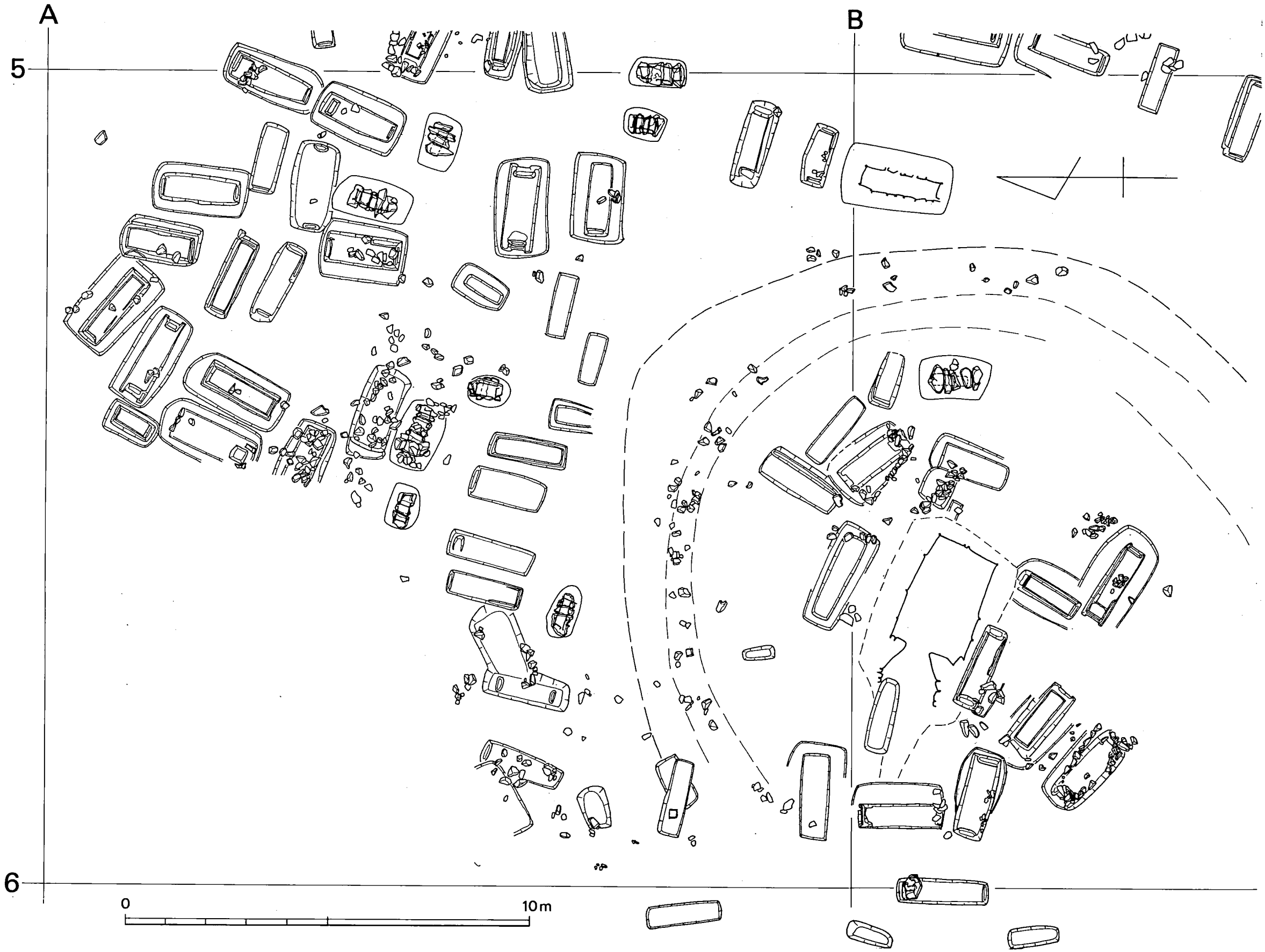
D　160（図版11－２，第16図）　二段掘込のA型式の木棺墓で，汐井掛遺跡の中でも大形に属するものである。両木口壁には側板の切込があり，床面には木口板の掘込がある。床面は中央部から北西側に高く，頭位に枕状の削出が認められた。この枕の上部から二段目墓壙上端までの高さ約30cm，足位側で約50cmを測る。

D　161（図版12－１，第17図）　二段掘込のA型式の木棺で床面には木口板の掘込が残る。側板の掘込はない。北東側の頭位部で長方形を呈す枕状の削出が認められた。また北東側隅の上部には側板の裏込の石が存在する。

D　162（図版12－２，第18図）　二段掘込のA型式の木棺墓である。床面には木口板の掘込が認められる。側板の掘込は壁に沿って認められないが，北東側の頭位の部分に削出があり，その両側の状態から側板が使用されたことが判明した。東側棺外中央部に鉄鏃を検出した。

D　164（図版13－２，第20図）　A型式の二段掘込の木棺墓である。主軸はほぼ南北を示す。床面の両木口板の掘込には黄灰色の粘質土が堆積していた。床面は中央部から北側頭位部の方が高い。

D　165（図版14－１，第21図）　B型式の木棺墓である。北東側では蓋置の段が認められ目張りに使用された炭化物の混入した青灰色粘土を検出した。床面には壁に沿って両木口，両側板の掘込があり，頭位床面で赤色顔料がわずかに認められた。D 181と切り合い関係があり，



第8図　汐井掛遺跡遺構配置図3 (1／100)

D181より新しい。

D 166（図版14—2，第22図） 地山掘込のA型式の木棺墓である。床面には壁に沿って両木口，両側板の深い掘込があり，側板の掘込底部には黄灰色粘質土が堆積している。掘込から判断して使用された板の厚さは5㎝内外のものと考える。床面は南東側足位部と北西側の頭位部の高低差は約10㎝程ある。枕にあたる部分にはわずかではあるが赤色顔料を施している。

D 167（図版15，第23図） 地山掘込のA型式の木棺墓である。両木口板の掘込と，南側に一部側板の掘込が認められる。頭位やや中央よりで，素環刀と鉄鏃がずかに浮いた状態で出土した。

D 169（図版17，第25図） 二段掘込のA型式の木棺墓である。他に比べて一段目の墓壙の規模が大きい。床面には両木口の掘込と南側で一部側板の掘込を検出した。床面はほぼ水平に整形されている。棺内中央部から鉄鏃が出土した。

D 170（図版18—1，第26図） 南側壁の一部はS30の掘方が破壊しておりS30より古い。木口板及び側板の掘込は検出できなかったが，側板の裏込に使用されたと考えられる15～20㎝大の石が北側に3石，南側に1石存在する。

D 174（図版19—1，第30図） 墓壙の南半部上面は，16号墳の地山整形の段階で削平を受けている。両小口・両側板の掘込があり，掘込の状態からA型式の組み合せ方と思われるが，両側板・両木口の端を合わせる箱式（D型式）の可能性もある。床面は北側がやや高くなっている。

D 175（図版20，第31図） D 174と同様に，17号墳によって削平を受け上部と南半部を失っている。上部構造は不明であるが，他の二段掘込の木棺墓とはちがい，一段目を蓋のレベルでとどめず深く掘り下げた後，その中央に下部の土壙を約10数㎝程掘り下げて側板・木口板を立て，さらに板の高さに合せて裏込を行なう型式でD 189と同構造のものと考える。しかしながら木板の痕跡は全く残っていないので確証はない。床面北側の頭位部には赤色顔料を施こしその上面に鏡面を上に向けた内行花文鏡片が副葬され，また東側壁に沿って鉇が1本置かれていた。

D 179（第35図） D 180と並んで検出されたA型式二段掘込の木棺墓である。床面には両木口，両側板の掘込，南側木口部には側板の切込が認められる。側壁はほぼ直に立上る。

D 180（図版21—2，第36図） 南西部の一部は調査区域外で未発掘であるが，下部の土壙はほぼ完掘できた。南西側木口部は，方形を呈し深さ15㎝の掘り込みがみられ，この両側には板状の石が2石立てて裾えられている。他に石がないため側板を支えたものと考えるが，他の木棺に見られる裏込の石に比べて大きく，使用法もちがう。

D 183（第39図） 地山掘込のA型式の木棺墓で小児棺である。木口板の掘込は両側で検出されたが，側板の掘込は南側に一部検出した。また側板裏込めに使用された15㎝大の石が四隅

で認められた。

D 184（図版23，第40図） A型式の典型的な木棺墓である。両小口板・両側板の掘込と木口部に側板の切込が明瞭に残るが棺材の痕跡は認められなかった。床面は赤褐色粘質土で貼り付け整形されており，頭位にあたる北西側がやや高く，枕石が置かれている。中央部からやや頭位よりには赤色顔料が施されている。南西側壁土壙上端からは棺外副葬と考えられる素環刀が１本出土した。

D 185（第41図） A型式の木棺墓である。両木口部には，木口板の深い掘込が残る。側板の掘込は明瞭ではない。北東側隅には，裏込に使用された石が存在する。

D 186（図版24―２・25・26―１，第42図） 第16号墳墓壙北東側からD 208と並んで検出された二段掘込A型式の木棺墓である。古墳築造の際はかろうじて破壊からまぬがれているが，後世の古墳盗掘で北側木口部を床面近くまで破壊されている。

両木口板，両側板の掘込は認められないが，裏込に使用された石と，墳丘盛土の関係であろうか，ややしまった褐色の裏込の土と棺内のやわらかい黄褐色土とは容易に分離できA型式の組み合せであることが判明した。また棺外北西側の墓壙上部から鏡面を上にした小形仿製鏡が出土している。墓壙上面で検出した標石とほぼ同レベルに存在しているためD 186の棺内副葬と考える。

D 188（図版27，第44図） 南側の木口上部を第16号墳の調査の際にトレンチによって破壊してしまった。二段掘込でA型式の木棺であるが，南東側の一段目の墓壙は16号墳の地山整形の段階で削平されている。床面には，両木口の掘込が残り，北側木口部には側板の切込を確認している。切込のない南側には側板の裏込めの石が存在する。また頭位と考える北西側床面からは多数のガラス小玉を検出したが連なった状態は認められない。

D 189（図版28，第46図） 細長い大形木棺墓である。中央上部を第16号墳の調査の際トレンチで破壊してしまった。組み合せ方は，棺材の痕跡，床面に掘込を残さないために明らかではないが，構築方法はD175と同様と考える。一段目を深く掘り込んだ後，下部の土壙を10数cm程掘下げて棺材を組合せ，さらに蓋の高さまで土をしめながら裏込を行っている。床面はやや舟底状を呈する。一段目掘込の北西隅下部から素環刀が１本出土した。

D 190（図版29―１，第45図） 上部を第16号墳で削平されている。D 186と切り合い関係があり，D 186より古い。床面には，南東側だけに側板の掘込があるが，組み合せは不明である。床面の頭位部に枕石がある。

D 194（図版31―１，第50図）第16号墳東側から検出したA型式二段掘込の木棺墓である。古墳の築造の際に西側を削平される。両木口ともに側板の切込みが深く，壁面もほぼ直に立上る。棺材の厚さは切込から判断して３～５cm程ではないだろうか。

D 197（図版32―２，第53図） 二段掘込のB型式の木棺墓である。小児棺と思われる。両

小口板と北西側の側板の掘込は検出されたが北東側では認められない。

D 199（図版33—1，第55図） D220と切り合い関係がありD200より古い。床面には木口板の掘込が残る。

D 200（図版33—1，第56図） 西側木口部でD 199を切っているが境は明確にはできなかった。他のものと比べて墓壙が大きい。床面には掘込は確認できず棺材の痕跡もない。埋土中から馬具が出土した。

D 203（図版34，第59図） D 204と並んで検出した地山掘込の土壙墓である。主軸はほぼ南北を示す。壁面はほぼ垂直に立上がる。棺材等の痕跡は認められなかった。北側の頭位の床面から鏡面を上に向けて内行花文鏡片が出土した。

D 209（第64図） 二段掘込の土壙墓と考えられるが，第16号墳の地山整形の段階で上部と東側木口部を削平されており詳細は不明である。棺材等の痕跡は認められない。西側床面から赤色顔料を検出した。

D 210（図版35—2，第65図） D195と切り合うが上部削平のため新旧関係は不明である。両木口，両側板の浅い掘込を確認した。南東側木口部には側板の切込がある。

D 211（図版36—1，第66図） 二段掘込のA型式の木棺墓である。北側を第16号墳の墓壙に切られ,南側も一段目を削平されている。D212と切り合うが新旧関係は確認できなかった。床面には,両木口板,両側板の掘込が認められる。北側の木口部では裏込めの状態を観察した。

D 212（図版37—2，第67図） 二段掘込でA型式の大形の木棺墓である。両木口板・両側枚の掘込，両木口部に側板の切込が残る。床面，北西部の頭位部には枕を長方形に削出している。掘込から判断して棺材の厚さは3㎝前後と考えられる。

D 216（図版38—2，第71図） 地山掘込のA型式の木棺墓で主軸をほぼ南北にとる。墓壙上面の頭位と考える北側には板石，南には20㎝大の礫がある。床面には木口板の掘込が残る。

D 219（図版40，第74図） 二段掘込の木棺墓である。一段目の両木口側で青色粘土を検出した。棺内床面には掘込はなく，棺材の痕跡も認められない。北側と南側の木口上部には板石が使用されているが，その用途はもう一つ判然としない。墓壙上部には，小礫とともに，土器片，鉄製鍬先が検出された。供献用の遺物と考えられる。

D 224（図版43—1，第79図） 標高71ｍの斜面に構築されたもので地山掘込の木棺墓である。主軸はほぼ南北を示す。副葬品をもつ土壙墓・木棺墓のうち最も低い地点に存在する。木口部の掘込は北側だけ認められた。床面からは勾玉1・管玉16が出土している。

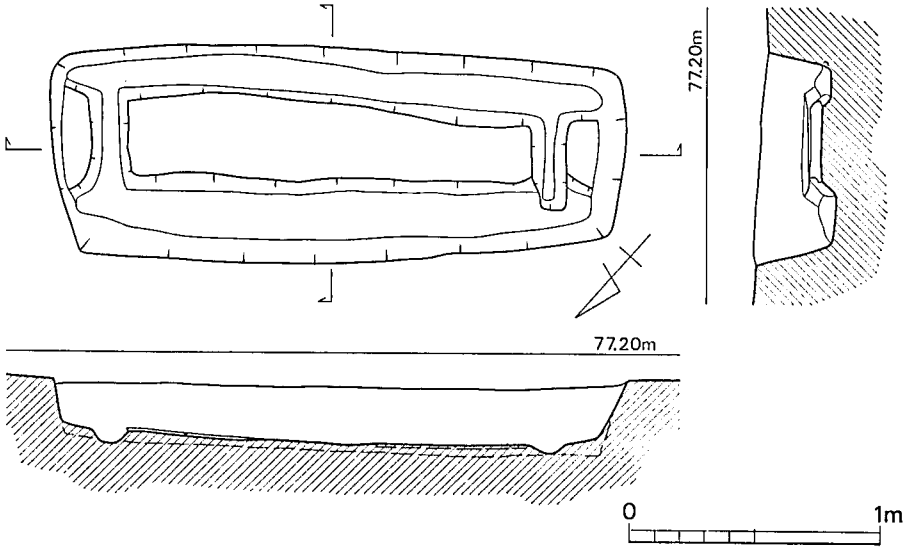
土壙墓・木棺墓の計測値は表2に示すとおりである。表中の主軸方向は等高等に平行なものを「｜」，直行するものを「—」で示し，掘込の項で両側に認められるものは「○」，片側だけのものは「△」で示した。 （池辺）

表 2　土壙墓・木棺墓一覧表

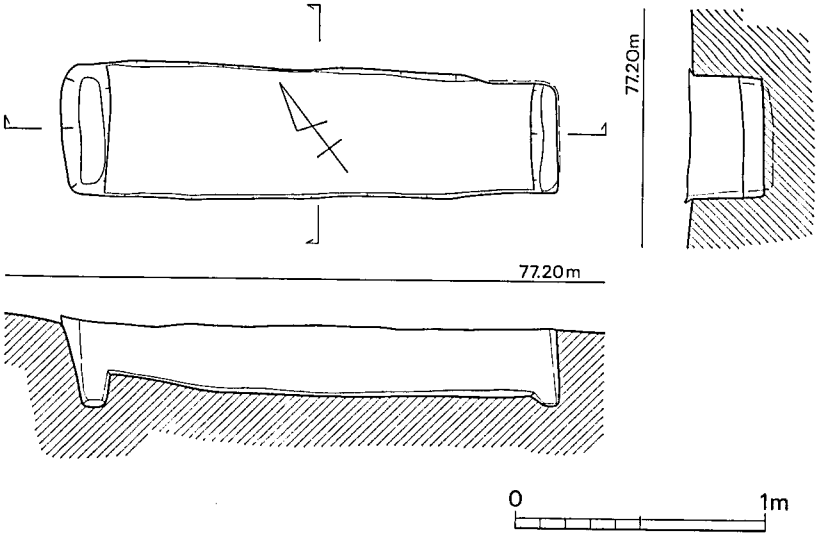
No.	種別	主軸方位	主軸方向	頭位	墓壙の規模		棺の内法			木棺の場合				
					長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	型式	木口の掘込	側板の掘込	側板の切込	裏込
153	木	N49°E	|	北東			170	39	26	A	○	○		
154	木	N52°W	—	北西			175	47	28	A	○			
155	木	N84°E	|	東			167	49	18	A	○			
156	木	N67°W	—	北西	241	133	161	41	37	A	○	○	○	
157	木	N84°W	—	北西	185	72	117	36	34	B	○	○		
158	土	N80°E	／	北東	203	117	175	58	35					
159	木	N86°W	—	西	222	127	164	44	38	A	△			
160	木	N83°E	—	西	240	132	173	75	46	A	○		○	
161	木	N31°E	|	北東	223	125	167	51	36	A	○			○石
162	木	N37°E	|	北東	236	119	183	58	32	A	○			
163	木	N76°W	／	北西			152	49	43	D	△			
164	木	N 5 °E	|	北	243	120	171	51	41	A	○			
165	木	N14°E	|	北東	199	100	164	48	15	D	○	○		
166	木	N67°W	／	北西			177	46	37	A	○	○	△	○
167	木	N62°W	／	北西			169	55	33	A	○	△		
168	木	N85°W	／	西			180	(98)	27	A	○			
169	木	N 2 °E	|	北	217	153	173	40	40	A	○	△	△	
170	木	N67°W	—	北西			179	64	58	(A)				○石
171	土	N17°E	|	北			210	54	21					
172	土	N67°W	—	北西	(180+α)	111	(148+α)	64	22					
173	木	N12°E	|	北			165	66	10	A	△			
174	木	N11°E	|	北			173	48	19	D	○	○		
175	木	N 9 °E	|	北	(113+α)	64	(91+α)	37	13	(D)				
176	土	N75°W	—	北西			134	40	15					
177	土	N80°W	—	西			154	42	20					
178	土	N31°E	|	北西	142	80	102	30	21					
179	木	N30°E	|	北東	261	123	176	53	42	A	○	○	△	
180	木	N31°E	|	北東	268	131	161	62	38	A	△			○石
181	木	N48°W	—	北西	247	134	187	46	31	A	○	○	○	
182	木	N73°W	—	西			154	52	28	A	○	△		
183	土	N70°W	—	北西			128	41	30	A	○	△		○石
184	木	N59°W	—	北西	254	120	175	57	27	A	○	○	○	
185	木	N15°E	|	北東			174	53	24	A	○	△		○石
186	木	N41°W	—	北西	207	120	130	41	30	A				○石
187	土	N18°E	／	北東	(196+α)	(79+α)	176	59	42					

No.	種別	主軸方位	主軸方向	頭位	墓壙の規模		棺の内法			木棺の場合				
					長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	型式	木口の掘込	側板の掘込	側板の切込	裏込
188	木	N50°W	—	北西	(222+α)	(114+α)	161	63	50	A	○		○	○石
189	木	N63°W	／	北西	261	(98+α)	216	48	62	(D)				○
190	木	N34°E	｜	北東			197	57	23	(B)		△		
191	土	N 8 °W	／	北			73	21	33					
192	木	N85°W	／	西	(242+α)	(145+α)	206	62	48	(?)				
193	土	N80°W	／	西			168	40	43					
194	木	N 1 °E	—	北	223	(117+α)	162	52	31	A	△		○	
195	木	N76°W	／	北西			172	65	46	A	○			
196	木	N58°W	／	北西	(?)	(110+α)	187	47	37	A	○	○		
197	木	N30°E	｜	北東	140	78	90	34	28	A	○	△		
198	土	N66°E	｜	北東			91	61	25					
199	木	N 9 °E	／	北			125	49	50	A	○			
200	土	N63°E	／	北東			213	91	60					
201	木	N20°E	／	北東			184	49	24	A	△			
202	土	N60°E	／	北東			179	(65+α)	21					
203	土	N 9 °W	—	北			184	47	28					
204	土	N11°E	—	北			111	40	32					
205	土	N53°E	｜	北東			176	47	(8+α)					
206	土	N81°W	／	北西			121	62	40					
207	土	N62°W	—	北西			(49+α)	32	26					
208	土	N56°W	—	北西			191	46	26					
209	土	N75°W	—	北西			130	41	30					
210	木	N53°W	—	北西	(231+α)	123	163	54	36	A	○	○	○	○
211	木	N30°E	｜	北東	(185+α)	122	134	35	25	A	○	○		○
212	木	N57°W	—	北西	267	144	185	49	41	A	○	○	○	
213	土	N11°W	—	北			189	68	45					
214	土	N 9 °W	／	北			121	33	26					
215	木	N 1 °W	／	北			171	48	35	A	△			
216	木	N 3 °E	／	北			193	49	32	A	○			
217	木	N11°E	／	北			164	59	32	A	○			
218	木	N 2 °W	／	北			193	59	37					
219	木	N21°W	—	北			156	40	32	(D)				
220	土	N19°W	—	北西	234	93	186	32	34					
221	木	N 4 °W	—	北西			111	22	26	B	△			
222	土	N 4 °W	—	北			144	35	34					
223	土	N 9 °W	—	北			189	31	34					

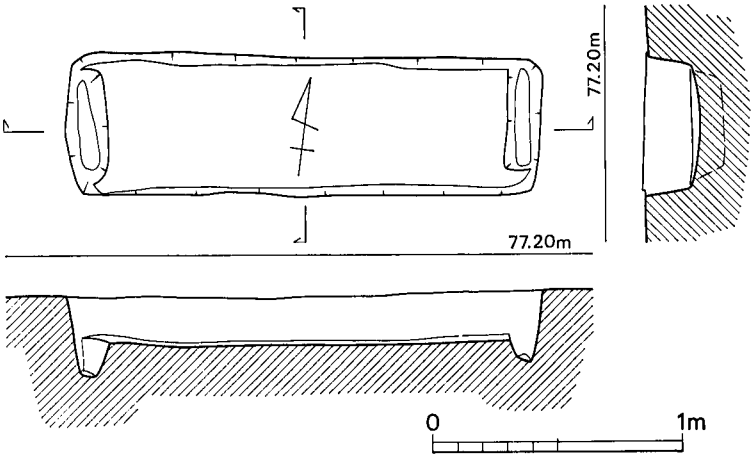
No.	種別	主軸方位	主軸方向	頭位	墓壙の規模		棺の内法			木棺の場合				
					長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	型式	木口の掘込	側板の掘込	側板の切込	裏込
224	木	N 7 °E	／	北			180	54	22	A	△			
225	土	N 5 °W	—	北			209	76	36					
226	土	N20°W	—	北西			176	50	30					
227	土	N10°E	／	北			95	37	20					
228	木	N11°E	／	北			115	44	24	A	△			



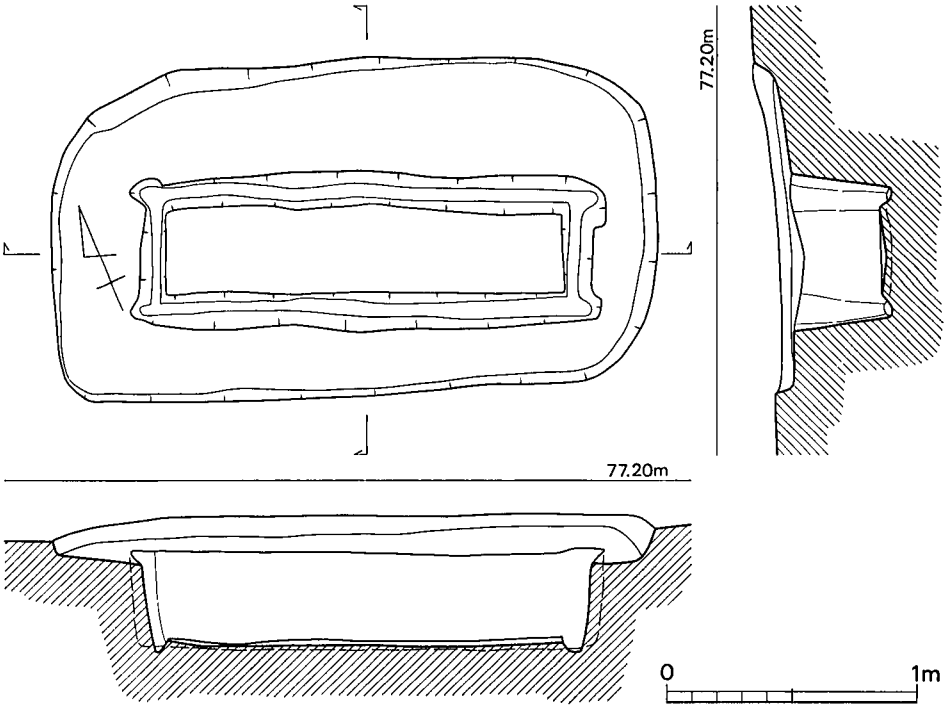
第9図　153号木棺墓実測図（1/30）



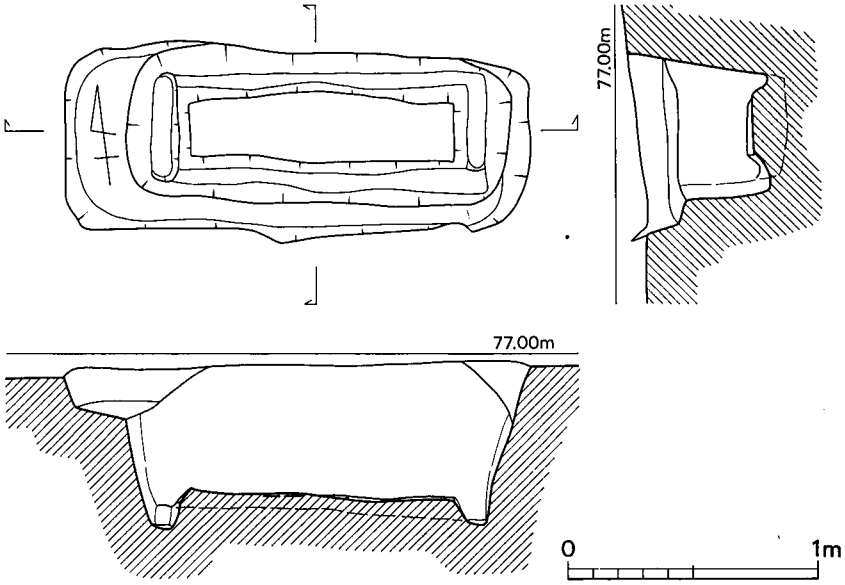
第10図　154号木棺墓実測図（1/30）



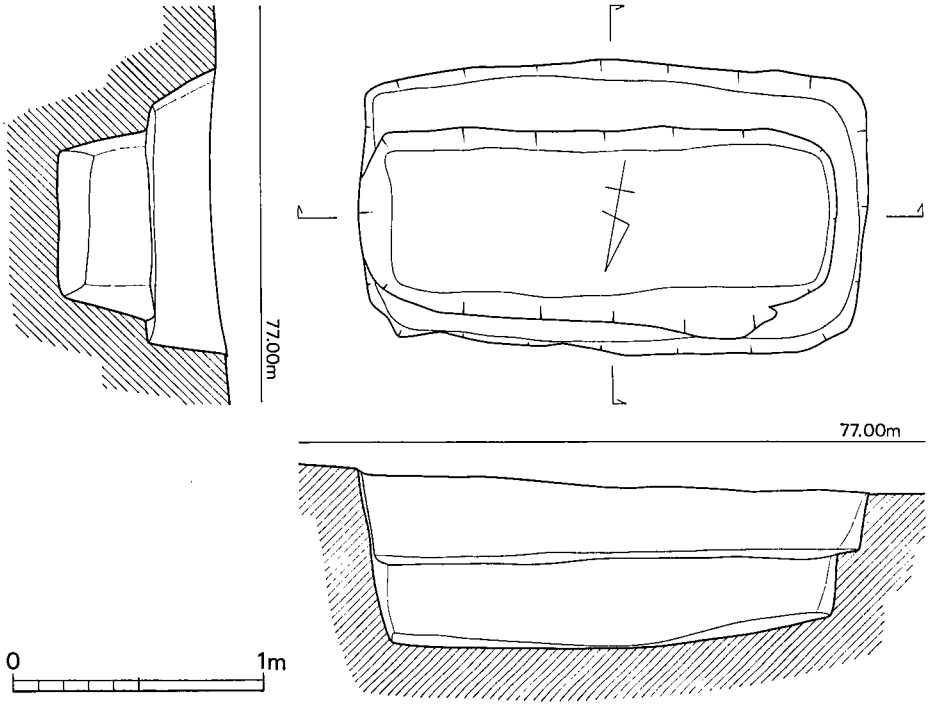
第11図　155号木棺墓実測図（1/30）



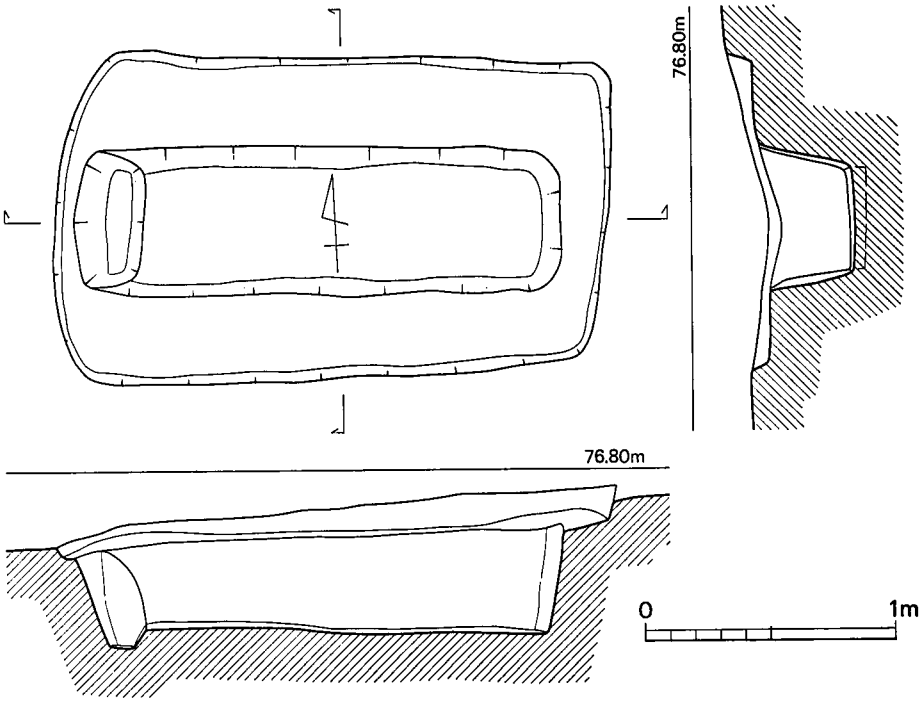
第12図　156号木棺墓実測図（1/30）



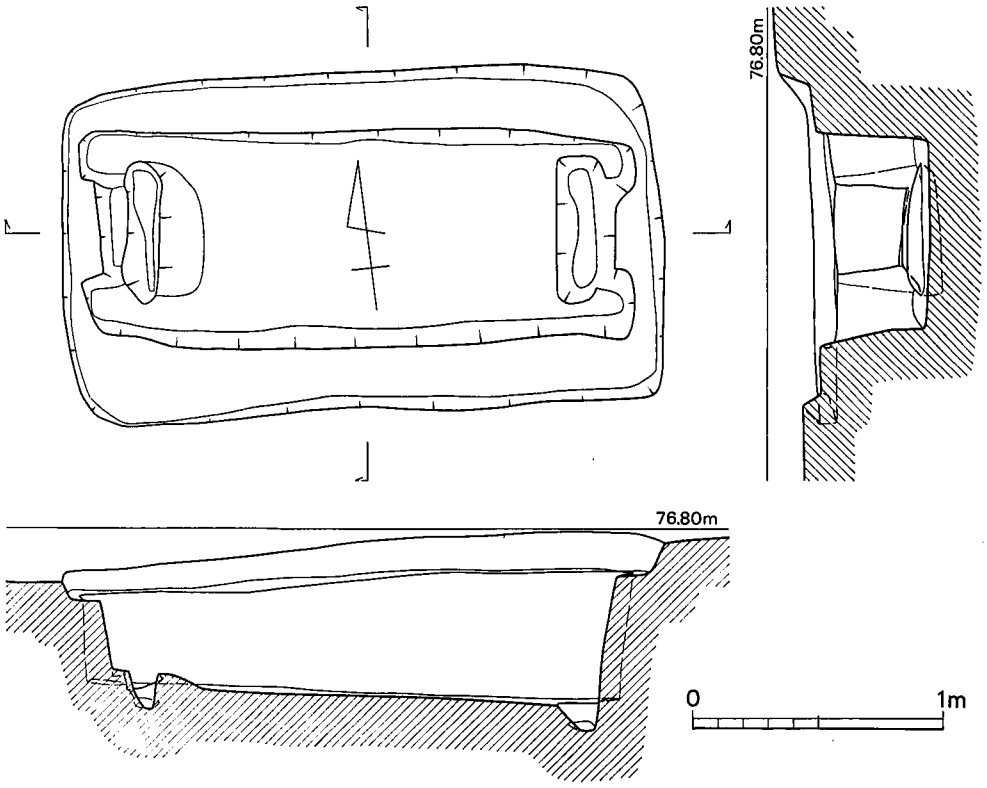
第13図　157号木棺墓実測図（1/30）



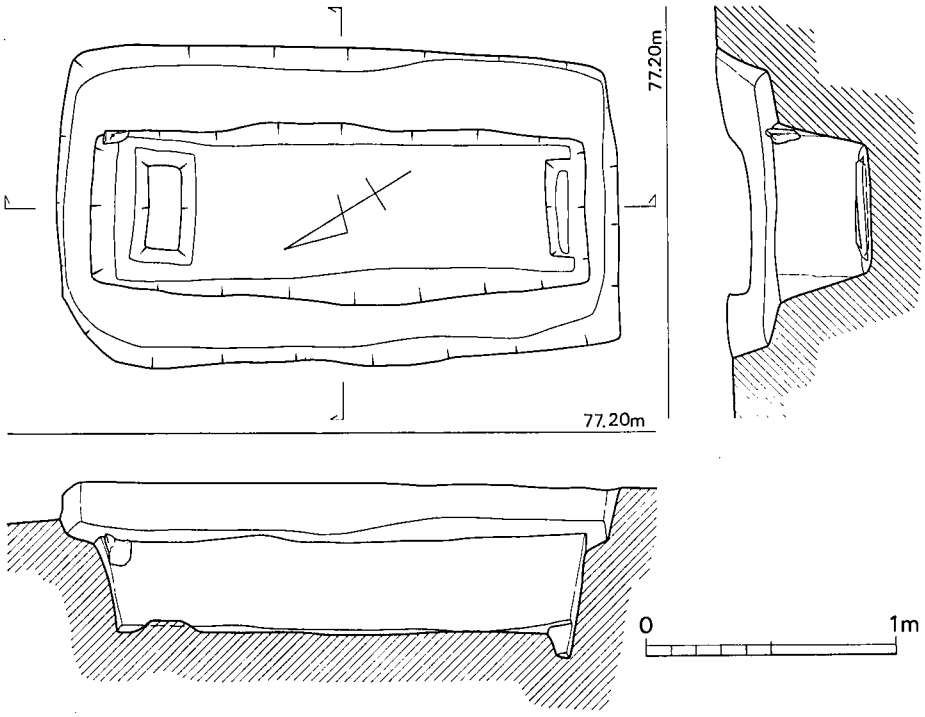
第14図　158号土壙墓実測図（1/30）



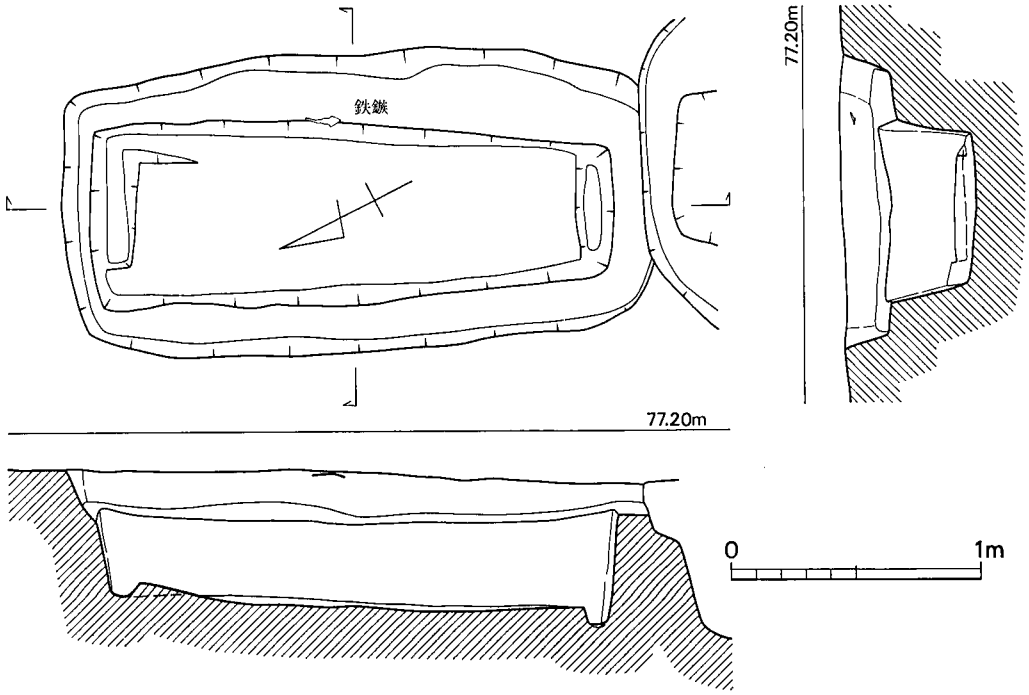
第15図　159号木棺墓実測図（1/30）



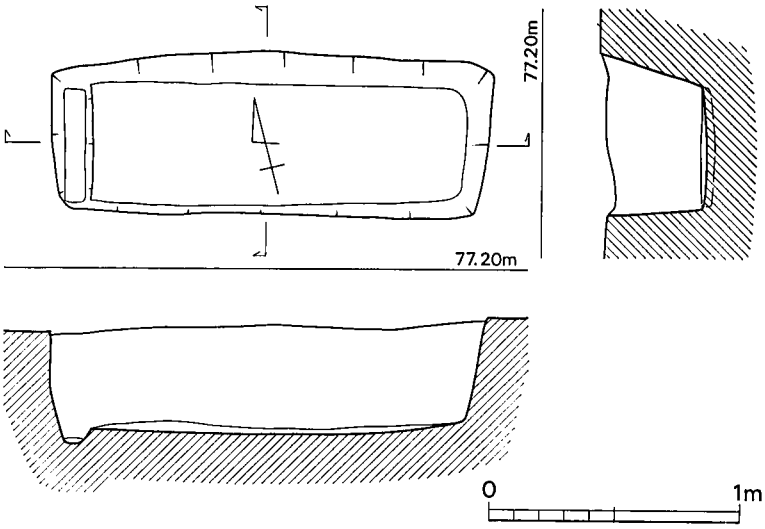
第16図　160号木棺墓実測図（1/30）



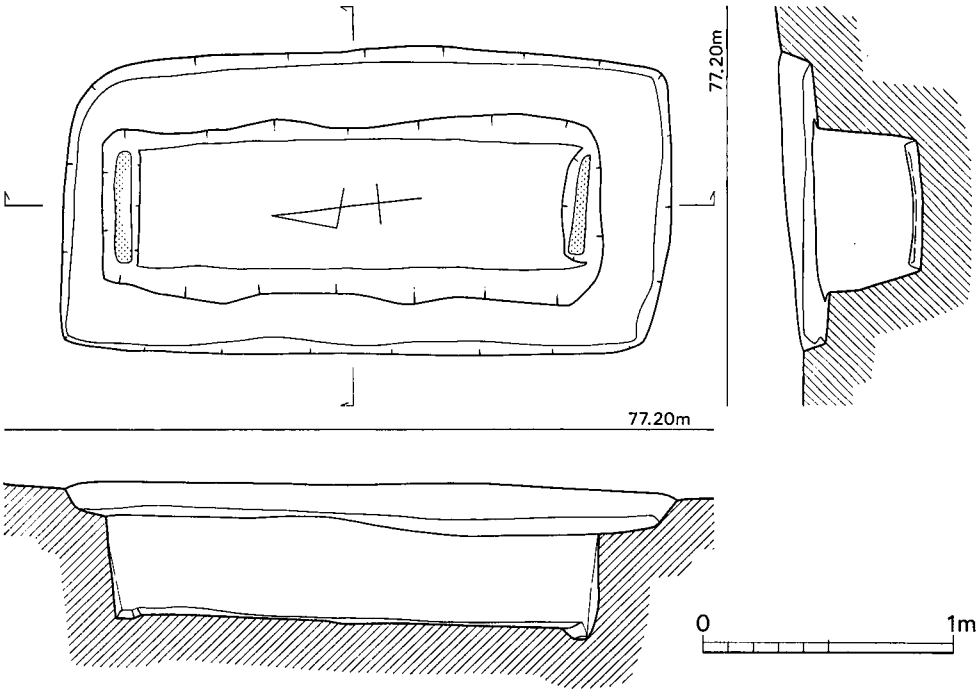
第17図　161号木棺墓実測図（1/30）



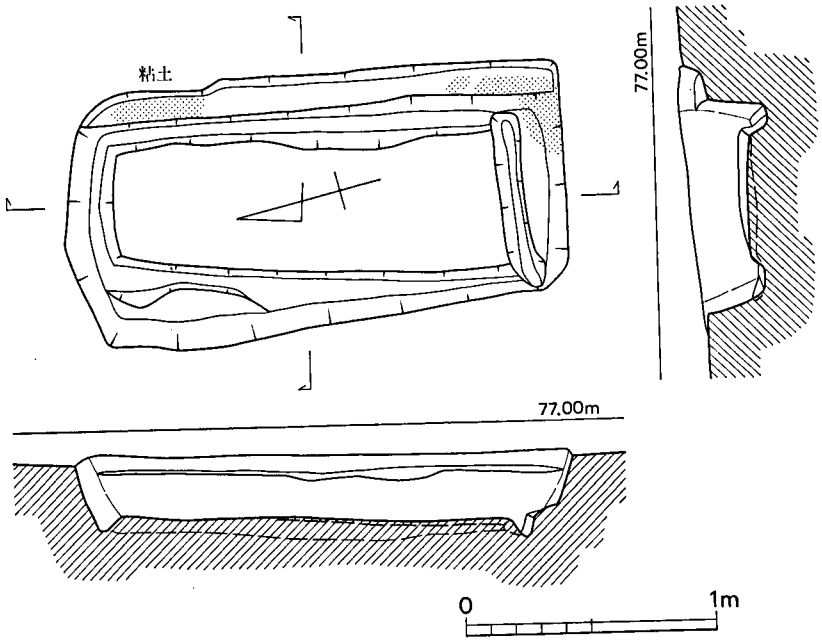
第18図　162号木棺墓実測図（1/30）



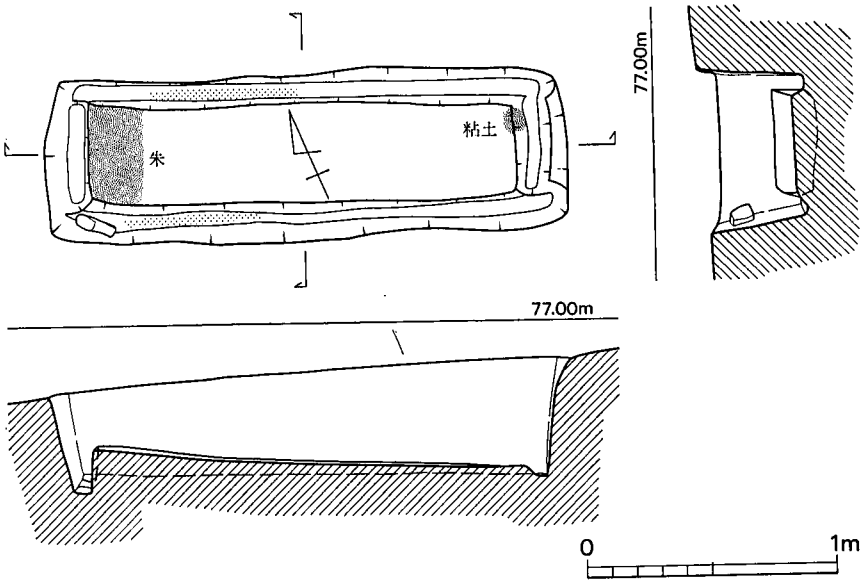
第19図　163号木棺墓実測図（1/30）



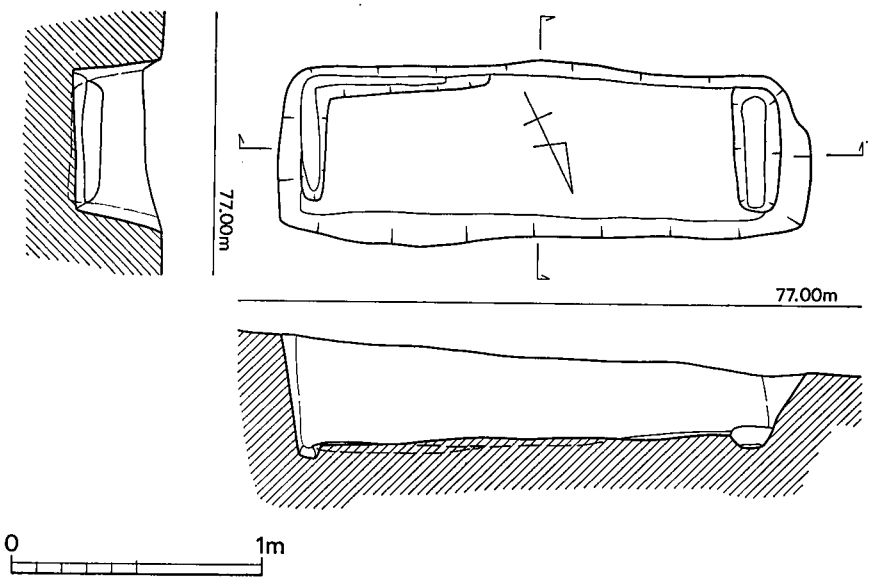
第20図　164号木棺墓実測図（1/30）



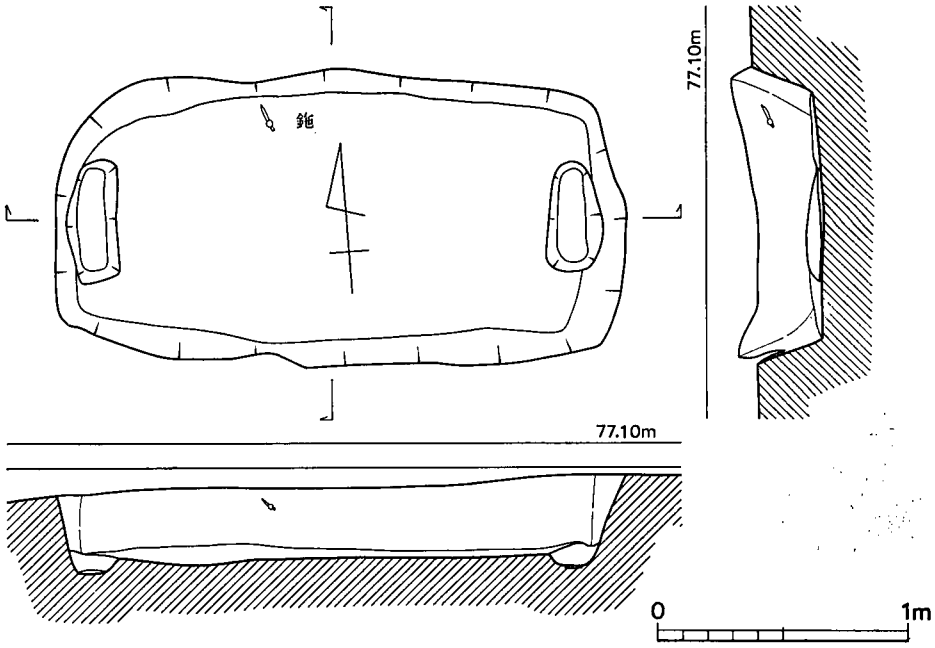
第21図　165号木棺墓実測図（1/30）



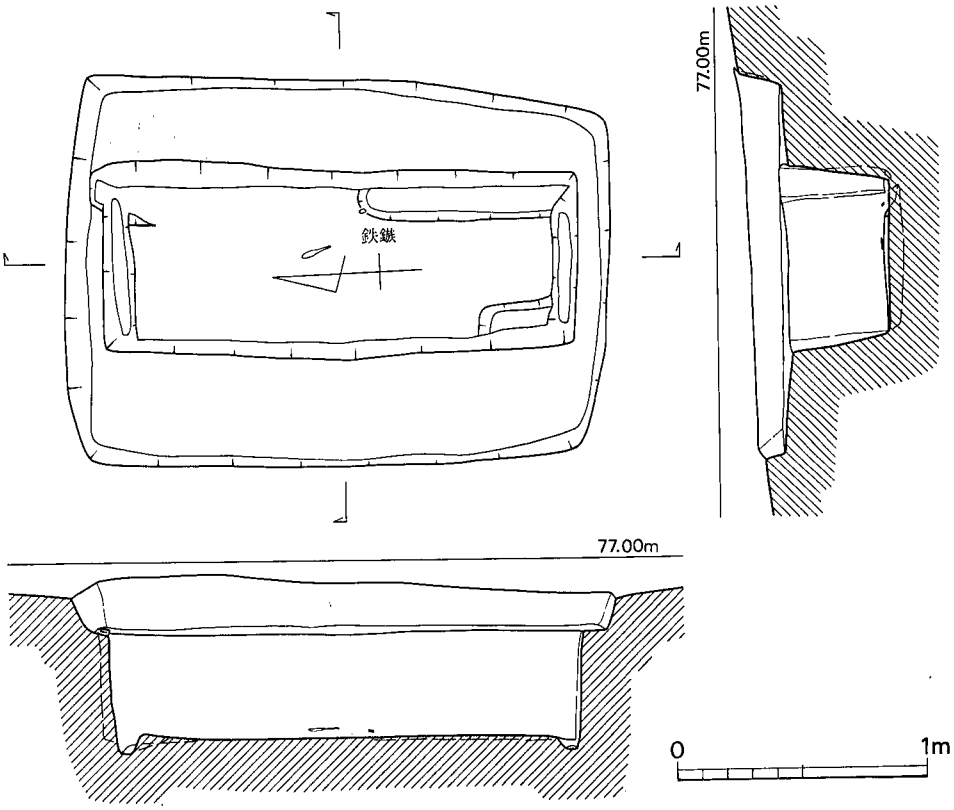
第22図　166号木棺墓実測図（1/30）



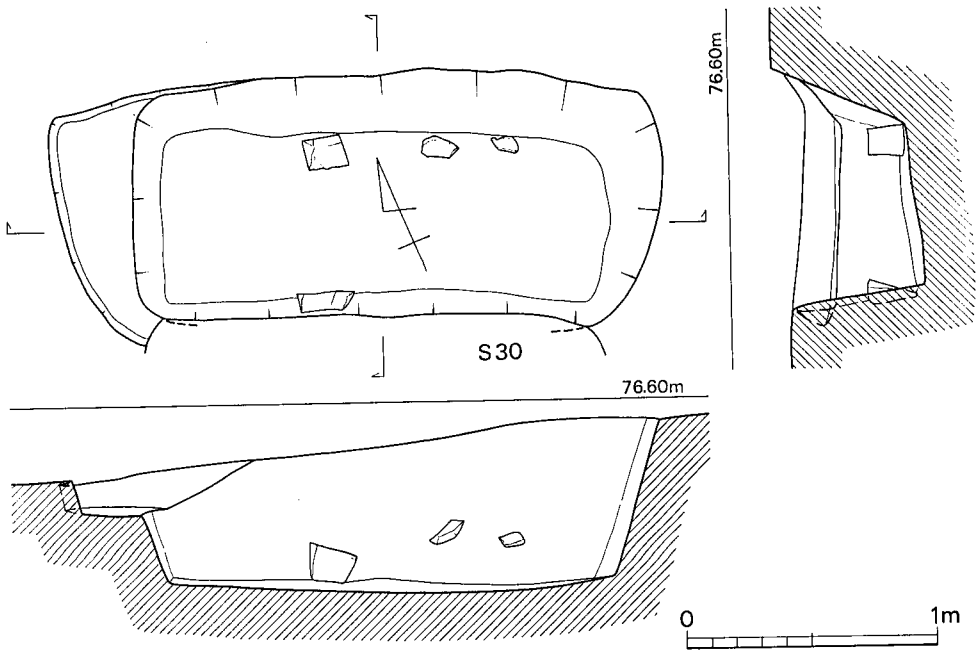
第23図　167号木棺墓実測図（1/30）



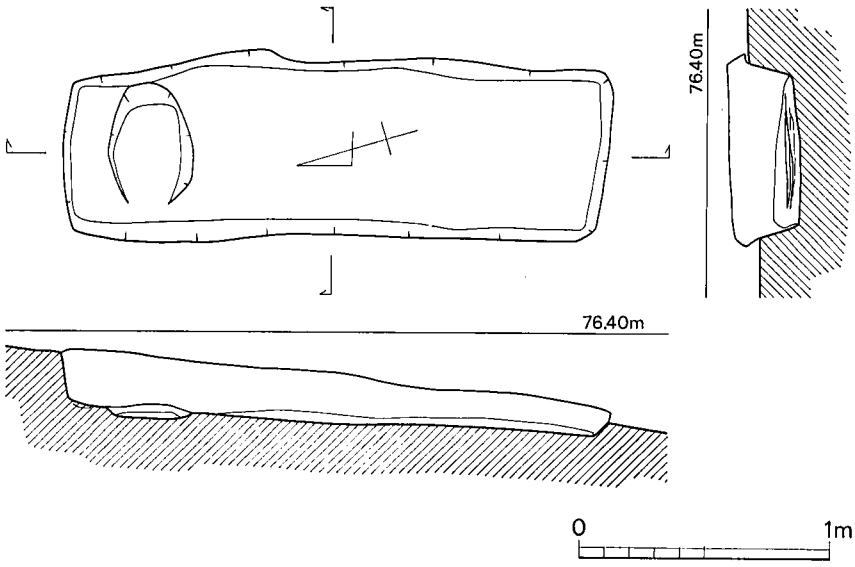
第24図　168号木棺墓実測図（1/30）



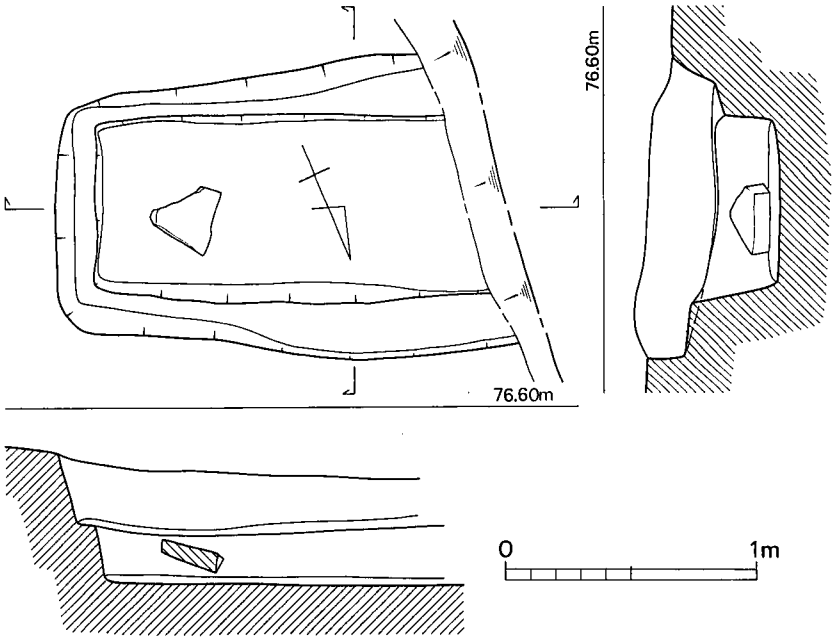
第25図　169号木棺墓実測図（1/30）



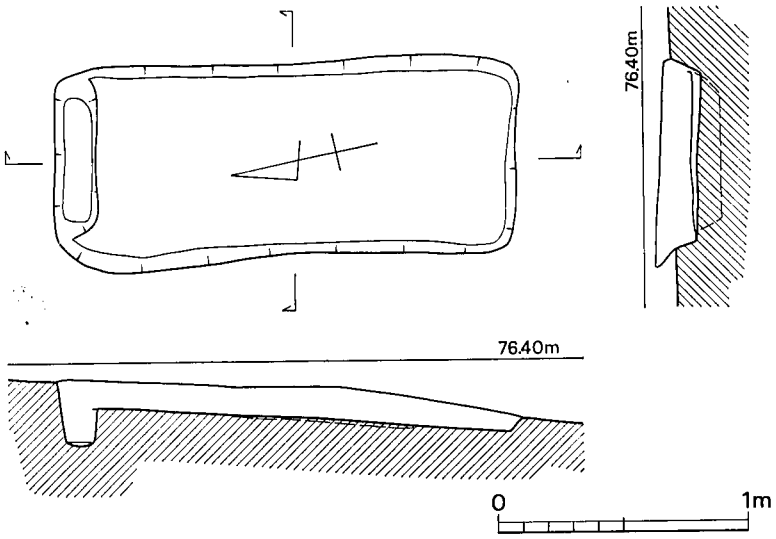
第26図　170号木棺墓実測図（1/30）



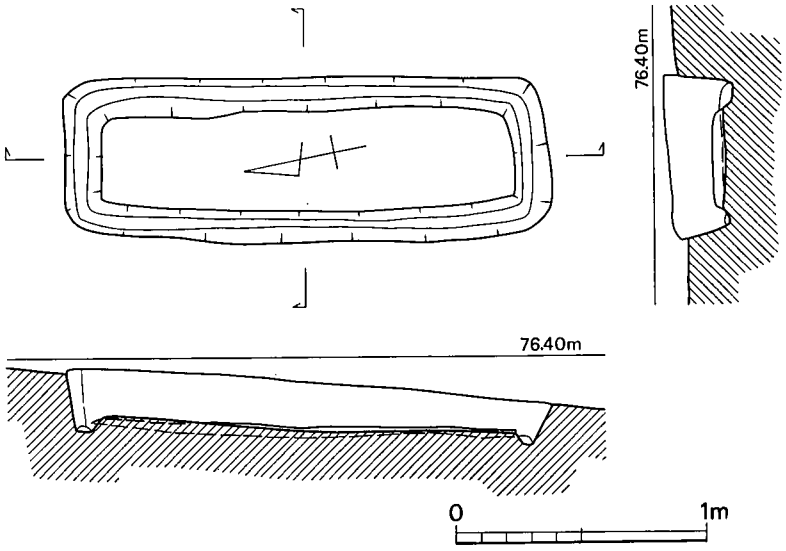
第27図　171号土壙墓実測図（1/30）



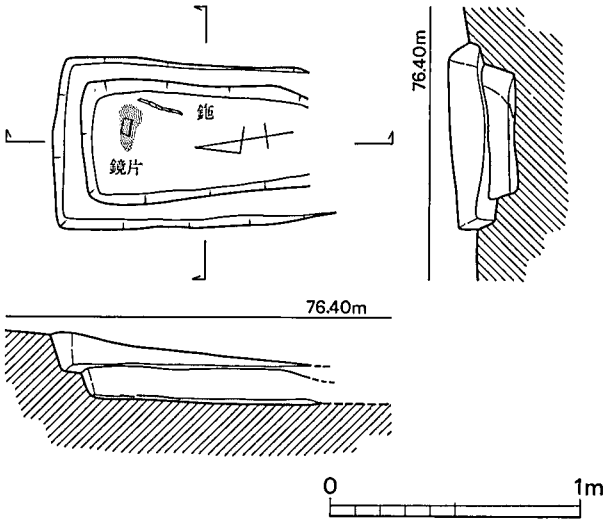
第28図　172号土壙墓実測図（1/30）



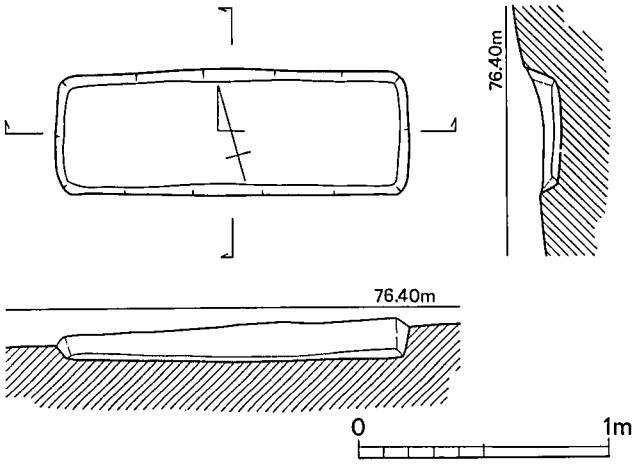
第29図　173号木棺墓実測図（1/30）



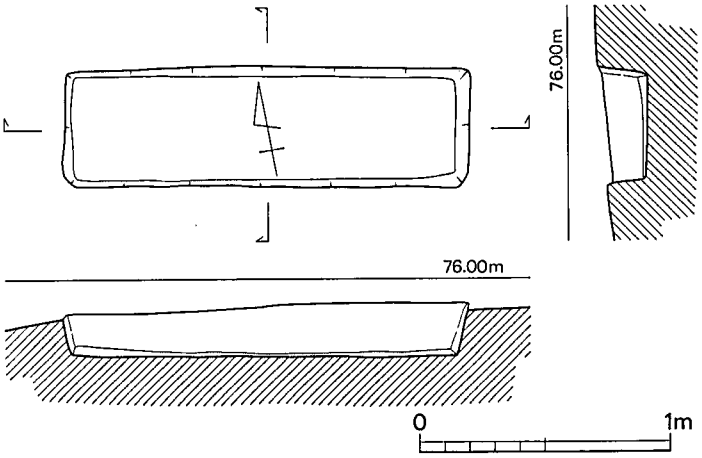
第30図　174号木棺墓実測図（1/30）



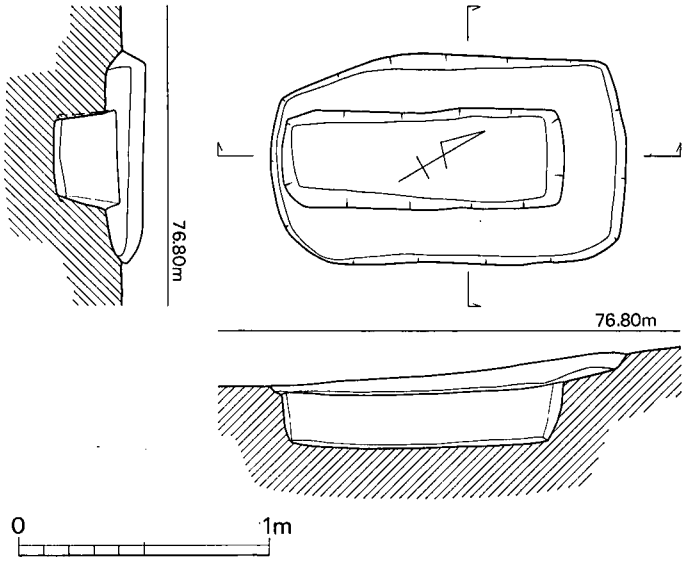
第31図　175号土壙墓実測図（1/30）



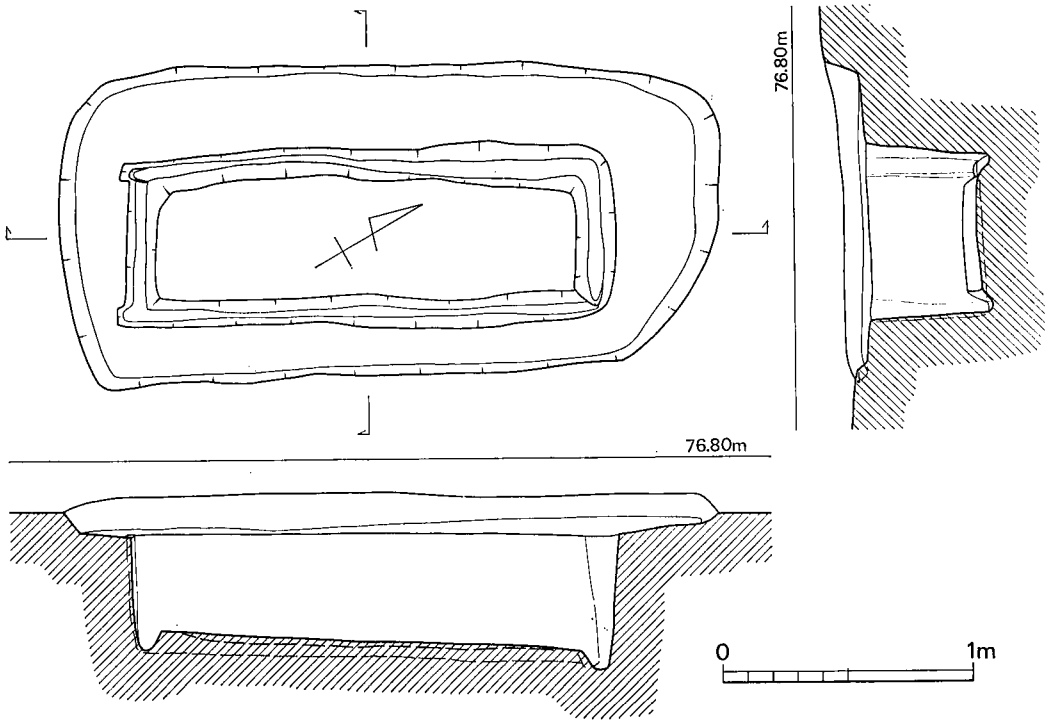
第32図　176号土壙墓実測図（1/30）



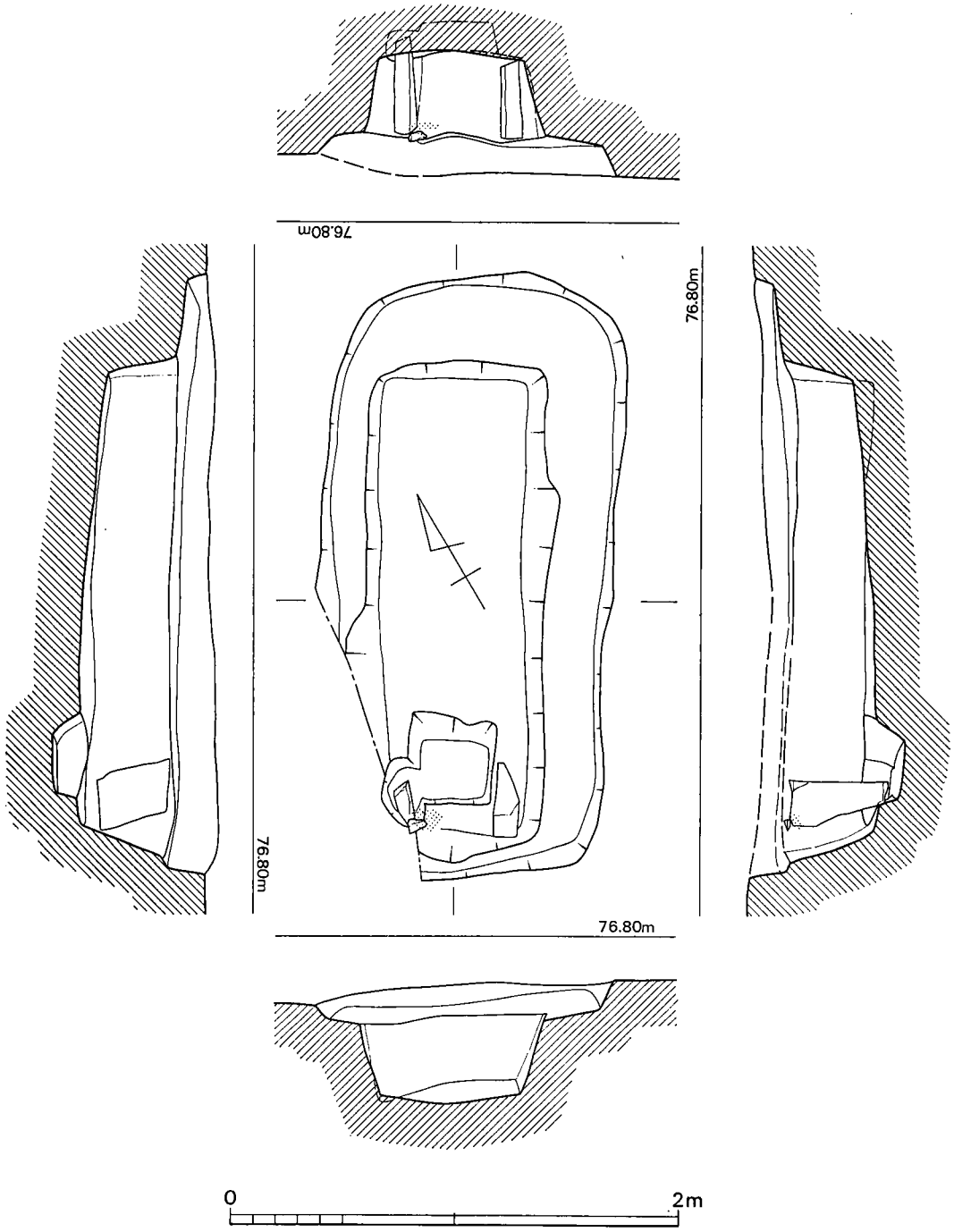
第33図　177号土壙墓実測図（1/30）



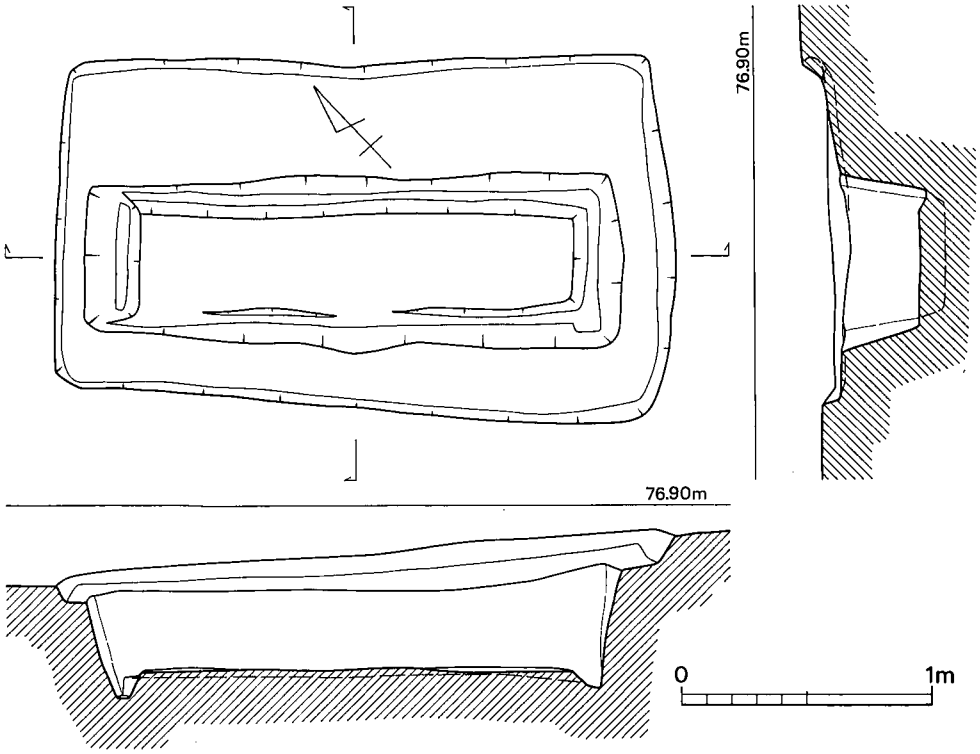
第34図　178号土壙墓実測図（1/30）



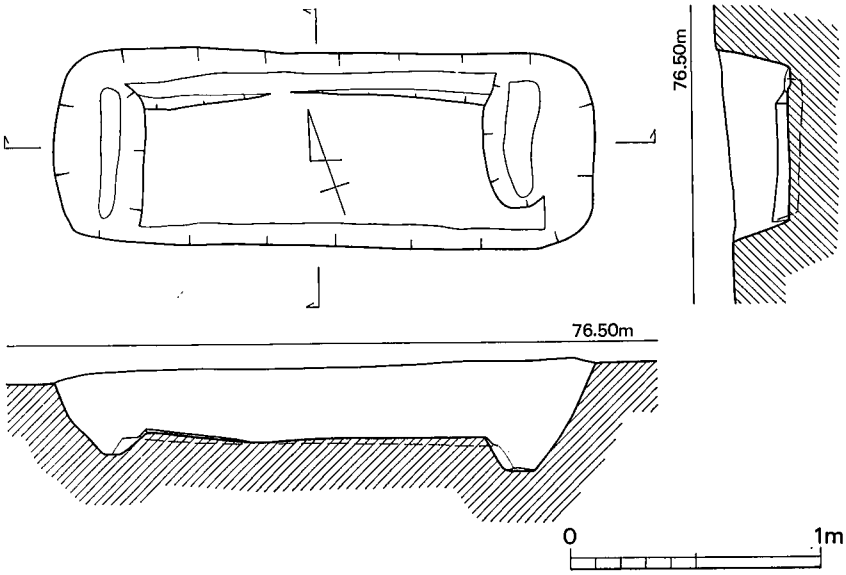
第35図　179号土壙墓実測図（1/30）



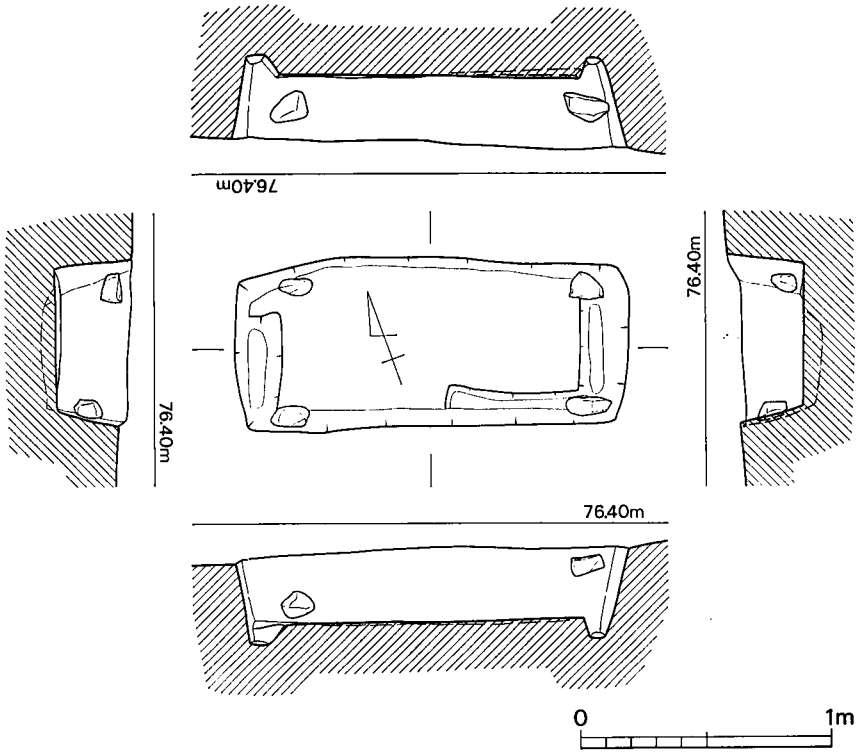
第36図　180号木棺墓実測図（1/30）



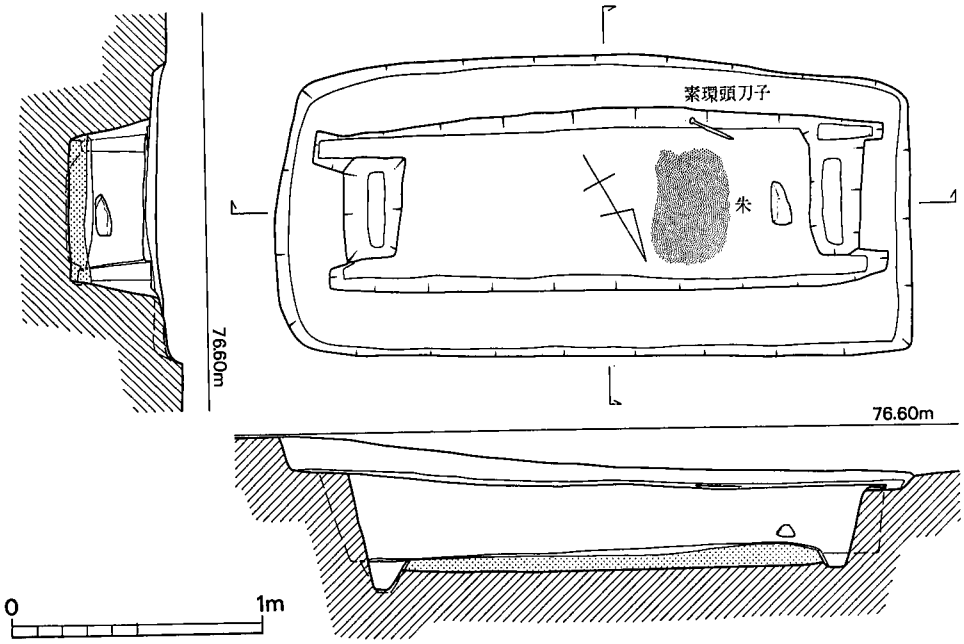
第37図　181号木棺墓実測図（1/30）



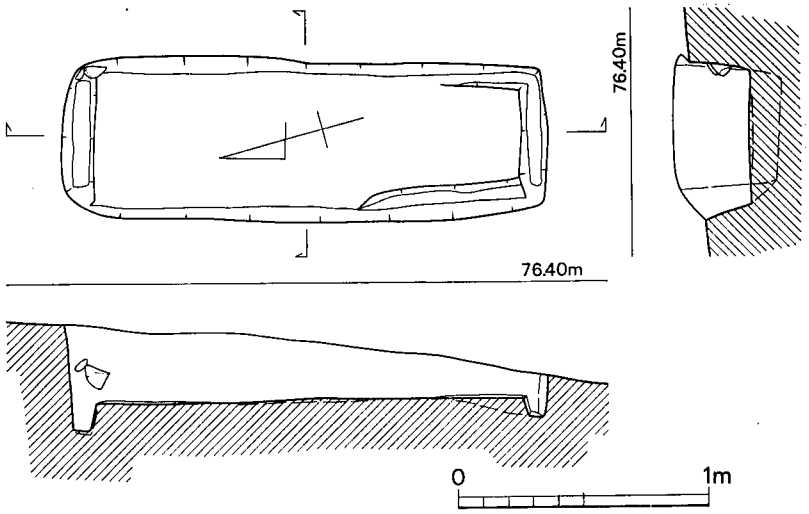
第38図　182号木棺墓実測図（1/30）



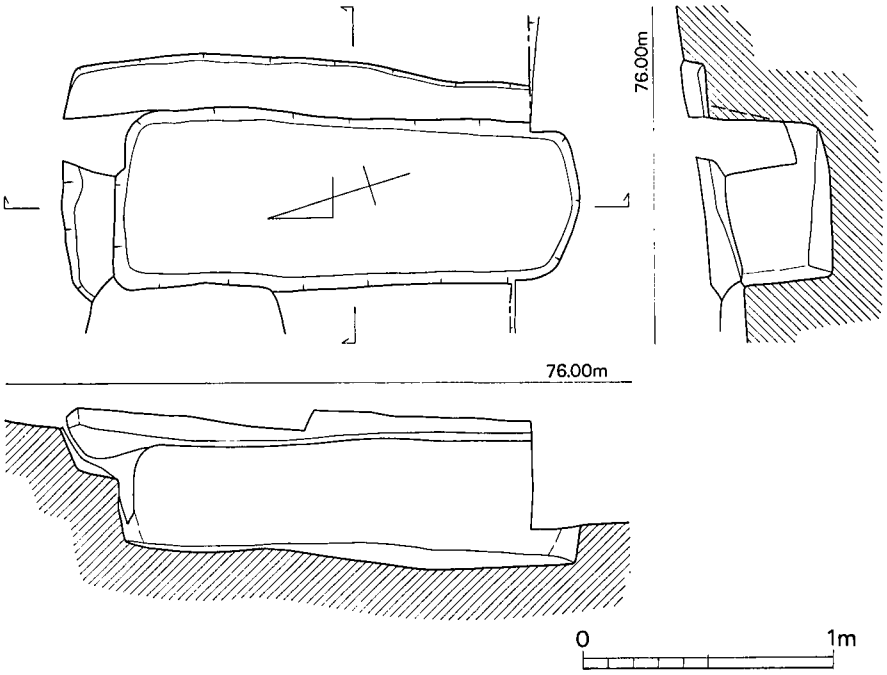
第39図　183号木棺墓実測図（1/30）



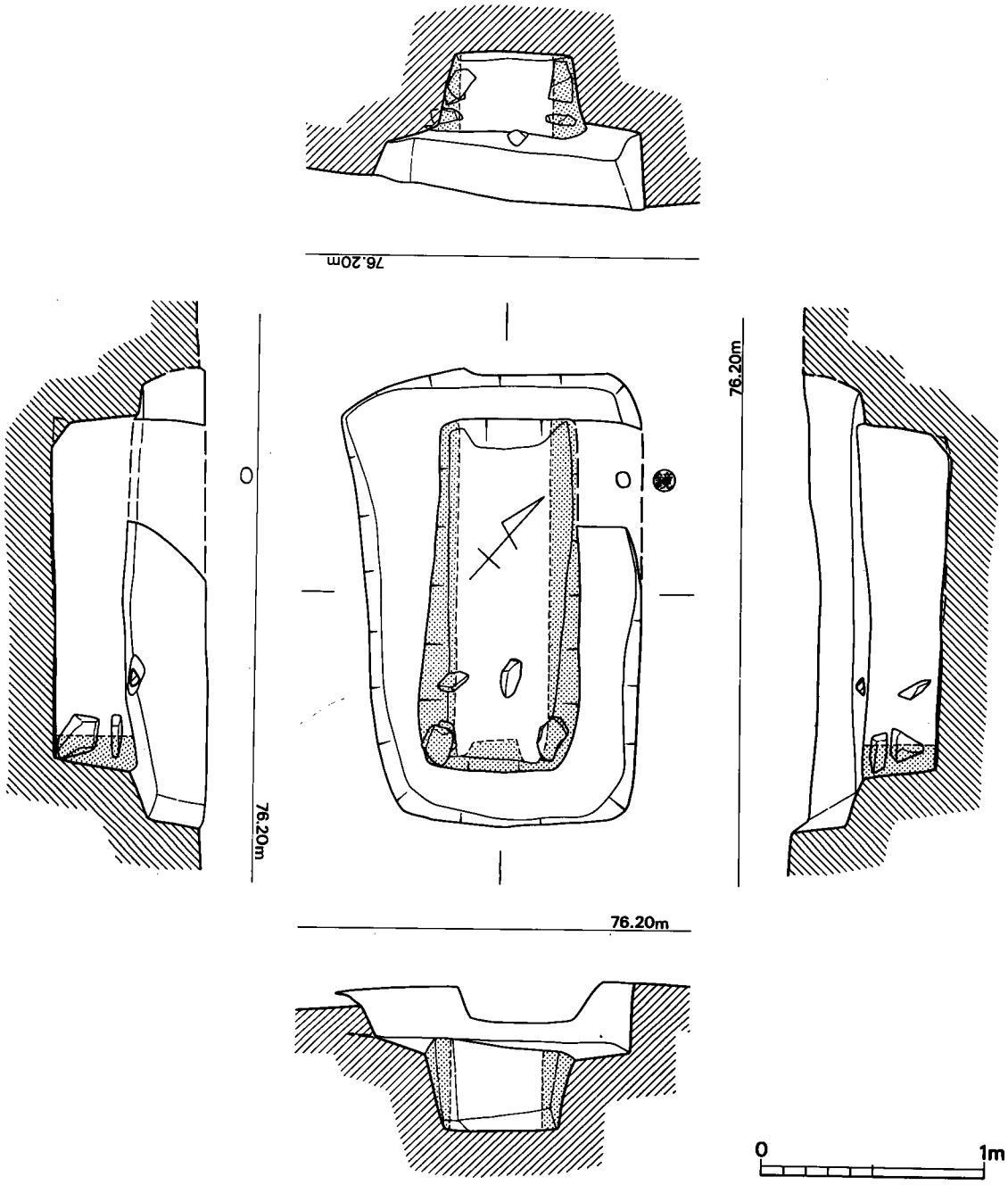
第40図　184号木棺墓実測図（1/30）



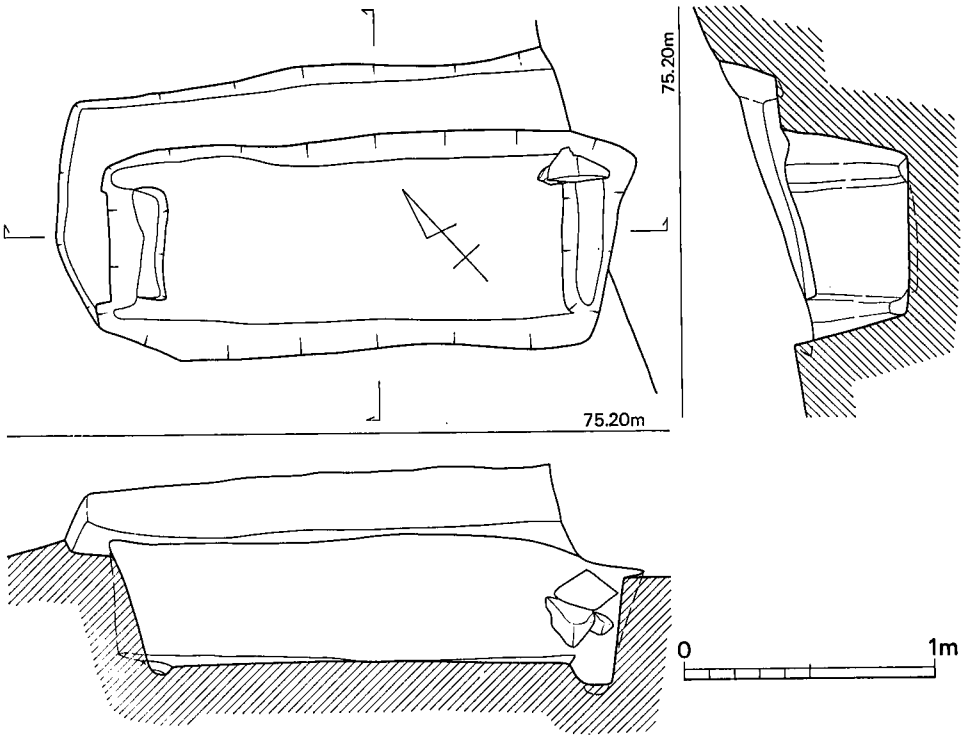
第41図　185号木棺墓実測図（1/30）



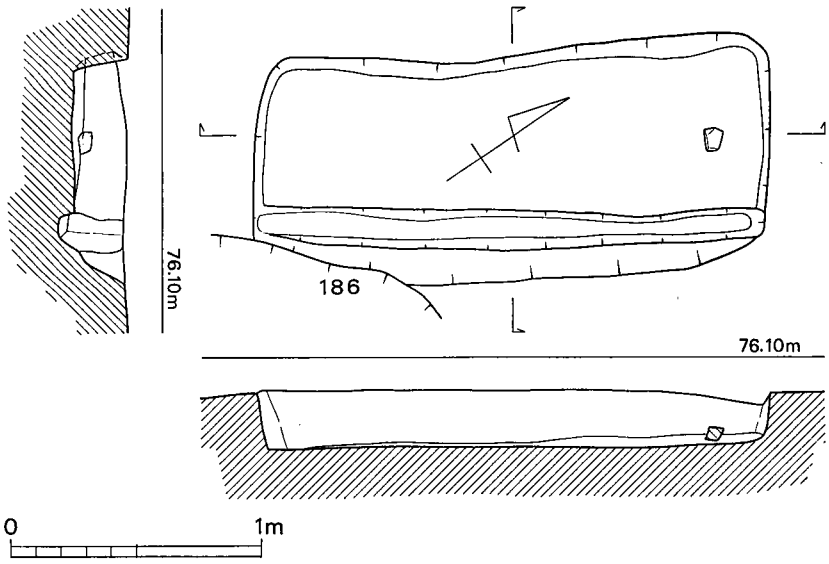
第43図　187号土壙墓実測図（1/30）



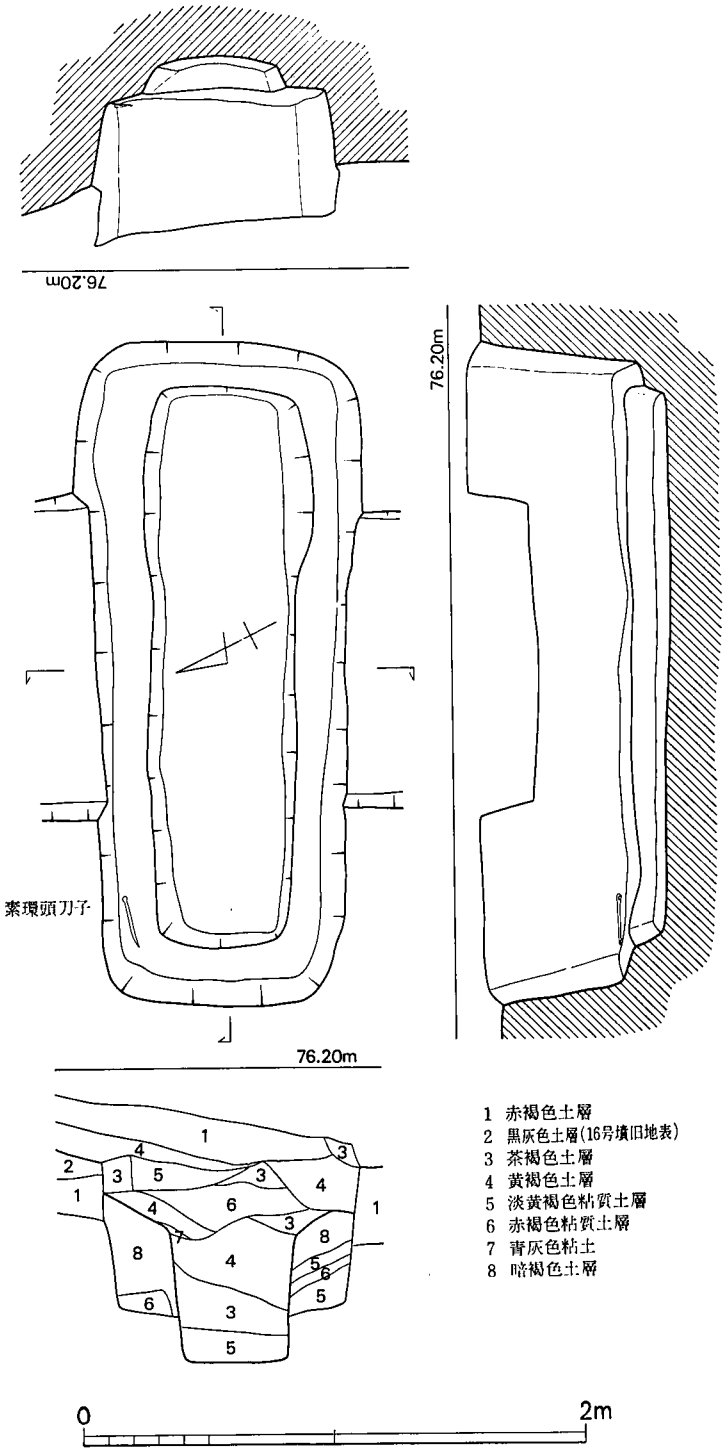
第42図　186号木棺墓実測図(1／30)



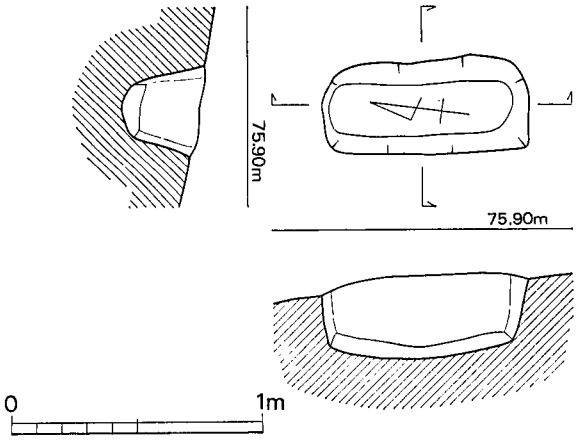
第44図　188号木棺墓実測図（1/30）



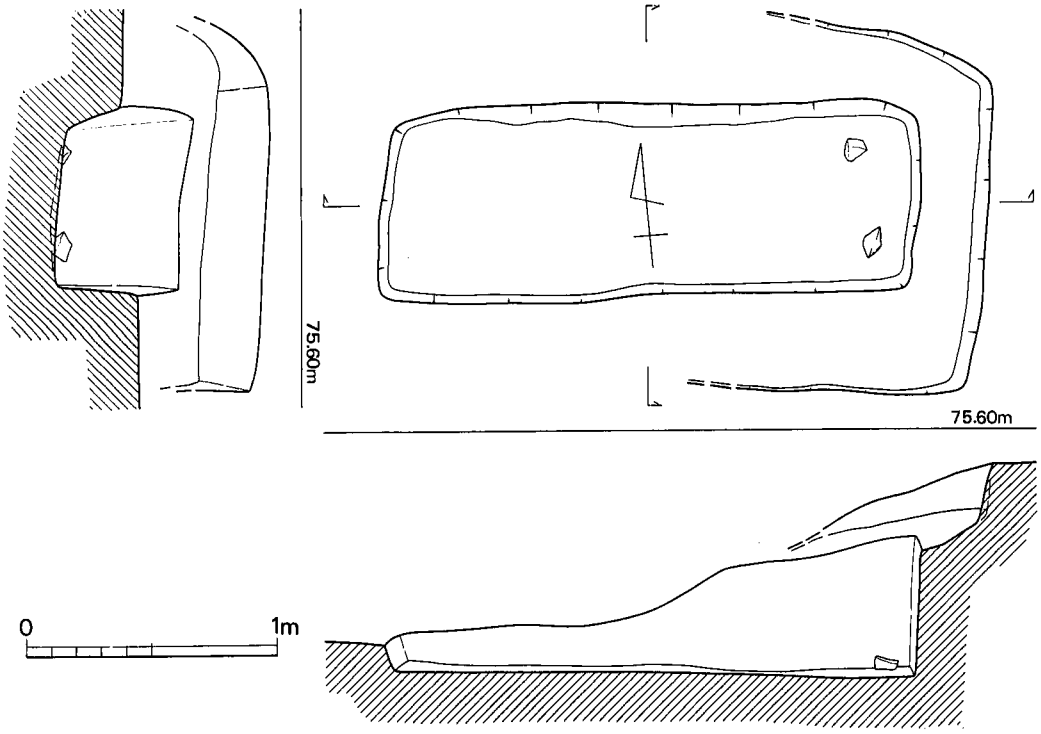
第45図　190号土壙墓実測図（1/30）



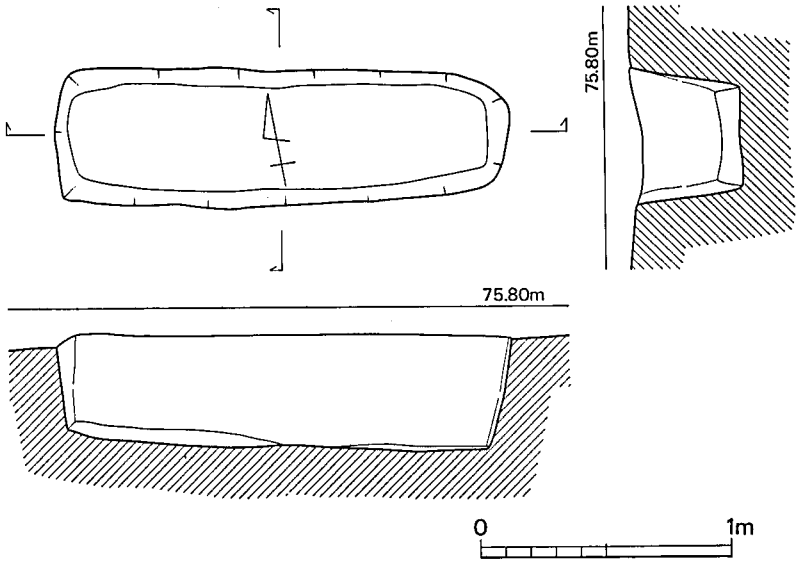
第46図　189号木棺墓実測図（1/30）



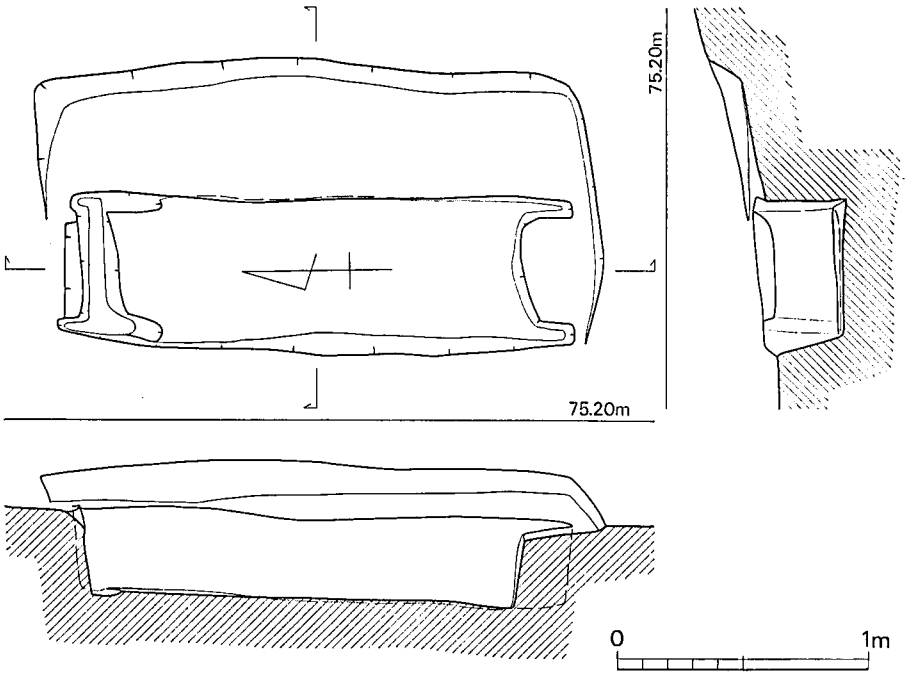
第47図　191号土壙墓実測図（1/30）



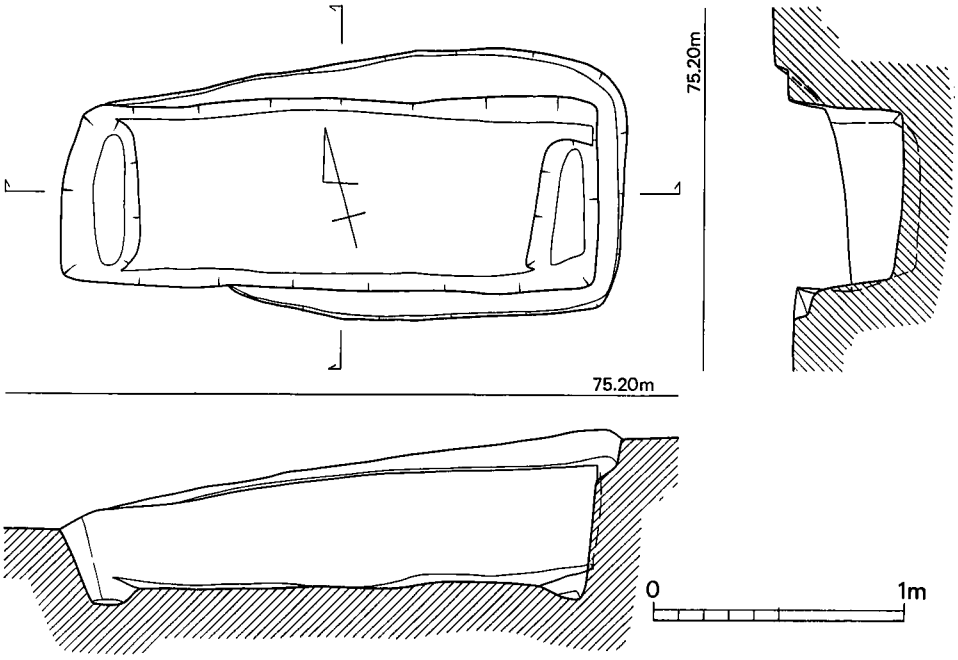
第48図　192号木棺墓実測図（1/30）



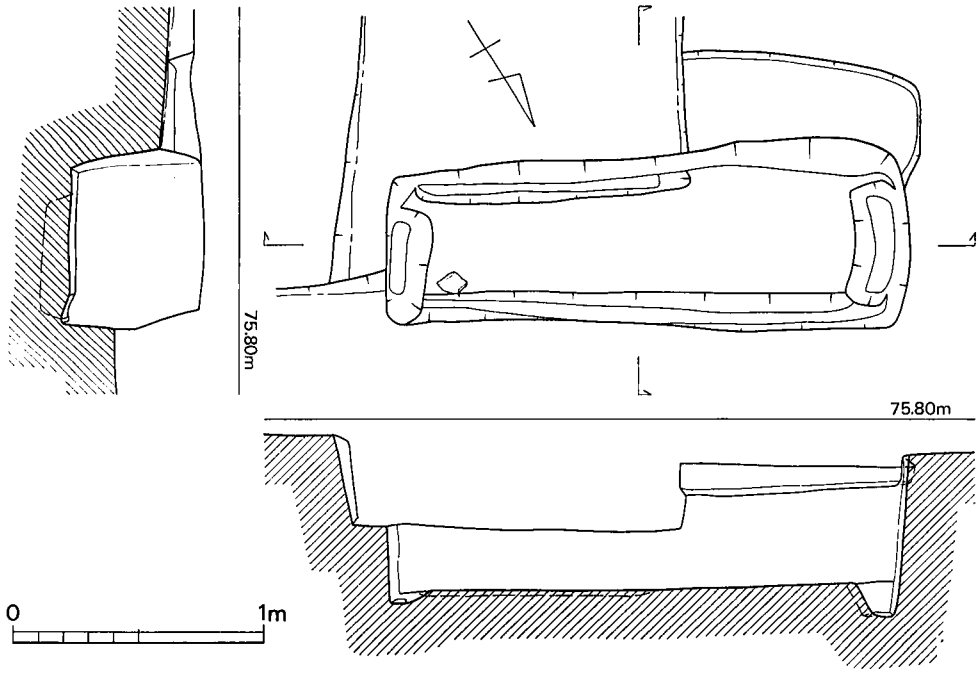
第49図　193号土壙墓実測図（1/30）



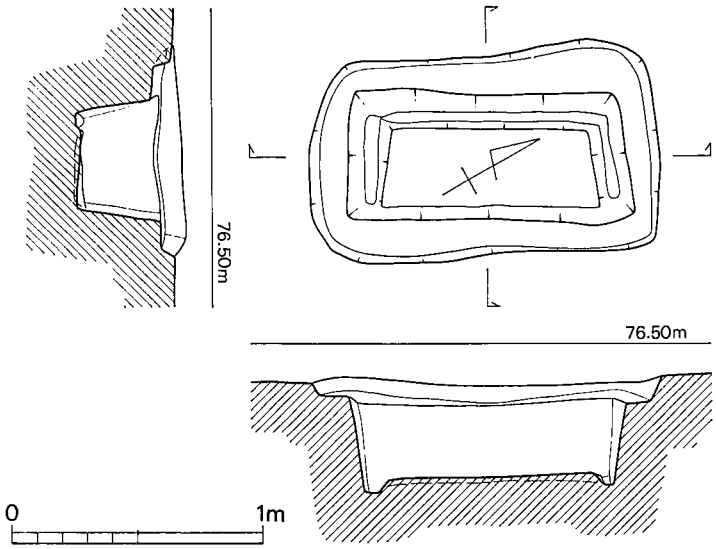
第50図　194号木棺墓実測図（1/30）



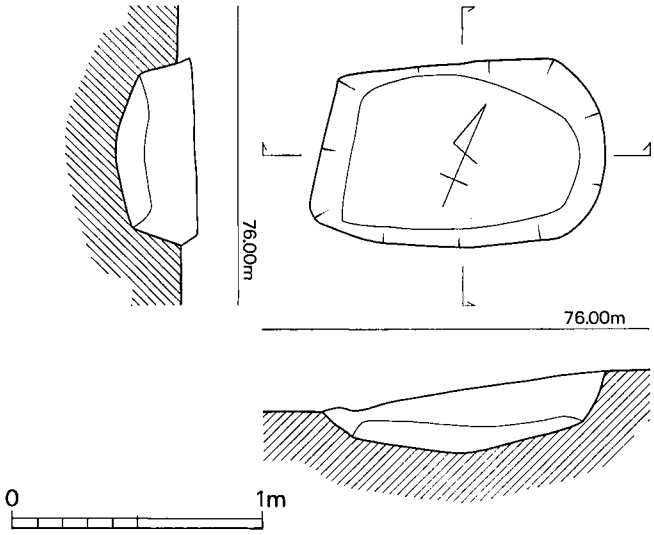
第51図　195号木棺墓実測図（1/30）



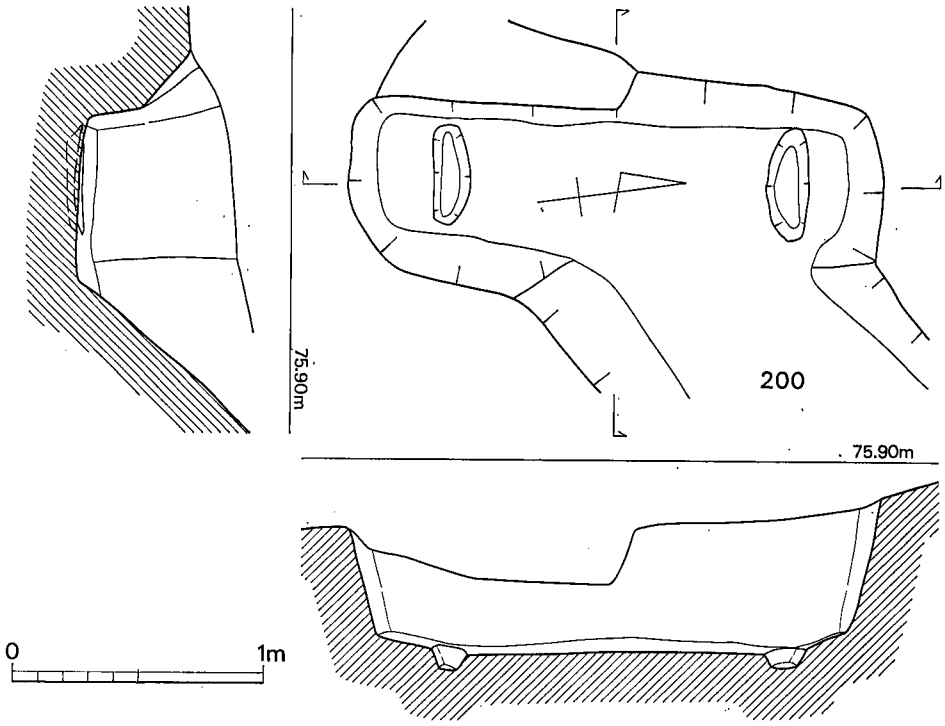
第52図　196号木棺墓実測図（1/30）



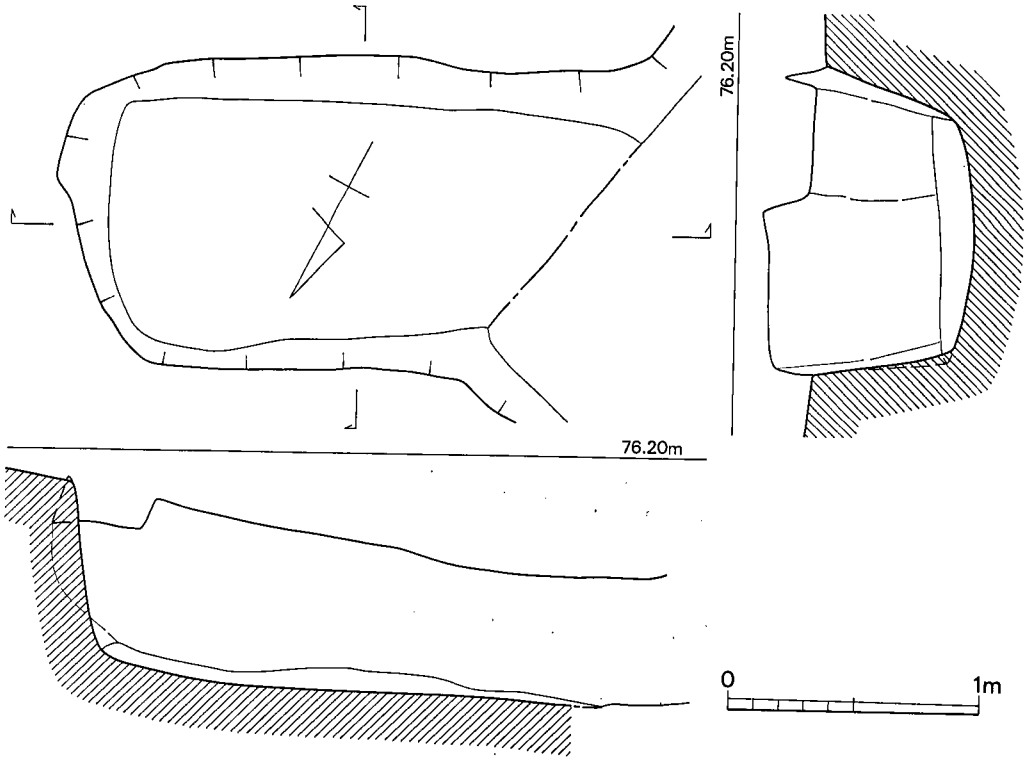
第53図　197号木棺墓実測図（1/30）



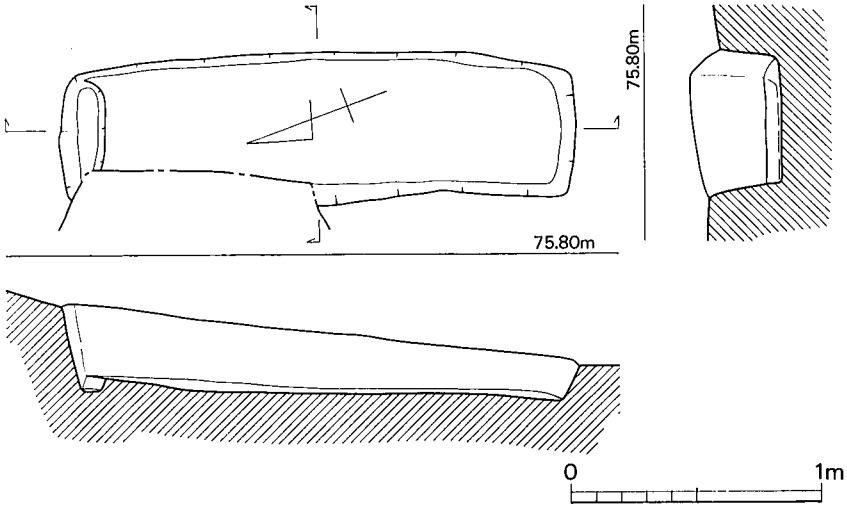
第54図　198号土壙墓実測図（1/30）



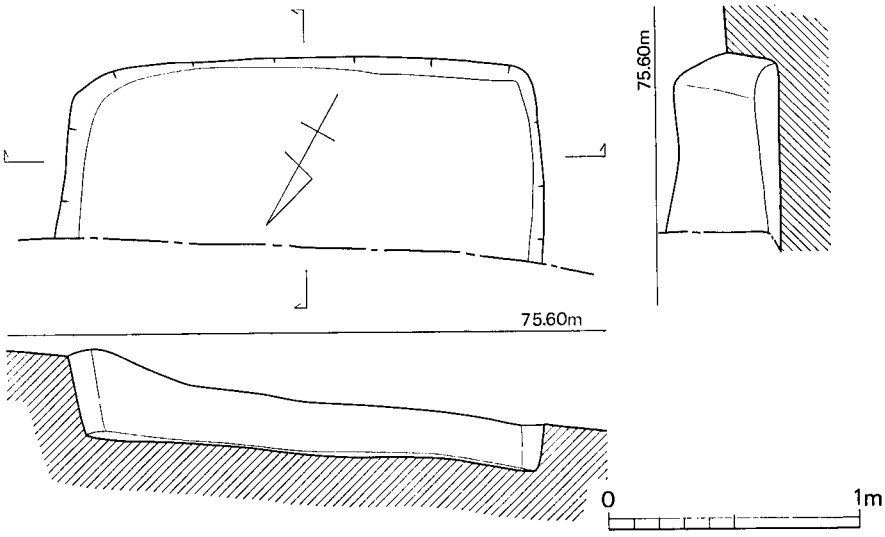
第55図　199号木棺墓実測図（1/30）



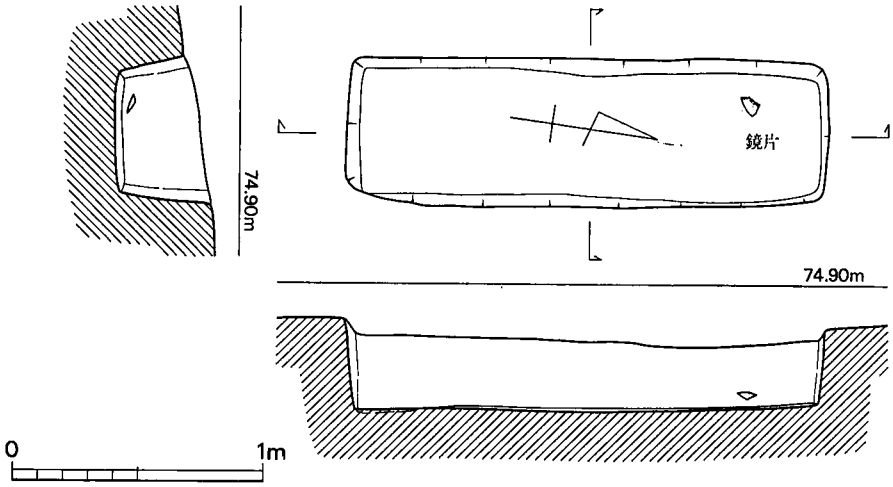
第56図　200号土壙墓実測図（1/30）



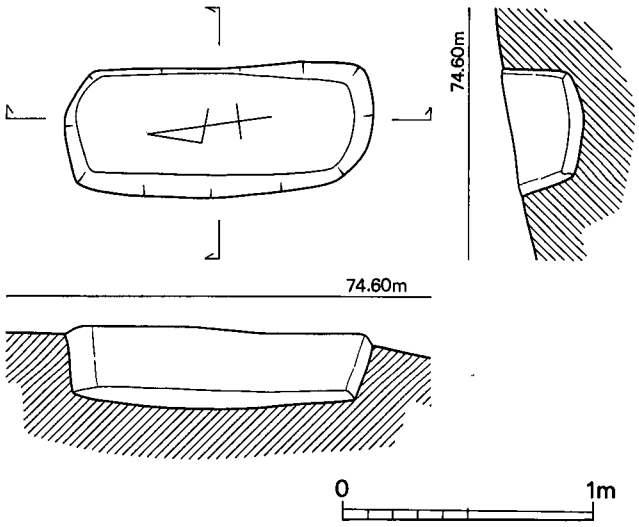
第57図　201号木棺墓実測図（1/30）



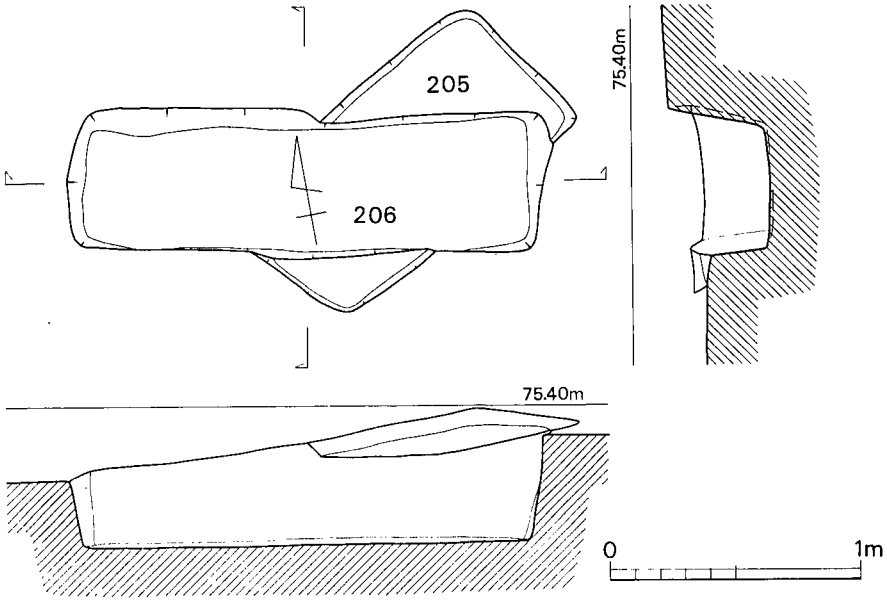
第58図　202号土壙墓実測図（1/30）



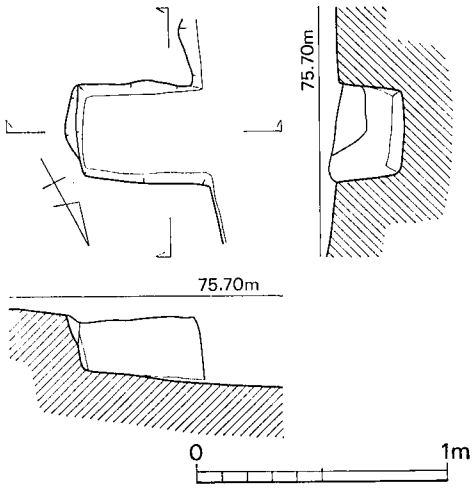
第59図　203号土壙墓実測図（1/30）



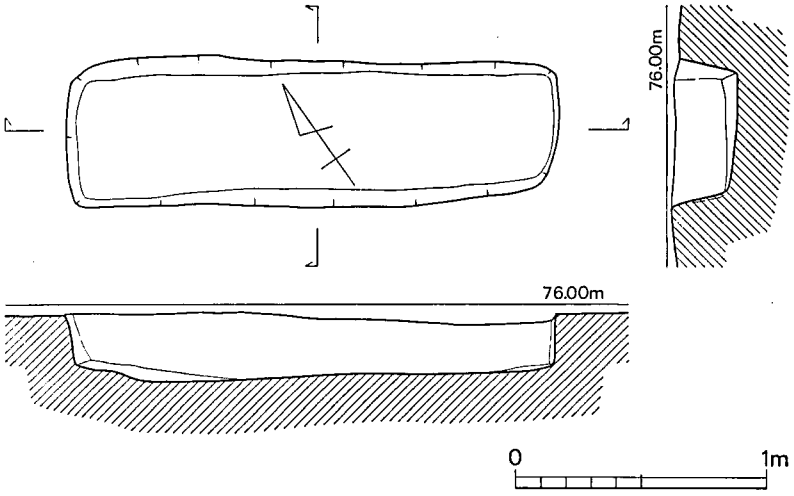
第60図　204号土壙墓実測図（1/30）



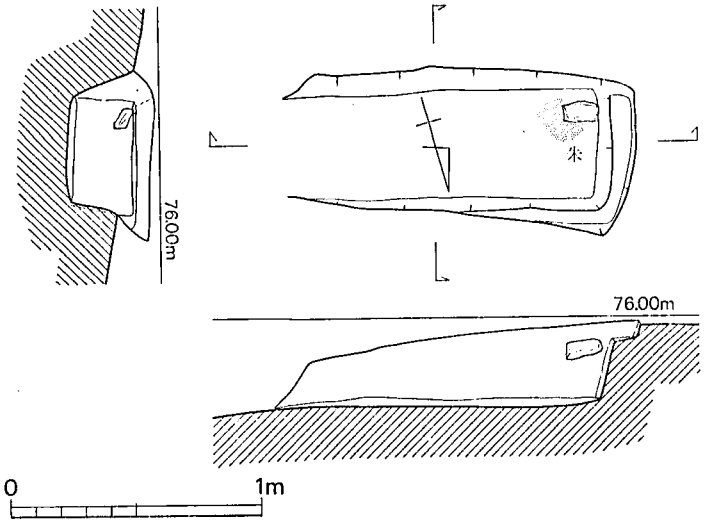
第61図　205・206号土壙墓実測図（1/30）



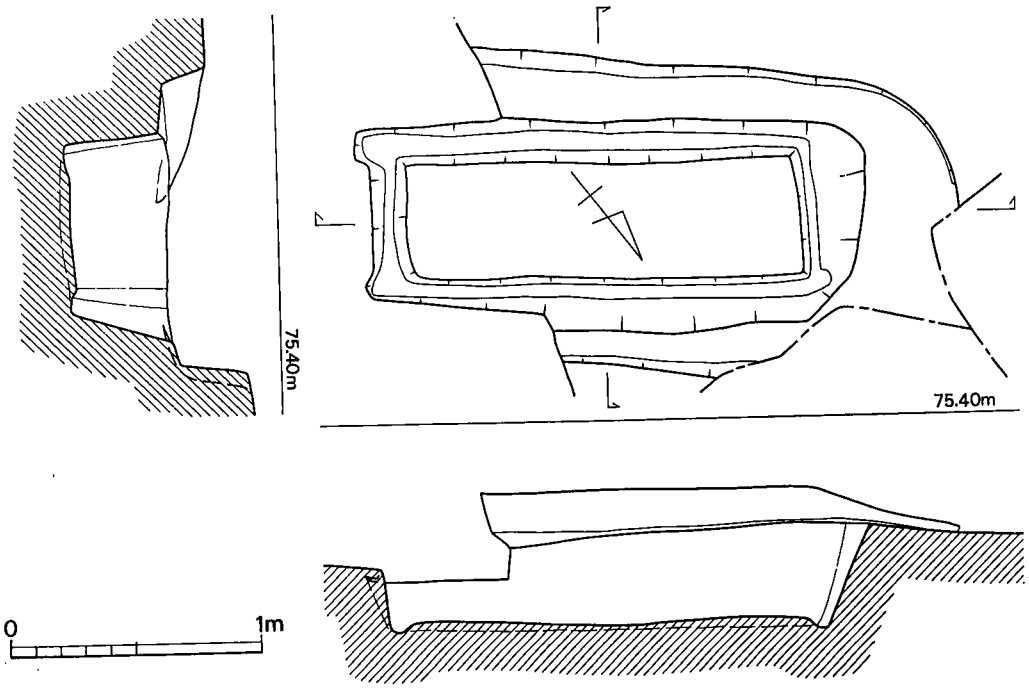
第62図　207号土壙墓実測図（1/30）



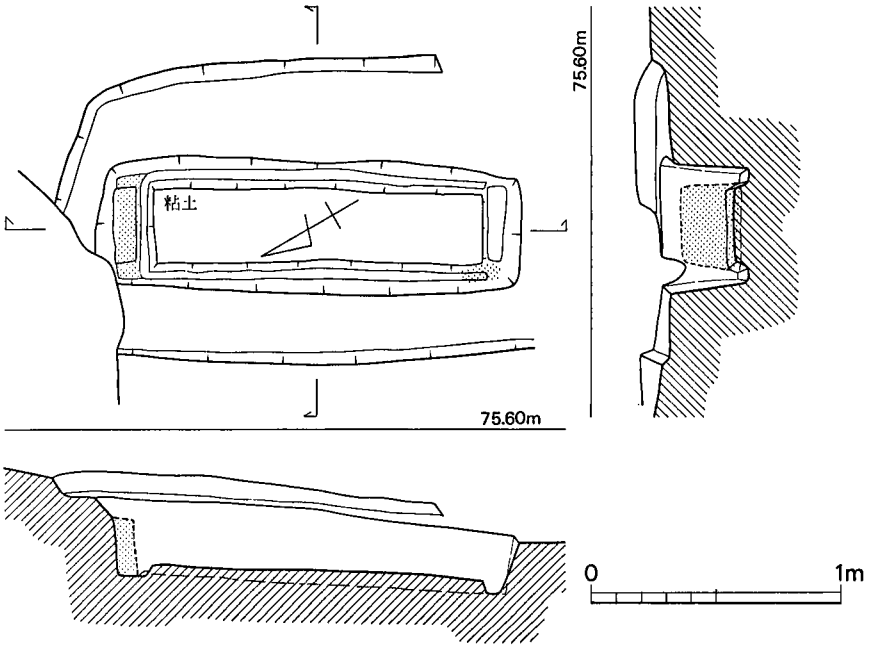
第63図　208号土壙墓実測図（1/30）



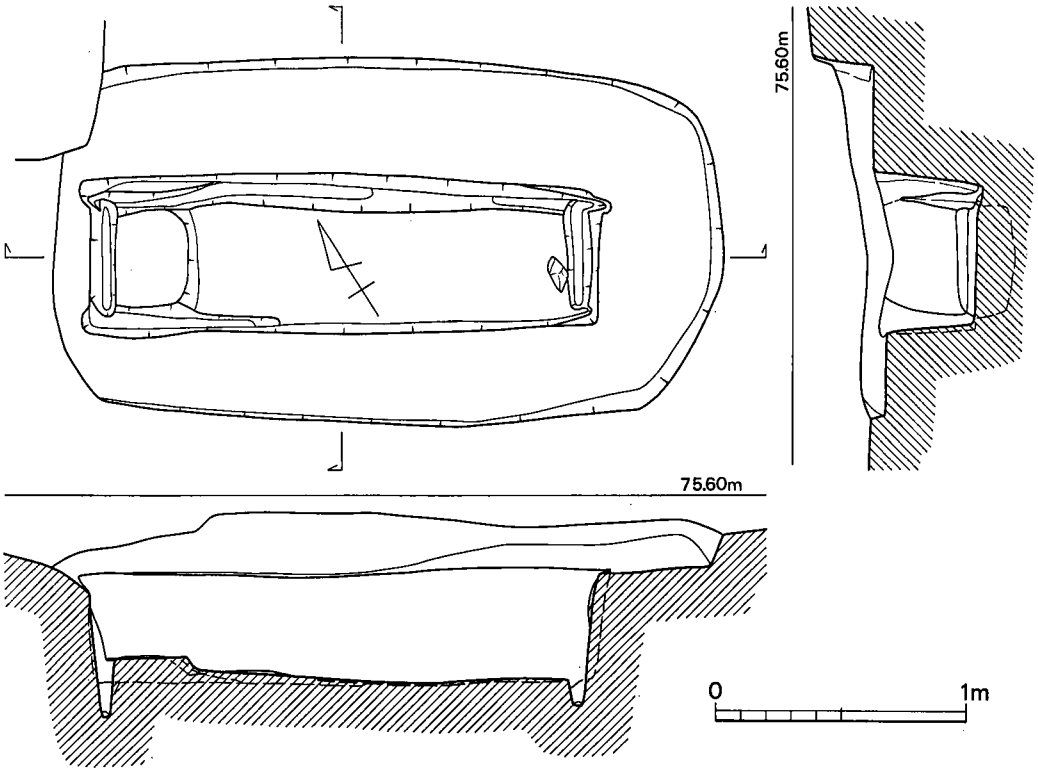
第64図　209号木棺墓実測図（1/30）



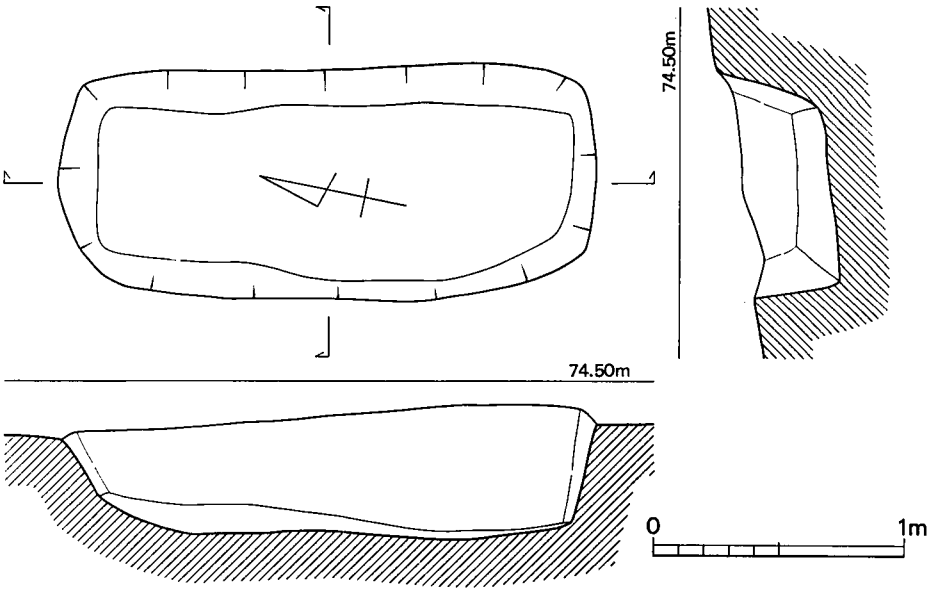
第65図　210号木棺墓実測図（1/30）



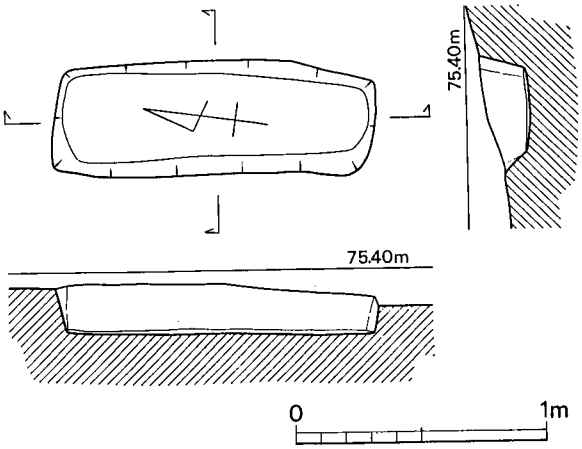
第66図　211号木棺墓実測図（1/30）



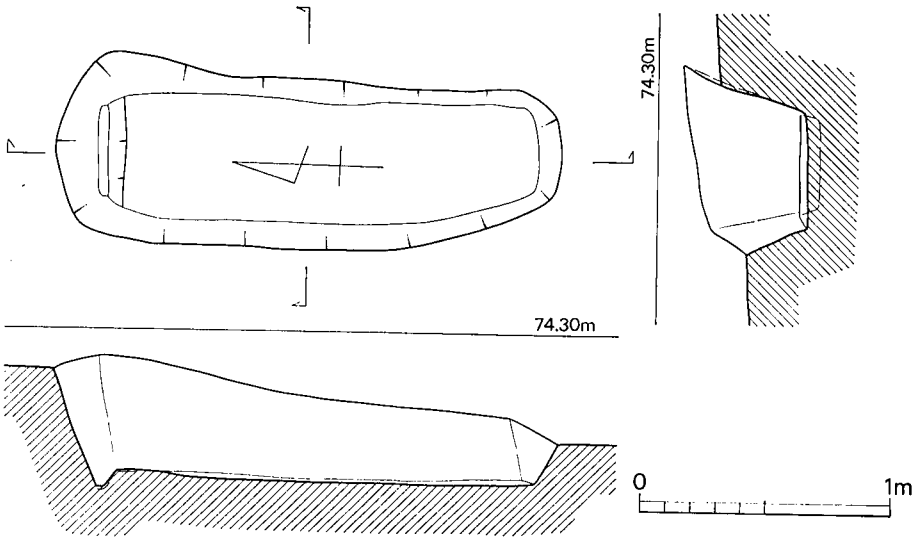
第67図　212号木棺墓実測図（1/30）



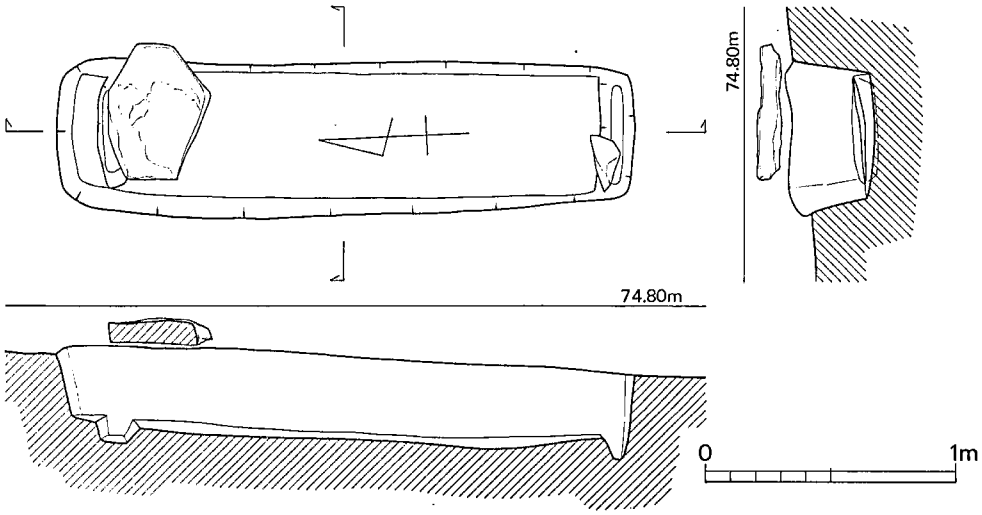
第68図　213号土壙墓実測図（1/30）



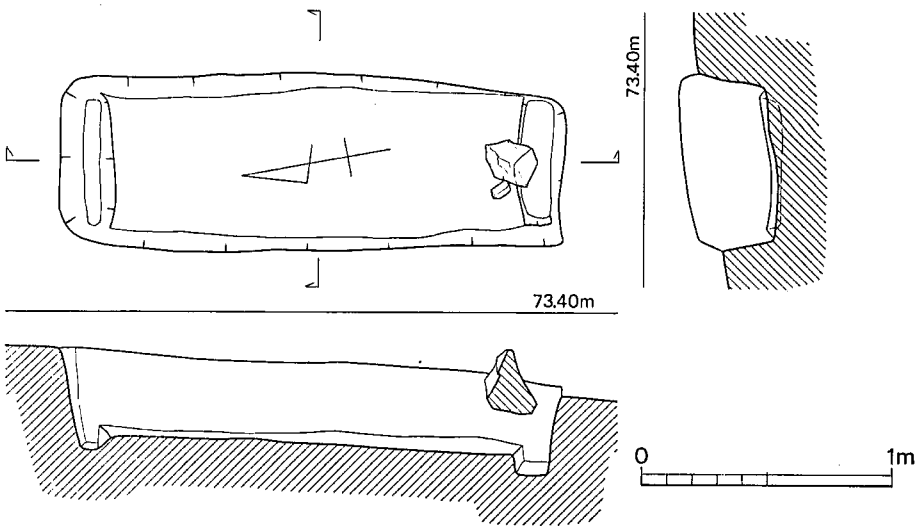
第69図　214号土壙墓実測図（1/30）



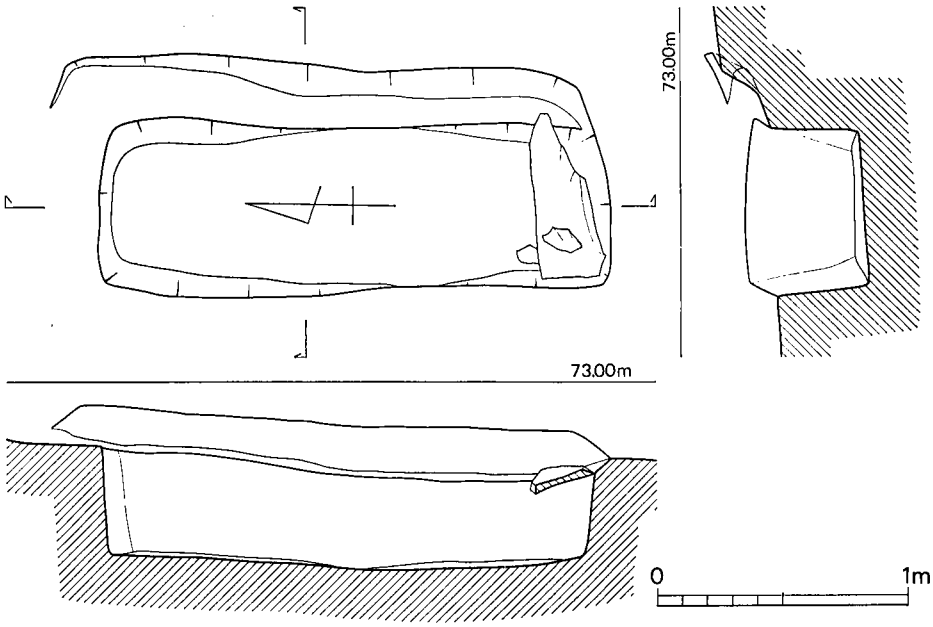
第70図　215号木棺墓実測図（1/30）



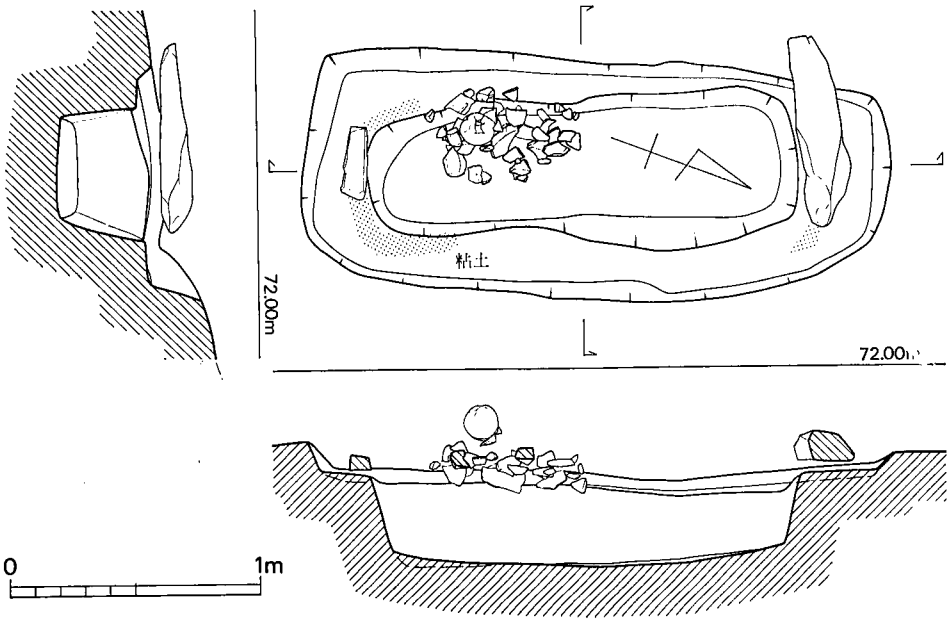
第71図　216号木棺墓実測図（1/30）



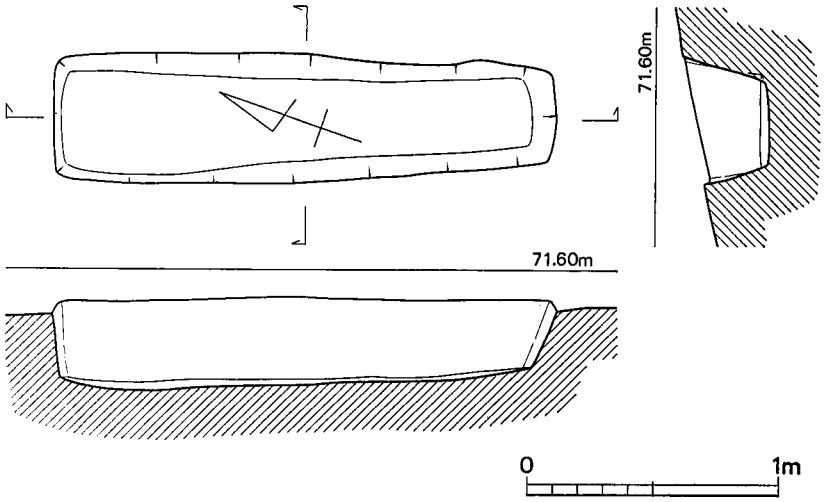
第72図　217号木棺墓実測図（1/30）



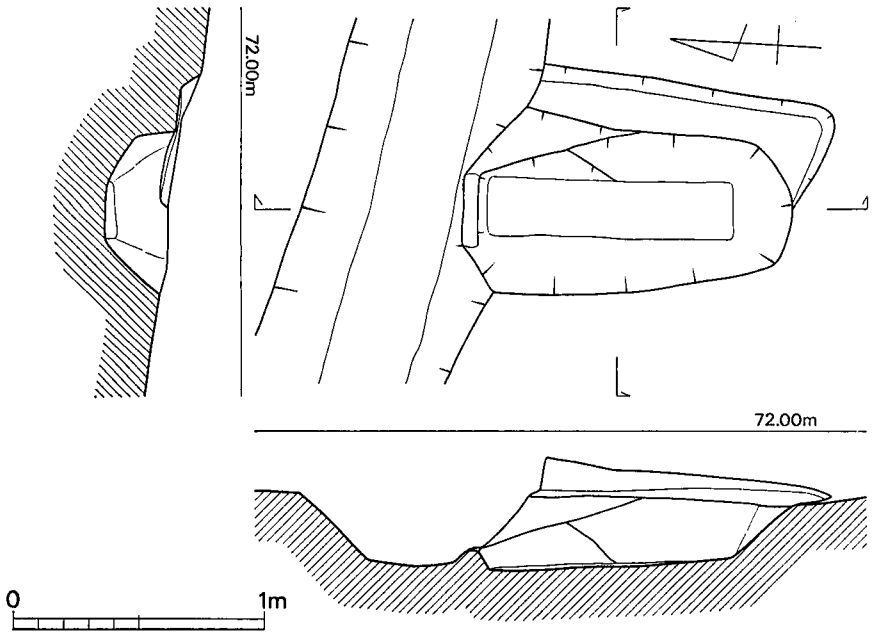
第73図　218号土壙墓実測図（1/30）



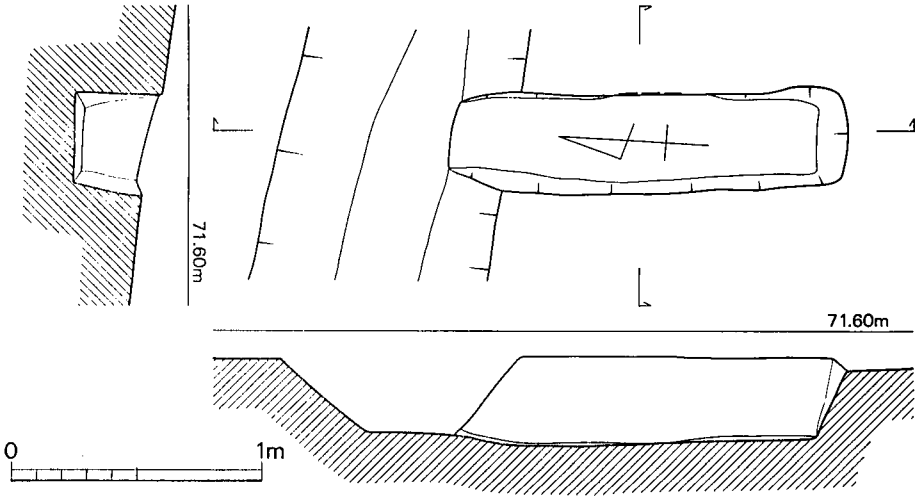
第74図　219号土壙墓実測図（1/30）



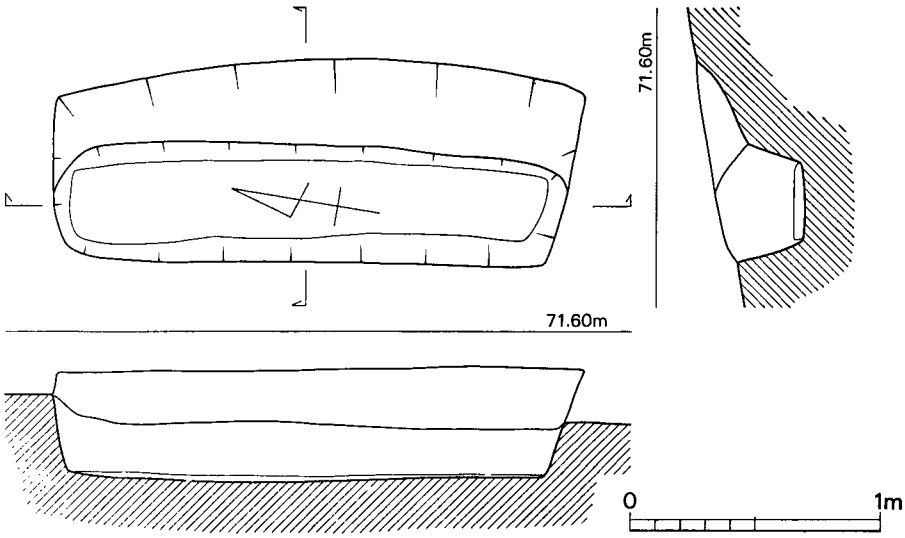
第75図　220号土壙墓実測図（1/30）



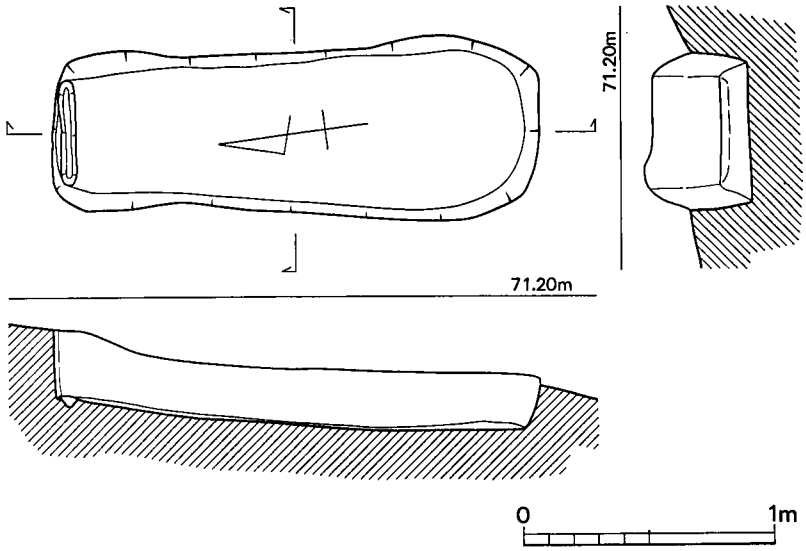
第76図　221号土壙墓実測図（1/30）



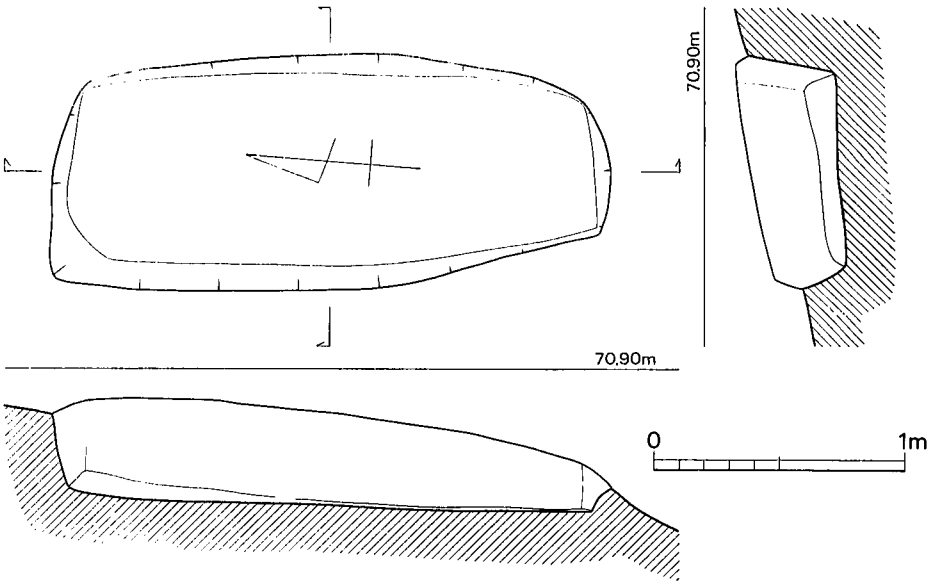
第77図　222号土壙墓実測図（1/30）



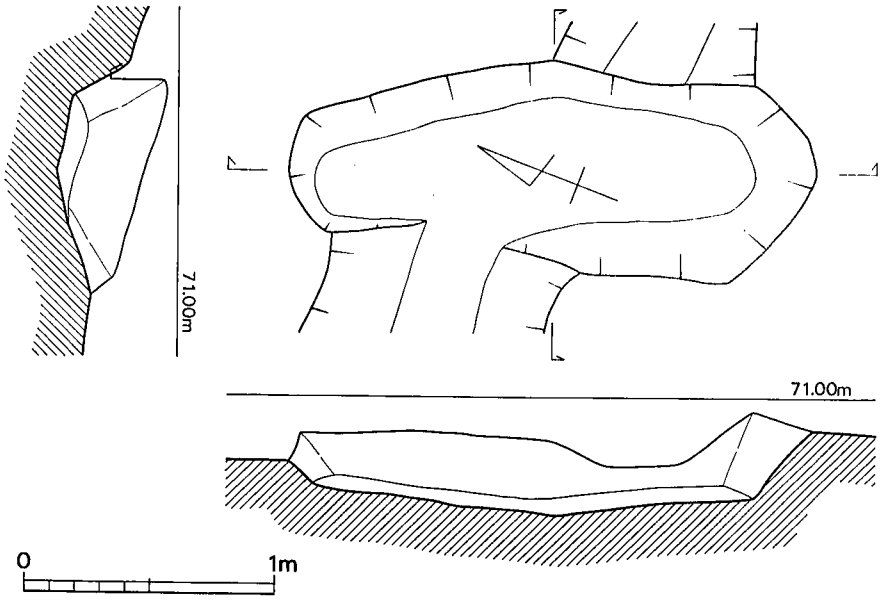
第78図　223号土壙墓実測図（1/30）



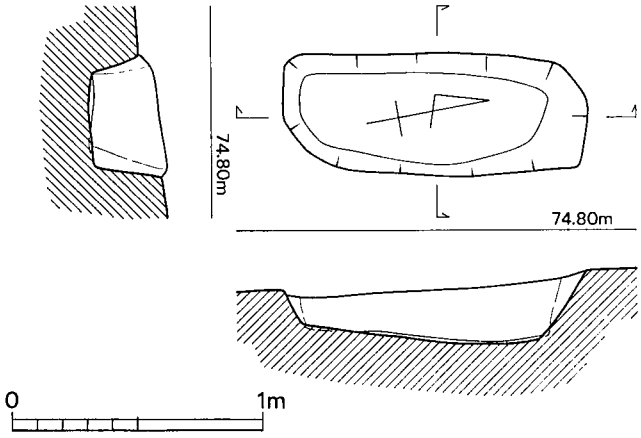
第79図　224号木棺墓実測図（1/30）



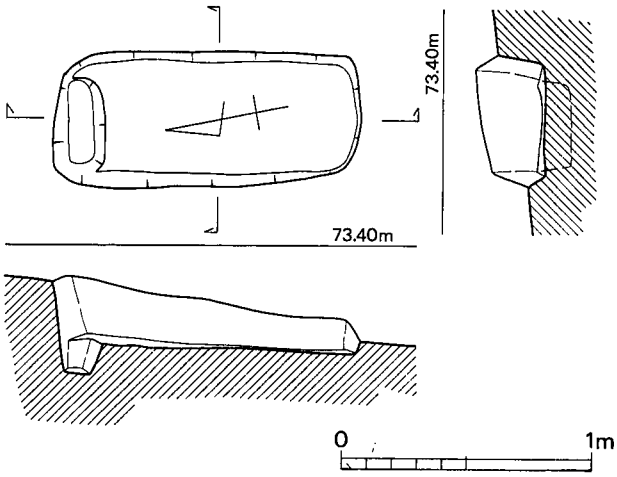
第80図　225号土壙墓実測図（1/30）



第81図　226号土壙墓実測図（1/30）



第82図　227号土壙墓実測図（1/30）



第83図　228号木棺墓実測図（1/30）

(3)　箱式石棺墓

今回の調査では９基を検出し，縦貫道用地内で検出した22基と合わせて総数31基となった（第４図）。工業団地用地内で検出した箱式石棺墓は標高77～72m付近に営まれ，他の多くの埋葬施設と同様にその主軸は丘陵尾根筋（等高線）におよそ直行するものと平行するものとの二者が存在する。

石棺構築にあたっての墓壙はすべて一段掘りで，前回に報告したＳ７，Ｓ９のように二段掘りのものは見られない。Ｓ23（第84図）墓壙は石棺を築くのに十分すぎる広さを有し，Ｓ25（図版45，第86図）・Ｓ26（図版46，第87図）・Ｓ30（図版48，第91図）・Ｓ31（図版48，第92図）もかなりの広さを持ち，他の石棺とやや異なる。しかし，石棺に対する墓壙の広さの差が他の面（副葬品の有無，赤色顔料の塗布，石棺のつくりの粗など）に直ちに対応するのもではない。

棺材の設置に際しては，墓壙底のその部分を一段深く掘り下げて棺材の安定をはかるものが大部分であるが，Ｓ23は全くそのような掘り込みは認められず，Ｓ27（図版46，第88図）のように明らかに周壁の上面の高さを合わせるために掘り込みの深さを調整したと推測されるものがある。蓋石を水平に近く架構するために，周壁の低い部分に小石をはさんで蓋石を架構する

という手法をとらず，S27のような棺材組み立ての手法はそれだけ入念に石棺を構築したためとみられる。

蓋石の架構にあたってS29・S30のように粘土を使用したり，S25・S26・S28のように小石で蓋石の隙き間を目張りするものがある。他は上述のような努力はされていないが蓋石の棺材はぴったりと合わせて架構されている。

赤色顔料の塗布はS27・S28に見られる。赤色顔料は棺内の床面より上位に塗布されており，周壁組み立て後に行なわれたことがわかる。ともに小児棺である。

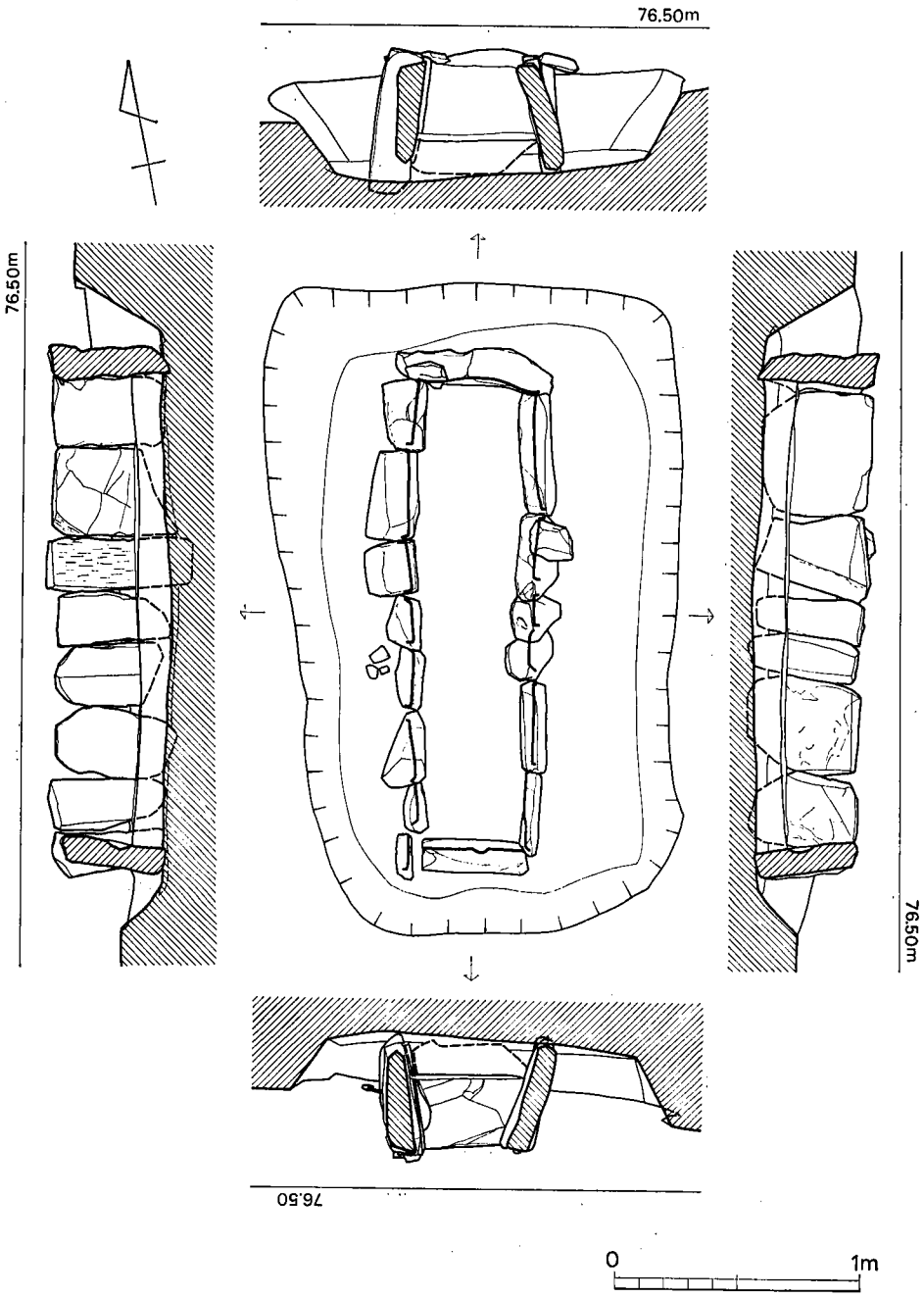
今回調査した箱式石棺墓のうち副葬品を持つものはない。S23・S31は調査時点で蓋石を欠失しており，盗掘を受けた可能性があるが，副葬品は当初からなかったと思われる。また，汐井掛遺跡を特徴づける標石との関係では，明確に標石を持つものはない。

箱式石棺墓と他の埋葬施設との関係では，S25がD168を，S30がD170を切っており，逆に木棺墓や土壙墓が箱式石棺墓を切った例はない。このことは相対的に箱式石棺墓が新しい可能性を示唆するものではあるが，箱式石棺墓が総体的に木棺墓・土壙墓より新しいということを示すものではなく，両者の営造期間には重なり合う部分があったと推測する。それは箱式石棺墓が木棺墓・土壙墓とその主軸をほぼ同一方向におき，前者が後者を切る場合においても平行あるいは直行してわずかに掘り方どうしで切り合うだけで棺本体まで切ることはないことから了解されるだろう。

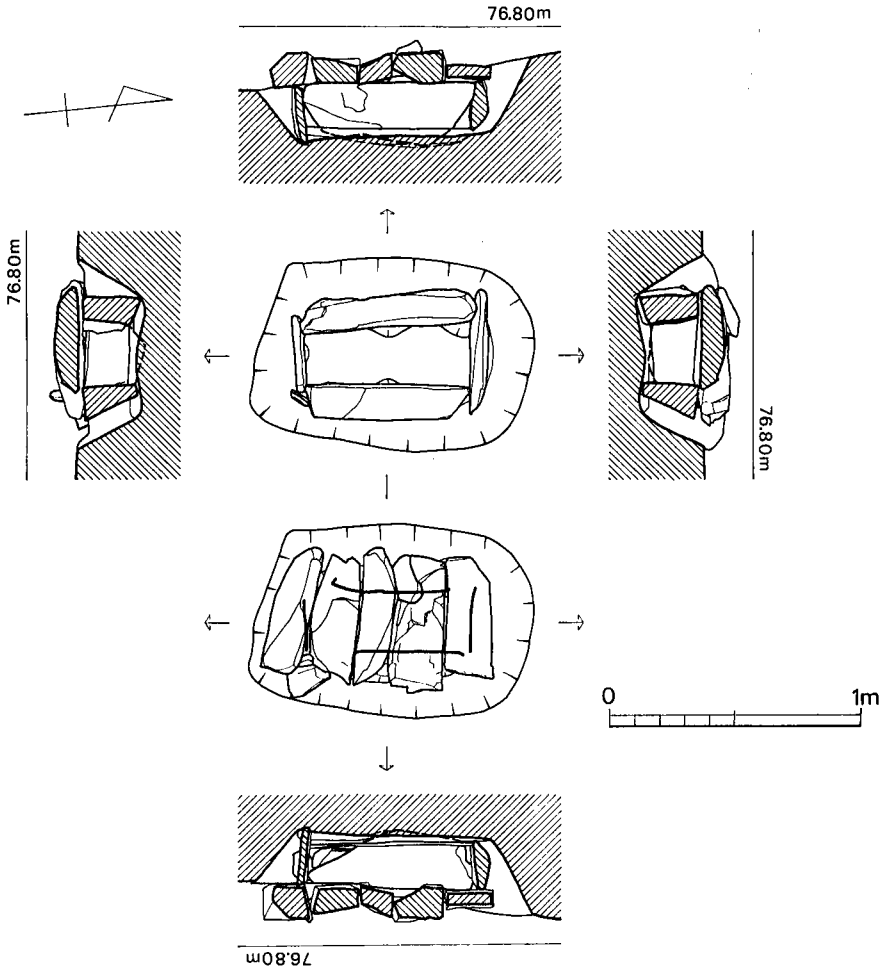
計測値については表3を参照されたい。　　（児玉真一）

表 3　箱式石棺墓一覧表

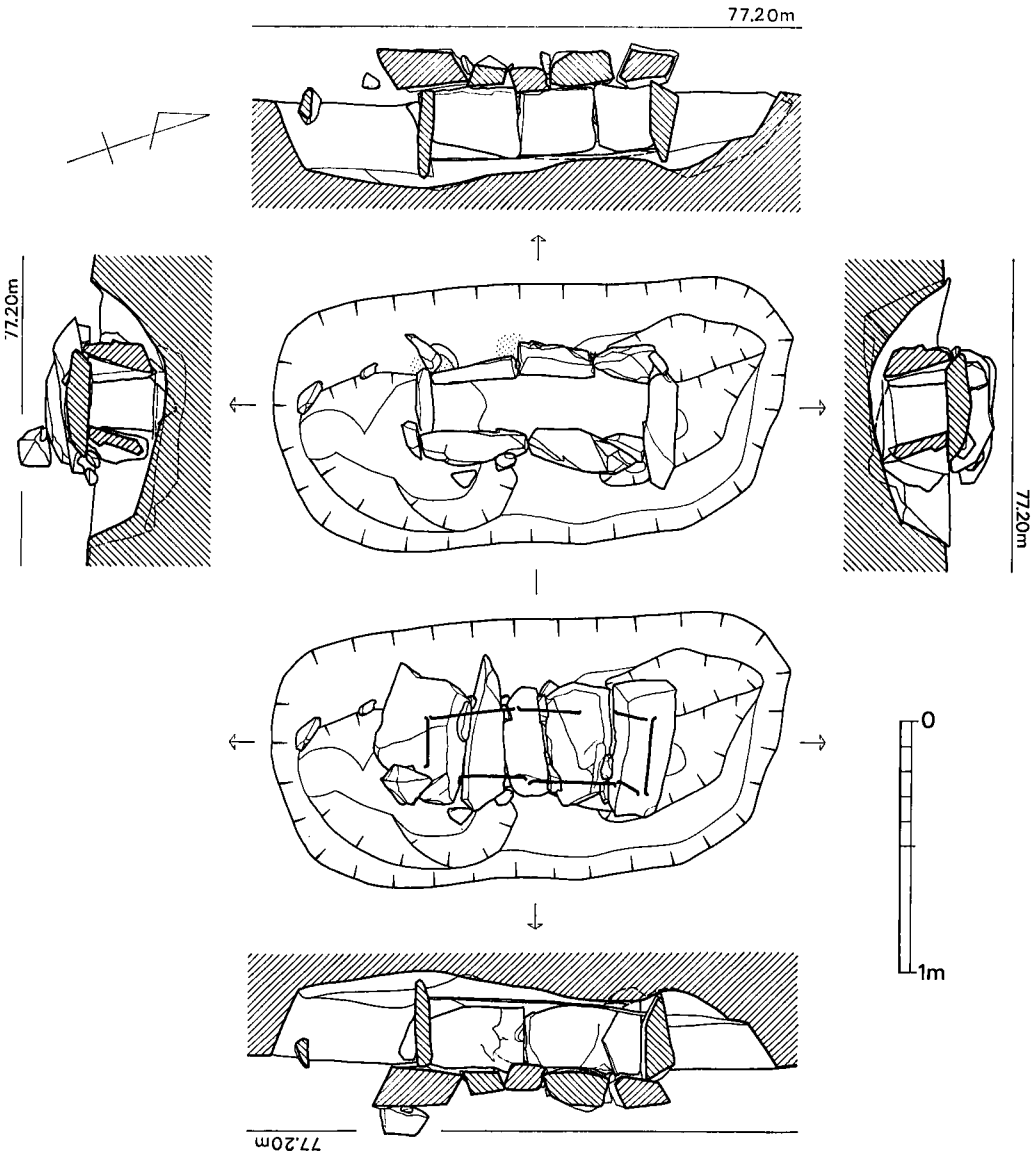
No.	主軸方位	主軸方向	頭位	丹彩	蓋石数	右壁数	左壁数	主軸長 (cm)	頭幅 (cm)	足幅 (cm)	深さ (cm)
23	N11°E	｜	北		?	6	8	192	49	44	31
24	N 6 °E	｜	北		5	1	1	66	25	24	19
25	N17°E	｜	北東		5	3	3	89	28	25	27
26	N74°W	—	北西		3	2	4	63	30	28	25
27	N72°W	—	北西	○	3	5	4	69	22	19	21
28	N 9 °E	｜	北	○	1	1	1	53	28	27	23
29	N 2 °E	｜	北		4	3	3	104	28	29	26
30	N69°W	—	北西		7	7	5	126	31	30	29
31	N10°W	—	北		?	7	8	172	34	31	35



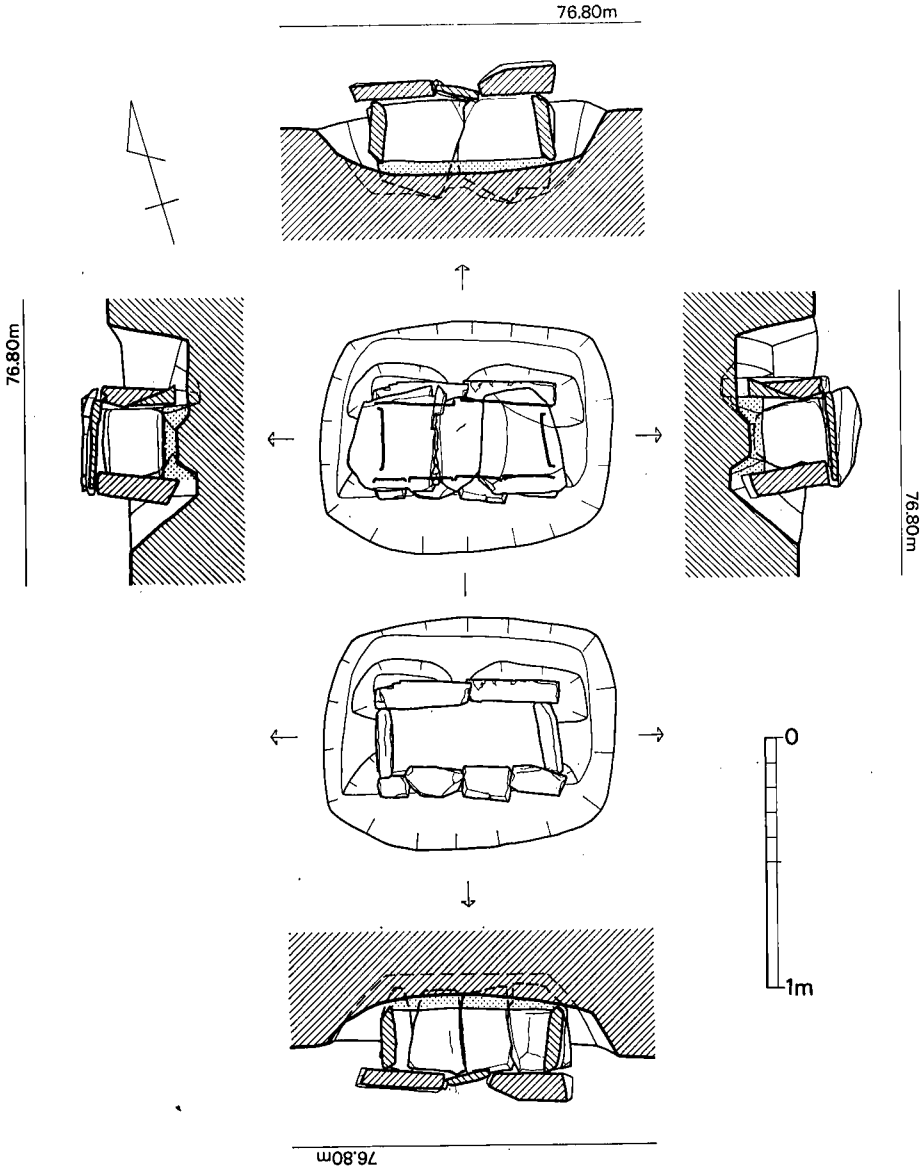
第84図　23号箱式石棺墓実測図（1/30）



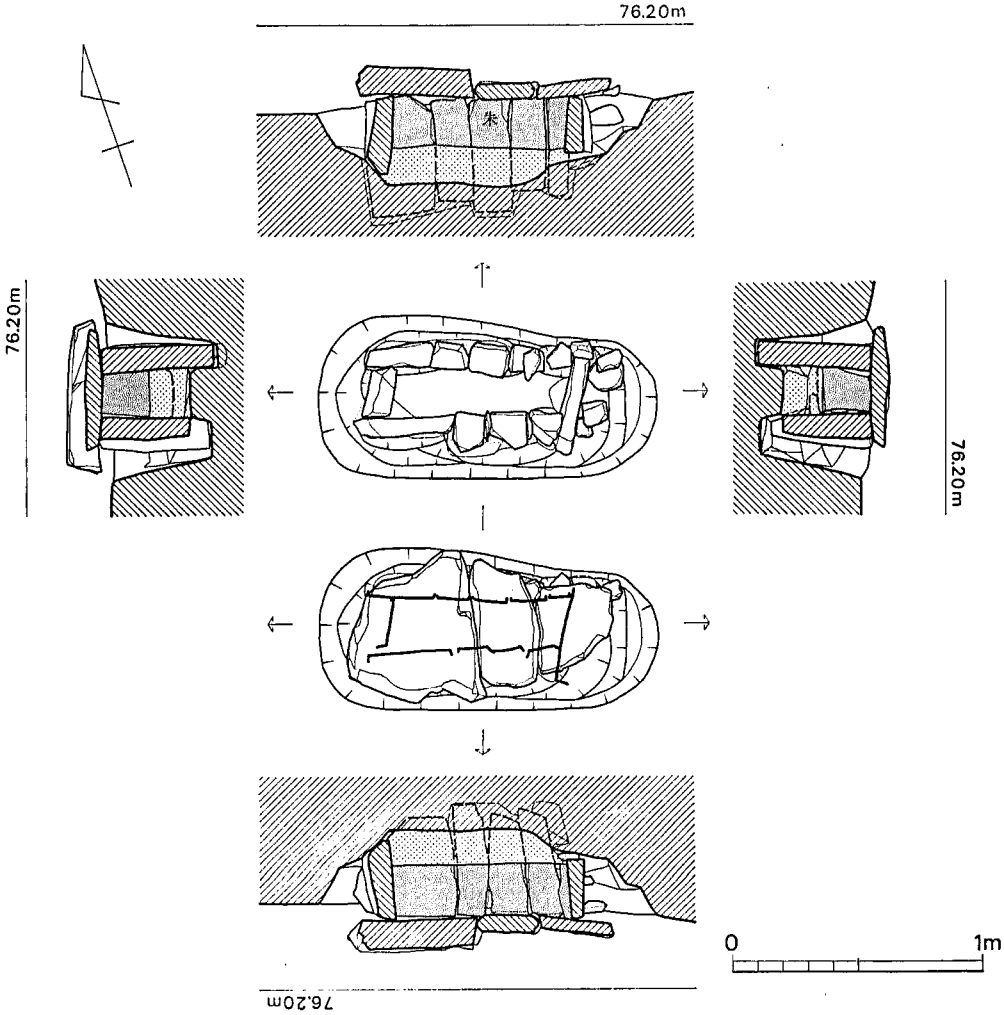
第85図　24号箱式石棺墓実測図（1/30）



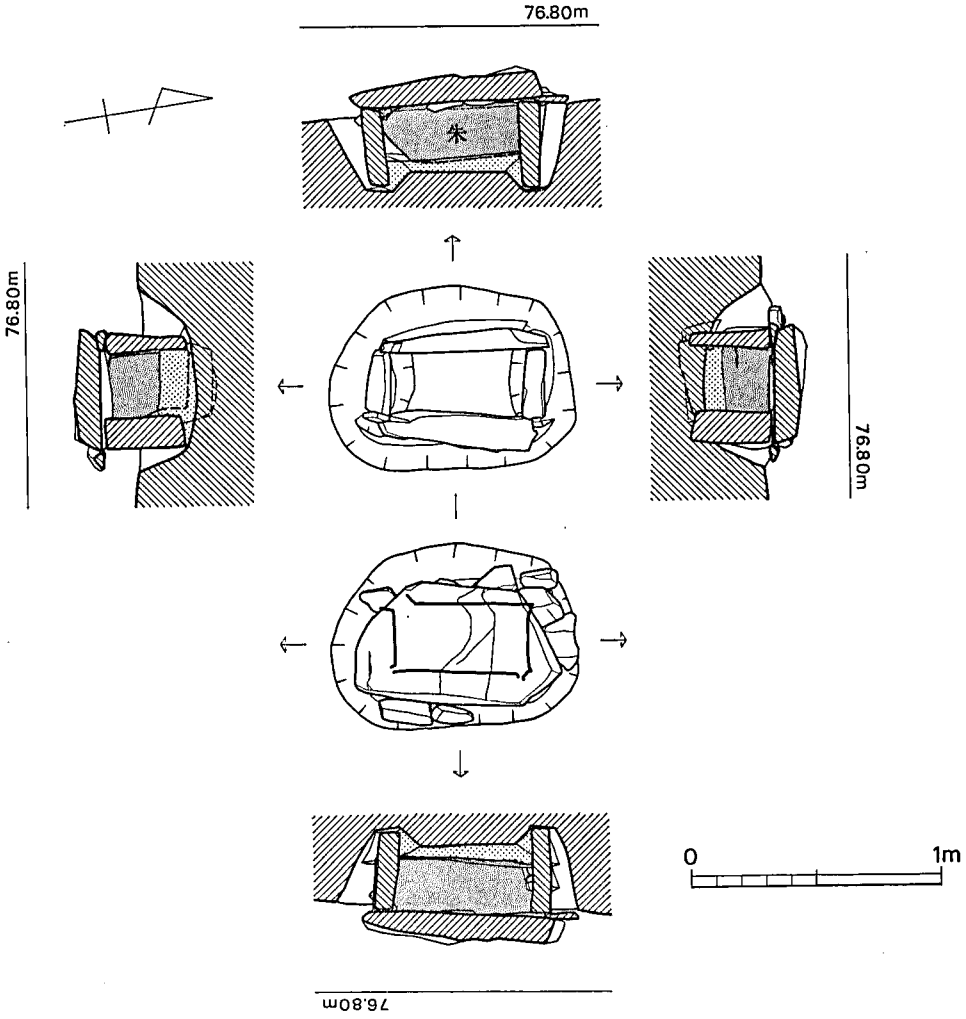
第86図　25号箱式石棺墓実測図（1/30）



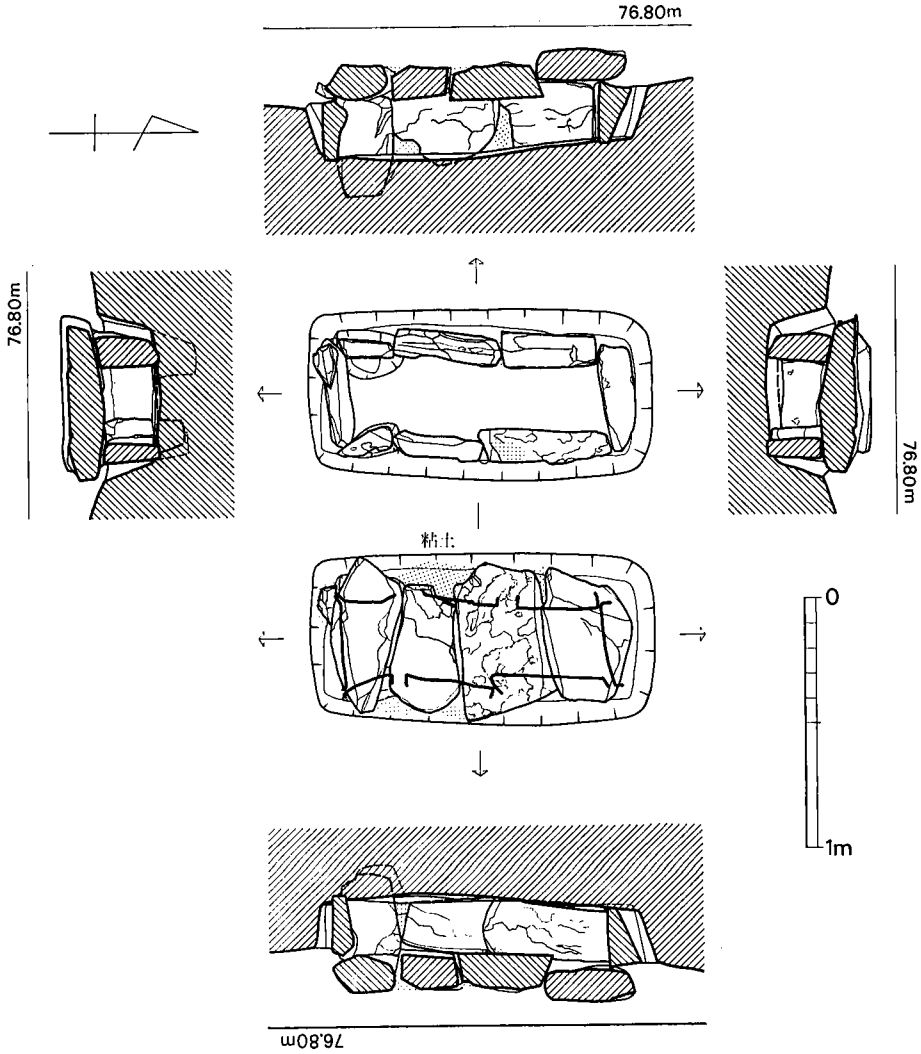
第87図　26号箱式石棺墓実測図（1/30）



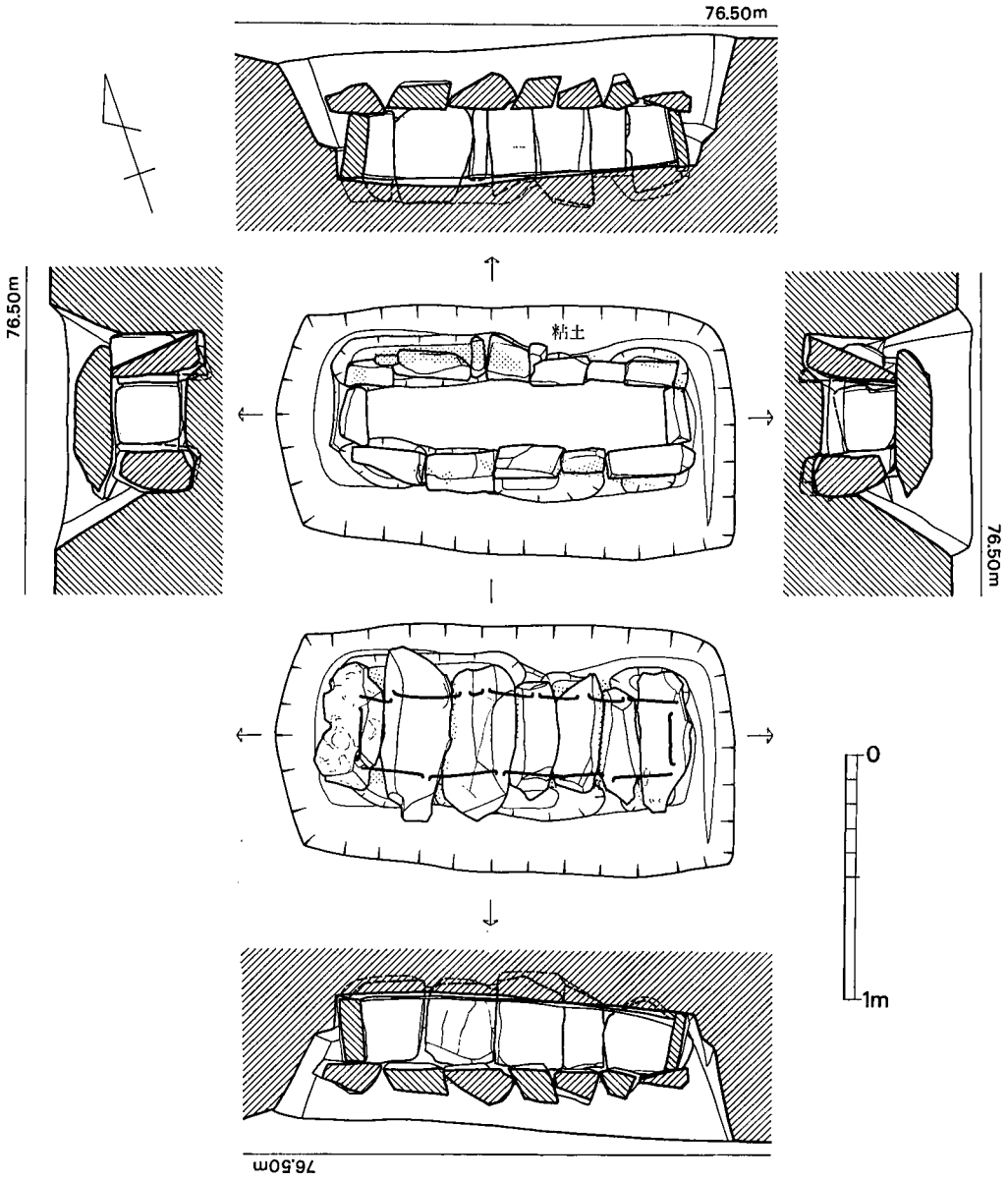
第88図　27号箱式石棺墓実測図（1/30）



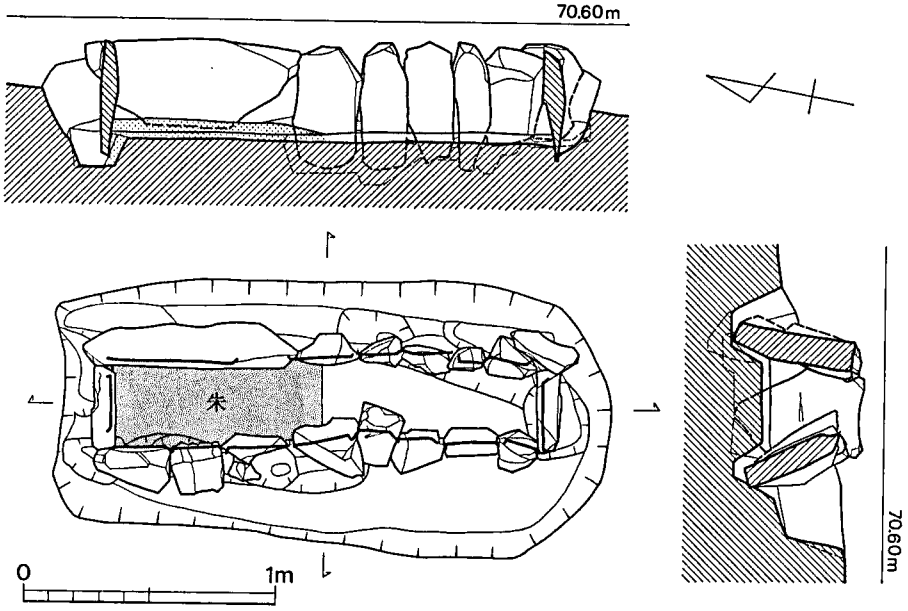
第89図　28号箱式石棺墓実測図（/30）



第90図　29号箱式石棺墓実測図（1/30）



第91図　30号箱式石棺墓実測図（1/30）



第92図　31号箱式石棺墓実測図（1/30）

(4)　石蓋土壙墓

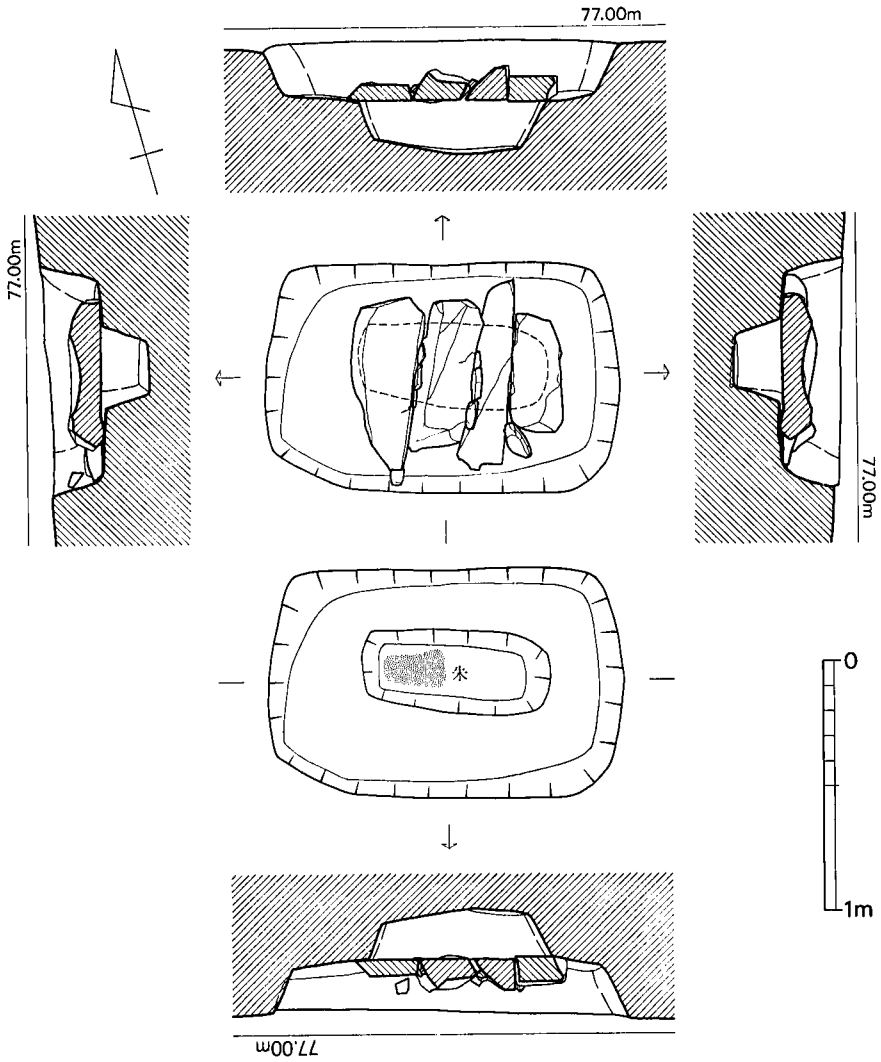
今回の調査で6基検出し，縦貫道敷地内のものと合わせて総数20基となった（第4図）。これらは標高77m～72m付近に営まれ，他の埋葬施設と同様にその主軸は尾根筋（等高線）におよそ直行するものと平行するものとがある。

石蓋土壙墓自体の分布は他の埋葬施設にまじって点在するもの（ＩD15～ＩD17）と，わりとまとまって存在するもの（ＩD18～ＩD20）とがあり，後者は，D219～D226，S31とともに一群となって小グループをなしている。

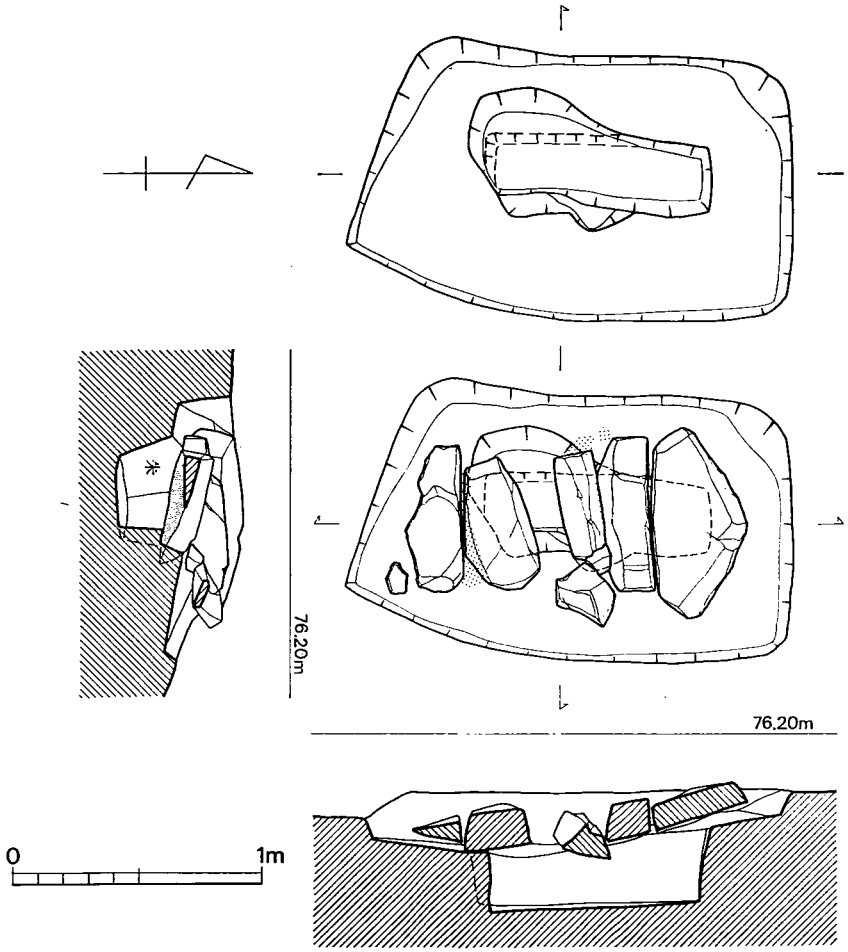
墓壙については明瞭な二段掘りのもの（ＩD15～ＩD17・ＩD19）と検出時点においては二段掘りと確認されないもの（ＩD18・ＩD20）があった。前者は小児棺で後者は成人棺である。蓋石数はＩD18（図版50，第97図）が8枚と最も多く他は4～6枚使用している。またＩD16（図版49，第95図），ＩD17（図版50，第96図）は蓋石内面に赤色顔料が塗布されていた。蓋石除去後の内部の構造はＩD15（図版49，第94図），ＩD16は隅丸長方形のプランで床面は水平に近く，他は長楕円形に近いプランを呈し，床面はほぼ水平を保つ。なおＩD15・ＩD19床

面には一部赤色顔料がみられた。ＩＤ19では両小口に各々一枚の石をたてており，このような構造は縦貫道用地内のＩＤ４で頭位側小口に１枚，ＩＤ５，ＩＤ14で両小口に各１枚の立石があった。枕の設置はない。

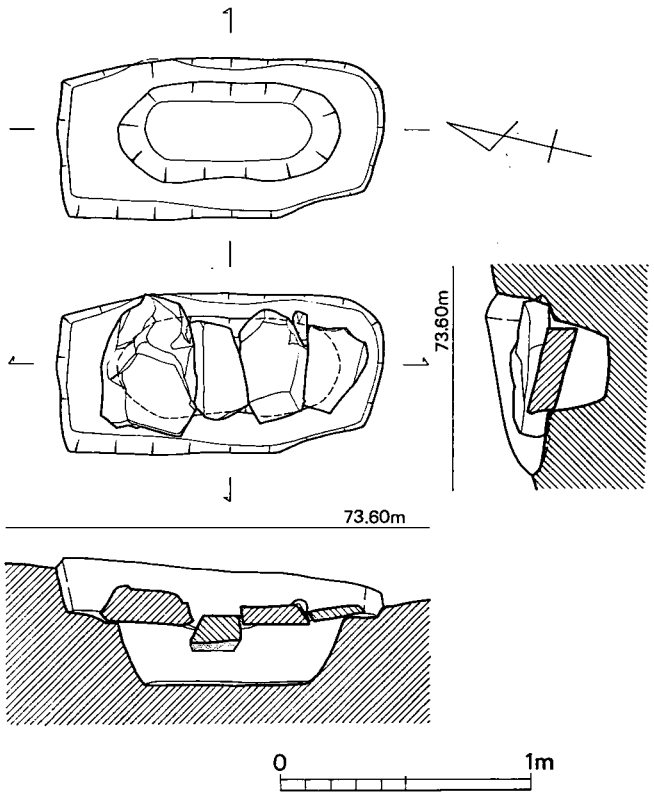
副葬品はＩＤ19床面でガラス小玉９個を検出だけで，他の石蓋土壙墓からの出土品はない。築造された時期に関しては明確さを欠くが，箱式石棺墓と同様に考えてよいと思われる。計測値は表４を参照されたい。（児玉）



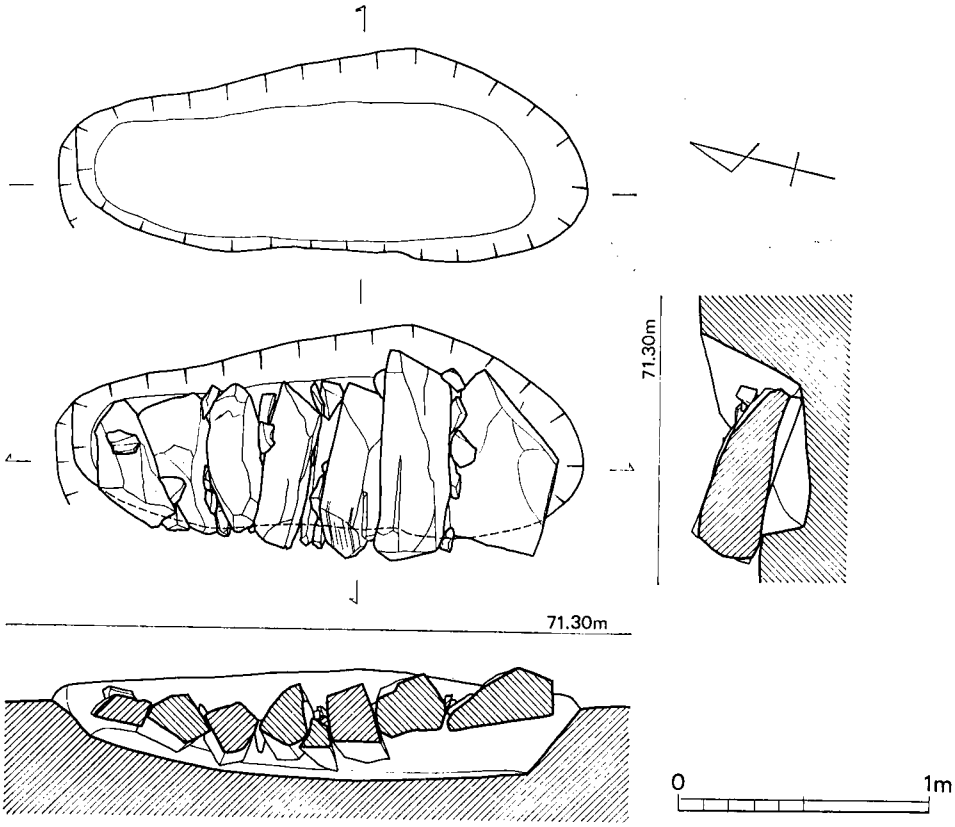
第93図　15号石蓋土壙墓実測図（1/30）



第94図　16号石蓋土壙墓実測図（1/30）



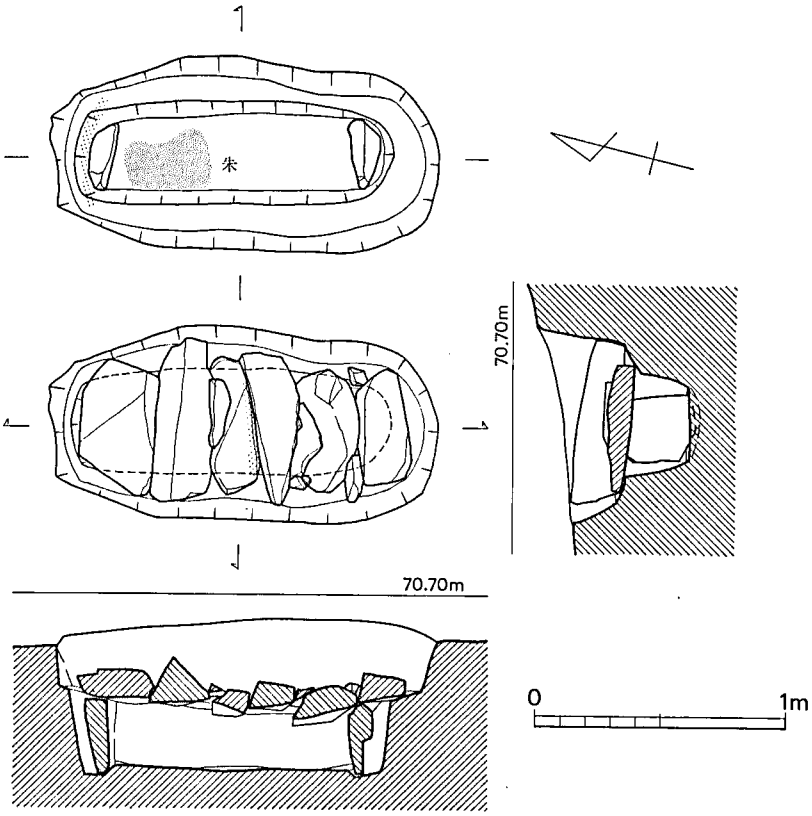
第95図　17号石蓋土壙墓実測図（1/30）



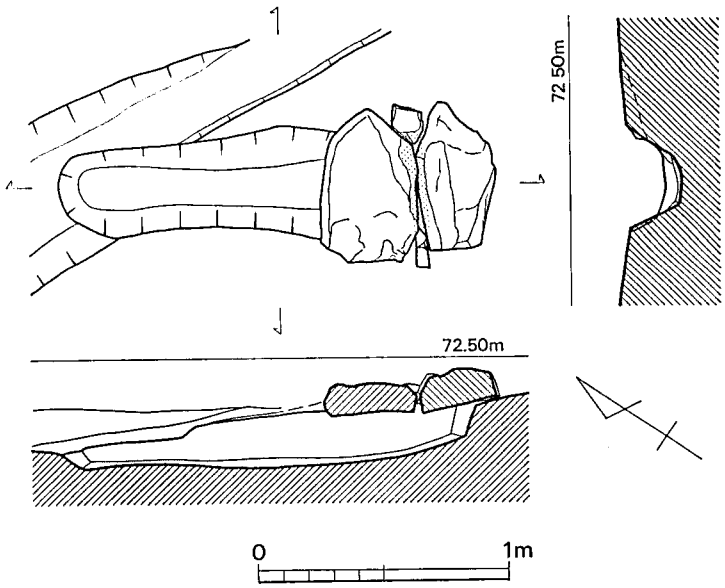
第96図　18号石蓋土壙墓実測図（1/30）

表 4　石蓋土壙墓一覧表

No.	主軸方位	主軸方向	頭　位	墓壙の規模		丹　彩	蓋石数	主軸長 (cm)	頭　幅 (cm)	足　幅 (cm)	深　さ (cm)
				長(cm)	幅(cm)						
15	N74°W	—	北西	142	91		4	58	18	19	19
16	N 1 °W	／	北	170	106	○	5	82	18	18	24
17	N13°W	—	北	127	63	○	4	67	23	22	24
18	N15°W	—	北	227	(92+α)		8	175	45	51	29
19	N14°W	—	北	154	78	○ 床	6	93	28	29	26
20	N37°W	／	南西				2 +α	153	25	18	19



第97図　19号石蓋土壙墓実測図（1/30）



第98図　20号石蓋土壙墓実測図（1/30）

2. 出　土　遺　物

(1) 土　　器　(図版60)

今回出土した土器は極めて少ない。埋葬遺構から出土した土器は表5に示すとおりである。いずれも埋土中からの出土で少片のため図示できるものは少い。器形の推定できるものは（　）内に示した。高杯と壺の破片が多くそのほとんどは弥生式土器である。D171とD213からは土師器の少片を検出している。供献用に使用されたと考えられるものはD 219の墓壙上面から鉄製鋤先とともに出土した壺1個体がある。以下器形の判明し，図示できたものについて説明を加える。

表 5　出土土器一覧表

D	出土遺物	D	出土遺物
154	弥生式土器片（壺・甕）	173	弥生式土器片
155	弥生式土器片	179	弥生式土器片
156	弥生式土器片（高杯・壺）	180	弥生式土器片（高杯）
162	弥生式土器片（高杯口縁・壺）	181	弥生式土器（甕・高杯）
163	弥生式土器片（壺）	182	弥生式土器（高杯）
164	弥生式土器片（高杯）	184	弥生式土器（高杯）
165	弥生式土器片（高杯脚）土師器片	187	弥生式土器（手捏ね）
166	弥生式土器片（高杯・壺）	195	弥生式土器（高杯）
167	弥生式土器片	196	弥生式土器（高杯）
168	弥生式土器片（高杯）	211	弥生式土器（高杯）
169	土師器片（高杯）	213	土師器片（高杯）
171	土師器片（高杯）	219	弥生式土器（壺・高杯）
172	弥生式土器片（壺・高杯）	224	弥生式土器（高杯・甕）

墓壙埋土中出土の土器（第99図）

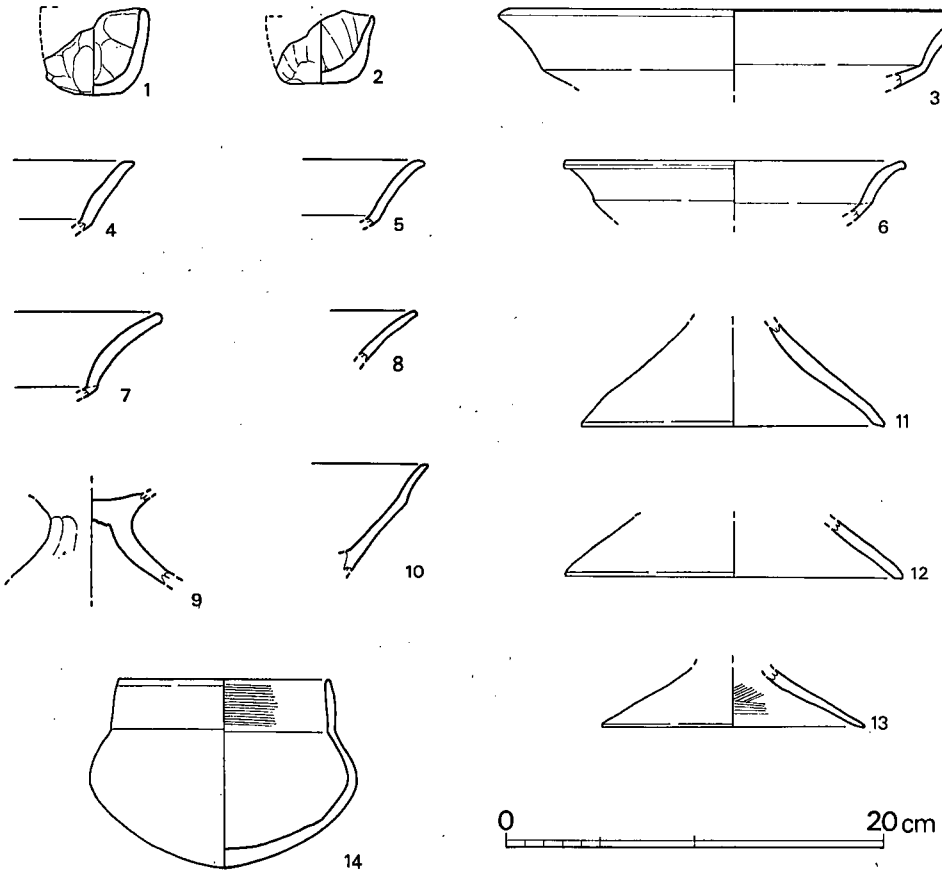
手づくね（1・2）D187から出土した手づくね土器である。1は復原口径5.2cm，器高4.6硬を測る。内面は指頭によるナデ，外面は比較的平滑であるが，粘土を貼り付けた痕を観察できる。2は推定口径約5.5cm，器高2.8cmを測る。器壁は1よりも薄く仕上げられ，底は厚い。内面は指頭によるナデ，外面は磨滅のため明らかではないが，指頭によるナデと考える。1・2ともに胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。

高杯（3～13）3～8・10は口縁部片である。3（D168）・4（D167）・5（D 181）は杯部との境いで大きく屈曲し，口縁部は外反する。端部は平たく仕上げられている。6(D162)は外反する口縁部は外方へつまみだされる。7（D184）は3とほぼ同じ傾きをもつ口縁部で端部は丸く仕上げられる。いずれも内外面ともにナデ調整されている。色調は淡黄褐色・黄褐色

を呈し，胎土には砂粒を多く含み，焼成は普通である。9はD 181の墓壙北側の表土直下で出土した脚部片である器面は荒れており調整は不明であるが外面の杯部との境いに指でおさえられた様な痕が残る。7はD 213の出土の土師器の杯部片である。やや外反する短い口縁部をもつ杯部は斜めに立ち上がる。内外面ともにナデ調整される。13（D 169）は薄く仕上げられ端部は丸味をもち，内面にハケ目が残る。

D219供献壺（14）

D219の墓壙上面中央に鉄製鋤先とともに供献されていた直口壺で，器高9.9㎝，口径11.2㎝，最大胴部14.1㎝を測る。やや内傾して立上がる短い口縁部と，上下に押しつぶされたように丸く膨らむ胴部を持つ。底部はややとがりぎみの丸底である。外面は器壁が荒れているため調整は不明である。内面は口縁部に横位のハケ目が残る。胴部はナデ調整されている。器壁は全体的に厚く仕上げられている。胎土には砂粒を多く含む。色調は，内面赤褐色，外面は淡黄褐色を呈し，一部に焼成時の黒色の部分が見られる。焼成は普通である。



第99図　土器実測図（¼）

(2) 鉄　　器　（図版61～69，第101・102図）

今回の調査で出土した鉄製品は武器・工具・農具でその種類は素環頭刀子，刀，刀子，鉄鏃，斧，鉈，鋤先，馬具の７種類におよび，他に不明鉄製品が２点出土している。これらの多くは木棺墓・土壙墓からの出土品で，石蓋土壙墓・箱式石棺墓からの出土例はない。

表 6　出土鉄器一覧表

遺　　構	出土位置	遺　物　名
162号 木棺墓	棺外	鏃　3
167号 木棺墓	棺内床面	鏃　6　・　素環頭小刀　1
168号 木棺墓	棺外	鉈　1
169号 木棺墓	棺内床面	鏃　2
175号 木棺墓	棺内床面	鉈　1
184号 木棺墓	棺外	素環頭刀子　1
189号 水棺墓	棺外	素環頭刀子　1
195号 木棺墓	棺外	不明鉄器　1
196号 木棺墓	棺外	鹿角装刀子　1
200号 土壙墓	埋土中	馬具（鞍）
219号 木棺墓	棺外	鋤先　1
	208号土壙墓付近	斧　1
	表土直下	不明鉄器　1

素環頭刀子（１～３）

D167・D184・D189から各一点ずつ出土している。すべて片関の鍛造品である。

１はD 167 棺底から４～９の鉄鏃とともに一括出土した小刀で，切先を頭位と推定される北西側に向けていた。全長29.7㎝の完形品で，刃部長 19.7㎝，刃部幅は関部で1.8㎝を測り，切先部にむかって幅は狭くなる。背部の厚さは0.3㎝前後である。把長は8.8㎝，幅1.2～1.3㎝を測り，厚さは背部側で0.4㎝，刃部側で0.3㎝で外径３㎝の素環頭につづく。素環の断面は角のとれた方形を示す。木質等の銹着は見られない。

２はD189棺外の掘り方床面から切先を北西側に向けて出土した。全長 20.8 ㎝の完形品で刃部長12㎝，幅は関部で1.1㎝，切先部近くで１㎝を測る。鋒部の厚さは0.2㎝である。把長は6.5㎝，幅0.9㎝，厚さは背部側で0.3㎝，刃部側で0.2㎝ を示す。素環頭のつくりは１とは異なり，背部側はまっすぐのびて次第に細くなりながら刃部側に曲げられて把尻に接する。素環の断面は太い部分は長辺0.4㎝，短辺0.3㎝の矩形を呈し，把尻に接する部分は円形である。次に切先から２㎝ 前後の部分は，当初からか，あるいは一度折損したかした後に接合したように見える（註１）。全体に細身で繊細なつくりである。木質の銹着は見られない。

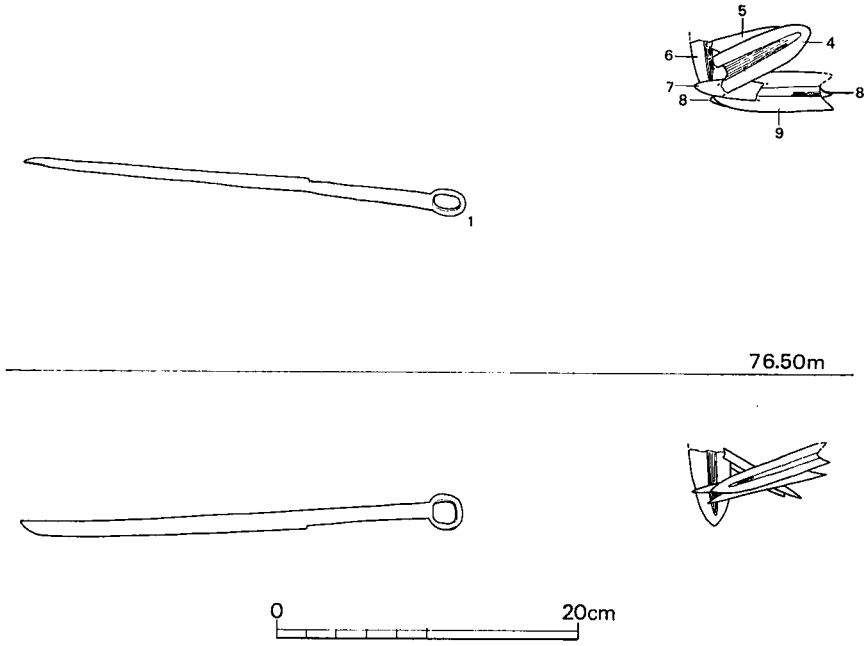
３はD 184 棺外からの出土品で，出土状態から木蓋上に切先を頭位と思われる北西側に向け

て副葬したものと推定される。全長18.8㎝を測る完形品で茎に木柄を装着し，更に径１㎜程のヒモ状のものを巻きつけており，三巻き半が残存している。刃部長は10.8㎝，幅は関部付近で1.2㎝，切先部近くで１㎝程を測り，背部の厚さは0.2㎝で薄い。把は幅0.8㎝，厚さ0.3㎝前後と推定される。素環頭は外径２㎝～1.7㎝程で断面は径0.2㎝前後の細い針金状の形態を示す。刃部には木質の付着はない。

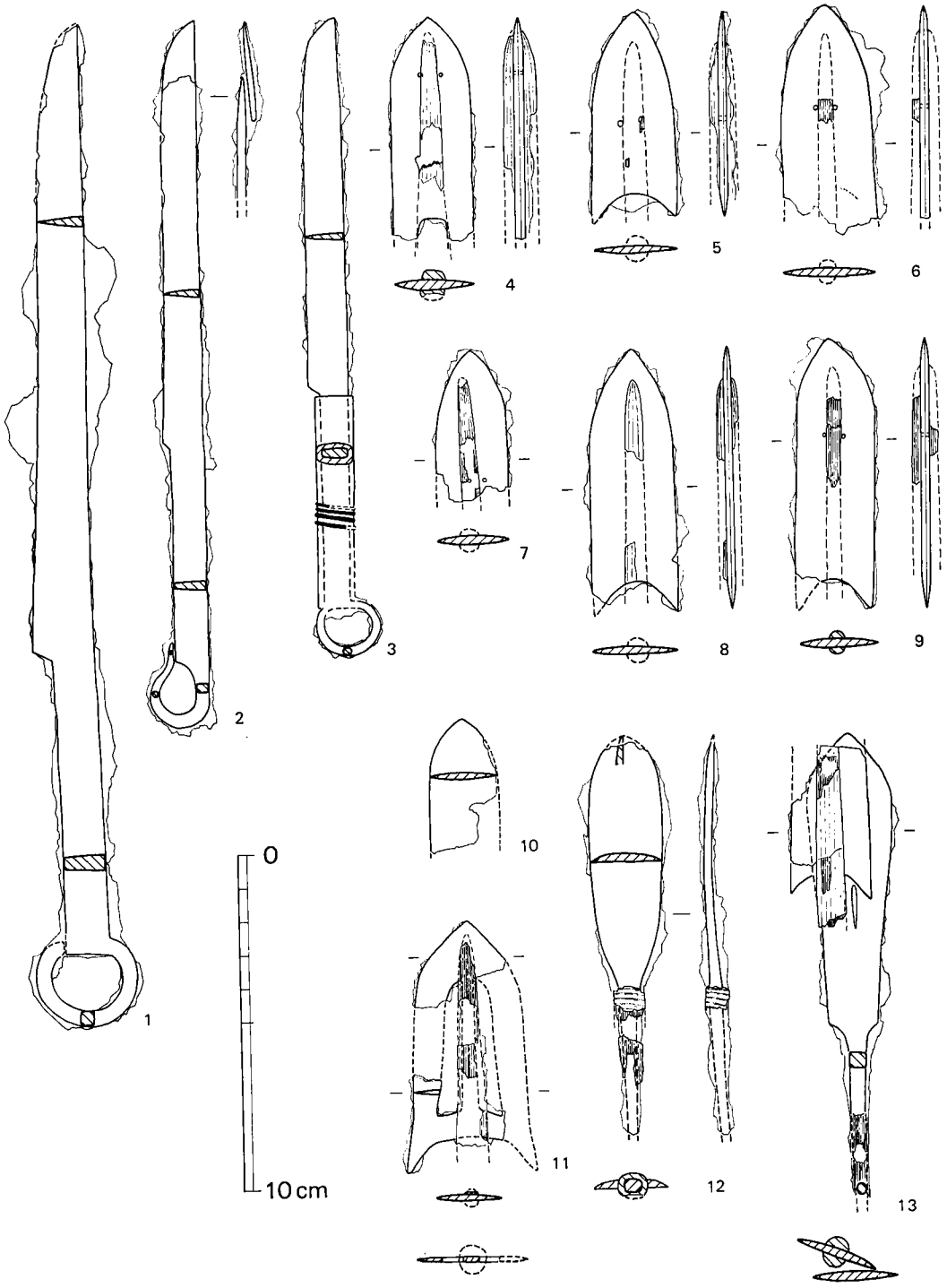
鏃（４～13）

D162から３点，D167から６点，D169から２点の計11点が出土している。すべて鍛造品である。

４～９はD 167棺底から１の素環頭刀子とともに一括出土した。すべて平造りの無茎長三角型式に含まれるもので箆木質が銹着している。基部のくり込みは４のように矩形を呈するものと５・８・９のように弧状を呈するものと二種類ある。８は明瞭ではないが他は径１～1.5㎜程の双孔が箆木質の両側に穿たれており，ヒモ状のものを利用して鏃身と矢柄を緊縛し，固定する用をなしていたものである。各部の寸法は，５は全長6.7㎝，幅2.5㎝，厚さ0.2㎝，８は全長7.8㎝，幅2.5㎝，厚さ0.2㎝，９は全長８㎝，幅2.4㎝，厚さ0.2㎝を測る。他は全形を復原し得ないが，４は幅2.4㎝，全長7.5㎝前後，６は幅2.8㎝，全長８㎝程度，７は小形で幅2.2㎝で全長は７㎝に満たないと推定される。



第100図　D167鉄器出土状態実測図（1/6）



第101図　鉄器実測図 1（½）

11・13はD 162の棺外副葬品で二段目掘り込みの東辺側の肩から出土し，木蓋上に置かれていたものと推定される。11は有透孔広鋒長三角形式で基部に浅い腸抉を有する。破片資料ではあるが全形を復原するのに差し支えはなく，全長7.5㎝，幅は逆刺部で4.8㎝程で，身の中央部には左右対称の透孔がはいる。身の中央部には箆木質が鏃身に銹着している。厚さは0.2㎝弱でくり込み部を徐いた周縁部はすべて刃をつくり出している。13は有茎の柳葉式鉄鏃に無茎長三角型式の鉄鏃が銹着したものである。柳葉式鉄鏃は下半に透孔がはいり，現存長13.7㎝，身部長8.6㎝，最大幅2.5㎝，茎につづく部分で1.4㎝を測る。厚さは0.25㎝程度で，茎の断面はほぼ方形であり茎元で一辺0.4㎝，茎尻に向かって細くなる。銹着した無茎長三角型式の鉄鏃は，上半部を欠失し，幅は2.4㎝，厚さ0.2㎝程で，全長は8㎝に及ぶことはないと推定される。基部のくり込みは浅く弧状を呈する。矢柄の残存状態は良好で鏃身を挟んだ状況がよくわかる。矢柄を鏃身に緊縛するための双孔の存在は明瞭ではない。

10・12はD169棺底から出土し，10は東側板ぎわで，12は棺中央部で検出した。10は破片のためその形態は不明だが，身に箆木質の銹着した痕跡は見られず，柳葉式に属する可能性が強い。現存長3.9㎝，幅2㎝，厚さ0.2㎝である。12は片丸造りの柳葉式の鉄鏃で13と比べて丸こいつくりである。現存長11.5㎝，身幅2.2㎝，厚さ0.25㎝を測る。身の復原長は7.4㎝程で，13のような透孔はなく，茎には木質が残り，桜皮を巻いている。本鉄鏃は身の先端部を欠き，出土位置等を勘案すれば副葬品とするよりも，被葬者の体中に突き刺さっていたものである可能性が高いと思われる。

鉈　(14・15)

D168・D175から各1本ずつ出土している。

14はD 175床面から「長宜子孫」鏡系統の鏡片とともに出土した。出土位置は被葬者の左肩付近にあたる。出土当初から柄尻を欠失するが，現存長17.8㎝，幅は上半部に最大幅があって1㎝強を測り，刃部，柄尻部分は細目である。刃は先端から2.5㎝の部分までついており，刃部中央には弱い鎬が通る。断面は刃部がV字形，柄部は浅いU字形を呈し，厚さは0.1㎝強である。刃部先端から5㎝の位置にD 189出土の素環頭刀子に見られたような，接合の痕跡のように見えるものが存在する。また柄の凹部には木柄が部分的に銹着して遺存している。

15はD 168の棺外副葬品で，当初は木蓋上面の端に置かれていたものと思われる。現存長10.8㎝，幅1～1.1㎝を測る。刃部先端から3.2㎝の部分で厚みが増し，この部分以下の柄の凹部に木柄が装着されていたと想定され，木質が部分的に銹着している。柄の凸面にも木質が銹着しており，この木質の木目は横に通っており，木柄と鉈本体を固定するために木皮等を巻きつけていたのではないかと推定される。

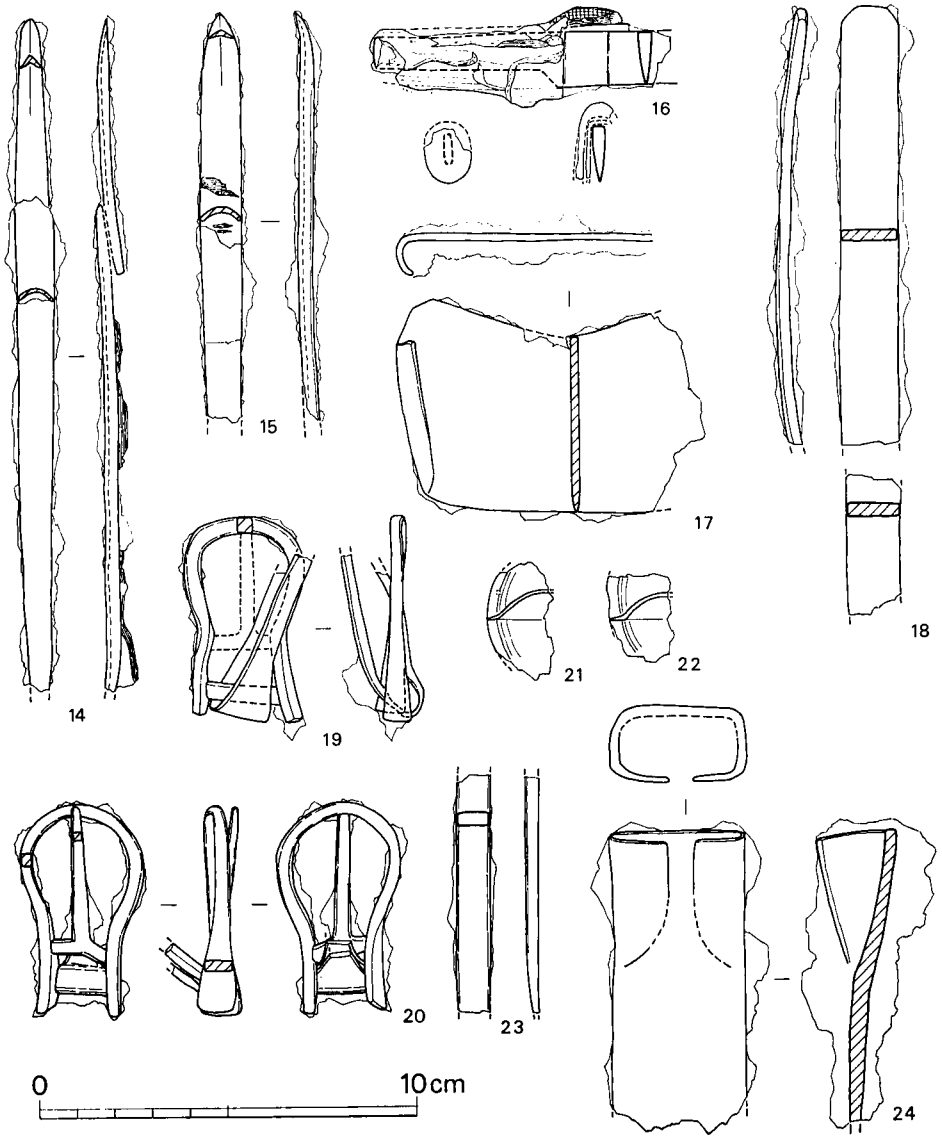
鹿角装刀子　(16)

汐井掛16号墳の石室裏込めの排土中にD196北西隅付近で検出したもので，D196の棺外副葬

品であろうと思われる。身の大半を欠失し，現存長8㎝を測る片関の刀子である。関部に鹿角が銹着し，鹿角表面には布が付着している。幅0.9㎝，厚さ0.2㎝の茎および関部に鹿角製の把が装着され，これから切先部寄り1㎝の部分は銹び方が他の部分と異なっており，本来は何らかの部品が装着されていたものと推定される。

鋤　先　(17)

D 219に供献されたと推定される土器群にまじって出土した。検出時から完形品ではなく現



第102図　鉄器実測図2（½）

存幅8㎝を測る。厚さ0.2㎝の鉄板の両端を折り返して作ったもので，刃部はゆるい弧線を描き，背部は1㎝程くり込まれてその弧線は刃部より強い。よって折り近し部の長さが最長で5.3㎝を測り，中央部は4.7㎝を示す。背部のカーブより推定して幅10㎝程に復元される。

馬　具（19～22）

D 200から出土した鞍橋の磯金具につくしおでで，19・20の鉸具と21・22の座金は相互に接続して1対となる。鉸具の部分は細身で断面は矩形を呈す。座金の部分は径4㎝前後と推定され，幅3㎜の周縁があり厚さは1㎜強である。

しおでは鞍金具の前・後輪に少なくとも各1対づつうたれて鞍を安定させる部品であるが，1対しか出土しておらず，馬具として使用されたものか否かは不明である。

斧　（24）

16号墳の盛土を剝ぐ過程でD 208周辺から出土した。埋葬施設に伴うかどうかは不明であるが，その可能性は薄いと思われる。刃部を欠失するが，現存長8㎝で袋部は矩形を呈する。幅はほとんど変わらず肩もないようである。

不明鉄器　（18・23）

18は表土中から出土し，幅1.6㎝，厚さ0.3～0.4㎝，長さは不明である。側面観はやや反っている。木質の銹着はなく，端部は丸味を持っている。鑿かと思われるが確証はない。

23はD195棺外からの出土品で両端部を欠失し，現存長5.8㎝，幅0.9㎝，厚さ0.3㎝を測る。厚さは下部に向かってその厚みを減じ折損部では0.15㎝である。刃になるとすれば片刃である。　（児玉）

註1　鉄器に見られるこのように接合したかのような状態のものは，D76・D175出土の鉈にも見られ，目を他地域に転ずれば北九州市小倉南区大字長行字郷屋の箱式石棺墓出土の鉈（山中英彦「郷屋遺跡」『北九州市の埋蔵文化財』所収　1976　北九州市教育委員会）にも見られる。これらはX線透視を行っただけで本体と接合したと思われる部分の両者の成分分析・硬度分析や専門家の意見を伺っていないので確たることは言えないが，このような現象は単に鍛造技術の稚拙さによって鍛接の不十分な部分に空気がはいって銹びたか，あるいは使用途中に折損したりしたものを接合したか，更には当初から硬度の異なるのを接合したかの三通りの可能性を考えることができる。X線写真を専門家に読んで頂いた結果によれば，鍛接不十分な部分に空気がはいり銹化が進行してふくれたためではないだろうか，というコメントを頂いている。

(3) 葬身具 (図版70)

葬身具の出土は表7に示すとおりである。勾玉・管玉・ガラス玉の玉類でいずれも棺内床面からの出土である。

表 7　出土玉類一覧表

遺　構	出土位置	遺　物　名
176号土壙墓	棺内床面	勾玉　1
188号木棺墓	棺内床面	ガラス小玉　90
224号木棺墓	棺内床面	ヒスイ製勾玉　1　・　碧玉製管玉　16
19号石蓋土壙墓	棺内床面	ガラス小玉　10
31号箱式石棺墓	棺内床面	ガラス小玉　27

D176出土勾玉　(第103図)

軟質の石材で黄灰色を呈し，黒色の斑点が見られる小さな勾玉である。C字形を呈し，背部は丸味をもつ。孔は両側から穿孔されている。長さは1.26㎝，厚さ4.55㎜，胴部幅は5.4㎜，孔径は2.3㎜を測る。

D188出土ガラス玉　(第103図，表8)

棺内頭位の中央部から左側壁よりに出土した。総数で90個を数える。出土地点のレベル差が15㎝程あり，連なった状態は観察できなかった。色調はすべてコバルトブルーである。形態的に3種類に分けられる。径が5～6㎜，厚さ3～4㎜で上下が平滑になったもので64個ある。(1・3・9・17・22) 径に比べて厚みのある特徴を示すものが19個ある。(5・7・12・15・16・18) 径が5㎜内外で，厚さが2㎜前後のものが9個ある。(14・23) 一連の糸に通すと41.3㎝を測る。総重量は18.7㌘ある。全体の計測値は表8に示すとおりである。

D224出土勾玉・管玉　(第103図，表11)

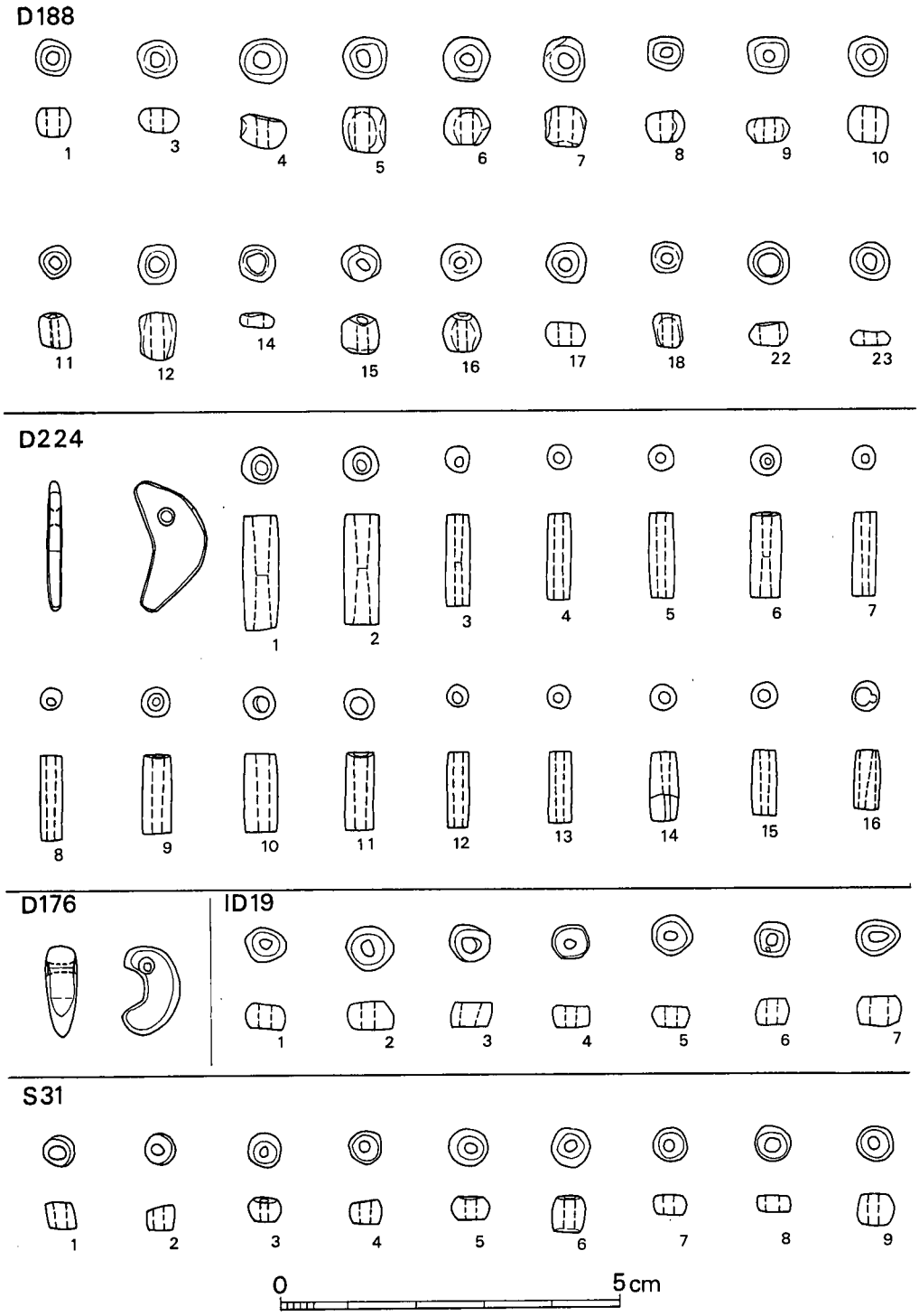
棺内床面中央部に集中して出土した。

勾玉　ヒスイ製の勾玉である。色調は濃緑を呈し部分的に白い斑点がみえる。く字形をなし，背部は研磨痕があり数ケ所で屈曲する。孔は両側からの穿孔である。長さ1.9㎝，厚さは，頭部で1.85㎜，背部で2.3㎜，尾部で1.55㎜，胴部幅は8.3㎜，孔径は1.85㎜を測る。

管玉 (1～16) 碧玉製の細身の管玉で，色調は，1・6・9・10・11・14・16が濃緑色，他は淡緑色を呈する。穿孔は1・2・3・5・6が両側から行なわれている。一連の糸に通すと19.5㎝を測る。総重量は5.3㌘である。計測値は表11に示すとおりである。

S31出土ガラス玉　(第103図，表9)

棺内中央部よりやや頭位部側の床面から出土した。総数27個を数え，色調はすべてコバルトブルーを呈するガラス製の小玉である。形態的には全体に不揃いである。引延法による切断後



第103図　玉類実測図（実大）

に切断面を整えるため，孔の周辺を研磨している。一連の糸に通すと，長さ9.9cm，総重量3.3gである。計測値は表9に示すとおりである。

ID19出土ガラス小玉　（第103図，表10）

棺内の中央部よりやや頭位部の右側に9個出土した。すべてコバルトブルーを呈するガラス製小玉である。大きさは径5.3mm～6.5mm，厚さ3.35mm～4.8mmである。全体に脆く，細いひびが入っている。切断面である孔の周辺は研磨して平坦面をつくってる。総重量は1.4gである。計測値は表10に示すとおりである。

表　8　D188 出土ガラス玉計測表　　単位mm

No.	径	厚	孔径	No.	径	厚	孔径	No.	径	厚	孔径
1	5.2	3.85	2.0	31	6.0	4.0	2.0	61	5.45	3.65	1.9
2	6.4	4.8	2.3	32	5.6	3.1	2.0	62	4.85	3.65	1.45
3	5.7	3.7	1.8	33	5.55	3.7	2.0	63	6.2	5.5	1.7
4	6.75	5.1	2.0	34	4.75	3.9	2.0	64	7.15	4.9	2.55
5	6.4	6.2	2.5	35	7.2	6.0	2.75	65	4.55	5.1	1.75
6	5.15	5.1	1.95	36	6.9	4.9	3.3	66	6.75	6.8	2.1
7	5.75	5.2	2.15	37	4.75	3.9	1.7	67	5.3	4.15	1.8
8	5.8	3.2	1.9	38	5.1	4.05	1.6	68	5.3	4.0	1.65
9	5.4	4.45	1.9	39	5.0	4.1	1.4	69	6.2	5.55	2.6
10	5.65	4.9	2.15	40	5.75	6.15	2.0	70	6.0	3.8	1.5
11	4.65	4.2	1.7	41	7.7	5.3	2.3	71	6.4	5.3	1.95
12	5.5	6.55	2.4	42	6.0	5.95	2.0	72	6.7	5.0	2.25
13	5.65	6.9	2.0	43	6.0	3.8	1.9	73	5.85	4.95	2.2
14	5.15	2.0	2.55	44	7.5	5.6	2.2	74	5.0	3.0	1.9
15	6.0	5.3	2.2	45	5.6	4.85	2.1	75	6.0	4.8	1.6
16	5.1	5.1	1.6	46	5.8	4.9	2.1	76	5.2	4.45	2.0
17	5.8	3.6	2.0	47	5.7	5.9	1.9	77	5.25	4.3	1.6
18	4.65	4.55	1.7	48	6.1	5.1	1.8	78	4.7	5.2	1.8
19	5.0	4.8	2.15	49	7.4	5.2	2.0	79	5.1	4.0	2.0
20	5.9	4.6	1.75	50	6.0	6.45	2.5	80	4.65	4.3	1.2
21	4.5	4.6	1.45	51	5.0	4.85	1.95	81	4.1	4.0	1.6
22	5.9	3.5	2.9	52	6.4	4.3	2.5	82	5.0	3.2	1.75
23	4.8	5.55	2.0	53	6.0	6.0	1.75	83	4.9	3.45	1.9
24	4.6	4.75	1.5	54	6.7	5.25	2.0	84	6.25	4.65	2.55
25	5.45	2.1	2.2	55	5.5	6.5	2.0	85	4.4	5.8	1.45
26	4.7	3.6	1.6	56	5.85	3.55	1.75	86	5.25	5.15	2.0
27	5.6	3.9	1.65	57	5.0	3.8	1.9	87	5.85	4.95	1.7
28	4.6	4.7	1.35	58	4.0	5.5	1.35	88	5.8	5.2	2.2
29	4.2	5.3	1.7	59	4.9	5.55	1.6	89	4.8	3.3	1.8
30	5.35	3.7	1.8	60	5.3	3.7	1.8	90	9.8	8.0	4.15

表　9　S31　出土ガラス玉計測表　　単位mm

1	4.65	3.6	2.1	10	4.5	3.2	1.3	19	4.4	3.45	1.85
2	4.65	3.8	1.5	11	5.0	5.0	1.45	20	4.5	3.4	1.6
3	5.0	3.2	1.5	12	5.4	4.5	1.8	21	4.55	4.25	1.4
4	4.9	3.45	1.2	13	5.2	4.7	1.65	22	4.7	3.65	1.2
5	5.4	3.3	1.8	14	4.35	4.05	1.65	23	4.6	4.65	1.5
6	5.3	4.9	1.8	15	4.6	4.5	1.2	24	4.55	2.15	1.7
7	4.9	2.8	1.9	16	5.1	3.1	2.65	25	4.2	3.2	1.0
8	5.15	2.4	1.9	17	4.6	2.55	1.65	26	4.8	3.6	1.45
9	4.95	4.3	1.55	18	5.9	4.0	2.2	27	4.1	3.5	1.3

表 10 I D19出土ガラス玉計測表 単位mm

1	5.8	3.45	1.45	4	5.55	3.4	1.4	7	5.4	4.55	2.3
2	6.4	4.2	2.4	5	5.3	3.85	1.85	8	6.0	3.85	2.4
3	5.9	3.35	1.8	6	6.5	4.45	2.6	9	—	4.8	—

表 11 D224 出土管玉計測表 単位mm

No.	長	幅	孔径		穿孔	色	No.	長	幅	孔径		穿孔	色
			最大	最小						最大	最小		
1	16.9	5.65	3.0		両	濃緑	9	11.7	4.2	2.0	1.2	片	濃緑
2	16.3	5.2	2.7		両	淡緑	10	11.4	5.0	2.25	1.85	片	濃緑
3	13.7	3.8	1.45		両	淡緑	11	11.2	4.25	2.15	1.8	片	濃緑
4	12.9	3.5	1.6		片？	淡緑	12	11.0	3.2	1.55	1.5	片	淡緑
5	12.65	3.9	1.45		両	淡緑	13	10.65	3.75	1.4	1.25	片	淡緑
6	12.6	4.45	2.0		両	濃緑	14	10.0	4.15	1.65	0.65	片	濃緑
7	12.4	3.4	1.45	1.25	片	淡緑	15	9.6	3.75	1.4	1.1	片	淡緑
8	12.3	3.25	1.35	1.2	片	淡緑	16	8.4	4.05	1.8 2.2	0.9 0.6	片2回	濃緑

(4) 鏡 (図版71)

鏡は表12に示すとおりD175・D203棺内から鏡片，D186棺内から小形仿製鏡が出土した。

表 12 出土鏡一覧表

遺構	出土位置	遺物名
175号 木棺墓	棺内床面	内行花文鏡片
203号 土壙墓	棺内床面	内行花文鏡片
186号 木棺墓	棺外北東側	小形仿製鏡

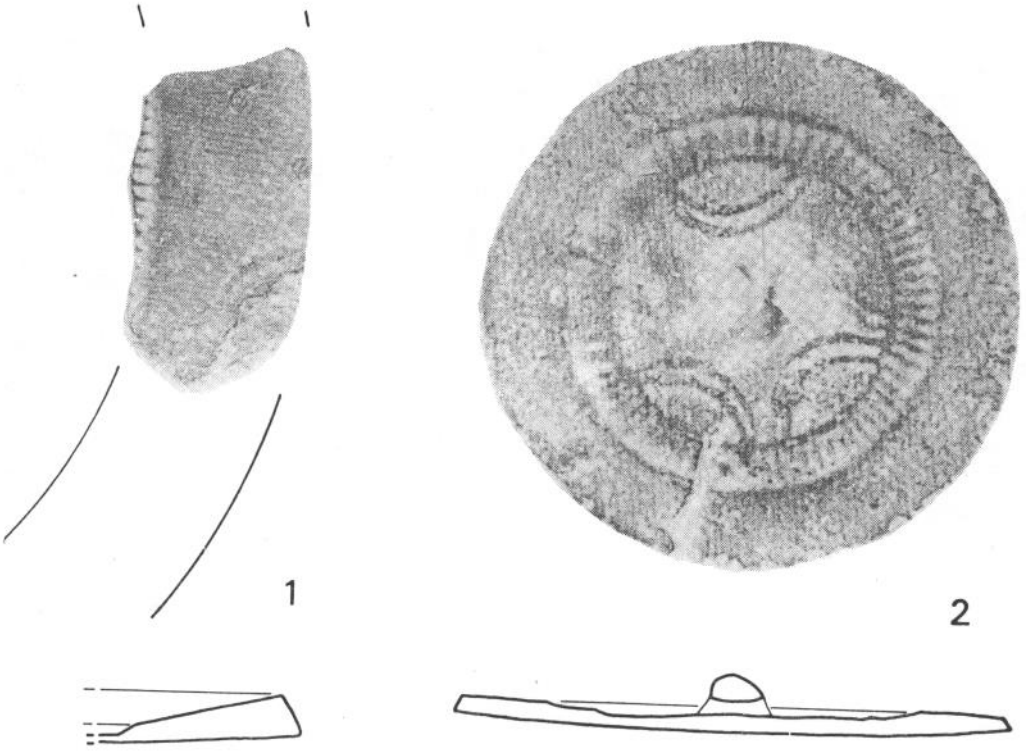
D175出土鏡 (第104図—1)

棺内の頭位と考えられる北側床面から鏡面を上にして出土した鏡片である。鏡片は約10㎝程の広がりをもつ鮮明な赤色顔料の上におかれており，したがって鏡背には赤色顔料が付着している。鏡片は長さ4.5㎝，幅約2.5㎝程の平縁片で，内側に直行する櫛目文が残る。鈕・内区・外区・縁のほとんどを欠き背文構成は明らかではないが，長宜子孫系の内行花文鏡片と考えられる。面径は約3.4㎝残存する縁から復原すると約18㎝程である。割れ口は磨滅しており，色調は漆黒色を呈し，鋳あがりは良く舶載鏡である。

D186出土鏡 (第104図—2)

D 186 北側墓壙上面から鏡面を上にして出土した小形仿製鏡である。外側から幅広につくられた平縁，比較的均等な間隔をもつ櫛歯文帯は斜行というよりはむしろ直行に近い。その内側には，双線をもって表現された5弧の内行花文帯を配する。鈕の周囲には円圏をめぐらさない。銅質はよく一部に光沢が見られ，色調は淡緑色を呈する。面径は7.27㎝を測る。鈕高は 7.2㎜

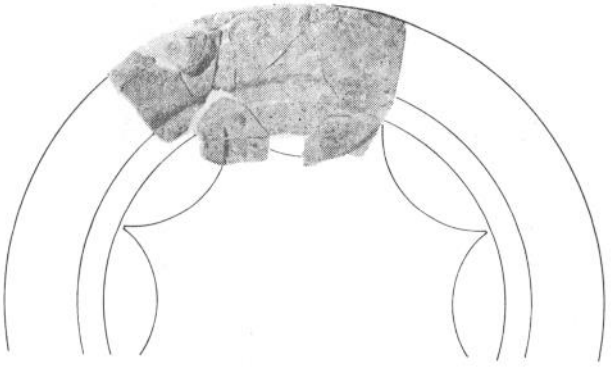
を測り，鈕孔内には繊維製品が紐状に残っていた。なおこの紐については布目順郎氏に分析していただいた。



第104図　1　D175出土鏡　2　D186出土小形仿製鏡（実大）

D203出土鏡　（第105図）

棺内の頭位と考えられる北側床面から鏡面を上に向けて出土した。鈕・内区・外区の大部分を欠く約⅛の片である。残存部は平縁とその内側の素文凹帯・花文帯の一部であるが，復原によりほぼ全体の文様構成がわかる。復原面径は約16cm程で，割付によって花文帯は８花文で構成されることが判明した，鈕座については不明であるが他の構成からみて蝙蝠形座鈕を有するものと考える。表面は一見淡緑色を呈すが，部分的に淡黒色の光沢が見られる。



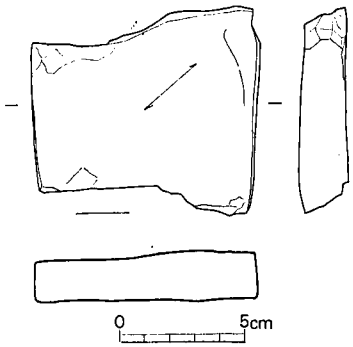
第105図　D203出土鏡（½）

（池辺）

(5) 石　器

砥　石　（第106図）

砥石は第16号墳の南トレンチ旧地表面直下で出土した。長いものの両端が折れたもので硬質砂岩製である。現在値は，長さ約8㎝，幅約9㎝，厚さ約1.8㎝，重さ210㌘を測る。表裏両面共砥面として使用されており，使用痕が見られる。　（池辺）



第106図　砥石実測図（1/3）

3 小　　結

検出された遺構は土壙墓・木棺墓76基・箱式石棺墓9基・石蓋土壙墓6基である。この墓地群は東西にのびる丘陵の尾根線上に立地し，今回の調査区はその丘陵の西端部にあたり，北・西・南側はゆるやかな斜面を形成している。埋葬施設は尾根鞍部に集中するが，今回の調査で南側斜面の標高71㎞を測る地点にも12基で形成されるグループが見られ墓域が斜面の低い部分にも拡がることが確認された。標石は6世紀中葉に比定される第16号墳の構築の際に地山整形による攪乱，また盛土の土留め作業に使用されており現存しているものは少ない。16号墳の旧地表下から検出したD 186の墓壙上面にはニの形態で配列されており同レベルで小形仿製鏡が副葬されていたことは興味深い。土壙墓の作り方は前回との相違点を見いだすことはできないが，木棺墓D175とD189に見られる組合せ方は，前回見られなかったものである。つまり一段目の墓壙を深く掘下げて，二段目の壙は10数㎝と浅く底はやや舟底状を呈しこの部分に棺を組合せ蓋のレベルまで裏込めを行なうものである。箱式石棺墓・石蓋土壙墓の構築法にも特に目を引くものはない。今回調査した埋葬施設のうち副葬品の出土例は圧倒的に木棺墓・土壙墓からのものが多い。鏡片2，小形仿製鏡1，鉄器（鏃11・素環頭刀子3・鹿角装刀子1・鉋1・鋤先1・馬具）はいずれも木棺墓・土壙墓からの出土例である。箱式石棺墓・石蓋土壙墓から出土例は，S31・ⅠD19から検出したガラス小玉がある。次に切り合い関係であるが，棺自体の切り合いは3ケ所に認められるだけで，他は一段目の墓壙での切り合い関係である。土壙墓・木棺墓の切り合いはD162→D161・D158→157・D181→D165・D199→D200・D201→D202・D205→D206・D212→D211の関係が見られ，主軸が等高線に対して平行なものが，斜行または直行するものに切られている。箱式石棺墓と土壙墓の切り合い関係はD168→S25・D170→S30の関係が見られ逆に木棺墓・土壙墓が箱式石棺墓を切った例は認められない。このことは相対的に箱式石棺墓が新しい可能性がある。Ⅵ.まとめの項では，各遺物分析と墓地形成について述べてみたい。　（池辺）

Ⅳ　第186号木棺墓出土の小形仿製鏡の鈕孔内にあった紐の材質について

汐井掛186号木棺墓出土の小形仿製鏡の鈕の中にあった繊維製品（図版74）は，神蔵古墳出土の三角縁神獣鏡の鈕の中にあった繊維製品（註1）と外観においても，繊維断面形においても極めてよく似ている。したがって，繊維の材質は楮かあるいは穀の樹皮繊維と考えられる。この繊維製品は神蔵古墳のものと同様，繊維同志が横に，部分的につながっている。かといって紙のように一枚のものでもなければ，織物でもない。これは木綿（ゆう）と呼ばれるべきものであり，類品は正倉院にも蔵されている（註2）。

これによって，3世紀頃のわが国にすでに木綿（ゆう）文化が存在したことがわかる。おそらくゆうとしてはわが国最古のものであろう。

終りに，本研究の機会を与えられた福岡県教育庁文化課の方々に深く感謝する。

（布目順郎）

註　1　拙著「神蔵古墳出土の三角縁神獣鏡の鈕孔内にあった紐の材質について」（『神蔵古墳』甘木市文化財調査報告第三集，甘木市教育委員会）　1978

2　拙著「正倉院の繊維類について」（『書陵部紀要』26号　1—46頁）1975

帝室博物館「正倉院御物図録」第14輯　1942

V　天神の上遺跡の調査

天神の上遺跡は，山口川左岸の標高約68mの丘陵上に所在する。同丘陵上西側の汐井掛の墓地群とは直線で約400 m離れている。東側には弥生時代・古墳時代の集落跡である都地原遺跡・柳ケ谷遺跡がある。

発掘調査は，昭和52年1月17日から同年2月25日までトレンチ調査を実施し，箱式石棺墓2基を確認した，本調査はこの部分に集中し，昭和52年11月1日から同12月15日まで約800 ㎡を完掘した。墓地群は，都地原遺跡から続く尾根線の西端の平坦部にあたり周囲からみるとわずかな高まりを呈している。検出された遺構は，土壙墓3・木棺墓1・箱式石棺墓3・石蓋土壙墓2である。

1. 遺　構　の　概　要

土壙墓3基・木棺墓1基・箱式石棺墓3基・石蓋土壙墓2基，計9基を検出した。以下本文中では土壙墓・木棺墓をD，箱式石棺墓をS，石蓋土壙墓をＩＤとする。

この内トレンチ調査で検出したＳ１・Ｓ２は，他の墳墓より上面から発見され時期的に若干新しい可能性がある。また表土下で検出した礫群はＳ１の南東側とＩＤ２の周辺に集中しているが，汐井掛遺跡で確認された標石の様に墓壙上面に意識的に石列を配した状況は見られない。しかしながら周辺から墳墓以外の遺構が検出できないことから，性格は不明であるが墳墓群の構築となんらかの関連があるものと考える。

以下各遺構について設明を加える。

(1)　土壙墓・木棺墓

土壙墓は4基検出した。Ｄ１は平坦部に他は南側の斜面に造られている。この内粘土の残存状況，側板の掘込からＤ１は棺材を使用した木棺墓であることが判明した。

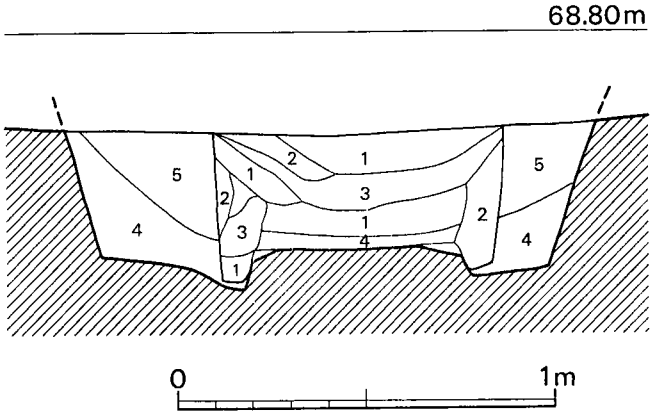
第１号土壙墓　Ｄ１　（図版53，第108・109図）

調査区中央部Ｓ２東側に検出した木棺墓である。構築法は，墓壙を掘りＡ型式の棺を設置して裏込するものである。墓壙は隅丸長方形を呈し，長さ2.45m，北側幅約1.4m南側幅1.54mを測る。主軸方位はＮ—6°—Ｅを示す。まず墓壙内は埋土（褐色土層）を約15㎝程掘下げたところで，墓壙内の埋中央部に土色の変化があり，小口に板石を使用した木棺墓のプランが現われ，さらに蓋板の目張りに使用された青灰色の粘土を検出した。粘土を観察すると約20㎝の間

隔で，5～10cmの帯状で棺主軸に直行する方向に使用され，棺の中央部付近は摺鉢状に落ちこんだ状態が見られた（第107図）。このことから推定して，木板の痕跡は残さないが，幅20数cm，長さ約80cm程の木板を7枚使用し棺の長辺に対して横掛したものと思われる。

棺内に推積した土は，褐色のさらついたもので，墓壙内の割合しまった黄褐色土と容易に分離できた。棺の内法は，長さ約2m，北側幅58cm，南側幅42cm，深さ30cm以上のものである。両側壁には側板を立てるための溝が掘り込まれているが，東側の溝は中央から南側にかけ内側に曲っている。

墓壙内の埋土を全部取り地山を出すと，両木口，両側板の掘り込み，さらに棺底の削出しが残る。両木口板，両側板を立てた外側に埋めもどして棺を組立てるものであるが，この場合底板が使用されたかどうかは不明である。副葬品等の遺物は出土していない。



第107図　1号土壙土層図（½）

第1号土壙土層断面図土層名

1. 褐色土層
2. 暗褐色土層
3. 青圧色粘土層(礫混入)
4. 黄褐色粘質土層
5. 暗黄褐色土層

第2号土壙墓　D2　（第110図）

S3の東側の斜面に検出された平面形長方形を呈する土壙墓である。主軸方位はN—10°—Wを示す。土壙墓の規模は，長さ2.5m，幅は北側で83cm，南側で78cm，内法は，長さ2.4m，幅は北側で64cm，南側で62cm，中央で68cmを測る。深さは最も深い北側で61cmを測る。壁面はやや斜めに立上がり，床面は北側が高く南に向って傾斜している。

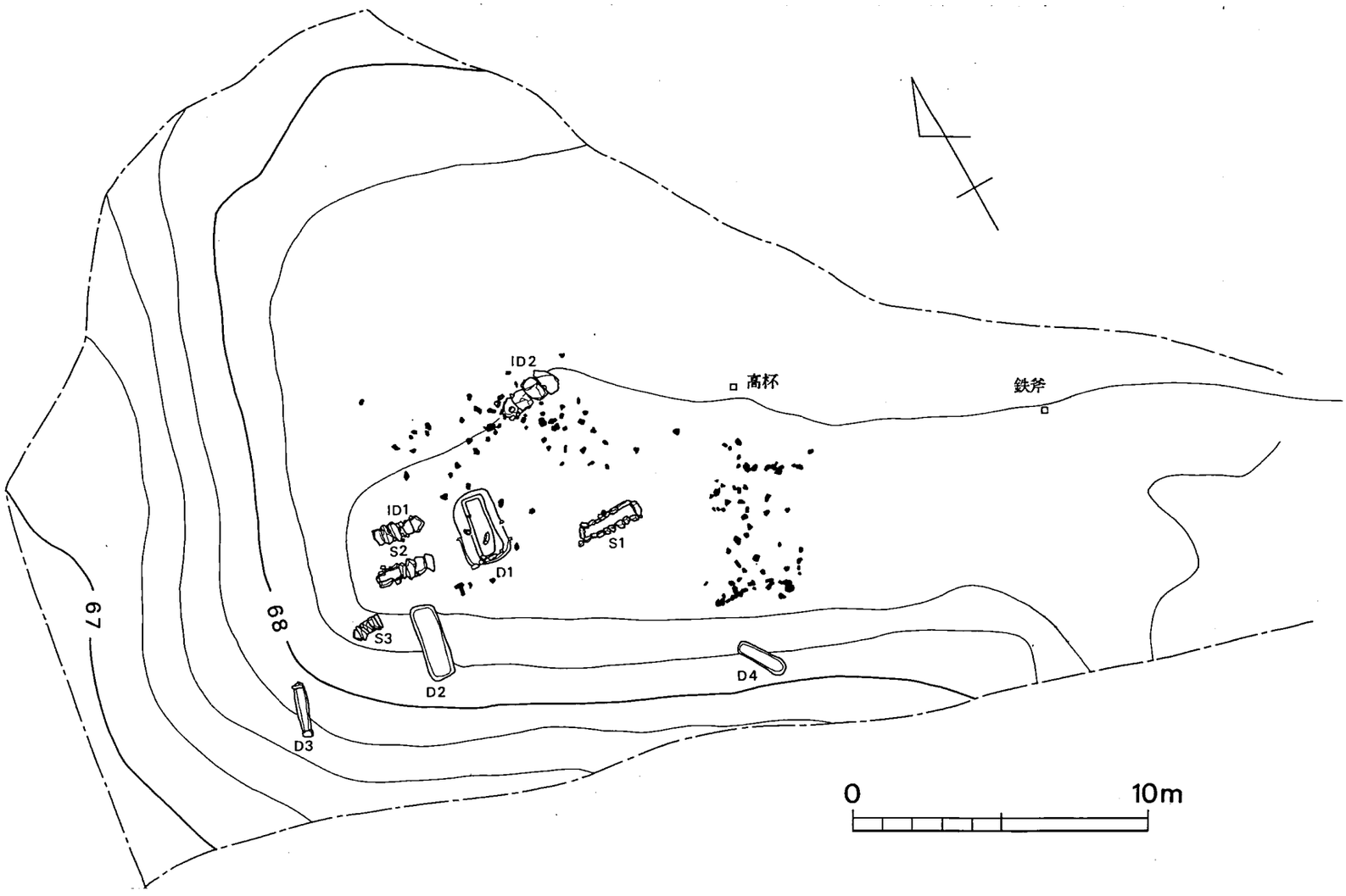
第3号土壙墓　D3　（第110図）

墓地群でもっとも低い位置から検出した土壙墓で，主軸方位はN—16°—Eを示す。墓壙両木口の上端部には，長さ40cm，幅20cm前後の石を裾えているが，用途については不明である。土壙墓の規模は内法で，長さ1.47m，北側最大幅27cm，深さは20cm，木口上部の石の上端から床面までは，北側で33cm，南側で29cmを測る。

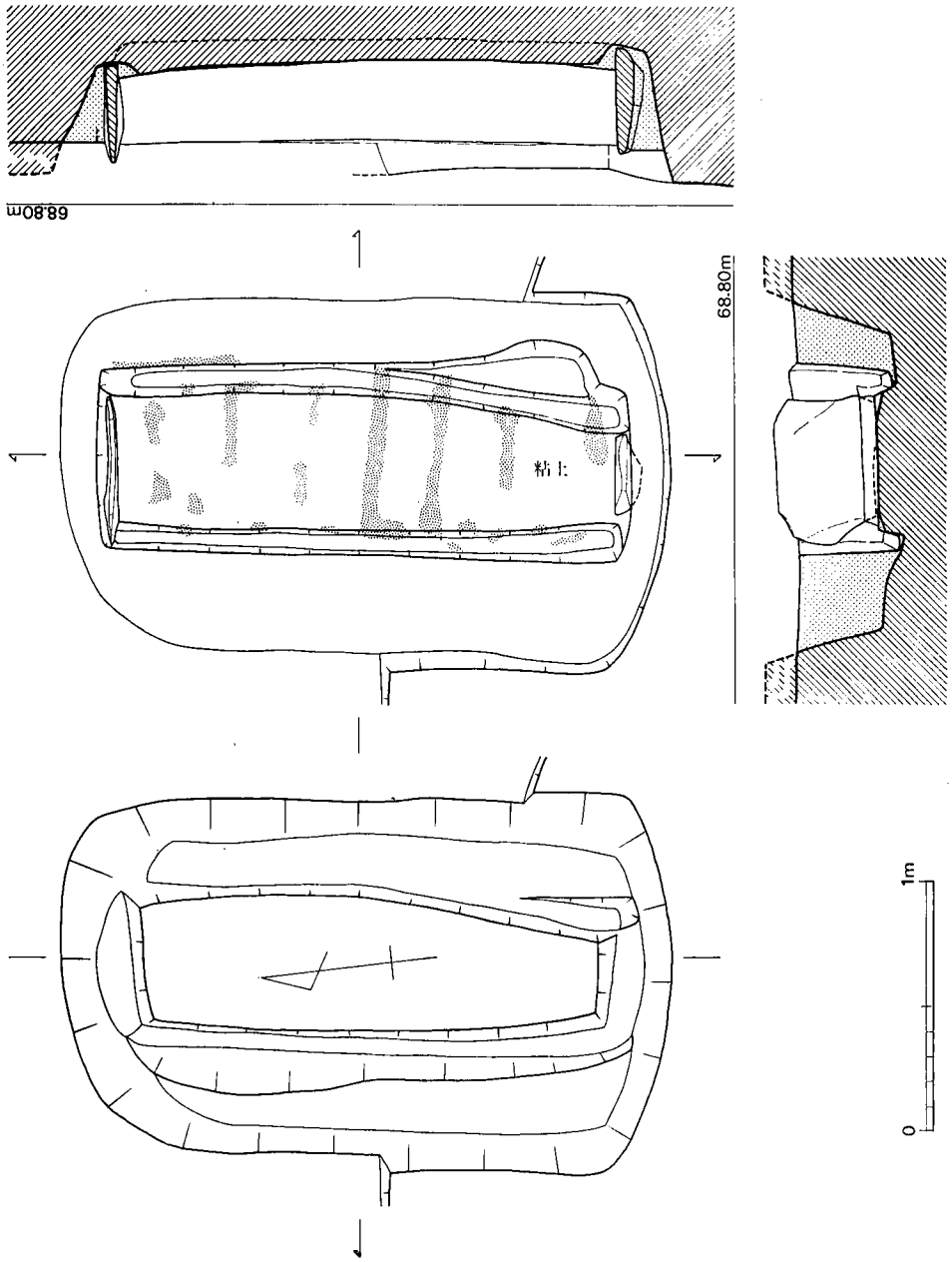
第4号土壙墓　D4　（第110図）

墓地群の東南端から検出した隅丸長方形を呈する土壙墓で，主軸方位はN—36°—Wを示す。規模は，長さ1.6m，幅は北側で30cm，南側で40cm，深さ17cmを測る。床面は北側が高い。

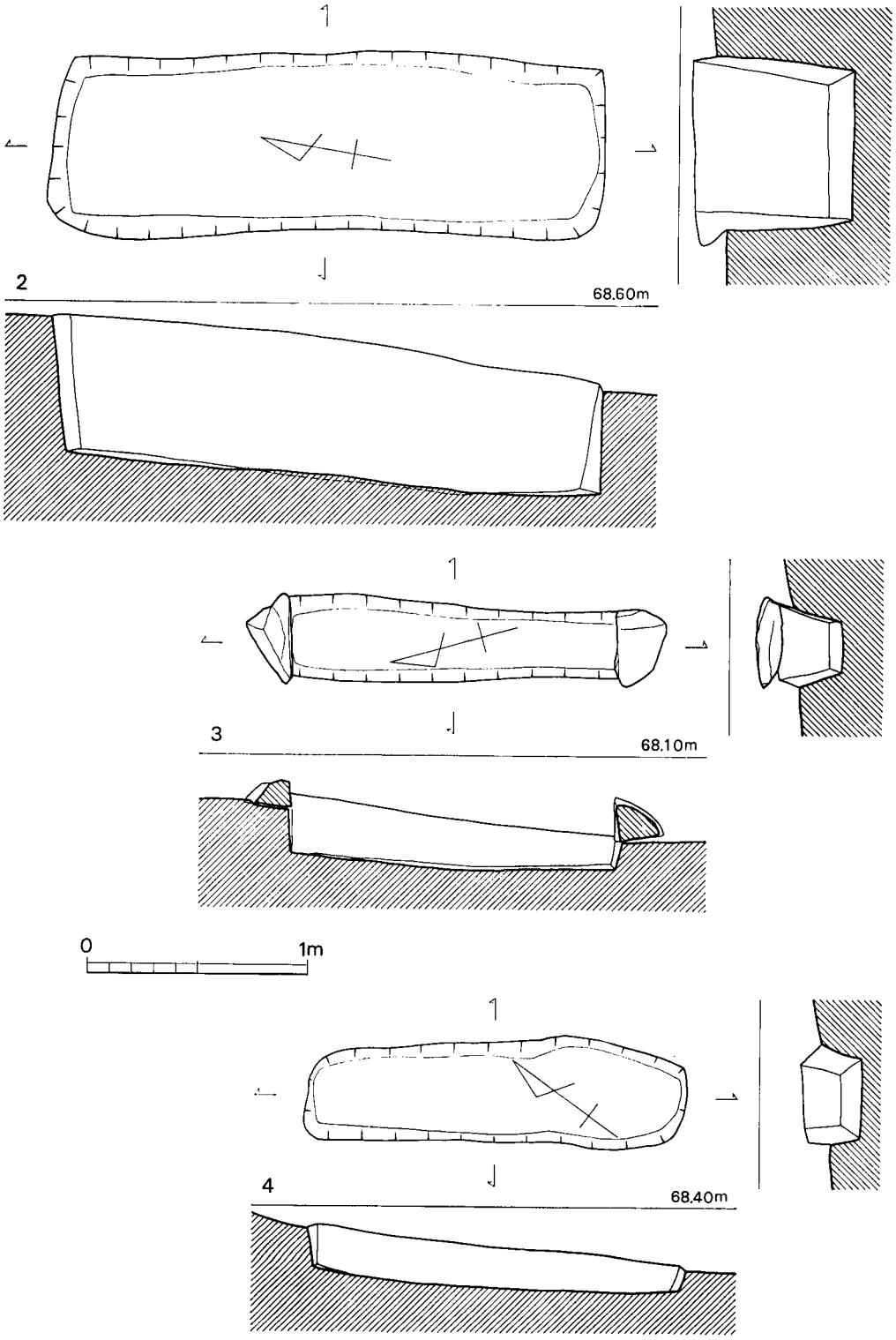
（池辺）



第108図　天神の上遺跡遺構配置図(1／200)



第109図　1号土壙墓実測図（1/30）



第110図　2～4号土壙墓実測図（1/30）

表 13 土壙墓・木棺墓一覧表

単位cm

No.	種別	主軸方位	頭位	墓壙の規模		棺の内法			木棺の場合				
				長	幅	長	幅	深	型式	木口の掘込	側板の掘込	側板の切込	裏込
1	木	N-6°-E	北	245	141	200	53	30	A	板石○	○		○
2	土	N-10°-W	北			240	68	61					
3	木	N-16°-E	北			147	23	20					
4	土	N-36°-W	北西			166	36	17					

(2) 箱式石棺墓

調査区中央からその西側にかけて3基の箱式石棺墓が検出された。うちS1・S2は成人用S3は小児用である。またS1・S2は上部を削平されていた。

第1号箱式石棺墓 S1 (図版54—2，第111図)

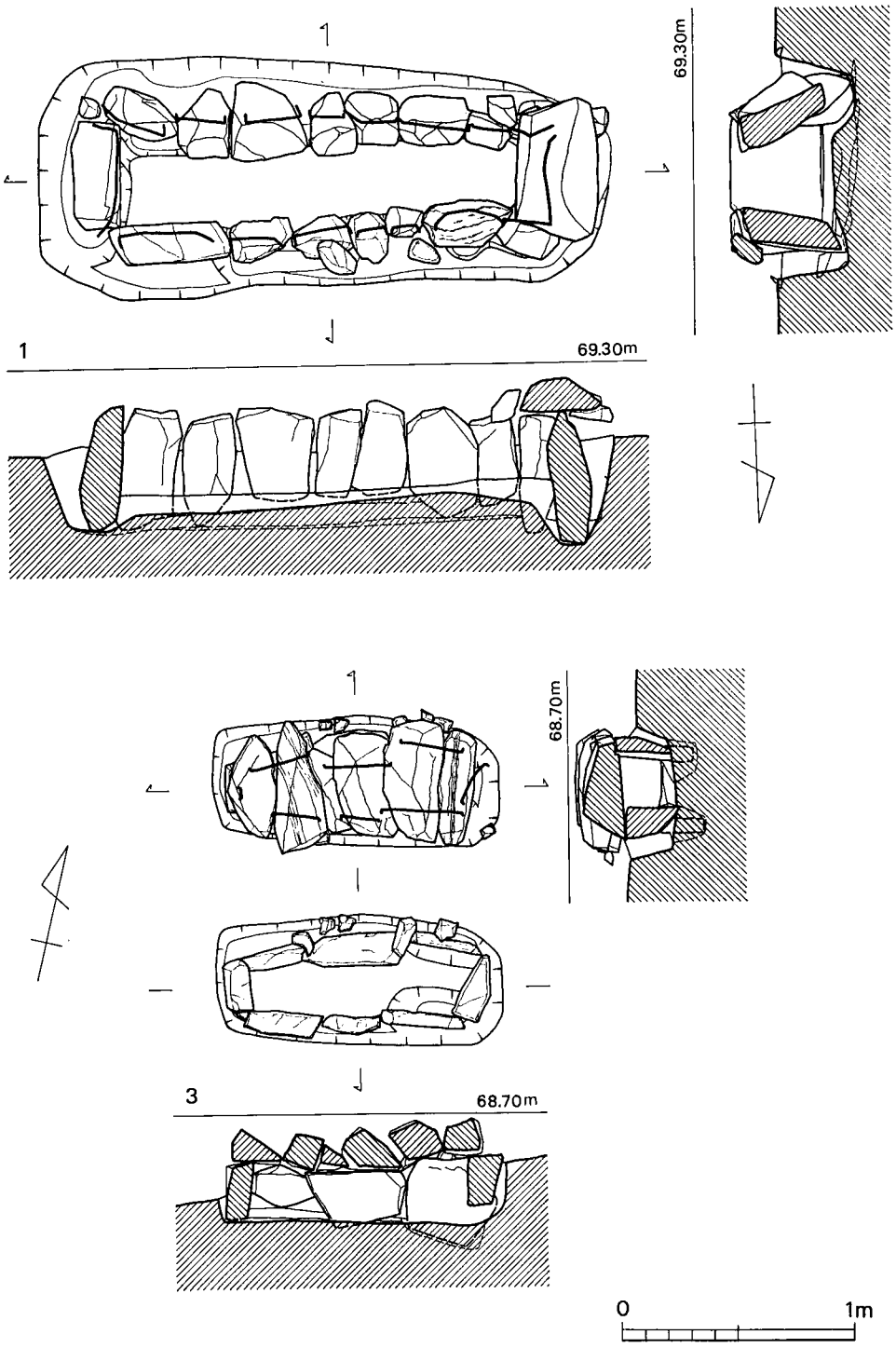
調査区の中央部から検出された石棺墓で，長さ2.45m，幅95cmの墓壙内に構築されている。上部は削平され，蓋石は1枚を残すのみである。主軸はE—2°—Sを示す。側壁は右側8枚，左側7枚の細長い板状の石を内傾させて立てて使用しているが組み合せ方は雑である。両木口1枚である。棺の内法は，長さ1.84m，幅は頭位と思われる東側が50cm，西側41cm，深さ34cmを測る。

第2号箱式石棺墓 S2 (図版55，第112図)

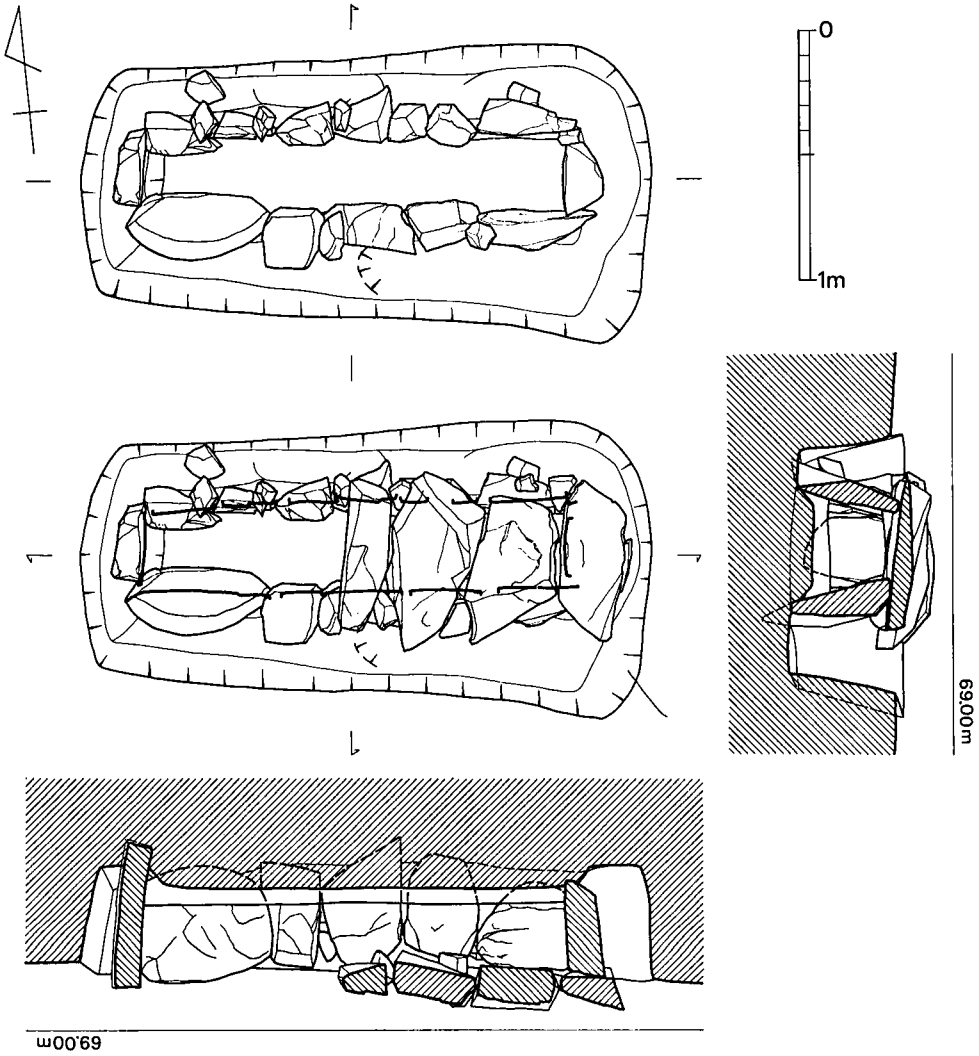
D1の西側に，長さ2.3m，幅1.05mの隅丸長方形の墓壙内に構築された石棺で主軸方位はE—5°30′—Sを示す。蓋石は中央から東側が破壊され，西側4枚を残すのみである。側壁は右壁5枚，左壁7枚の板石をやや内傾させて裾えている。左壁は，右壁に比べて石材も不揃いで組み方も雑である。両小口はそれぞれ一枚の板石を使用している。両側壁，両木口の基部は壙底に深く掘り込んで裾られている。棺の内法は，長さ1.68m，幅は頭位と考えられる東側が36cm，西側で30cm，深さ25cmを測る。底面は水平に整形されている。棺内からの出土遺物はないが，北側側壁の上部から鉄鏃が出土している。

第3号箱式石棺墓 S3 (図版56，第111図)

S2の南西側3mから検出した。長さ1.22m，幅55cmの隅丸長方形の墓壙内に構築された小型の石棺墓である。主軸方位はN—78°—Eを示す。蓋石は6枚使用されている。両側壁3枚，両木口1枚の板石が用いられ組み立てられているが，石材の大きさも不揃いで，組み合せ方も乱雑である。棺の内法は，長さ93cm，幅は頭位と考える東側で26cm，西側で18cm，深さ24cmを測る。副葬品等の遺物は出土していない。 (池辺)



第111図　1・3号箱式石棺墓実測図（1/30）



第112図　2号箱式石棺墓実測図（1/30）

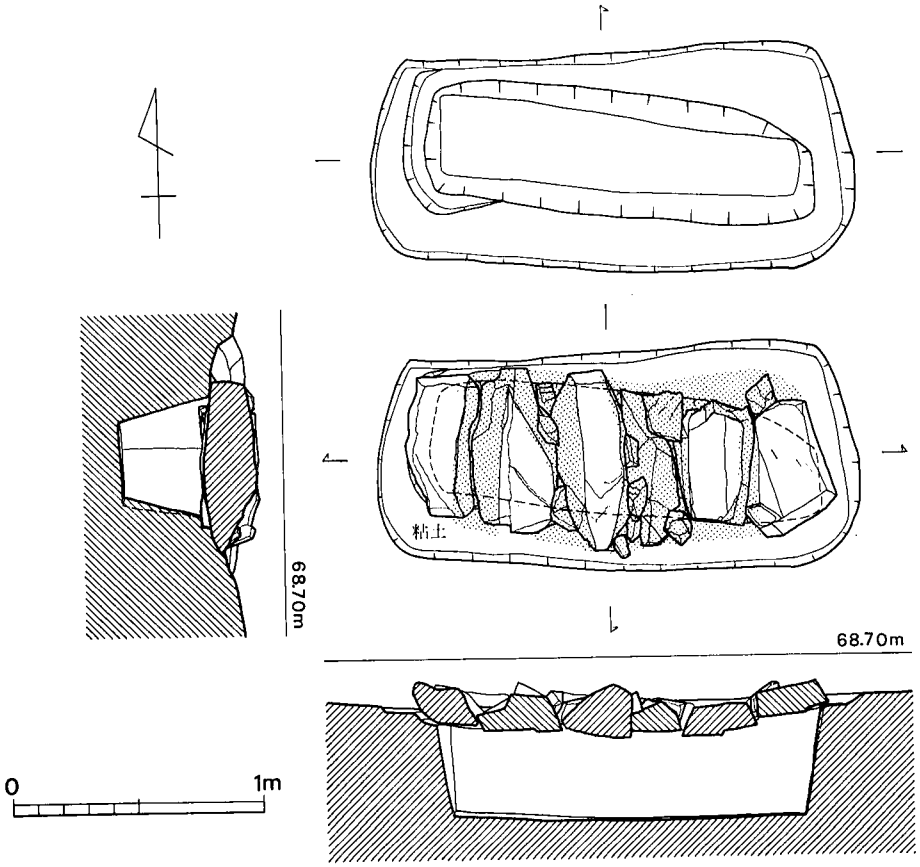
表　14　箱式石棺墓一覧表

No.	主軸方位	頭　位	丹　彩	蓋石数	右壁数	左壁数	主軸長 (cm)	頭　幅 (cm)	足　幅 (cm)	深　さ (cm)
1	E-2°-S	東		(1＋α)	8	7	184	50	41	34
2	E-5°-S	東		(4＋α)	5	7	168	36	30	25
3	N-78°-E	東		6	3	3	98	26	18	24

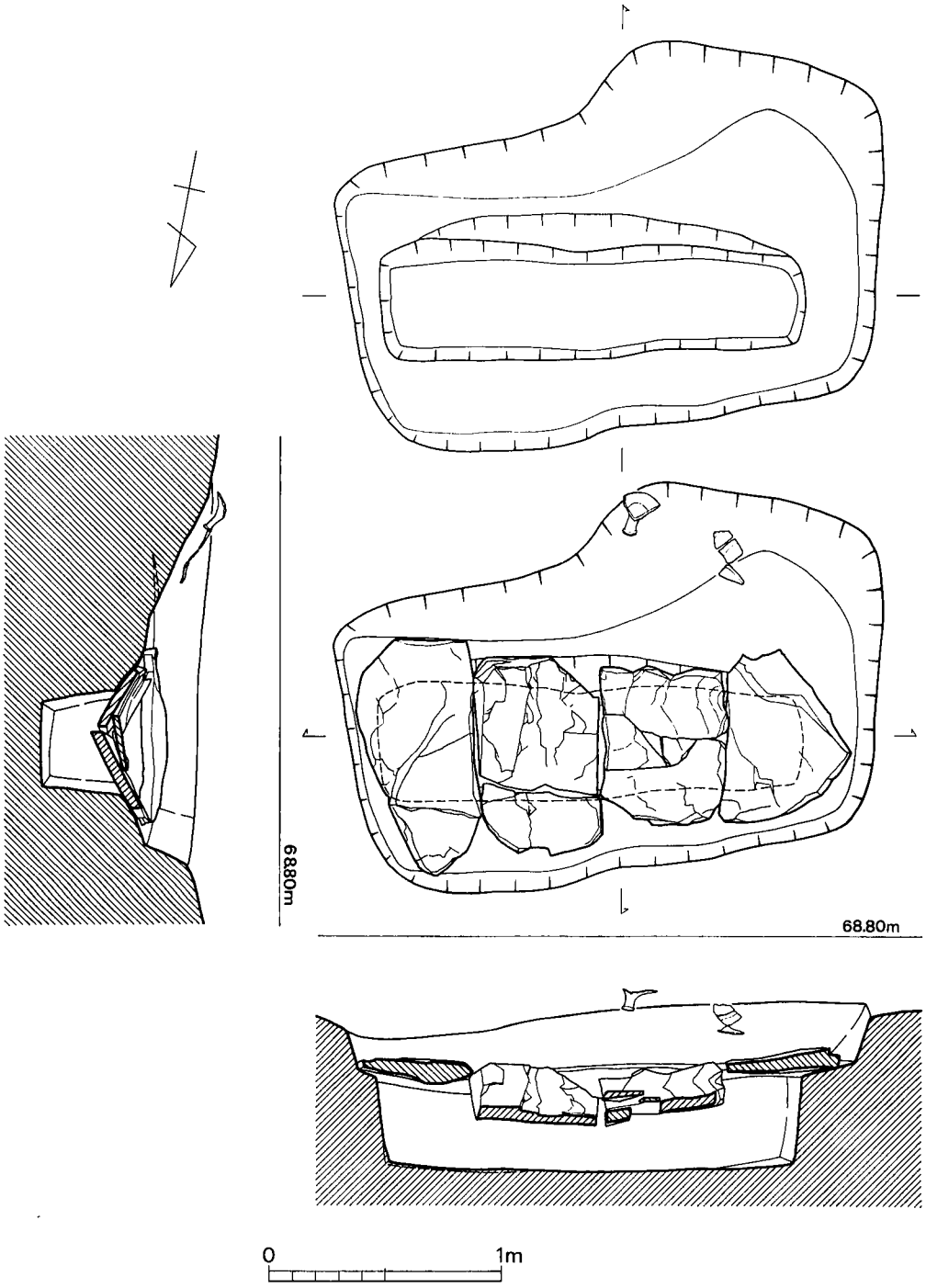
(3) 石蓋土壙墓

第1号石蓋土壙墓　ID1　（図版57，第113図）

S2の北側に，並例して検出されたが，S2蓋石の高さよりも10cmほど低い位置にあり同時期のもとは考えにくい。S2を検出した高さでは土色の変化が判別できず。周囲を掘り下げた時点で蓋石が現われた。このため一段目の墓壙を掘り過ぎてしまった。一段目墓壙の主軸はほぼ東西にとる。隅丸長方形のプランをなし，長さ1.92m，東側最大幅91cm，西側幅80cm，残存する深さは5cm程であるが，本来10数cmあったものと思われる。蓋石には6枚の板状石材を用いて覆っている。蓋石の透間は15cm大の小石で補っている。この後，青灰色の小石交りの粘土で目張りを丁寧に施こしている。下部の土壙は，一段目の墓壙に対して，主軸がずれ斜行する。内法は長さ1.44m，西側最大幅32cm，東側幅22cm，深さ37cmを測る。側壁は斜めに立ち上が



第113図　1号石蓋土壙墓実測図（1/30）



第114図　2号石蓋土壙墓実測図（1/30）

る。床面はほぼ水平に整形している。頭位は幅が広い西側と推定される。副葬品その他の遺物は発見できなかった。

第2号石蓋土壙墓　ＩＤ2　（図版58，第114図）

墓地群の北側端に存在する二段掘の土壙墓である。一段目の墓壙は不整方長形をなし，主軸はN—79°—Eを示す。長さ2.15 m，西側最大幅1.65m，東側幅1.35m，深さは西側で25cm，東側で20cmを測る。この墓壙内は褐色土層で埋まり，頭部と推定される東側で深さ20cmほど掘り下げたところで石蓋が現われた。南側壁では，供献土器と考えられる高杯が出土している。

蓋石は，長さ75cm～1 m，幅50cm前後，厚さ5～12cmの石材4枚を用いこれを横に掛けて使用している。現状では中の二枚は石材自体の重みと土圧で中央が折れ，下部の土壙内に陥没している。この時に土壙南側側壁上端部を破壊している。下部の土壙は隅丸長方形を呈し，規模は内法で長さ1.64m，幅は東側37cm，西側32cmを測る。深さは，頭位と考えられる東側で39cm，足位と考える西側で40cmを測る。床面は中央部がわずかに低くなっている。棺内から出土遺物はない。　（池辺）

表　15　石蓋土壙墓一覧表

No.	主軸方位	頭　位	墓壙の規模		丹　彩	蓋石数	主軸長 (cm)	頭　幅 (cm)	足　幅 (cm)	深　さ (cm)
			長(cm)	幅(cm)						
1	N-91°-W	西	192	80		6	144	32	22	37
2	N-79°-E	東	225	160		4	174	37	32	42

2. 出　土　遺　物

(1)　土　　器

天神の上遺跡からの出土土器は極めて少ない。ＩＤ2の墓壙南側の褐色土層中から墓壙に落ちこむ様に高杯片が出土した。また調査区北側央の表土直下から高杯1個体分が出土した。他にも土器の少片が出土したが，器形が判明するものは少ない。図示できたものについて説明を加える。

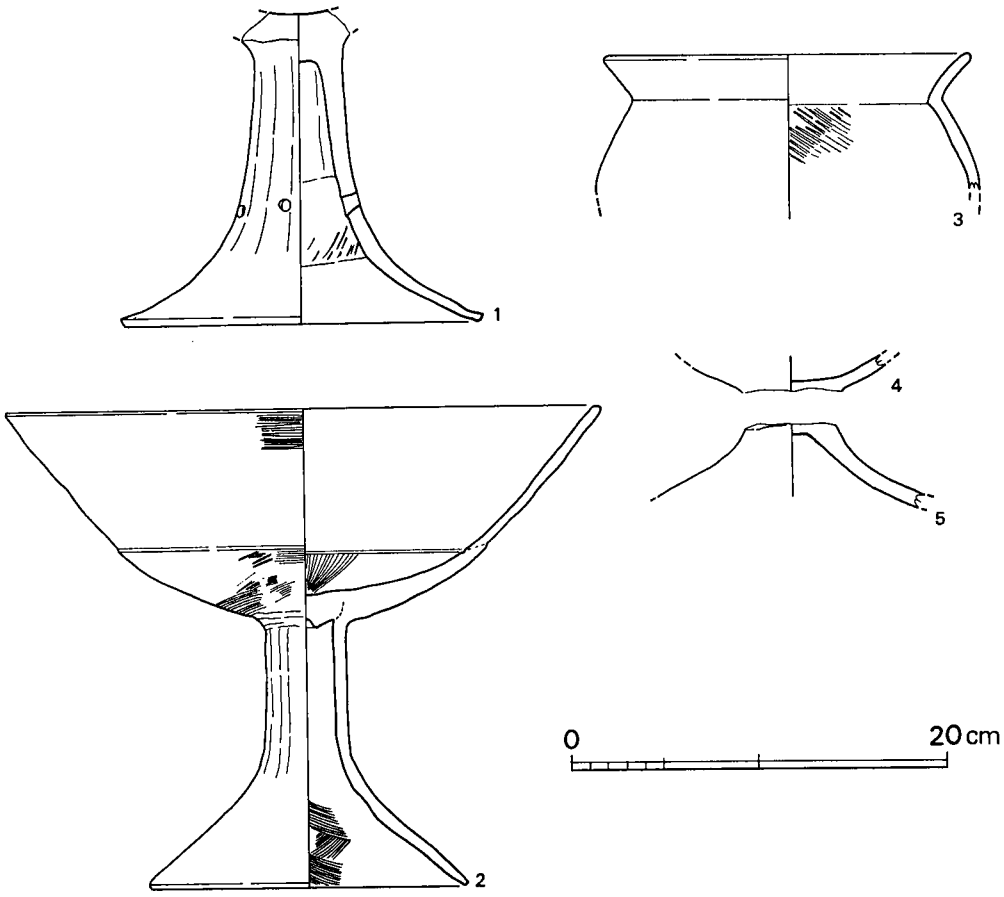
高　杯　（図版73，第115図—1・2）

1は高杯脚部片である。柱状部と脚裾を約⅓程残す。口縁部片も出土したが非常に脆く器壁は剝落し取上げる段階で少片化し図示することはできない。脚部は中空で内面は粒子の流れから右回りの丁寧なヘラ削りを行ない裾部内面はナデられている。裾端部は角ばる。外面はヘラ削りの後にタテヘラ磨きで仕上げている，中位よりやや下に3回の円孔が残存する。間隔は一定ではない。欠損部にもう一個あった推定できる。色調は赤褐色を呈し，胎土は砂粒を多く含み，焼成はわるい。残存高1.46cm，脚部裾復原径は19.2cmを測る。

2は，杯底部・脚柱部と口縁部・脚裾部の一部を残すものであるがほぼ全形を復原できる。杯部内面は放射状に丁寧なヘラ磨きがされ，外面はハケ目調整されている。口縁部は杯底部から斜めに立上り，するどい屈折はみられない。口唇部は丸く仕上げられている。口縁部内面はヘラナデされ，外面はヨコ方向にヘラナデされている。脚柱部外面はヘラ削りの後ヘラ磨きされている。内部は中空で右回りのヘラ削りが観察できる。脚台部外面はヘラナデされ，内面はハケ目調整されている。脚台部から端部にかけてやや内傾し角ばった端部へつづく。円孔の存在は欠損のため不明である。復原すると器高は25.6㎝，口径は31.6㎝を測る。色調は淡赤褐色を呈し，砂粒を多く含み，焼成は普通である。

台付壺　（第115図―３～５）

３・４・５は色調淡褐色を呈し，胎土・焼成ともに類以しており同一個体と考えるが，割れ口が磨滅しており接合はできない。



第115図　土器実測図（¼）

3は残存高7.2㎝を測り「く」字を呈する口縁部片で，口唇部は丸くおさめられている。外面はハケ調整の後ナデて仕上げられ，内面はナデられ頸部には一部ハケ目が残る。4は台付壺の底部で，内外面ともにナデ調整されている。5は脚部片で「ハ」字に大きく開く。内外面ともにナデられている。（池辺）

(2) 鉄　器　（図版73，第116図）

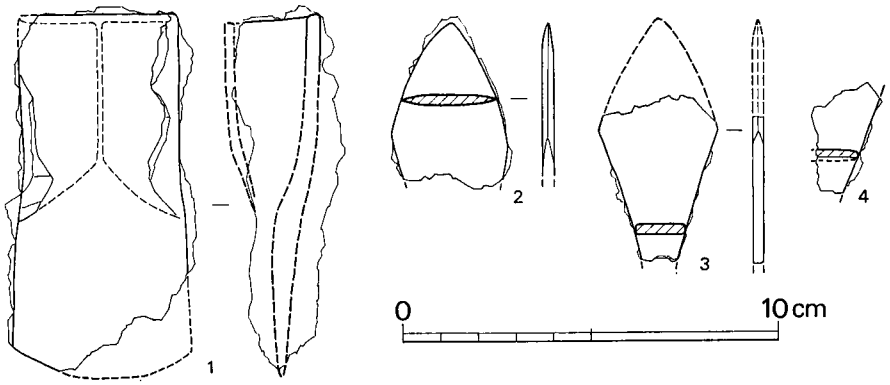
鉄斧1点，鉄鏃3点が出土した。

鉄　斧　（1）

1は発掘区東側の表土中から出土した。銹化が進み，現在は小破片となっている。本品は刃部の過半を欠失しているが図上復原によれば全長9.8㎝，刃部幅4.8㎝となる。明確な肩はなく袋裾部付近から刃部に向かってやや幅広となり，刃部は曲刃を呈する。

鉄　鏃　（2～4）

S2の棺外から出土した。すべて破片ではあるが同一形式のものである。刃は鏃身の先端から最大幅の部分までにだけある。平造りの鍛造品で厚さは0.3㎝程度である。（児玉）

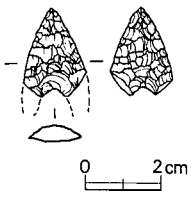


第116図　鉄器実測図（½）

(3) 石　器　（第117図）

石　鏃

両脚を欠損している。現存長2.3㎝，現存幅1.7㎝を測る。石材は姫島産の黒耀石である。（池辺）



第117図　石鏃実測図（½）

3. 小　　結

天神の上遺跡の所在するのは汐井掛遺跡と同一丘陵上で，縦貫道関係の調査で明らかにされた汐井掛B墓地群と同様の様相をみせる。丘陵凸部に土壙墓・木棺墓４基，箱式石棺墓３基・石蓋土壙墓２基の計９基の埋葬施設が確認された。

表土直下からは，小礫群が検出されたが，その形態は汐井掛遺構で確認された様な墓壙上面に意識的に配石・置石されたものではなく，墓域の東側の空地に点在するもので，墳墓の標石・配列とは性格が違う。この礫群の内には高杯・台付壺等の土器片が混入しており埋葬時の祭祀に伴う施設と考えられる。

墳墓群の主軸方向は，土壙墓・木棺墓は東西を示し，頭位は北・北西側と推定される。石棺墓は東西を示し，頭位は東側と考えられる。石蓋土壙墓の主軸方向は，箱式石棺墓とほぼ同様の方向を示しているが，頭位は下部の土壙の形態から推定してＩＤ１は西側，ＩＤ２は東側と考えられる。

次に各埋葬葬設の墓域における占地の状況は，ＤＩが頂部の平担地中央部をしめ，これをとりまく様に箱式石棺墓・石蓋土壙墓が存在する。そして斜面には土壙墓がある。

ＤＩは蓋板に使用された目張り粘土の状況から使用された板の幅と長さが推定できた。汐井掛遺跡の木棺墓には蓋板に使用された粘土を検出した例は少ない。木棺墓の構造・構築法を知る上の手がかりになる好例である。

検出した副葬品はＩＤ２の墓壙内から高杯・Ｓ２の墓壙から鉄鏃がある。高杯は土師器で古墳時代初頭のものである。

墓地群は検出したレベルからみるとＳ１・Ｓ２は他の埋葬施設よりもやや上面で検出した。このことは主軸方向と考え合せれば土壙墓・石蓋土壙墓は箱式石蓋墓に先行して構築されたと推定できるが切合い関係がないことからその新旧関係の断定はできない。

これらの点から考えて，天神の上遺跡の墓地群は古墳時代初頭を前後とする時期に形成されたと考えられる。

（池辺）

Ⅵ ま　と　め

汐井掛遺跡の立地する丘陵は若宮町金丸から西走し，宮田町の有木地区と若宮町の水原・沼口地区を分断する丘陵地で，九州縦貫自動車道が尾根に沿って走り，その南北両側に工業団地が計画され，昭和49年度の縦貫道関係の調査を始めとして，昭和51年度からは工業団地用地の調査が実施された。その結果多くの埋蔵文化財が確認され犬鳴川流域としては，始めて弥生時代から歴史時代にかけての墓地群（土壙墓・木棺墓・箱式石棺墓・石蓋土壙墓・円墳・小石室・蔵骨器），集落跡等の遺構が検出された。汐井掛遺跡はこの丘陵部の最西端部に位置し，細い尾根は丘陵頂部に至たり，南・西側はゆるやかな斜面を呈し，山口川流域の水田面へとつづいている。

汐井掛遺跡の墳墓群は東南から北西に延びる長さ120mの尾根線上に集中して分布している。検出された遺構は，土壙墓・木棺墓228基・箱式石棺墓31基・石蓋土壙墓20基・甕棺墓1基である。

まず各埋葬施設の分布と問題点をあげ，副葬品の検討を行い，墓地群の形成について考えて見たい。

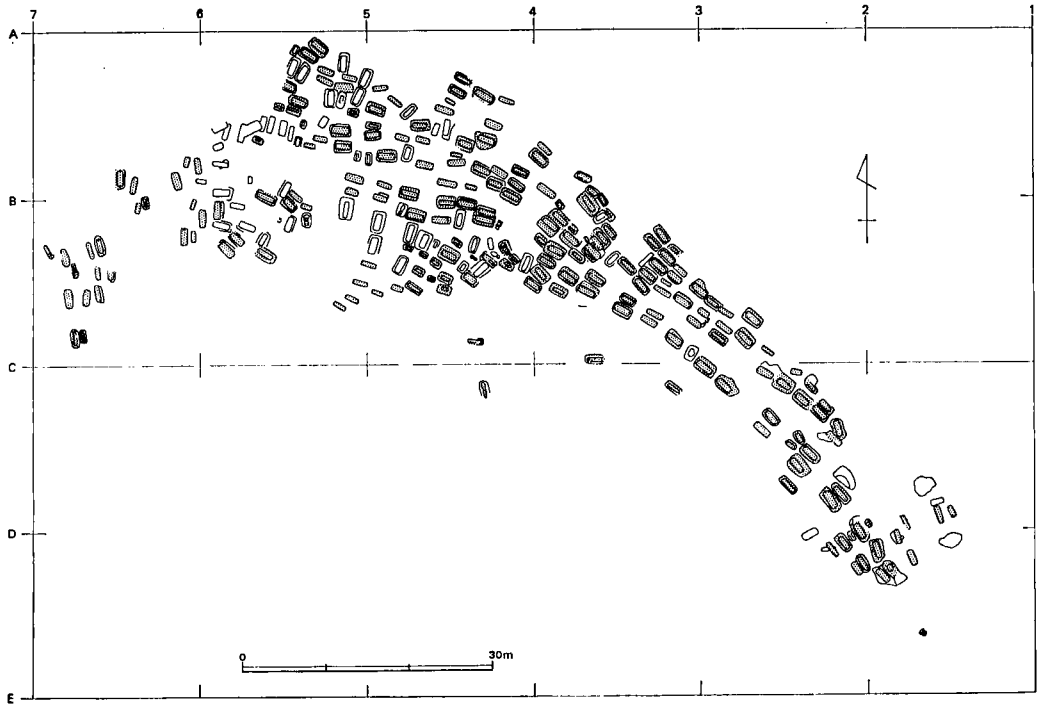
各墳墓の分布

土壙墓

墓域全面にわたって分布し，総数77基を数える。土壙墓だけ集中する傾向はみられないが，5ラインを境にして西側は標高76m付近から南西側の緩斜面に広く分布している。小児棺も箱式石棺墓や石蓋土壙墓に見られる特別な傾向は認められない。主軸方向で尾根線（等高線）に明らかに直行するものは，D3・D65・D111・D178・D187・D198・D200・D202・D205の9基を数えるだけである。土壙墓対土壙墓の切り合いはD205→D206だけしか認められない。土壙墓が木棺墓を切った例はD199→D200・D201→D202の二ケ所，いずれも尾根線に直行するものが斜行するものを切っている。箱式石棺墓と石蓋土壙墓との切り合い関係はない。副葬品をもつ土壙墓は6基ある。鉄器を副葬するものD37（素環刀）・D90（剣）・D200（馬具），玉類を副葬するものD115（勾玉・管玉・水晶玉）・D176（勾玉），鏡片を副葬するものD203である。墓域の東半部で副葬品をもつものはD37だけである。土壙墓の副葬品の中でD115の玉類・D200の馬具・D203の鏡片はいずれも汐井掛遺跡の時期決定に重要な手がかりとなる。

木棺墓

埋葬施設は総数で280基を数えるが，この内大半の151基は木棺墓で汐井掛遺跡の主体となる



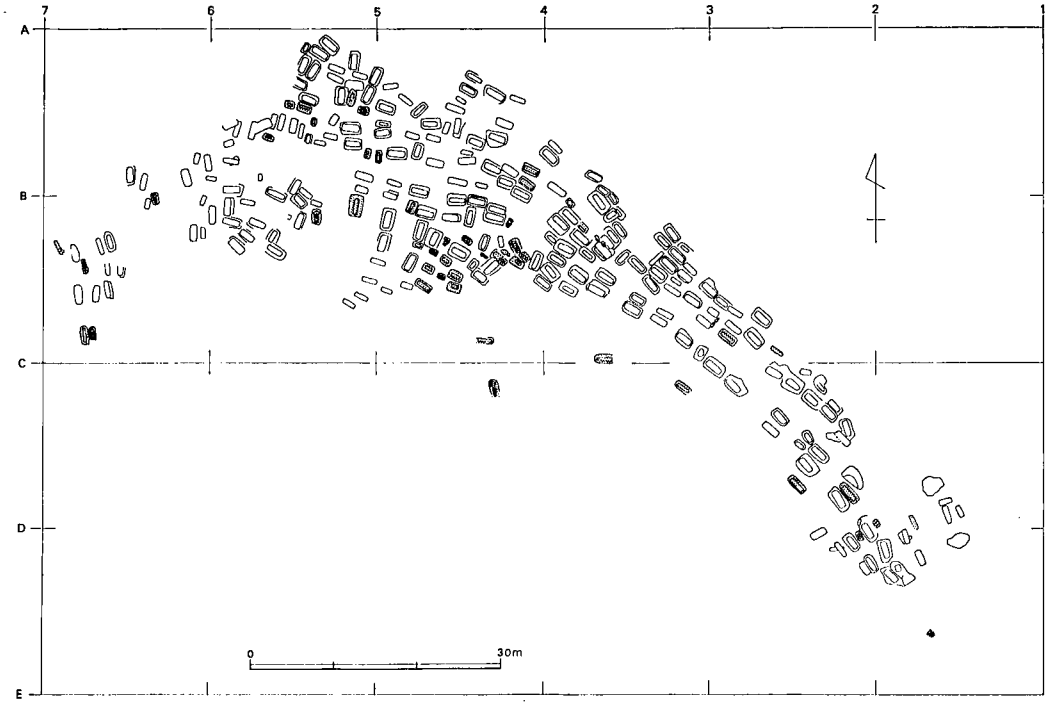
第118図　尾根線に平行するものと直行するもの（1/900）

ものである。木棺墓の分布は墓域全体におよび特に4ラインから東半部に於いては，墓道（ハカミチ）と考えられる空地の両側に整然と並び，その主軸方向は尾根線に対して平行である。4ラインから西半部の標高76*m*を測る付近からは尾根線（等高線）に対して直行するものが現われ，特にB－5区付近の平坦部に近い部分では斜行するものもでてくる。このことは埋葬施設の新旧関係だけでは理解できない。尾根線は4ラインあたりで丘陵頂部の平坦面へと移行し，C－6区・C－5区・B－6区あたりでは緩斜面を呈す。墳墓もそれにともなって分布する傾向が見え地形的な面も判断の材料に加える必要がある。

副葬品をもつ木棺墓は他の埋葬施設に比べ圧倒的に多い。分布的に見れば，B－5区・C－5区の北側ではD 176の勾玉の副葬例を除けば鉄器が多く，B－3区北西側では玉類の副葬例が多いことが注目される。（池辺）

箱式石棺墓・石蓋土壙墓

墓域全面にわたって分布するが，総数51基のうち37基が第119図の4ライン，すなわち墓域の西半部に，14基が東半部に営まれている。副葬品を持つのは石蓋土壙墓に1基，箱式石棺墓に5基あり，西半部のS10が碧玉製管玉1個，S22が鉄鏃2個を副葬するに対して，東半部の箱式石棺墓はS 4に方格蕨手文鏡，S 6に長宜子孫系内行花文鏡片を副葬している。また，



第119図　箱式石棺墓・石蓋土壙墓分布図（1/900）

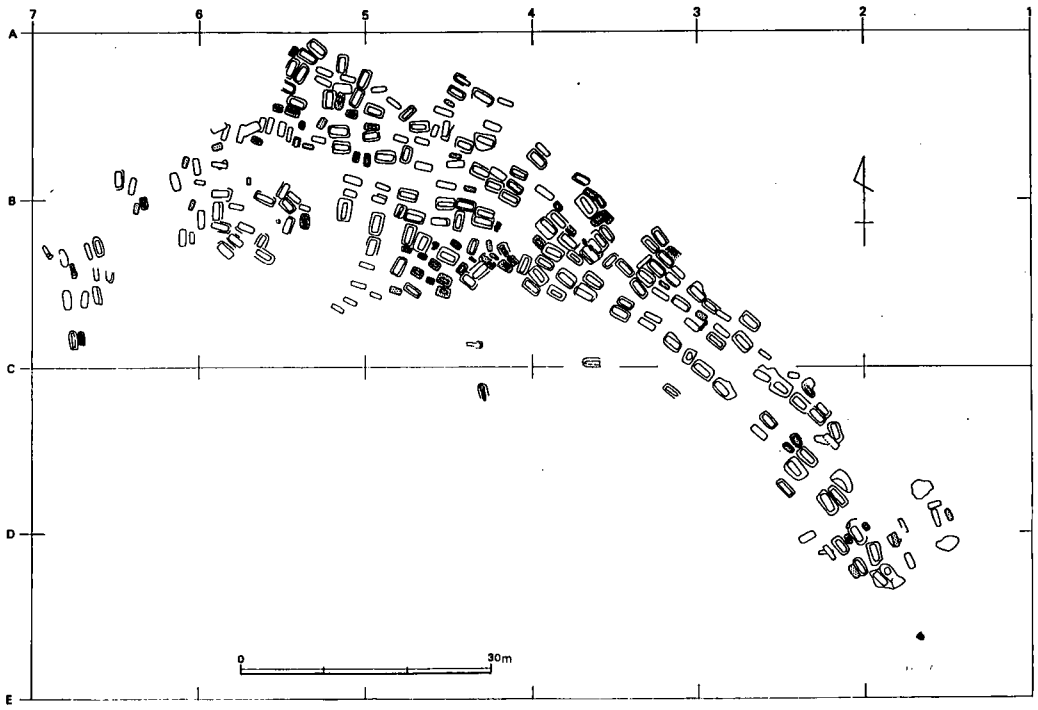
箱式石棺墓に注目すれば，成人葬用のそれは東半部に多く分布する。小児棺はC－4区に集中し，箱式石棺墓・石蓋土壙墓もこの地区が最も分布密度が高い。

箱式石棺墓・石蓋土壙墓と木棺墓・土壙墓が切り合っている場合，必ず前者が後者を切っており，その逆はない。これは総体として前者が後者よりも新しいことを示しているのではなく，相対的に箱式石棺墓・石蓋土壙墓が木棺墓・土壙墓より新しい要素があるという程度のことを示しているのであり，それは，木棺墓・土壙墓同士での切り合いや5世紀に降ると思われる土壙墓が存在することから了解されるだろう。

S5・S12・S13・ID5は他の埋葬施設から一定の距離を保って墓域の南斜面に営まれており，その在り方は何かしら示唆的である。丘陵鞍部をはさんで北側にはこのような在り方をするものはなく，汐井掛遺跡自体が丘陵鞍部から南斜面に位置することと勘案すれば，この墓地は山口川流域の平野を意識しており，彼等の生活基盤―生産活動の主たる場所を示していると推測される。

小児棺

普通の成人を伸展葬か屈肢葬で納棺できない規模の埋葬施設（註1）の総数は84基に達し（木棺墓・土壙墓49基，箱式石棺墓18基，石蓋土壙墓17基），そのうち棺内法長が1 *m*前後未満



第120図　小児棺分布図　(1/900)

の小児棺は62基（木棺墓・土壙墓30基，箱式石棺墓17基，石蓋土壙墓15基）である。小児棺の割合は，木棺墓・土壙墓が13.2%，箱式石棺墓が55.8%，石蓋土壙墓が75%で，埋葬施設の相違によってその比率が大きく異なり，大勢としては，木棺墓・土壙墓は主として成人葬用に，石蓋土壙墓は主として小児埋葬用に，箱式石棺墓は双方に使われたようである。また，全埋葬施設に対する小児棺の割合は22.1%であり，副葬品・着装品を持つものは，小児棺が4.84%，成人棺が9.18%である。小児棺には鏡は副葬されず，玉か鉄器である。

小児棺はC－4区，C－3区北西部に多く営まれ，ここに小児棺の4割近くが集まる。この部分より東側は小児棺は少く，全体の1割をわずかに超えるにすぎず，C－4区を中心とする西半部に多く分布し，上図の5ライン以西では特に集中する傾向はなく，分散した在り方をしている。C－6区東半部の12基の埋葬施設群は一つのまとまりを示すが，この部分には小児棺は存在しない。

このような，東半部・西半部における小児棺の在り方の相違は，汐井掛遺跡形成過程とその成層的な構造を考える上で，一つの重要な視座となり得る。　(児玉)

註1　汐井掛遺跡の埋葬施設は，木棺・土壙・箱式石棺のいずれにもその規模に大小の差異があり，被葬者の年齢差からくる体格の大小に合わせられたものと推定する。この種の埋葬施設は，当初から遺体を伸

展葬か，それに近い体位で埋葬されうるもので，一般に埋葬施設の規模は遺体の体格に対応するだろうと思われる。よって，ほぼ等質的な埋葬観念を有すると推定されるこの時代にあっては，埋葬施設築造後になされる遺体の収納――埋葬に際して，被葬者の属した集団内における社会的通念上の規範的なものとしての規制が当然あったと推定される。その規制の全容については明らかにし難いが，埋葬施設の主軸方向と尾根筋方向との関係，埋葬施設の採用にあたっての選択等から一定程度伺い知ることができようが，更に埋葬体位も「規制」の重要な一部分を占めたと考える。よってここでは，埋葬施設の大小は，成人葬か否かの根拠となり得る，棺内法の主軸上が1m前後未満のものを小児棺として取り扱う。

この墳墓群の埋葬施設は丘陵鞍部を含めて南側斜面に築かれ，北側斜面には存在しない。汐井掛11号墳の北側・東側には土壙墓や箱式石棺墓を築く為に十分な平坦面があるのに，その部分には埋葬施設は一基も築かれていない。すなわちこの墳墓群はこの丘陵の南側の犬鳴川，山口川の流域の平野部を意識して形成されたと推定できる。

各埋葬施設を通じてその分布状態を見たが，埋葬施設の作られていない空地や，墓道（ハカミチ）と推定される空地が存在し，埋葬施設のまとまり方や副葬品をもつ埋葬施設の分布等から，いくつかの群に分けられる。

埋葬施設の在り方からみて4ラインを境に東半部，西半部とに大別される。東半部は尾根線沿いの墓道の両側に埋葬施設が整然とならびその主軸方向も尾根に直行する。さらにこの東半部は3つの小群に分けることができる。

- D・2ラインの交点を中心とするグループ。
- D―2区北半，C―2区の南半のグループ。
- C―3区北半を中心とするグループ。

西半部は丘陵頂部の平坦面さらに南側の緩斜面にも墓地群が拡がる。埋葬施設の作られていない空地が数ケ所あるが東半部でみられた明らかな墓道は存在しない。第16号墳の地山整形の際にかなり破壊を受け消滅した墓地もかなりあるようだ。主軸方向は直行するものと斜行するものがでてくる。西半部は4つの小群に分けられる。

- C―4区の北半を中心とするグループ。
- B―4区を中心とするグループ。
- B―5区を中心とするグループ。
- C―6区西側のグループ。

以上の様にこの共同墓地は大まかに二つにわかれ，さらにそれぞれ3～4群の小群から構成されていたと推測される。（池辺）

標　石

標石は汐井掛遺跡を特徴づける重要な存在で現地表から浅い所では数cm，平均して20cm前後のレベルで検出された。埋葬終了後の地表面に配置されたもので埋葬施設の総数 280基のうち69基にその存在が明らかである。(第５・６図)。また南側の緩斜面や墓地群を破壊して構築された第11・16号墳の盛土や周溝内にもかなりの小礫が散在しており，本来は他の埋葬施設にも標石が存在したことが考えられる。このことは数多い埋葬施設が重複することが少なく，切り合い関係が認めらる場合でも一段掘の墓壙が重り合う程度であることからも理解できるし，尾根線を避ける様に構築された円墳（竪穴系横口式）の在り方を考えてもこの標石の存在は大きく印象づけられる。

藤田等氏はこのような配石を持つ墳墓に注目し分類されている（註１）。当遺跡の場合は，このうちの置石墓（埋葬終了後に標識として，頭・腹・膝節部などにあたる部分の地表に１個または数個の石をおくもの）・列石墓（埋葬後に地表面に数個の石を列状にならべたもの）にあたる。

当遺跡では，この置石・列石に次のイ～ヘまでの形態が見られた。

イ　墓壙主軸に対して直行し，礫を横一列に並べたもの。

ロ　墓壙主軸に対して平行に，礫を縦一列に並べたもの。

ハ　墓壙の長辺と短辺に礫を，Ｌ型に並べたもの。

ニ　墓壙の３辺にコ型に並べたもの，又は略方形に並べたもの。

ホ　墓壙上面に板石を置いたもの。

ヘ　墓壙上面に数個の礫を部分的に集石したもの，又は数個の礫を上面に置いたもの。

埋葬施設別にみると土壙墓・木棺墓では，計60基にイ～ヘの形態が認められヘの形態をもつものが最も多い。箱式石棺墓では６基に標石が認められ，イの形態が４基・ニとヘの形態を示すものがそれぞれ１基である。石蓋土壙墓には標石は認められない。

配石の違いは家族その他の相違を示すとも考えられるがその立証はむつかしい。配石の左り方でいくつか注意を引くものがあげられる。12基の土壙墓と４基の箱式石棺墓に配石されたイの形態の場合は，どの墳墓の場合も頭部と推定される側に石列を配している。とくに方格蕨手文鏡が出土したＳ４は顕著である。Ｓ17・Ｓ18の場合は２基の石棺に跨って石列が配され，この２基の被葬者の関係が興味深い。ハの形態をとる10基の土壙墓・木棺墓のうちD56・D59のＬ型の配列は向い合い，この付近では墳墓が整然と並んで検出されたこと等を考えると家族墓の標識的な存在とも理解できる。二の形態をとるものは４基ある。３基の木棺墓はいずれも１段目墓壙の縁の直上に，Ｓ20は石棺の掘方に合せる様に配されている。この配列は周囲の標石に比べて特に目を引く存在である。個人墳墓を誇示するものの様にうけとれるが，副葬品をも

ったものはD186（小形仿製鏡）だけである。規模の点でも他の墳墓と特別な差は認められず，S20場合は小児棺と推定される。ホ・への置石の在り方は，家族墓の墓域の設定，個人墳墓の誇示よりはむしろ墓標としての意識を強く感じる。これらの配石・置石の存在は墳墓群の検出状況や，重複関係が極めて少ないことから考えて，墓標的な役割を果し，埋葬当時は地表面に露出していたのであろう。

福岡県内で土壙墓・木棺墓に伴う配石列は現在３遺跡報告されている。

１　飯塚市川島甘木山遺跡（註２）

９基の土壙墓が検出され，うち３基の土壙墓に配石が認められている。これらの土壙墓群は溝と重複して作られ，溝の西側肩部付近は24個の角礫が一列に並んでおり，墓城を示すために配列されたものと考えられている。土壙墓の標石はＤ１はロ・ホの形態，Ｄ２はホの形態，Ｄ３はニの形態を示す。土壙墓に伴う遺物はないが弥生時代中期中葉まで遡らせることができるとしている。

２　嘉穂郡穂波町大字日上遺跡（註３）

８基の土壙墓が検出され，うち第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ号土壙墓に配石が認められている。Ⅱ号土壙墓は木棺墓である。土壙墓群の時期は中期初頭をそれほど降らないものと考えられている。

３　福岡市博多区大字下月隈宝満尾遺跡（註４）

14基の土壙墓・石棺墓のうち７基の土壙墓に配石が認められている。ロの形態を示すものにＤ３・Ｄ４，ハの形態を示すものにＤ７，ニの形態を示すものにD10・D12，への形態を示すものD14・D15がある。土壙墓群の時期は後期前半とされている。

以上の様に福岡県下に於いては地上標識のある土壙墓・木棺墓は中期初頭に現われている。箱式石棺墓についてはまだ類例がない。汐井掛遺跡に認められる地上標識をもつ墳墓群は今後も出土する可能性は極めて強いと思われる。　（池辺）

註１　藤田等「弥生時代の配石墓について」『日本民族と南方文化』金関丈夫博士古稀記念委員会編　平凡社　1968

藤田等「埋葬」『日本の考古学Ⅲ　弥生時代』河出書房　1966

註２　浜田信也「甘木山遺跡」『嘉穂地方史一先史編一』　1973

註３　酒井仁夫「土壙墓」『日上遺跡』福岡県文化財調査報告書第48集　福岡県教育委員会　1971

註４　山崎純男『宝満尾遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集　福岡市教育委員会　1974

棺の構造

木棺墓

木棺墓の構築法には，まず長方形の墓壙を掘り，その中央部に棺を組み立てるための壙を掘り込む二段掘込のものと，直接木棺を組み立てる壙を掘り込む地山掘込の二種がある。この場合墓壙と側板との間の裏込は，床面に残された小口板・側板の掘込から判断して5～10cmの間におさまると推定される。この二種の他にD175・D189にみられる構築法がある。一段目の墓壙を深く掘り込み，二段目の掘込みは10cm内外でとどめ，この内に棺材を組み立てて蓋の高さまで裏込めを行うものである。木棺の組み合せ方には，木口板を両側板で挟みこむもの（A型式）木口板で両側板を挟みこむもの（B型式），A・B型式の折衷形態で井桁状をなすもの（C型式），箱式に組合すもの（D型式）に分類できる。数字的に見るとA型式（84基），B型式（21基），C型式（21基），D型式（9基）で，汐井掛の木棺墓の場合A型式の組み合せが最も多く使用されている。

木口板を立てるための掘込はA・B型式のほとんどの木棺墓に認められる。ただ両側に認められ例と片側だけの例があり，後者の場合は頭位と推定される側に限られる。側板を立てるための掘込は約半数の木棺墓に認められた。木口板を挟みこむ場合は必ずしも必要しなかった様である。また側板の掘込がない場合は裏込によりよく固定させるために石を利用したり，木口部に側板の切込みが認められることが多い。また特例としてD91の木棺墓にみられる組み合せ型がある。側板の掘込は両側ともに三段に深さの違いが認められ，少なくとも一側面に三枚の板を縦に差し込んで使用した痕跡と考えられる。

次に床面の構造であるが，当遺跡の木棺墓は底板は使用されていない様である。このことは頭位部と推定される側の床が一方よりも高く作られていることから明らかであり，中には床を枕状に削り出したものや，枕石を使用したものがある。副葬品はそのほとんどが木棺墓からの出土であるが副葬品をもたないものとの構造の差は認められない。（池辺）

箱式石棺墓・石蓋土壙墓

箱式石棺墓・石蓋土壙墓は，A地区でそれぞれ31基，20基を検出し，B地区では同様に4基，2基を検出している。ここでは，その床面プランを中心に検討してみたい。

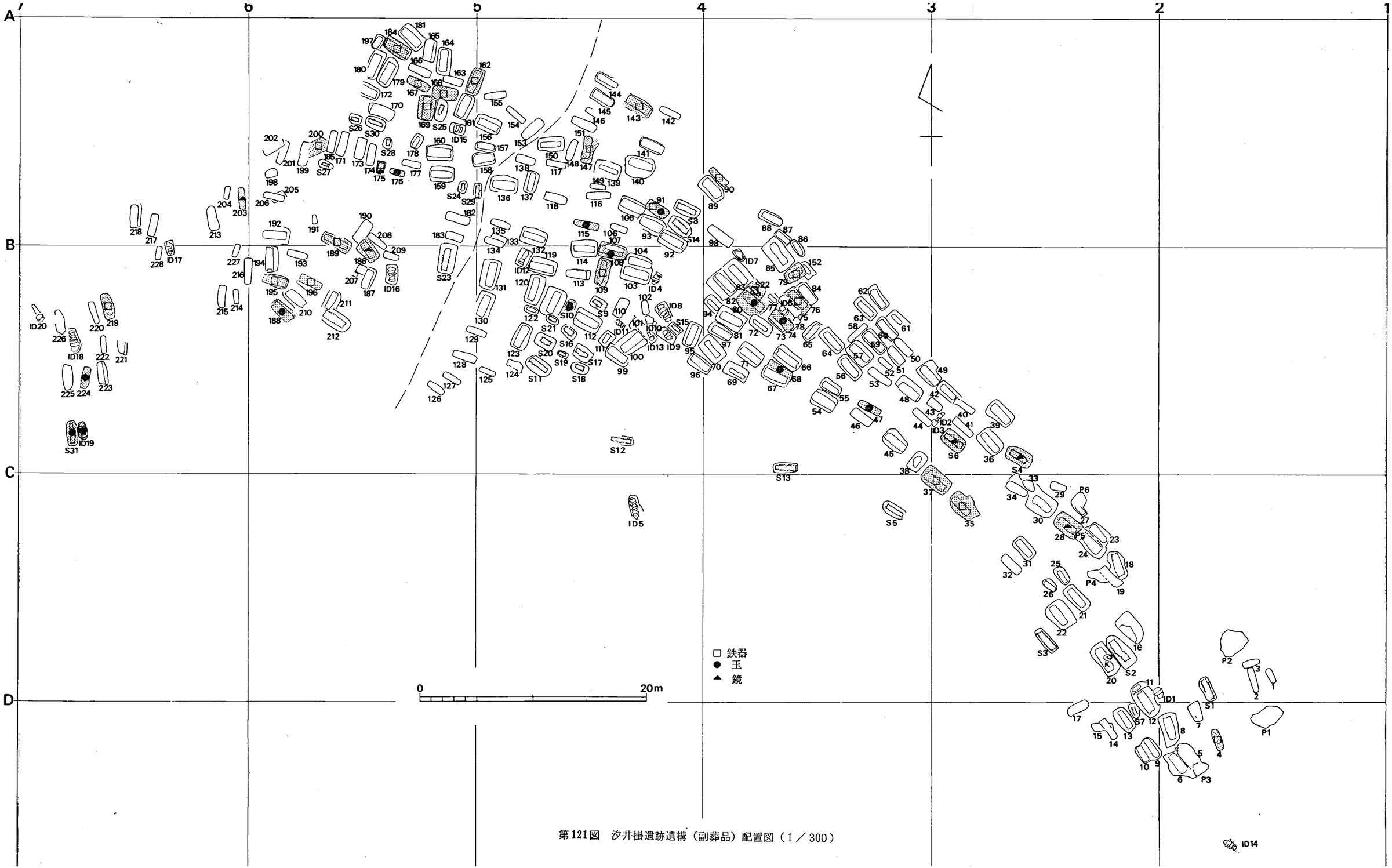
石蓋土壙墓は先述したように主に小児用埋葬施設として使われ，副葬品をもつものはなく，埋葬施設としての地位は低いものである。そのプランについてみると，ＩＤ1，ＩD17，ＩD18等のように長円形に近いタイプ，ＩＤ8のように土壙墓と変わらないタイプ，D12のように石蓋木棺墓のタイプ，墓壙が長方形に近く木口壁，あるいは長側壁の一部に石材を立てるものなどがある。木口壁に石材を立てるものは，あるいは側板に板材を使っていたかも知れないが確証はない。棺内主軸長1.5m前後以上の成人棺とみなされるものは，蓋の石材数が多く，ＩD

5のように幾重にも石材を積む例があり，床面のタイプについては特に統一されず，ＩＤ５，ＩＤ18，ＩＤ20は各々異なったプランを示している。小規模な石蓋土壙墓の床面プランについても同様であり，床面プランの形態差が何に起因するかは定かではない。

箱式石棺墓は３基に副葬品が認められ，鏡を持つＳ４・Ｓ６は成人棺で，比較的丁寧につくられ，内面に赤色顔料が塗布されている。鉄鏃を棺外副葬したＳ22は小児棺で大きな墓壙内に丁寧につくられ，蓋石のすき間は粘土で目張りをし，棺内壁体には赤色顔料を塗布している。また，Ｓ４，Ｓ20は標石を持ち，これらの石棺の石材については，比較的に良いものが選ばれて板状に近いものを使っている。

次に床面プランについてみると，Ｓ５，Ｓ８，Ｓ11，Ｓ13，Ｓ22のように頭位側の木口壁と足位側の木口壁の寸法に差があって足位側が幅狭くなるもの，逆にＳ４，Ｓ６のように頭位側の木口壁の幅が狭いもの，また両方の木口壁の幅にほとんど差がないものが存在する。それらは小児棺においては両木口幅に差のないものが多く，鏡を持つものは頭位側の幅が狭く，成人棺は両木口壁の幅が同じものの中に片方の木口壁の幅が狭いものがまじる傾向にある。側壁と木口壁の組み合わせにおいて，Ｓ２，Ｓ10，Ｓ26，Ｓ30等のように側壁が木口壁を挟むもの，Ｓ24のように木口壁が側壁を挟むもの，Ｓ27のように一方の木口壁が側壁に挟まれ，もう一方の木口壁で側壁を止めるもの，Ｓ11のように井桁状に組まれたもの等があり，これらは木棺墓の側板と木口板の組み合わせ方に通じるもので，その影響を受けたものと思われる。木口壁と側壁の組み合わせ方の相違が，特に何かを反映しているような徴候は見られない。しかし，先述した床面プランの両木口壁の幅の相違は，古墳時代にも継承され，汐井掛古墳群の竪穴系横口式石室の床面プランにその残照を見ることができる。すなわち，17号墳の竪穴系横口式石室は奥壁幅の方が広く，遺存した人骨片より頭位は横口部側であり，Ｓ４，Ｓ６に類似する。27号墳石室も奥壁側が広く，人骨は遺存しないが奥壁側が頭位だと仮定すればＳ８，Ｓ11等に類似するものである。28号墳の竪穴系横口式石室は両木口部ともほぼ同一幅でＳ３やＳ14に類似する。これらの竪穴系横口式石室は石棺系竪穴式石室の系譜（註１）にあると思われ，箱式石棺墓の影響は５世紀後半以降においても根強く残っている。　（児玉）

註　1　山中英彦『東宮ノ尾古墳群』　北九州市教育委員会　1974



第121図　汐井掛遺跡遺構（副葬品）配置図（1／300）

表 16 汐井掛遺跡出土副葬品一覧表

番号	遺構	出土地点	勾玉	管玉	ガラス勾玉	ガラス小玉	水晶玉	虎珀玉	剣	刀	素環頭刀	素環頭刀子	鏃	刀子	鉇	斧	鋤先	鎌	馬具	不明	鏡
1	D 4	棺内床面													1						
2	D 28	墓壙内																			飛禽文鏡片
3	D 35	棺外北西側								1											
4	D 37	棺外北西側									1										
5	D 47	棺内床面			2																
6	D 68	棺内床面				323+α															
7	D 74	棺内床面	1			24															
8	D 76	棺外北東側												1	1					1	
9	D 79	棺外墓壙内											3			1					
10	D 80	棺内床面				1															
11	D 90	棺外北東側							1												
12	D 91	棺外														1					
13	D 91	棺内床面				328+α		1													
14	D108	棺内床面	2	3																	
15	D109	棺内床面									1										
16	D115	棺内床面	1	9			10														
17	D143	棺内埋土中										1									
18	D147	棺内埋土中																1			
19	D162	棺外東側中央											3				1				
20	D167	棺内床面									1		6								
21	D168	棺内北側													1						
22	D169	棺内床面											2								
23	D175	棺内床面													1						内行花文鏡片
24	D176	棺内床面	1																		
25	D184	棺外西側										1									
26	D186	棺外北東側																			小形仿製鏡
27	D188	棺内床面				90															
28	D189	棺外墓壙内										1									
29	D195	棺外																		1	
30	D196	棺外北側												1							
31	D200	埋土中																	(鞍)		
32	D203	棺内床面																			内行花文鏡片
33	D219	棺外中央															1				
34	D224	棺内床面	1	16																	
35	S 4	棺内																			方格蕨手文鏡
36	S 6	棺外																			内行花文鏡片
37	S 10	棺内床面		1																	
38	S 22	棺外蓋石上											2								
39	S 31	棺内床面				27															
40	ID 19	棺内床面				10															
	計		6	29	2	802	10	1	1	1	3	3	16	2	4	2	2	1	1対	2	6

表 17 素環頭地名表

番号	遺跡名	所在地	遺構	寸法	備考	註
1	汐井掛遺跡	(筑前)福岡県鞍手郡若宮町大字沼口字汐井掛	A地区 D 37	25 (+)	他の埋葬施設から飛禽文鏡，方格蕨手文鏡，長宜子孫系の内行花文鏡，小形仿製鏡が出土	①
2		宮田町大字上有木字高平	D109	34.8		①
3		〃	D143	6.2(+)		①
4		〃	D167	29.8		①
5		〃	D184	18.9		①
6		〃	D189	21		①
7		〃	B地区 D 4	9.2(+)		②
8	立岩・掘田遺跡	飯塚市立岩・掘田	K 28	17.9	重圏「昭明」鏡伴出，他の甕棺から連弧文「日有喜」鏡，重圏「精白」鏡，重圏「清白」	③
9		〃	K 36	25 (+)	鏡，連弧文「清白」鏡，重圏「姚咬」鏡，重圏「昭明」鏡，重圏「久不相見」鏡，連弧文「日光」鏡が出土	③
10	岩崎	嘉穂郡稲築町岩崎	—	—		④
11	上り立遺跡	中間市上底井野字上り立	S 6	21		⑤
12	宝満尾遺跡	福岡市博多区下月隈字宝満尾	ID13	19.1	4号土壙墓から連弧文「明光」鏡が出土	⑥
13	丸尾台遺跡	福岡市西区堤字原ノ原	K	44.5	他の甕棺から連弧文日光鏡，鉄刀が出土	⑦
14	三雲遺跡	糸島郡前原町三雲字番上	H 6	5.6(+)	後期終末	⑧
15	平原遺跡	糸島郡前原町有田字平原	M	75	方格規矩鏡約31面分，四蟠鏡長宜子孫鏡、内行花文鏡，大形仿製内行花文鏡等を出土	⑨
16	上町遺跡	糸島郡前原町前原字上町	S(?)	118.9		⑩
17	山田遺跡	朝倉郡朝倉町上須川字山田	S	37.5		⑪
18	亀ノ甲遺跡	(筑後) 八女市室岡亀ノ甲	K10外	30	後期前半 他の石棺から方格規矩鏡，小形仿製鏡出土	⑫
19	郷屋遺跡	(豊前) 北九州市小倉南区長行	1960年 S	39.7(+)	他の石棺から三角縁四禽文鏡出土	⑬
20		〃	1979年 S			⑭
21	長行小学校校庭	北九州市小倉南区長行	S—1	25		⑮
22	前田山遺跡	行橋市大字前田	I地区 ID 5	31.9	6号石蓋土壙墓から小形仿製鏡出土	⑯
23		〃 大字検地	S 9	26.6	長宜子君内行花文鏡を共伴	⑯
24	下稗田遺跡	行橋市大字下稗田	H地点 S 1	26.2(+)		⑰
25	松本遺跡	京都郡犀川町大態字松本	ID	23.8		⑱
26	松山遺跡	田川郡糸田町松山	ID	8.9(+)		⑲
27	三津永田遺跡	(肥前)佐賀県神埼郡東背振村三津永田	K104	50.25	後期前半，流雲文縁五獣鏡共伴出土，他に連弧文日光鏡，四虺鏡出土	⑳
28	横田	神埼郡東背振村横田		61.8		㉑
29	二塚山遺跡	神埼郡東背振村大曲	D33	54.6	他の埋葬施設から連弧文清白鏡、連弧文昭明鏡，波文縁方格規矩鏡，波文縁獣帯鏡，連弧文鏡，小形仿製鏡4面を出土	㉒
30		三養基郡上峰村提	D52	44		㉒
31	椛島山遺跡	杵島郡北方町椛島山	S	16.7	前漢代作の連弧文明光鏡1面，硬玉製勾玉3個，碧玉製管玉36個	㉓
32	妻山石棺群	杵島郡白石町馬洗	S—4	43.2(+)		㉔
33	トウトゴ山墳墓群	(対馬)長崎県上県郡峰町吉田トウトゴ山	S 1	78.7	後期初頭の壺，笠頭形青銅器，刀子を伴う	㉕
34	鍛冶屋迫遺跡	(周防)山口県豊浦郡菊川町田鍛冶屋迫	S 4	—		㉖
35	朝田墳墓群	(長門) 〃 山口市大字吉敷	S 1	14.1		㉗
36		〃	S 4	25.4		㉘
37		〃	S13	20.5	仿製内行花文鏡，鉄鎌，ガラス小玉，貝製小玉を伴う	㉙
38		〃		17.8		㉚
39	(参考)臼佐原遺跡	福岡県福岡市南区臼佐原	E群 S 7	—	小盛土を持つ箱式石棺墓より管玉，鉄鏃，鉄斧等にまじって素環頭の一部と思われる鉄片と鉄刀片が出土している。	㉛
40	(参考)立岩遺跡	福岡県飯塚市立岩・掘田	K	—	採集甕棺片に素環頭の鉄銹が残っている	③

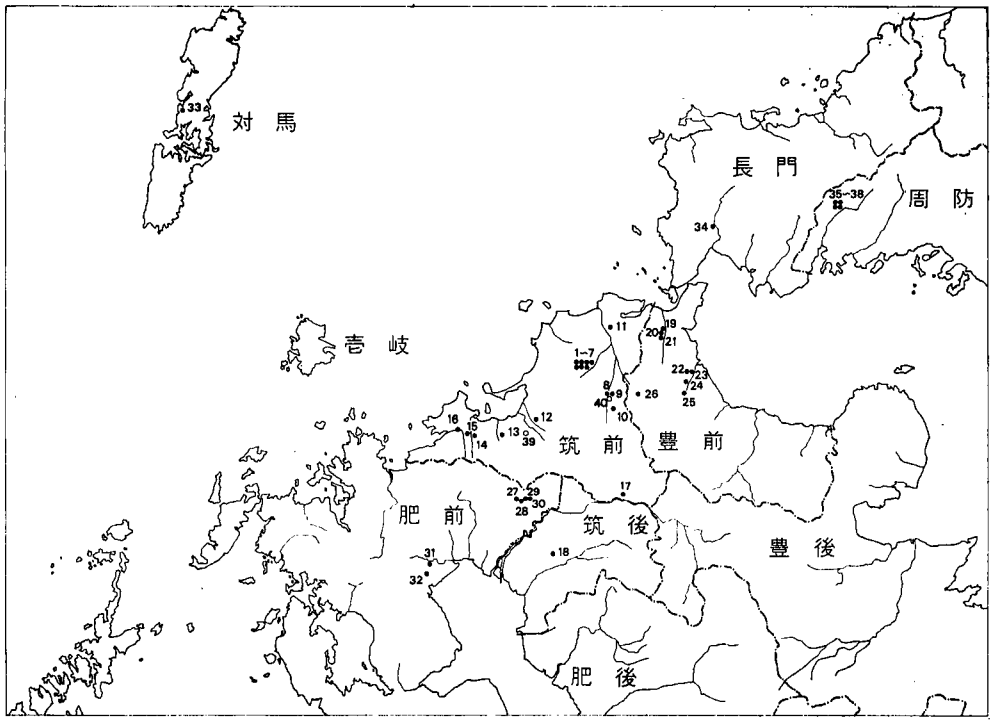
鉄　器

汐井掛遺跡の調査を通じて出土した鉄製品は剣・刀・素環頭刀子および刀・刀子・鏃・鉈・斧・鋤先・鎌・馬具の10種におよび，不明鉄器を含めて50点に達する。なかでも７本の素環頭刀子・刀は福岡県下の古墳以外からの出土総数の３割に近く，４型式18本の鉄鏃や馬具の出土は注目に値する。ここでは関連資料を概観しながら汐井掛遺跡出土の鉄器を素描し，その性格と所属時期の推定を行ないたいと思う。

素環頭刀子・刀

九州北半部の福岡県・佐賀県・長崎県において筆者の知るところでは古墳出土のものを除いて23（＋１）遺跡33（＋２）本の出土例があり，山口県では２遺跡５本が知られている（第122図・表17）。広島県・島根県以東においては前期古墳（特に前方後円墳）からの出土例はかなりの数にのぼるが，集団墓地の埋葬施設などからの出土例は寡聞にして聞かない。

素環頭刀子・刀は現在知られている例で最大のものは福岡県糸島郡前原町上町遺跡出土のものが118.9㎝，最小のものは山口県山口市吉敷朝田墳墓群１号石棺出土のものが14.1㎝である（表17）。ここでは便宜的に，細身で全長20㎝台までのものを刀子，前者より身幅が広く30㎝



第122図　素環頭分布図（番号は表と対応する。臼佐原例39・立岩例40は確実な例ではないので白抜きで表示した）

前後から40㎝位までのものを小刀，それ以上の大きさのものを刀とし，60㎝前後以上のものを太刀と呼ぶこととする。また形態的には刃部先端が剣状になっているものも一応ここでは刀に含めておく。

以下，未報告資料や実測をしなおした資料を中心に概要を記し，汐井掛遺跡出土資料と比較検討をしたい。

なお，素環頭刀子・刀の出土地名表（表17）とその分布図（第122図）に，筆者の不手際で遺漏資料が当然存在すると思われる。今後，その充実をはかってゆきたいと思う。

福岡県飯塚市立岩・掘田遺跡（7・16）

28号甕棺，36号甕棺から各1本づつ出土している。7は28号甕棺から前漢鏡1面・管玉553個・ガラス製丸玉1個・同棗玉1個・塞杵状ガラス器5個とともに出土している。全長17.9㎝，刃部長8.4㎝の片関の刀子で，刀子本体に比して大きな素環がつく。布が付着している。16は36号甕棺から鉄製矛・鉋各1本とともに出土し，現存長25㎝，刃部長17㎝程度を測る。関は差程明瞭ではないが身に対して把部が2㎜程細く，わずかな関がつくようである。環頭を復原すれば全長26㎝をやや超えると思われる。両甕棺とも立岩Ⅱ期に編年され，中期後半におかれている（註1）。

福岡県中間市上底井野上り立遺跡（8）

小丘陵上に位置する墳墓群で，箱式石棺墓11基と壺棺墓1基の存在が確認されている。6号石棺墓の棺内副葬品として，全長21㎝，刃部長約11.5㎝の素環頭刀子が出土している。素環のつけ方が他と異っており，刃部側の把尻から素環がのびて背部側は把に接せずに離れている。身の形態は庖丁的である（註2）。

福岡県朝倉郡朝倉町上須川山田（15）

丘陵上に営まれた箱式石棺墓で2体合葬されており，両遺骨の間に先端部が剣状になった素環刀が発見されている。全長37.5㎝と報告されているが，現在は関から身の中程までが欠失している。よって掲載図は報文の寸法に合わせたものである。身は先端から7㎝までの部分が幅広となって両側に刃をつけ，剣状になっているが鎬はないようである。剣の部分の幅は2㎝，刀身部の幅は現存部で1.8㎝である。刀の背部は厚さ5㎜，剣の部分の厚さは2.5㎜程度であり，製作過程で先端部を叩いて薄くするとともに幅を広げ，研いで両刃とする際に刀身部の刃の方は研ぎ落として幅を合わせている。把の部分は幅1.8㎝で関部寄りにわずかに布片が銹着し，銹がひどく明確さに欠けるが，円形ではなく長方形に近い形を示し，その断面は太い矩形を呈する（註3）。

福岡県北九州市小倉南区長行・郷屋遺跡（14）

小倉の平野を貫流して響灘に注ぐ紫川中流域の左岸台地上に営まれた集団墓地で1960年に小倉高校教諭田頭喬一氏が，1968年に同じく小倉高校教諭山中英彦氏（現戸畑高校）が，1979年

に北九州市教育文化事業団調査室栗山伸司氏が調査された（註4）。この遺跡では箱式石棺墓が主流的埋葬施設で量的に多く，石蓋土壙墓が混在する。また埋葬施設の数に対して副葬品の多い事（註5）は他遺跡に類例を見ない。

ここに紹介する素環刀は1960年に小形の箱式石棺から出土したものである。この箱式石棺は他に床石をもつ大形箱式石棺２基，小形石棺１基の計４基で径15m前後の円墳の埋葬施設となっていた。大形石棺２基は原位置に現存するが小石棺と墳丘の一部を除いて現在はなくなっている。小石棺２基のうち，素環刀を副葬したのとは別の石棺から径11.9㎝の四禽文鏡が出土しており，縁は三角縁である。

素環刀は身の先端部を欠くが現存長39.7㎝，刃部最大幅2.8㎝，把長7.7㎝，同幅2.5㎝を測り，わずかな関を形成する。素環部は銹で明確さに欠けるが外径で長軸５㎝程度である。推定復原長は，身の中程から幅が狭くなっていることから考えてせいぜい45㎝どまりであろうと推測される。

1979年の調査でも箱式石棺墓から素環頭刀子が１本出土している。

福岡県北九州市小倉南区長行・長行小学校校庭

石蓋土壙墓・箱式石棺墓・壺棺墓からなる集団墓地で1953年に鏡山猛氏と田頭喬一氏が第１号箱式石棺墓を実測され，２号石棺墓は小倉高校考古学部で調査された。その１号石棺墓内から「素環頭短剣」が１本出土している。田頭氏の報文では全長25㎝とあり，掲載図では身の先端から５㎝までの所は両刃であるが，把に近い部分の形状は定かではない（註6）。

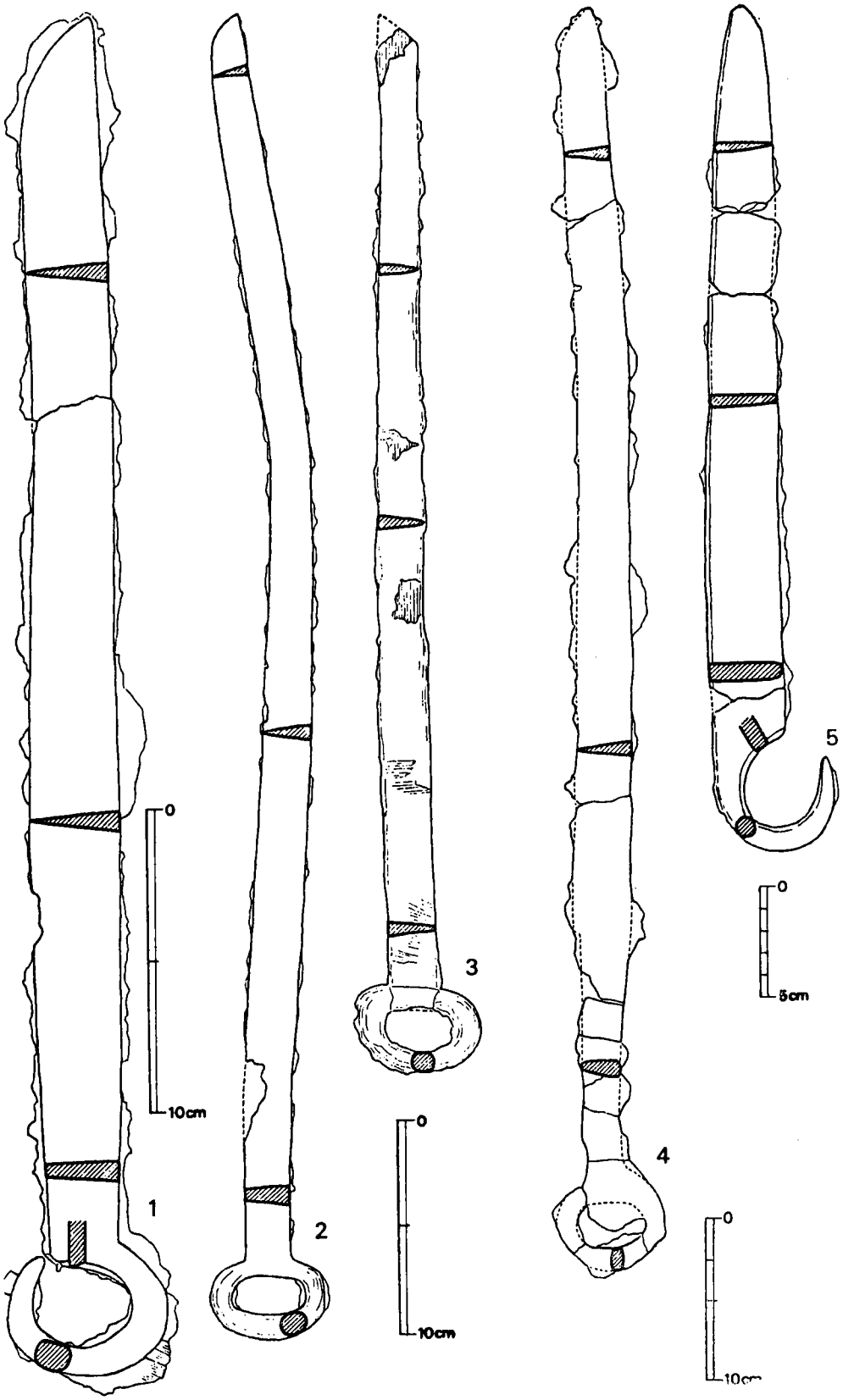
福岡県行橋市前田・前田山遺跡（９・10）

弥生時代から古墳時代に及ぶ広大な遺跡で，土壙墓・甕棺墓・箱式石棺墓などの埋葬遺構が集中する第Ⅰ地区の５号石蓋土壙墓，９号石棺墓から１本づつの素環刀が出土している。箱式石棺墓出土のものは全長26.6㎝，刃部長16.9㎝を測り，素環は正円に近く外径で2.8㎝を測る。刃部幅1.5㎝把部幅は1.1㎝で明瞭な関をつくる。刃部先端付近は，先端から４㎝付近から徐々に外反し，その反りは６㎜程である。身には織り目の相違から少なくとも二種類の布で巻かれている。「長宜子君」銘のはいった内行花文鏡が伴出している。石蓋土壙墓出土のものは切先部を欠失するが全長40㎝程に復原され，刃部長21.5㎝，同最大幅1.8㎝，把長8.5㎝，同幅1.3㎝で明瞭な関を形づくる。把の平面形は関部寄りと把尻寄りがやや広目となる。素環は長円形に近く，外径で長軸3.2㎝を測る。先述の箱式石棺墓出土例ほどではないが，身の先端部が外反する。

上記２本ともによく似たつくりで，入念に製作されたあとが伺える優品である（註7）。

福岡県行橋市下稗田・下稗田遺跡（11）

前田山遺跡の南側丘陵に位置する集落および埋葬遺構である。H地点１号箱式石棺墓から切先部，素環の一部を欠失した素環刀が出土している。現存長26.2㎝で，刃部最大幅２㎝，把部



第123図　素環頭関連資料①（縮尺不同）1丸尾台　2横田　3三津永田　4トウトゴ山　5宝満尾

長6㎝，同幅17～1.8㎝でわずかながら明瞭な関がある。把は把尻に向かってわずかに幅を増し，素環は把の背からそのまま直線的にのび，把尻から2㎝位の所から徐々に内側に曲がる。把尻と素環折損部内側との間隔は3㎝である。把尻寄りの素環部にわずかに布が銹着している。赤色顔料の付着が部分的に見られる（註8）。

福岡県京都郡犀川町大熊字松本（12）

石蓋土壙墓から出土し，素環の一部を欠失するがほぼ完形品である。全体に細身の刀子で全長23.5㎝，刃部長13.9㎝，同最大幅1.1㎝，把部長7.1㎝，同幅1㎝前後を測り，わずかな関を有する。身は極めて細身で先端に向かって徐々にその幅を狭め，切先部に至る。素環は丸味を持った矩形を呈し，その断面は丸く，紐状のものを巻きつけている（註9）。

福岡県田川郡糸田町松山（13）

石蓋土壙墓の女性人骨に副葬されたもので，身を欠失する。現存長8.9㎝，幅1.3㎝である。素環は丸味を持った矩形を呈し，把尻下部が素環端部にはさみこまれている。素環頭は外径で長軸が2.7㎝である（註10）。

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町汐井掛遺跡B地区（22）

第4号木棺墓から出土したものですでに報告されたものであるが（註11），X線透視の結果，新しい事実が判明したので再度説明を加える。

身と素環部の大半を欠失する刀子で現存長9㎝，把部長6㎝，同幅1.2㎝を測り，刃部幅1.7㎝と推定され，明確な関を形づくる。素環端部は針金状で先細りとなり，把尻側下部側面に添えるようにつくっている。この部分のつくりはA地区189号木棺墓出土例に酷似する。推定復原長は189号木棺墓出土例により大振りであり，20㎝を超えると思われる。

分布について旧国名別に対馬を除く北九州の河川ことの出土例をみれば以下のようである。

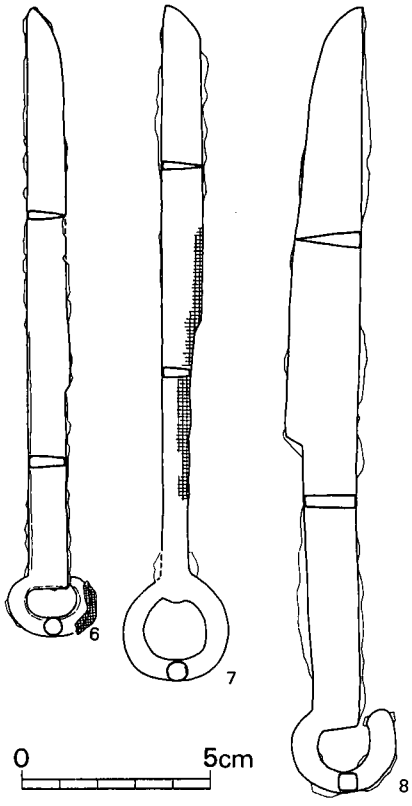
筑　前　17（＋1）例

◦雷山川・瑞梅寺川の流れる糸島平野

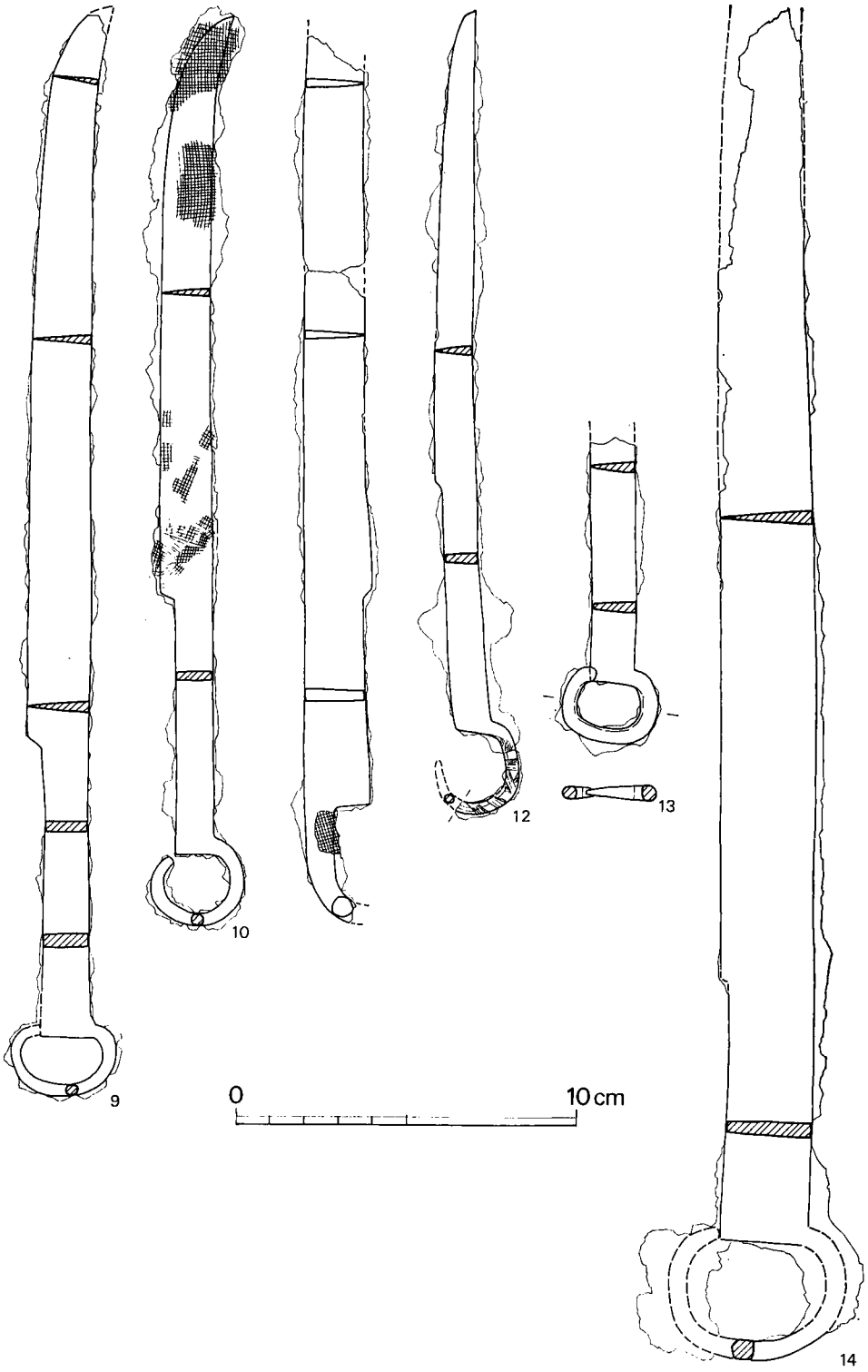
3例（三雲・平原・上町）

・樋井川・那珂川・御笠川の流れる福岡平野

2（＋1）例（丸尾台・宝満尾，臼佐原は参考例）



第124図　素環頭関連資料②（½）
6 桃島山　7 立岩28号甕棺　8 上り立



第125図　素環頭刀子・刀関連資料③（½）

9・10　前田山　11　下稗田　12　松本　13　松山　14　郷屋

・遠賀川およびその支流域　11(＋1)（汐井掛・立岩・岩崎，松山遺跡は豊前に含まれるが遠賀川支流域なのでここに含める。）

・筑後川中流域の両筑平野　1例（山田）

筑　後　1例

・矢部川中流域　1例（亀ノ甲）

豊　前　7例

・紫川中流域　3例（郷屋・長行小学校校庭）

・長狭川流域　4例（前田山・下稗田・松本）

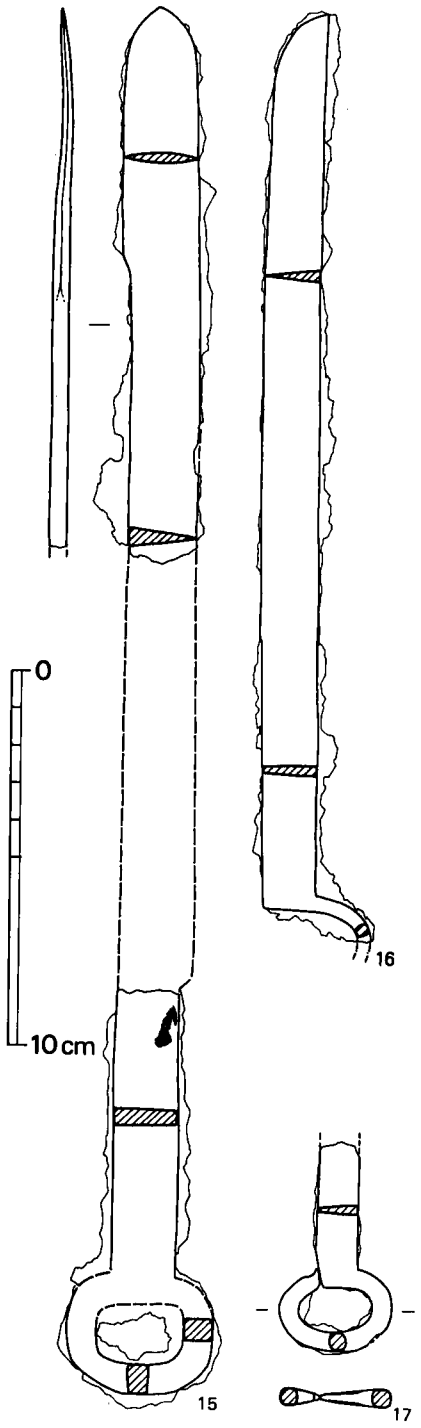
肥　前　6例

・筑後川流域北方の佐賀平野　4例（三津永田・横田・二塚山）

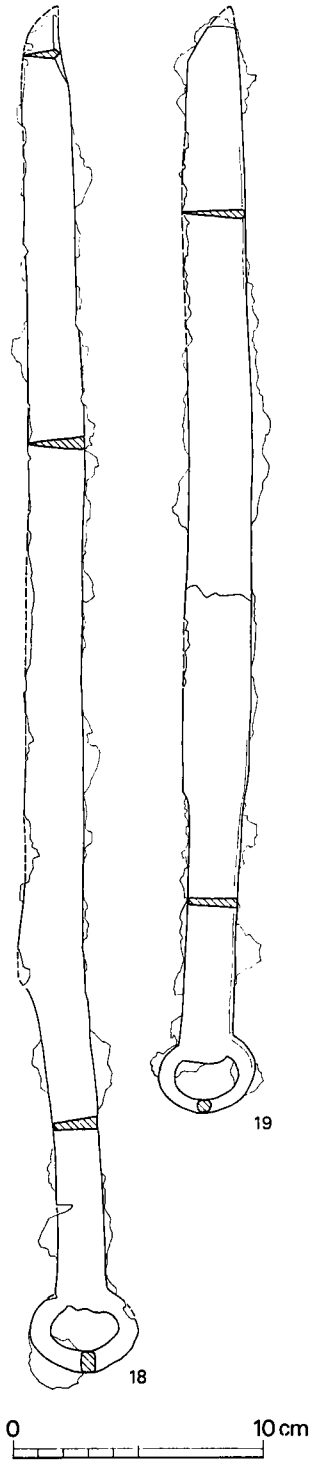
・六角川流域の白石平野　2例（桃島山・妻山）

便宜上，旧国名別に見れば筑前に17（＋1）本出土しており，九州本島における出土総数33（＋2）本に対して5割に達する。しかし，かつての成人葬用大形甕棺分布圏の中枢部と目される糸島・福岡両平野での出土例は仮に臼佐原例を含めたとしても6本にすぎず，両平野における発掘調査の件数が他地域に劣らないにもかかわらず，現状ではその出土本数は遠賀川流域，豊前北半部に及ばない。筑前の南においては，肥前で6本，筑後で1本で，時期差を別にして素環類の分布の中心は現在の行政区画に即していえば福岡県北半部にあり，その東半部が最も密度が濃い。このような分布の仕方の背後にある諸条件についてはここでは述べないで，その事実を記述するにとどめておきたい。

これらの素環頭類は，糸島郡前原町三雲遺跡番上地区6号住居跡出土の1例（註12）を除いて他はすべて集団墓地の埋葬施設等から出土している。甕棺からの出土例として以下の諸例がある。



第126図　素環頭関連資料④（½）
15　山田　16　立岩36号甕棺　17　三雲



第127図　素環頭関連資料⑤（1/3）
25　二塚山D34　　26　二塚山D52

1　福岡県飯塚市立岩・掘田遺跡28号甕棺　中期後半（註13）

2　福岡県飯塚市立岩・掘田遺跡36号甕棺　中期後半（註14）

3　福岡県福岡市西区堤・丸尾台遺跡　後期前半～中葉頃（註15）

4　福岡県八女市室岡亀ノ甲遺跡10号甕棺棺外　後期前半（註16）

5　佐賀県神埼郡脊振村三津永田遺跡104号甕棺　後期中頃（註17）

また，出土土器から所属時期の明らかな例として

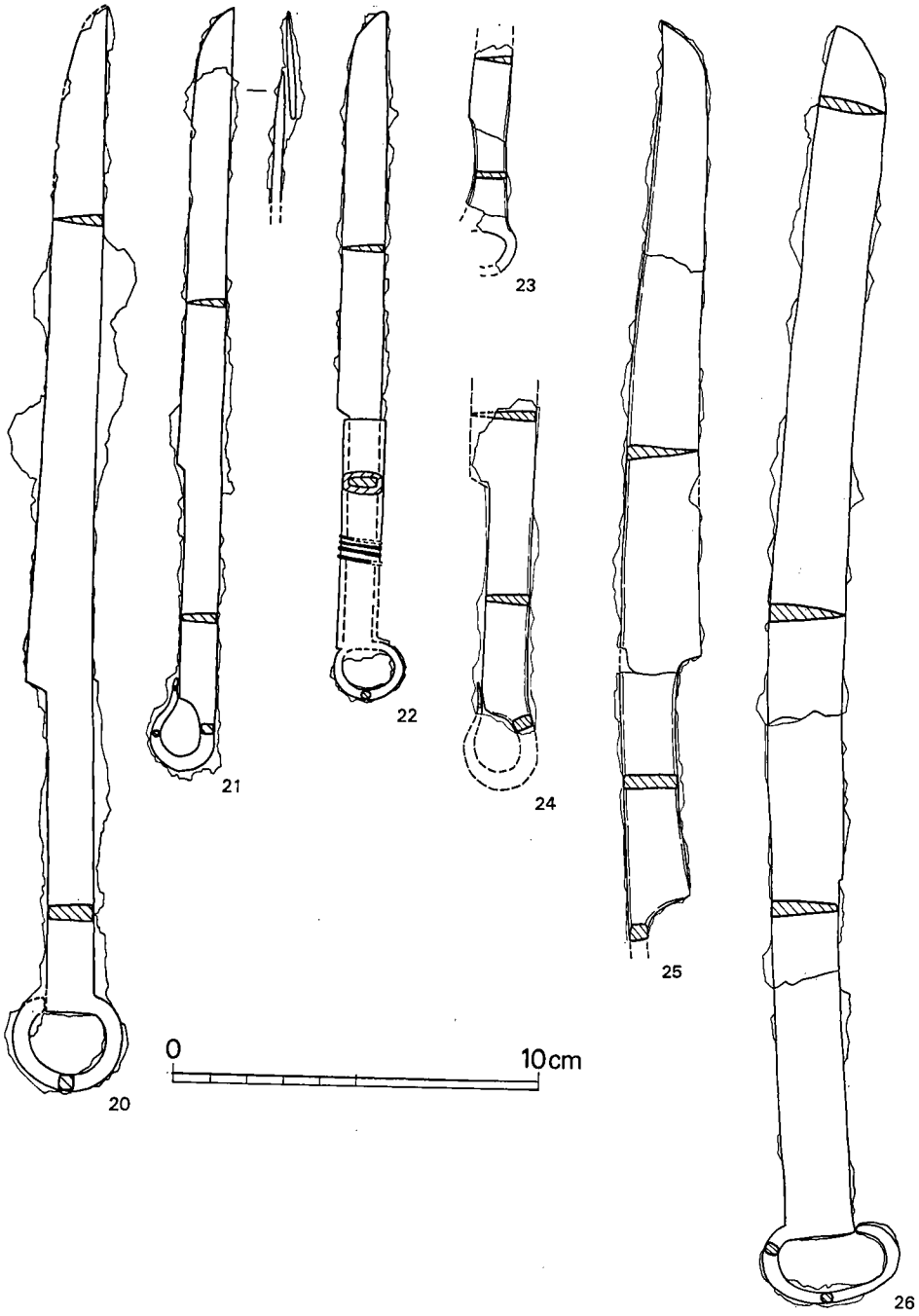
6　福岡県糸島郡前原町三雲遺跡番上地区６号住居跡　後期終末（註18）

7　長崎県上県郡峰町吉田トウトゴ山墳墓群２号箱式石棺　後期初頭（註19）

の２例が存在する。

土器の編年体系の中に組みこまれてその所属時期を知ることのできるのは上記の７例だけで，立岩遺跡の２例で明らかなように中期後半には素環頭刀子・小刀の副葬が開始される。現状では素環刀の副葬が開始されるのは後期にはいってからで刀子・小刀の副葬は引き続き行われる。後期の段階ではその分布は北九州一帯に広がり，ために箱式石棺墓や石蓋土壙墓への副葬例が増加する。

素環頭の刀子や刀は多くの場合舶載品と考えられているようである。たとえば小田富士雄氏は「素環刀および素環刀子は前漢代から後漢代におよぶ舶載品が多いであろうが，なかでも刀は身が刃部側にやや内彎気味の傾向あることを一特徴としている。」（註20）とされ，森浩一氏は「墳墓出土の素環頭の刀は……中国や朝鮮からの舶載品であると思われる。……弥生中期後半にはすでに日本列島内でも戈や剣などの鉄器が製作されていたのに，一方では素環頭の鉄刀が舶載されていた背景には，攻撃用武器を重視していた当時の北九州の首長たちの動向がうかがえるとともに，なお長大な刀剣の製



第128図　汐井掛遺跡出土素環頭（½）

20　A地区167号木棺墓　21　A地区189号木棺墓　22　A地区184号木棺墓
23　A地区143号木棺墓　24　B地区４号木棺墓　25　A地区23号木棺墓
26　A地区109号木棺墓

作を可能にするほどの優秀な鍛冶技術が日本列島内では完成していなかったことが考えられる」（註21）とされ，その文脈から判断すれば，氏は素環頭刀だけでなく刀子をも含めて舶載品と考えておられるようである。また川越哲志氏は弥生時代の鉄器を概説し，刀子の項で，「舶載品では，福岡県上り立（中期後半）の長さ21㌢，同立岩掘田の長さ18㌢，佐賀県桧島山の長さ16.4㌢の，茎の端を丸くリングに作る素環頭刀子が埋葬品として残っている。」（註22）とし，その後，国産鉄器の出現に関する発言の中で「国産品か否かの検討は，中国・朝鮮に類似のない独自の形態的特徴をもった鉄器の存在を評価することであり，…鉄戈を除く国産鉄器はいずれも小型のもので，鉄板に刃をつけ簡単な加工技術で製品化しており，鉄戈のように（傍点　児玉）長さ40㎝を超えるものは，かなり熟練した鍛接技術を想定しなければならず，すべての鉄戈を国産品とみることは今ひとつ検討の余地がある。」（註23）とされている。氏は素環頭を中心に論じられたわけではないがその文脈から解せられることを素環頭に即して言えば，弥生時代の鉄器生産の技術的レベルでは，茎の端にリングを持つ刀子や刀の国内生産を想定することはかなり難しいということである。

このように素環頭刀子・刀は舶載品と考えられている場合が多く，わずかに小田富士雄氏がその一部に国内生産の可能性の余地を残している程度である。

現在までの出土例のうち，中期後半から後期にかけての甕棺墓からの出土資料は，唐津湾～博多湾岸を中心にその甕棺を集団墓地の主流的埋葬施設とする地域を通じて入手したものと想定され，甕棺を集団墓地の，ほぼ唯一の主流的埋葬施設とする時期のそれらの地域は舶載青銅器を含む多くの中国・朝鮮製の副葬遺物が集中的に見られる地域で，これらに伴って舶載されたものと想定される。また，後期以降に属する甕棺以外からの出土資料はそのすべてを舶載品と想定する積極的な根拠に乏しく（逆に国産品とする根拠にも乏しい），舶載品か否かを各々識別する基準の設定は現状では困難で，理科学的分析が望まれるが，ここでは舶載品が多かったであろうとする小田氏の考えを支持しておきたい。

舶載時期あるいは埋納時期については共伴出土，あるいは同一墳墓群出土の舶載鏡によっておよその時期を推測することができる。舶載鏡の鏡式の上からは四つの段階が想定され，表17によれば，重圏昭明鏡と共伴した立岩28号甕棺墓例(註24)，連弧文明光鏡と共伴出土した桧島山石棺墓出土例(註25)は前漢鏡との共伴出土例であり，流雲文縁五獣鏡と共伴出土した三津永田104号甕棺墓(註26)は後漢初期頃の鏡との共伴出土例である。また，長宜子孫，長宜子君鏡を伴って出土した平原遺跡(註27)，前田山9号石棺墓は後漢末期頃の鏡との共伴出土末から三例であり(註28)，同一墳丘内の他の箱式石棺から三角縁飛禽文鏡を出土した郷屋遺跡例は後漢国時代に降るとみなされる(註29)。甕棺から出土する例は先述した理由により，各々の鏡と同時かそれに近い時期に舶載された可能性が高いと想定される。甕棺以外からの出土例については鏡とほぼ同時期に舶載された可能性はあるが，その埋納時期の上限を示すという程度にとどめておきたい。鏡が各鏡式ごとに順を追ってほぼ整層的に舶載されたと仮定することが許され

るならば，素環頭刀子・刀は前漢末期の鏡から三国時代にかけての鏡が舶載された時期頃に使用され，その後副葬されたと推測される。それは弥生時代中期後半の甕棺墓にまず副葬が開始され，石蓋土壙墓や土壙墓（木棺墓を含む），箱式石棺墓に引き継がれ，古墳時代に降るものが一部存在すると思われる。

汐井掛遺跡の出土例は完形品に限ってみれば，最大のものはD 109 出土の34.8㎝，最小のものはD184出土の18.9㎝で，小刀，刀子の部類に含まれるものである。すべて土壙墓・木棺墓からの出土品で，D 143 号出土刀子が鉄鎌１個と，D 167 出土例が鉄鏃６本と共伴して出土したが，素環頭刀子・刀自体は１棺１口の副葬のされ方をしており，朝田墳墓群13号箱式石棺墓の１棺２口を例外とすれば，他遺跡の素環頭の副葬のされ方（１棺１口）と規を一にしている。

また，素環頭の細部についてみればD 189 木棺墓，B地区D４号木棺墓出土例のように素環の先端を細くし把に沿わせるようなつくりのものは他遺跡出土例に類例を見ない。D37土壙墓，D109木棺墓出土例は全体に反りがあり，D143木棺墓出土例は把自体のつくりが，中央部が狭くD37出土例に近似している。D 184 出土例は木柄が装着されて細い紐で巻かれ，素環は径 2.5㎜前後の極めて細いものである。この６本についてはその形態や生産時の技術的難易度を考慮すれば，舶載品の可能性は高いと推測される。D 167 木棺墓出土の素環頭小刀は前記６本とその形態もつくりにおいて相違が認められ，さらに舶載の根拠は乏しくなるが，ここでは舶載品と考えておきたい(註30)。舶載か否かの規準はもち合わせないが，遂に国産か否かについてはその判断はむつかしい。本文中にも少し述べたが，筆者は現状では素環頭刀子・刀の多くは舶載品の可能性は高いと推定している。今後は中国や朝鮮側の研究の進展や，理化学的分析が行なわれることを期待し，その結果を判断の材料として使った方が，より正確を期せると思われる。

洛陽焼溝漢墓 (註31) では 116 本が出土し，第一型～第三型に分けられており，汐井掛例は第二・三型と対応するようで，各々，〝書刀〟，厨房内で使用した鉄刀とされている。焼溝漢墓では長身の第一型鉄刀が武器とされているが，汐井掛遺跡例を含めて北九州では小型の素環刀すら武器として使用されたかも知れない。

鉄　鏃

汐井掛遺跡全体で４型式18本の鉄鏃が出土し，そのうち11本が平造りの無茎長三角型式に属する。以下，関連資料について概観し，本遺跡出土鉄鏃と比較してみたい。

福岡県筑紫郡太宰府町吉ケ浦遺跡（１～４）

弥生時代中期前葉の住居跡群が放棄された後に集団墓地が営まれ，木棺墓十数基，甕棺墓七十余基が検出されている。甕棺墓に切られた木棺墓が存在し，甕棺は中期後半から埋葬施設として採用されており，木棺墓は中期中葉に位置づけられている。13号木棺墓床面から４本の鉄鏃が出土し，長さは2.9㎝～4.3㎝(復原長)で浅い三角形の腸抉りがある。無茎長三角型式に属

する鉄鏃としては現状では最も古い資料で平面形・大きさにおいて未だ規格性に欠ける。(註32)

佐賀県神埼郡脊振村三津永田遺跡（５～７）

漢式鏡・素環刀・鉄釧・貝釧等が出土した著名な埋葬遺跡で（註33），1974年に未報告資料として鉄鏃３点が橋口達也氏により報告された（註34）。５・６は浅い三角形の腸抉りがあり，前者が３㎝，後者が3.3㎝の長さを有する。７は復原長6.3㎝で三角形に近い深い腸抉りをもつ。７は後期，５・６は中期に属するとされている。

福岡県春日市上白水　門田遺跡辻田地区（８）

時間空白期間をはさんで先土器時代から歴史時代におよぶ集落遺跡である。東・西の各短壁部に幅１ｍのベッド状遺構を有する長方形プランの５号住居跡から１本の鉄鏃が出土している。鉄鏃は復原長2.9㎝で浅い腸抉りを有する。５号住居跡は後期終末期の９号住居跡に切られており，この鉄鏃の下限は後期終末である（註35）。

福岡県福岡市西区下長尾　小笹遺跡（９・16）

石蓋土壙墓６基，土壙墓１基（十），祭祀遺構からなる墓地で，包含層中より弥生式土器片とともに９の鉄鏃が，４号石蓋土壙墓から16の鉄鏃が出土している。９は長さ2.9㎝，幅2.6㎝で浅い弧状の腸抉りを有し，全体としてずんぐりとした形である。16は全長11.1㎝，2.5㎝の深い腸抉りを有し，この型式の鉄鏃の中では最長の部類にはいる（註36）。

福岡県朝倉郡三輪町栗田遺跡Ｄ・Ｅ地区（10・11）

弥生時代から古墳時代におよぶ集落遺跡で，Ｅ地点２号住居跡床面から２本の鉄鏃が出土している。住居跡からは後期後半頃の土器が出土している。鉄鏃は大小の二種あり，10は小形鏃で弧状の浅い腸抉りを有し，現存長2.5㎝である。11は一部欠失するが長さ6.5㎝で，箆木質が遺存し，先端部から2.5㎝の箆木質両側に径１㎜程の１対の孔が穿たれている。逆刺は鋭く，腸抉りは浅くゆるい弧状を呈する（註37）。

福岡県筑紫野市塔ノ原樋田山遺跡（12）

甕棺墓・箱式石棺墓等からなる集団墓地と弥生時代の貯蔵穴，中世の土壙等からなる遺跡である。第４号箱式石棺墓の掘り方線付近から１本の鉄鏃が出土している。先端部を欠失するが，復原長５㎝，幅2.3㎝を測る。形状は全体に丸味を持ち，腸抉りは弧状を呈する。箆木質の残りが良い（註38）。

長崎県壱岐郡芦辺町・石田町所在原ノ辻遺跡（13～15）

弥生時代後期の鉄器出土遺跡として著名な遺跡でそれについては岡崎敬氏の報文がある（註39）。

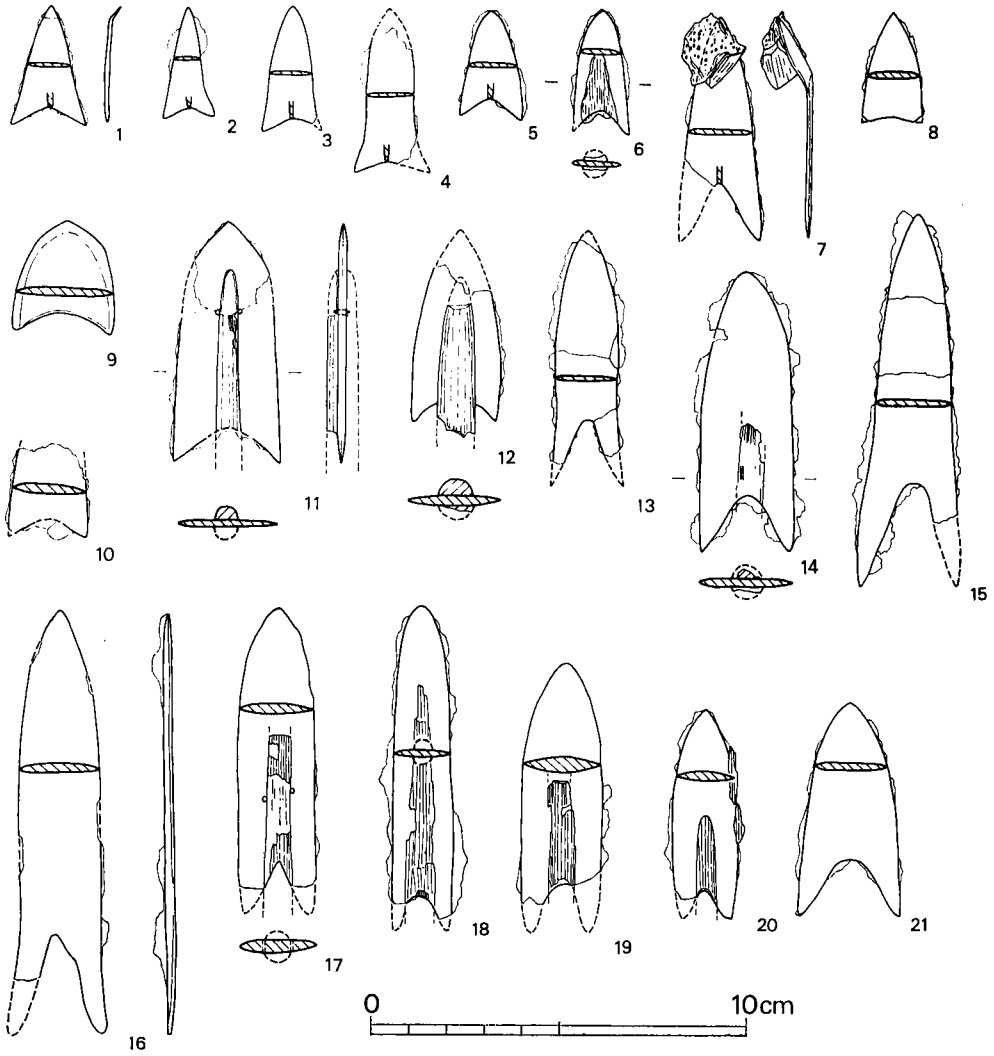
ここにとりあげる鉄鏃３点は1977年に長崎県教育委員会が実施したトレンチ調査中に発見されたものである。鉄鏃検出地点には黒い落ち込みがあり，土壙墓にともなう副葬品ではないかとされている。13は復原長6.7㎝，14は7.3㎝，15は9.8㎝である。腸抉りは13・15が頂部の丸い長三角形で，14は前者に比べ浅いものである（註40）。

長崎県上県郡峰町木坂遺跡（17）

遺跡は海神神社北西側丘陵に位置し，箱式石棺墓７基と配石遺構が調査されている。鉄鏃は５号石棺から出土し，舶載・国産青銅器・水晶製切子玉・ガラス小玉・鉄剣・刀子が共伴している。弥生式土器と金海式土器が棺外副葬され，弥生式土器の壺は後期終末におかれている。鉄鏃は現存長6.4㎝，幅2.1㎝を測り，箆木質両側に径１㎜程度の双孔が穿たれている。腸抉りは正三角に近い形を示している（註41）。

長崎県下県郡豊玉村佐保シゲノダン（18～20）

佐保浦最奥部の段状畑地に発見された土壙に朝鮮製青銅器・国産青銅器に伴って鉄製武器・工具が埋蔵されていた。鉄鏃は他の鉄器とともに銅矛の東側に，青銅器は一括して西側に埋置



第129図　鉄　鏃　関　連　資　料

1～4　吉ケ浦　5～7　三津永田　8　門田　9・16　小笹　10・11　栗田　12　桶田山　13～15　原ノ辻　17　木坂　18～20　シゲノダン　21　桑飼下（京都府）

されていたという。18は復原長8.8㎝，19は7.2㎝，20は5.6㎝である。18は身幅が1.5㎝前後で細身である。腸抉りの形態は，20は頂部に丸味をもつ正三角形，他は長円形の半截された形を呈する（註42）。

京都府舞鶴市桑飼下遺跡（21）

遺構に伴っての出土ではなく，Ⅸ56区第４層から出土している。全長5.6㎝，幅2.8㎝で割と深い孤状の腸抉りを有する（註43）。

北九州以外の地方で筆者はこの１例しか知らないが参考例としてあげておく。

福岡県京都郡豊津町上坂平遺跡（第130図　１～９）

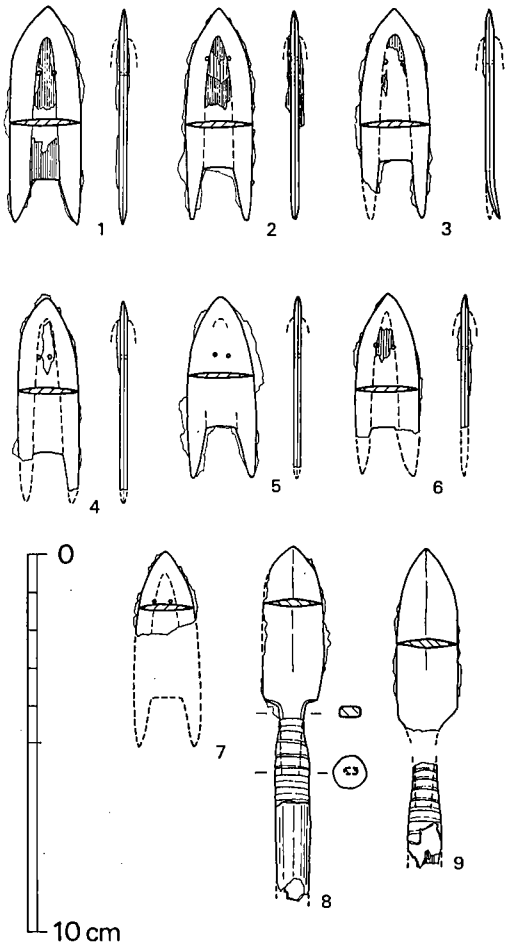
単独で発見された箱式石棺墓の副葬品として夔鳳鏡片と伴出した鉄鏃で，７本が無茎長三角型式に属し，他の２本は有茎鏃である。無茎鏃は長さ4.7㎝～5.7㎝で腸抉りの形は矩形を呈し，先に述べた本型式の鉄鏃とは異なる。X線透視の結果，箆木質の両側に径１㎜の双孔が存在し，鏃身と矢柄の緊縛の用をなしている。有茎鏃は中央部に弱い鎬が通り，断面は菱形を呈する。あまり長くない茎を矢柄にさしこんだ後，桜皮を巻いている（註44）。

以上，概観した11遺跡30例のうち，豊津町平出土の２例を除いた28例の無茎長三角形式の鉄鏃は土器型式の上からその所属時期を判断できる資料に乏しい。それは，集団墓地の埋葬施設の副葬品として出土する場合が多いことに起因するが，およその時期が判断されるものに下記の諸遺跡出土例がある。

1　福岡県筑紫郡太宰府町吉ケ浦遺跡13号木棺墓　中期中葉

2　福岡県飯塚市立岩掘田２号甕棺墓　中期末（？）～後期初頭（註45　立岩Ⅲ期一桜馬場Ⅲ式）

3　福岡県朝倉郡三輪町栗田遺跡E地点２号住居跡　後期後半頃



第130図　京都郡豊津町平箱式石棺墓出土鉄鏃一括(½)

4　福岡県春日市上白水門田遺跡辻田地区５号住居跡　後期末が下限

5　長崎県上県郡峰町木坂５号石棺　後期終末

上記の諸例から無茎長三角型式の鉄鏃は中期中葉には存在し，後期を通じて使用されたことがわかる。完全に中期に含まれるものは吉ケ浦例だけで，中期に含まれるとされる三津永田出土の２本の小形鏃を含めて，長さは３㎝前後～５㎝末満で，その平面形は長二等辺三角形がベースとなり，

1　鏃身の先端から逆刺先端までが直線的な形を示し，身の先端にふくらみがなく，浅い三角形の腸抉りを有するもの（吉ケ浦１・２）

2　身の平面形に丸味を持ちはじめ，先端付近にふくらみを有し，腸抉りが浅い孤状を呈するもの（吉ケ浦３・４）

3　身が更に丸味を持ち，腸抉りが前者に比して深くなるもの（三津永田５・６）

の三者に分類される。鉄鏃全長に対する腸抉りの深さの割合は，吉ケ浦例ではおよそ10：１～８：１の間，三津永田例ではおよそ７：１と11：２である。鉄鏃の平面形と腸抉りの形状から上記三者は小分類できそうだが，ここでは中期の小型鏃を記述の都合上Ⅰ類と呼ぶことにする。

Ⅰ類の鉄鏃は資料自体が量的に少ないが，その分布範囲は現状では成人葬用甕棺墓の分布範囲の中に含まれる。

後期にはいると鉄鏃は大形化の道を歩み，小笹例のように全長11㎝に及ぶものまで出現する。反面，立岩例，栗田例等のようにⅠ類の系譜をひく小形鏃が後期にも存在する。後期の鉄鏃はⅠ類と比べて平面形自体に丸味を帯びるものが多く，腸抉りの形態は弧状を呈するか，頂部の丸い三角形を呈し，深くなる。しかし，細部においてはバラエティに富み，平面形において以下の特徴がある。

1　割と直線的で長三角形に近く，先端部付近にふくらみをもち，腸抉りは頂部の丸い正三角形を呈する。（三津永田７）

2　両側線がほぼ平行で，先端部付近が内彎して丸味を持ち先端に到る。腸抉りは弧状ないしは頂部の丸い三角形を呈するものが多い。（栗田11，原ノ辻14，木坂17，シゲノダン18～20）

3　両側線全体に丸味をもち，腸抉りが深く逆刺の付け根付近にわずかなくびれを有するもの。（原ノ辻13・15，小笹16）

ここでは記述の便宜上，上記の諸特徴のうち腸抉りの深いものをⅡ－１類，浅いものをⅡ－２類としておく。しかし，ここでは両者に時期差を想定しているわけではない。後期以降の鉄鏃で量的に多く主流を占めるのはⅡ－２類の鉄鏃である。Ⅱ類の鉄鏃の全長に対する腸抉りの深さの割合は，Ⅱ－２類が７：１～５‥１で割と浅く，Ⅱ－１類はおよそ４：１～３：１の比

率を示し，深い。Ⅱ類の鉄鏃の分布は中期の小型鉄鏃の分布範囲（成人葬用甕棺墓の分布範囲に含まれる）を越えて拡大する。これらの多くは箱式石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓からの出土品で，三津永田でわずかにⅡ－１類が甕棺から出土したにすぎない。よってⅡ類の鉄鏃は後期にはいってから出現し，甕棺衰退期以降に多く製作・使用されたものと想定される。

以上の諸例は弥生時代に属するものとして報告された鉄鏃の一部であるが，中期の小型鏃から，後期にはいって大型化し，腸抉りの形態が低三角形から次第に丸味を帯びてⅠ類の鉄鏃より深さを増す流れの中にとらえることができるが，以下述べるように，腸抉りが矩形を呈する鉄鏃が存在する。

豊津町平石棺出土例は長さ4.7㎝～5.7㎝で寸法に多少のバラつきがあるが，一遺構複数出土例としては統一された平面形を呈する。注目されるのはその腸抉りの形態で，腸抉りの残る１～６は台形に近い矩形を呈し，全長に対する腸抉りの深さの割合は3.5：１～５：１で深いものが多い。腸抉りが矩形を呈する為に逆刺は細身となり，矢柄を緊縛する双孔をもつ。有茎鏃，夔鳳鏡片を共伴し，後期終末前後と推測されるが，あるいは古墳時代に下がる可能性もある。

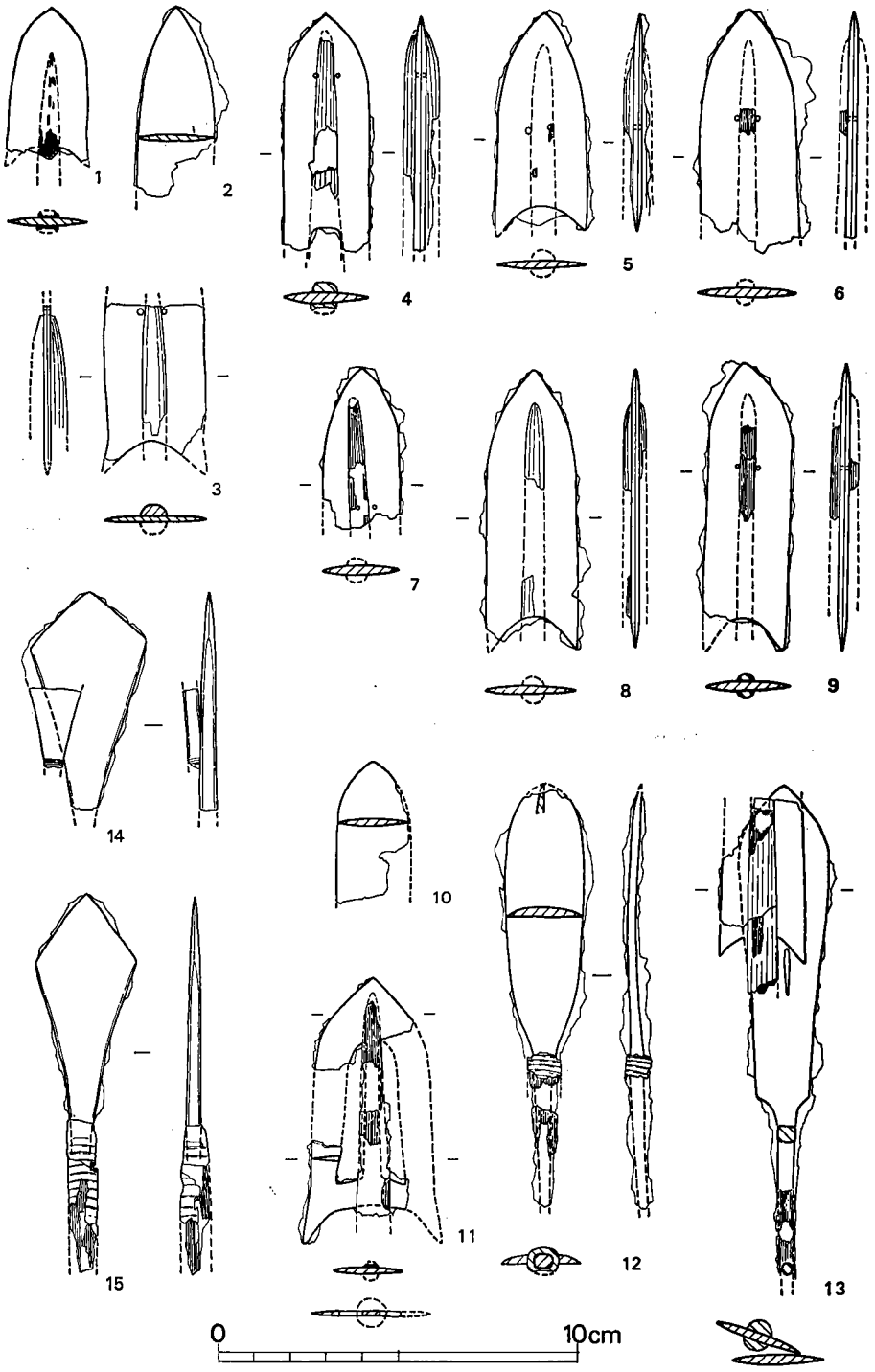
他の１例は汐井掛167号木棺墓出土例で逆刺の両端を欠失するためその深さは不明だが，逆刺の幅は平例より広く，大型鏃である。腸抉りが弧状を呈する鉄鏃と共伴しており，大型で平例より古い要素を持つ。

この鉄鏃は未だ資料が僅少でその分布や出現の契機について不明な部分があるが，現状ではⅡ－２類のシゲノダン出土の鉄鏃の腸抉りの形態（33）が汐井掛例に近い。恐らくこの類の鉄鏃から汐井掛例の矩形の腸抉りの鉄鏃が派生したものであろう。汐井掛例をⅢ－１類，平例をⅢ－２類とすると，Ⅲ－２類は確実に有茎鏃と共伴するが，Ⅲ－１類を出土した汐井掛遺跡では，D162から有茎の柳葉式鉄鏃とⅡ－２類に属する鉄鏃が銹着して出土しており，Ⅲ－１類とⅡ－２類の鉄鏃がD 167で一括遺物として出土していることから，先の柳葉式鉄鏃とⅢ－１類は共存した可能性がある。よってⅢ類の鉄鏃は有茎鉄鏃の出現と何らかの関連性があると想定される。また，Ⅲ－２類はⅢ－１類に比べて小厥化しており，Ⅲ類の定着する段階で鉄鏃は小型化するのかもしれない。Ⅲ類の行われた段階でもⅡ－２類の系譜につながる鉄鏃は後述するように汐井掛D79出土例のように小型化して遺存する。

関連資料によって鉄鏃の型態変化を概観したが，その流れの中に２つの画期を見出すことができそうである。

第１の画期は橋口達也氏の指摘のように鉄鏃の大型化（Ⅱ類鉄鏃の出現）としてとらえることができよう。出土例が増え，かつての成人葬用大形甕棺墓の分布範囲を越えて北は対馬，東は現状では筑前東部にまで及ぶ。

第２の画期は有茎鏃の出現であろう。それに伴って無茎長三角形式の鉄鏃は腸抉りを矩形化すると推測される。有茎鏃は住居跡や箱式石棺墓・土壙墓等からの出土例は無茎鏃ほど多くはなく，大分県大野郡大野町松木遺跡Ⅰ区４号住居跡（註46），福岡県京都郡犀川町山鹿本庄土



第131図　汐井掛遺跡出土鉄鏃集成図（½）

1・4　D79出土　2・3　S22出土　4～9　D167出土

10・12　D169出土　11・13　D162出土　15　B地区D14出土

壙墓（註47），福岡県朝倉郡朝倉町外隈遺跡（註48），先述した京都郡平遺跡，北九州市郷屋遺跡，鞍手郡汐井掛遺跡等があり，松木遺跡例は後期終末におかれているが，他遺跡出土の中には古墳時代に下がるものがある。このように有茎鏃は後期終末には出現することは明らかで，第Ⅱの画期の時期はおよそこの時期前後におかれよう。

汐井掛出土の鉄鏃は，これまでに述べた鉄鏃の形態変化の中では後期以降に含まれるのは明らかで，無茎鏃においては腸抉りが弧状を呈するものと矩形を呈する二者があり，有茎鏃は柳葉式と鏃身先端が山形を呈するものがある。

無茎長三角型式の鉄鏃は腸抉りが弧状のものはⅡ－２類に，矩形のものはⅢ－１類に含まれる。A地区D79出土（14），B地区D14出土（15）の２例は汐井掛遺跡出土例では最も新しい部類に属し，これらに近い型態の鉄鏃は三雲遺跡から出土しており，加賀石Ⅰ－１区の布留式併行期の溝から１点（註49），サキゾノⅠ－１区第３層から庄内式併行期のもの１点（註50）が出土している。B地区D14出土（15）はサキゾノ出土例に近似し，A地区D79出土（14）は鏃身自体が大形化し，加賀石例への指向過程にあると思われる。また無茎鉄鏃のうち１はA地区D79出土であり，これら３本は古墳時代に下がる。１は無茎長三角形式鉄鏃Ⅱ－２類の系譜上にあると思われる。柳葉式鉄鏃（12・13）はD162出土の錆着鉄鏃からⅡ－２類併行期，有透孔広鋒長三角型式（11）はD162出土なのでやはりⅡ－２類併行期におかれるが，Ⅱ－２類は時期幅が広く，上記３例は先述した大分県松木例と勘案して後期終末を前後する時期におけると考えられる。よって汐井掛出土の鉄鏃は弥生時代後期終末前後～古墳時代前期（４世紀代）に属すると思われる。

刀　子

素環頭を有さない刀子がD76，D196両木棺墓から各１本づつ出土している。

D196出土刀子（第101図２）は鹿角柄を装着したもので他に既存の報告例として

1　福岡県京都郡犀川町本庄土壙墓　　１例（註51）

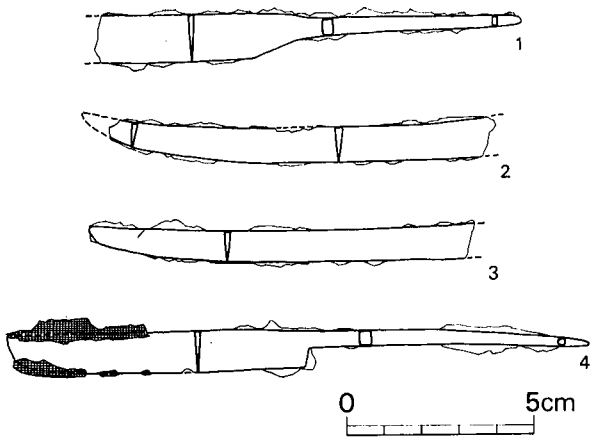
2　福岡県飯塚市立岩運動場　　２例（註52）

があり，剣に鹿角柄を装着したものとして

3　福岡県春日市上白水門田遺跡辻田地区27号甕棺墓　　１例（註53）

が報告されている。門田辻田地区例は中期後半に属し，立岩例もおよそその時期と推定されるが，本庄例は共伴出土した鉄鏃の型態から古墳時代に降る可能性もある。刀子・剣への鹿角柄の装着は中期後半には存在することが明らかで，確実に後期に含まれる鹿角柄装着の報告例を筆者は知らない。汐井掛D196号出土鹿角柄刀子は中期後半までのぼらせるのは困難で，D196周囲の木棺墓からの出土遺物や本庄例から判断して，後期末あるいは古墳時代に降る可能性がある。

D76木棺墓出土の刀子は身の過半を欠失するが身の全長はおよそ10㎝程度と推定され，細い



第132図　刀子実測図(½　1汐井掛D76出土　2～4郷屋遺跡)

茎を有するものである。他遺跡からの出土例として福岡県北九州市小倉南区長行・郷屋遺跡出土例(第132図4，(註54) があり，全長15.5㎝，身部長8㎝，茎長7.5㎝で茎は細くて長く，身に布が銹着し，少なくとも身の部分は布にくるまれていたと思われる。茎は欠失しているが郷屋遺跡からは他に2本の刀子(第132図2・3）が出土している。2は身の先端を欠くが現存長10.2㎝，幅0.9㎝で全体に反りが認められ，特に先端近くは大きく背部側に反っている。3は現存長10.2㎝，幅0.9㎝弱で2程ではないがわずかに反りが認められる。これらは素環頭刀子の可能性も残る。郷屋遺跡例は他に古墳時代に降ると思われる鉄鏃も出土している。

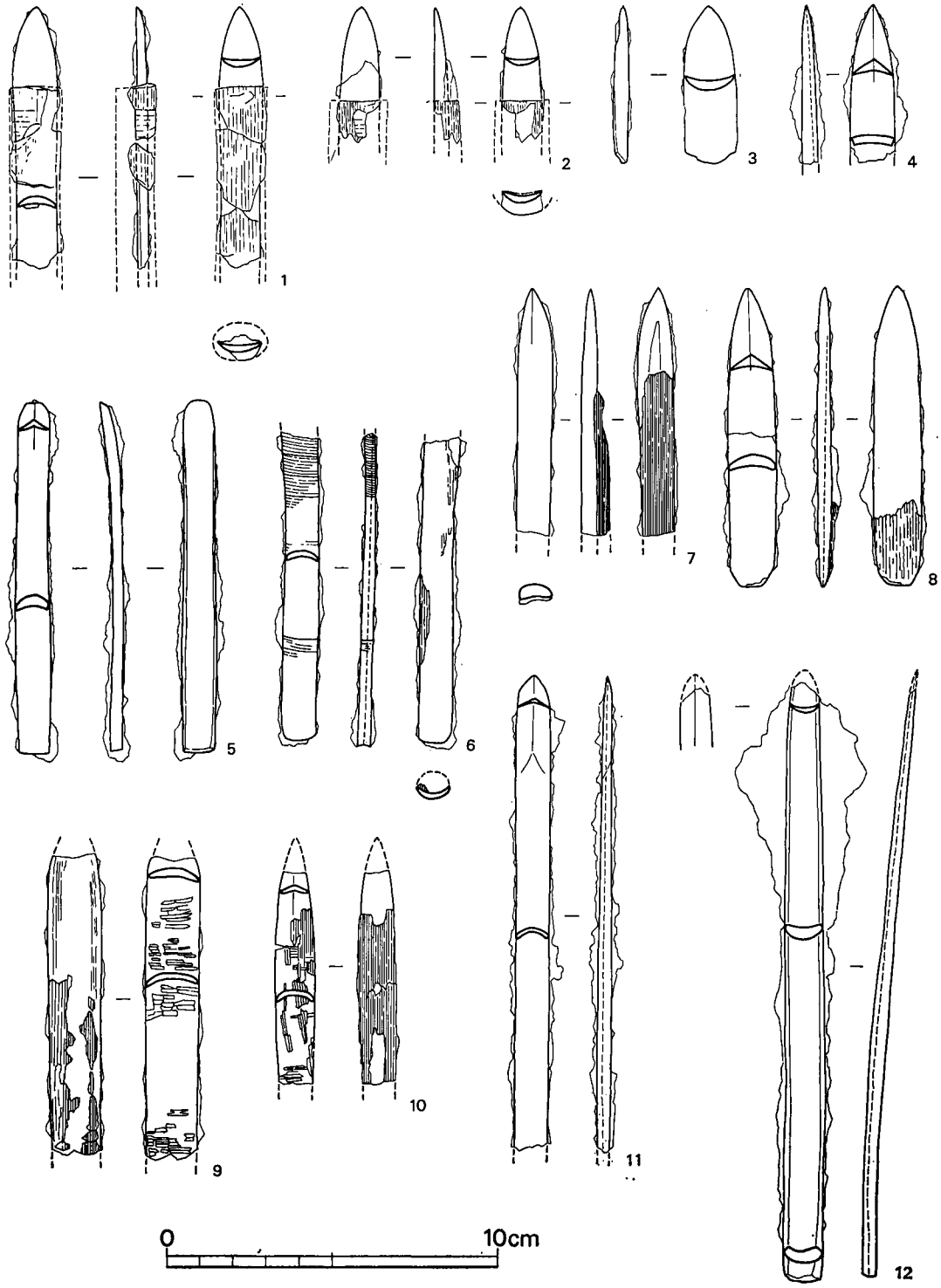
この種の刀子はあまり出土例がなく，D196 木棺墓出土の茎が幅広の刀子は古墳時代にはいっても副葬遺物として多く見受けるが，茎の細く長い先述の刀子は古墳の副葬遺物として定着した形跡はなく，現状では国産鉄器としての足どりをつかむことは困難で舶載品の可能性が強いと推測される。汐井掛遺跡では共存する他の埋葬施設から長宜子孫系の内行花文鏡や飛禽鏡等が出土しており，これらの鏡や素環頭類とともに舶載されたと推測すれば，その埋納時期は後期終末頃をさかのぼらないだろうと思われ，古墳時代に降る可能性もある。

鉇

汐井掛遺跡では5本の鉇が出土している。鉇は北九州では中期前葉にさかのぼる例が報告されており (註55)。更に古い例として山口県綾羅木遺跡から前期末のものが出土しているという (註56)。最近，集落遺跡からの出土資料が増え，それまでの出土例の多くが埋葬遺跡からであったのに対してその所属時期をおさえることのできる資料が増加し，柄の装着状態を推定できる資料の出土例も存在する。以下，弥生時代に属する鉇の報告例を概観し，汐井掛遺跡出土例と比較してみたい。

福岡県筑紫郡太宰府町吉ケ浦遺跡（第133図1～3）

中期後半に属する72号甕棺掘り方埋土中からから3が，中期中葉とされる17号木棺墓蓋面より10㎝下層で1・2が出土している。3は幅1.5㎝，全長4.7㎝で研ぎ減りしたのか長さが短い。1は幅1.3㎝，2は1.2㎝で3に比べて幅が狭い。木柄の一部が銹着して残存し，茎を木柄ではさみ，桜皮で上から巻いている。木柄からの刃部の出は1が2.4㎝，2が2.8㎝である。断面は三日月形を呈する。



第133図　鉈関連資料　(½)

1～3　吉ケ浦　4～6・8　門田遺跡辻田地区　7　辻田遺跡　9・10　シゲノダン

11　立岩10号甕棺　12　宮ノ前

この墓地は中期前葉の竪穴住居を放棄された後に形成され，72号甕棺墓掘り方埋土中出土の1は，副葬品とは考えられず，埋土中に中期前葉の土器片が混入すること等から，混入したものと思われ，中期前葉に属する可能性が高いとされている。17号木棺墓出土の2例は，棺外副葬品であれば中期中葉，掘り方埋土中のものならば中期前葉とされている(註57)。

福岡県飯塚市立岩掘田10号甕棺（11）

現存長14.3㎝，幅1㎝の鉋で前漢鏡6面，鉄剣・銅矛各1口，砥石2個と共伴出土した。裏面に布片が銹着しており，木柄を装着せずに副葬されていたようである。断面は蒲鉾型で 2.5㎝前後の刃がつく。この甕棺は立岩Ⅱ期，中期後半におかれている(註58)。

福岡県春日市上白水門田遺跡辻田地区（4～6・8）

集落遺跡からの出土例で5は8号住居跡，4・8は14号住居跡，6は 19号住居跡から出土し，弥生後期終末に属する。4・8は幅1.3㎝程度で幅広で，8は全長8.9㎝である。5・6は幅1㎝未満で狭く，長さも8に比べて長めである。6は表裏に木質が銹着し，鉋の凹部に木柄を添え，両者を桜皮様のもので巻いて固定している。8も凹部に木柄を添えているが，凸面部に木質の銹着は認められないが，柄の装着法は6と同様であったと思われる。4例とも断面は蒲鉾型を呈する(註59)。

福岡県春日市上白水辻田遺跡Ⅰ区1号住居跡（7）

後期終末に属する住居跡からの出土品で幅1㎝未満の細めのものである。裏の凹面に銹着した木質から，刃部の木柄からの出は 2.5㎝未満で柄の装着法は6と同様であったろうと思われる。茎の断面は蒲鉾型である(註60)。

福岡県福岡市西区拾六町宮ノ前C地点，（12）

箱式石棺を内部主体とする墳丘墓裾の3号箱式石棺墓から出土したもので，復原長18.2㎝，幅 1.1㎝である。断面は蒲鉾型で全体に布が銹着し，布にくるまれて副葬されたと推定されている。墳丘墓は弥生後期終末頃に比定され，裾部の2号石棺は副葬された碧玉製管玉の大きさから古墳時代に下げられている(註61)。

長崎県下県郡豊玉村佐保シゲノダン（9・10）

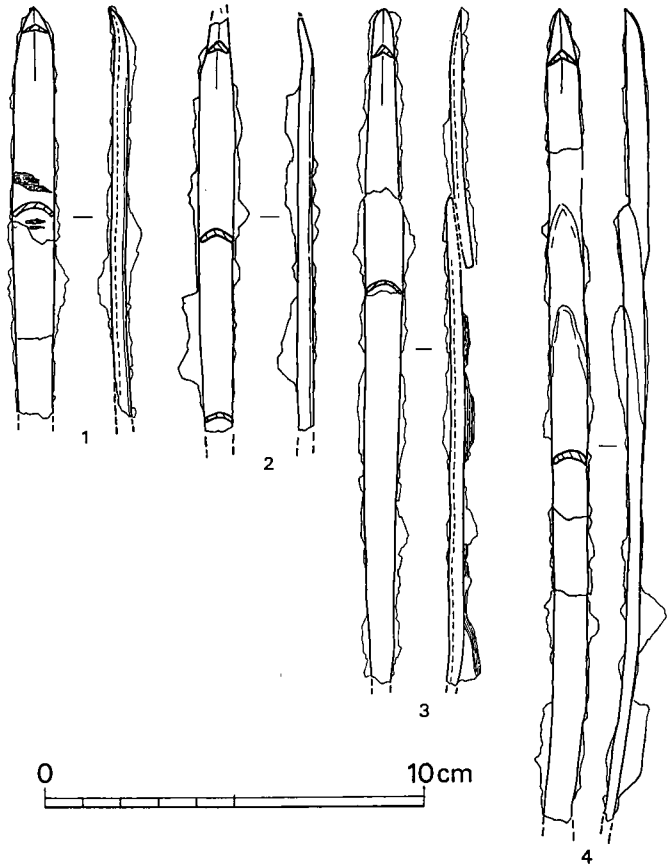
朝鮮製・国産青銅器等とともに大・小2本の鉋が出土している。9は幅広で 1.5㎝，10はやや狭く1.2㎝である。ともに鋳造品で刃部の長さは9が1.5㎝，10が2㎝程度と推定されており短い。柄の装着法は両者で異なり，9は凹部に木柄をはめ込んで木皮様のもので重ね巻きされ，10は茎の両面に木柄をあててはさみこみ，その上から木皮様の紐を巻きつけたと推定されている。この遺跡は貨泉の存在から，「大きくいって1・2世紀の間」にあてられている（註62）。

以上の例より，北九州では弥生時代に含まれる鉋は，初期出土例の吉ケ浦例は幅1.2㎝以上で幅広のものであるが，中期後半の時期におかれる立岩例は幅1㎝の細身のもので，中期後半には細くて長い鉋の存在することが知られる（註63)。後期終末の春日市門田遺跡では細身のも

のと幅広のものが存在し，門田遺跡例でみる限り，幅広の鉇の方が長さが短いようである。シゲノダンでも両者が存在し，完形品ではないので長さの比較はできないが，幅広の刃部長は1.5㎝，細身の方は2㎝と推定されており，両者の間に用途に応じた使い分けがあるいは存在したのかも知れない。大分県下でもここ数年来，住居跡出土の幅広の鉇の報告例が少しづつ増加し，その1例として竹田市小園B地区 109号住居跡出土例（註64）があり，この種の鉇の分布は割と広いようである。

北九州の弥生時代に含まれる鉇の断面は蒲鉾形・三日月型の言葉で示されるように浅いU字型を示し，岡山県沼住居跡群A号住居跡出土の鉇（註65）のように茎の断面が矩形を呈するものの報告例はない。北九州で断面U字型の鉇がどこまで降るかが問題で，現状では福岡県筑紫野市杉塚所在の唐人塚2号墳1号石棺の鉇が断面U字型を示し，同墳丘内の4号石蓋土壙墓に布留式併行期の甕が棺外副葬されており，「4世紀中葉から後半にかけての，やや後半よりの年代」（註66）が与えられており，最も新しいものであろう（註67）。

木柄の装着法については，中期前葉の吉ケ浦例，1～2世紀の間（後期前半か？）のシゲノダン例(10)先述の竹田市小園B地区109号住居跡出土例は茎を柄の中にはさみ込む方法がとられ，シゲノダン例(9)後期終末の門田遺跡辻田遺跡出土例では鉇の裏面（凹面）に木柄を添え，桜皮等をまきつけている。この木柄の装着法における二者は，シゲノダン例のように同時に二者が存在する場合と終末期の大分県下と福岡県下の例で各々異なっている場合があり，それは単に地域性によるものなのか，



第134図　汐井掛遺跡出土鉇（½）
1 D168　2 D4　3 D175　4 D76

あるいは用途（機能という言葉を使えるかも知れない）差によるものなのか，更に他の理由によるものなのかは現状では推測することは困難で，今後の課題とし，ここでは柄の装着法に現状では二種類の方法があるという程度にとどめておきたい。

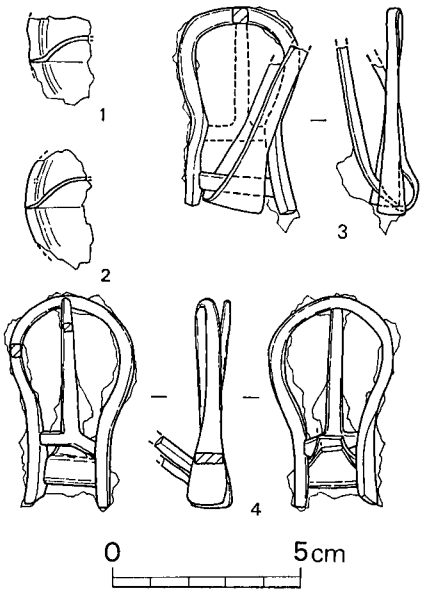
さて，汐井掛遺跡出土の鉈はみな細身のもので，茎の断面は浅いU字型を呈し，木質が銹着したものは鉈の裏面に茎と並行する方向に木目が通っており，鉈の表面に桜皮の銹着したD168木棺墓出土例から，本遺跡出土鉈の柄の装着法は鉈裏面に木柄を添えて桜皮等を巻きつけて固定したものと思われ，柄の装着法は統一されているようである。所属時期については，茎の断面が浅いU字型で弥生時体の鉈の形態を踏襲しており，弥生時代の内に含まれる可能性は十分にあるが，筑紫野市唐人塚出土例のように4世紀に降る例があり，その下限の時期幅は4世紀代まで見込んでおかねばならないだろう。

馬　具

D 200号土壙墓から棺外副葬品として鞍が1対出土している。墳丘を伴わない集団墓地の埋葬施設から出土した例は他にはないようである。

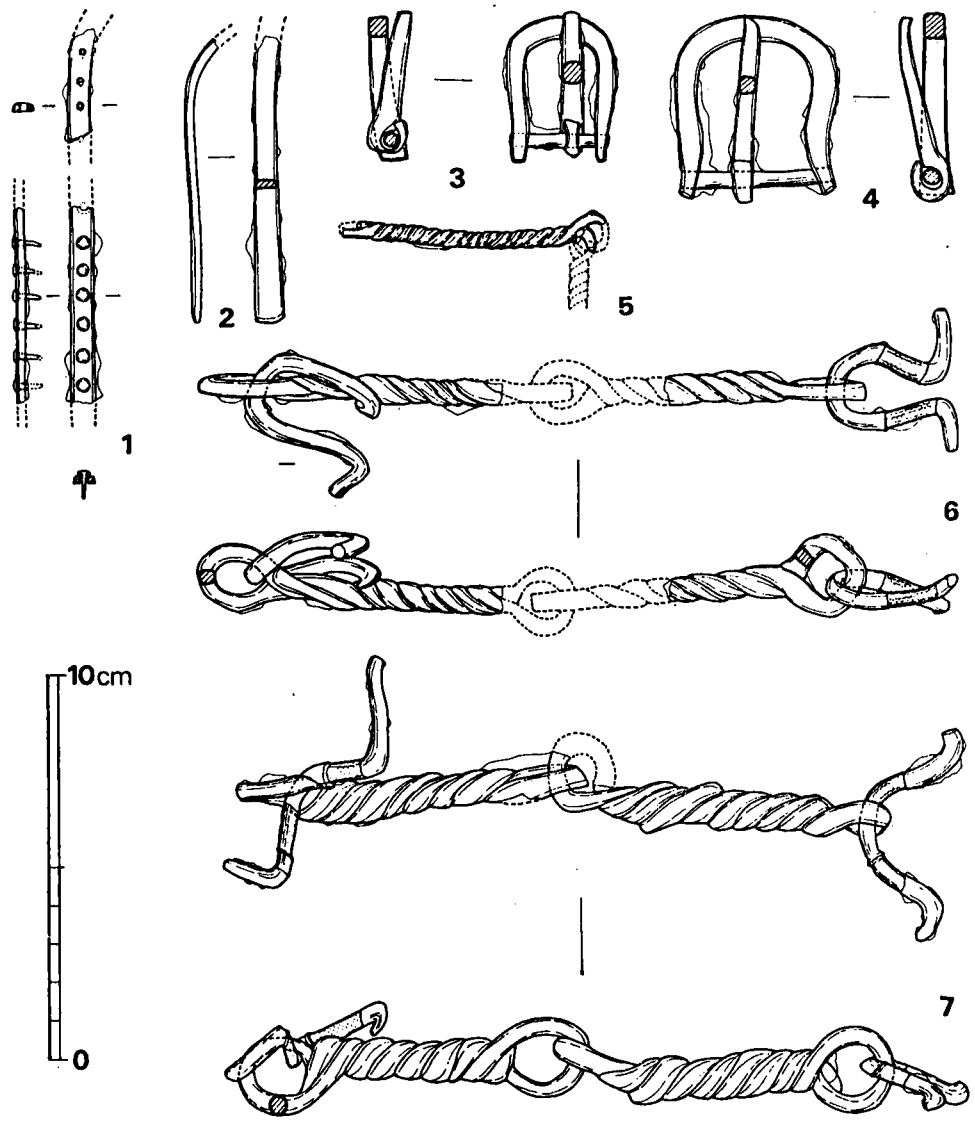
福岡県内で最古に属すると思われる馬具の出土例として，福岡市老司古墳3号石室（註68）甘木市池ノ上6号墳（註69）があり，前者は5世紀初頭に比定され，後者は老司3号石室の馬具・金環と同様のものを伴っており，また出土土器の編年観から5世紀初頭〜前葉に位置づけられている。池ノ上6号墳棺外副葬の馬具（第136図）の中にしおでと推測されているものが2個存在する。それは絞具の部分だけで，座金冚や座金具と絞具を連接する金具は出土しておらず，2個の大きさが不揃いである。汐井掛例は完形品ではないがしおでとしての部品が不足することなく揃っており，形・寸法もほぼ同様である。絞具の形態が池ノ上例とかなり異って，汐井掛例は刺金の軸が接着する部分を境にくびれており，朝鮮半島の慶尚北道南端の高霊池山洞34号墳1号石室の馬具の中に汐井掛遺跡例とほぼ同様の形状を示すものが含まれており，この古墳の築造年代は4世紀を中心とする時期におかれている（註70）

汐井掛出土のしおでは，老司古墳や池ノ上6号墳出土の諸例から5世紀初頭頃の年代をあてて不都合はないと思われ，高霊池山洞45号墳の出土例



第135図　汐井掛遺跡D200出土馬具（½）

から4世紀にのぼらせうる余地も残しておきたい。また，本例はしおでだけの出土例であり，騎馬の風習と一体となって舶載されたものではなく，鞍金具の一部分だけを手に入れたものと思われ，汐井掛遺跡の周辺では未だ騎馬の風は定着していなかったと推測される。　（児玉）



第136図　池の上6号墳出土馬具（½　橋口報文より転載）

註 1 小田富士雄「鉄器」『立岩遺跡」所収 1977 立岩遺跡調査委員会

36号甕棺出土のものは素環頭のつかないものとして報告されている。筆者が実測した折に素環頭がつくように観察され，飯塚市教育委員会の許可を得てX線透視を行ったところ，素環頭のつくことが判明した。

28号甕棺出土の素環頭刀子については福岡県文化課橋口達也氏の御厚意で図面を拝借した。記して感謝致します。

2 永井昌文・小田富士雄・橋口達也「福岡県中間市上り立弥生墳墓群調査報告」 九州考古学33・34 1968

橋口達也氏の御厚意で素環頭刀子の図面を提供して頂き，種々の御教示に対し，深く感謝致します。

3 「朝倉町大字須川山田石棺」『埋もれていた朝倉文化』所収 1969 福岡県立朝倉高等学校史学部

4 山中英彦「郷屋遺跡」『北九州市の埋蔵文化財」所収 1976 北九州市教育委員会

掲載した素環刀はは田頭氏が調査した折に箱式石棺墓から出土したものである。調査に関する状況は山中英彦氏に御教示頂いた。

1979年調査の分については，調査担当者の栗山伸司氏に種々御教示頂き，氏と藤丸詔八郎氏の御厚意で地名表に入れることができた。

三氏には心から感謝致します。

5 1968年に戸畑高校教諭山中英彦氏（当時小倉高校教諭）の指導のもとに小倉高校考古学部が調査した際に箱式石棺墓5基，石蓋土壙墓2基が出土し，そのすべてが副葬品を持ち，半壊した箱式石棺墓の副葬品は碧玉製管玉だけであったが，他の埋葬施設には1～2本の鉄製品が棺外および棺内に副葬されており，鉄製品の総数は鉄鉋6，刀子1摘み鎌1であった。他に刀子を副葬した箱式石棺墓にはガラス製丸玉50個が頭部に着装されていた状態に近い状況で出土している。更にこの遺跡の調査の契機となった，畑の庭園化工事中に削平されて赤色顔料の付着した棺材や土砂の散乱する中から，山中氏によって鉄鏃，刀子，切先が剣型になった刀の小片，大型の不明鉄器等多数が採集され，現在，小倉高校に保管されている。せまい範囲での調査・工事であったが，埋葬施設の数に対して鉄製品の出土総数が極めて多く，注目される遺跡である。

6 田頭喬一「長行小学校庭の原始遺跡」『西谷―その歴史と民俗―』所収 1965 小倉郷土会

7 長嶺正秀・水島稔夫・田崎博之「福岡県行橋市前田山遺跡の調査」考古学ジャーナル №156 1978

前田山遺跡については，同調査会の長嶺正秀氏に入念な御教示と素環刀の実測図を提供して頂き，本報告書に使うことを快諾された。実測図は九州大学文学部水島稔夫氏の作成されたものである。両氏の御厚意に心から感謝致します。

8 長嶺正秀『下稗田遺跡調査概報』 1980

整理中であるにもかかわらず，素環刀の実測と本報告書への掲載を快諾して下さった長嶺正秀氏，福岡県文化課酒井仁夫・木下修の三氏に感謝致します。

9 福岡県文化課松岡史の御厚意で資料を採用させて頂いた。素環頭刀子の原図は県文化課柳田康雄氏によるものである。両氏の御厚意に感謝致します。

10 9に同，なお，下記の報告書がある。

吉田基衛「松山遺跡」『松ケ迫遺跡』所収 1980 糸田町教育委員会

11 酒井仁夫「B地区の調査概要」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』―XXⅧ―所収 1979 福岡県教育委員会

12 柳田康雄編『三雲遺跡』第1集 1980 福岡県教育委員会

13　1に同

14　1に同

15　中原志外顕・石井忠・下條信行「丸尾台遺跡調査報告」『宝台遺跡』所収　1970　日本住宅公団
採土工事中に発見されたため，素環刀を出土した甕棺の時期は明確ではない，他遺跡の素環刀の出土例から後期前半～中葉におかれているが，立岩遺跡出土例が時期的にさかのぼる例としてあり，中期後半頃までのぼる可能性があるとし，所属時期については幅を持たせている。

16　岩崎光・松岡史・小田富士雄『亀ノ甲遺跡』　1964　八女市教育委員会

17　金関文夫・平井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』所収　1961　日本考古学協会

18　2に同

19　坂田邦洋「トウトゴ山墳墓群」『対馬の遺跡』所収　1975　長崎県教育委員会

20　註1文献237頁

21　森浩一「鉄」　1974　社会思想社

22　川越哲志「金属器の製作と技術」『古代史発掘』4所収108頁　1975　講談社

23　川越哲志「金属器の普及と性格」『日本考古学を学ぶ』2所収　86頁　1979　有斐閣

24　1に同
岡崎敬「鏡とその年代」『立岩遺蹟』所収　1977　立岩遺跡調査委員会

25　木下之治「付・椛島山遺跡」『勇猛山古墳群』所収　1967　佐賀県教育委員会
小田富士雄「佐賀県椛島山石棺の遺物」古代学研究51　1968

26　17に同

27　原田文六「福岡県糸島郡平原弥生古墳調査概報」　1965　福岡県教育委員会
原田大六「実在した神話」　1966　学生社
後者の文献の183頁に素環頭太刀の写真が掲載されている。

28　7に同

29　4に同

30　舶載品か国産品かを判断する規準があるわけではない。本文中にも若干述べたが，筆者は素環頭刀子・刀の多くは舶載品であろうと推測している。今後の中国や朝鮮での研究の進展，日本出土例を含めての理化学的分析が行なわれることを期待し，その結果を生産地推定の手がかりとした方がより正確を期せると思われる。

31　中国科学院考古研究所編『洛陽焼溝漢墓』　1959　科学出版社

32　橋口達也「初期鉄製品をめぐる二・三の問題」　考古学雑誌60―1

33　金関文夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』所収　1961　日本考古学協会

34　橋口達也「佐賀県三津永田遺跡出土の鉄器―追補―」　九州考古学49・50　1974

35　井上裕弘「山陽新朝線関係埋蔵文化財調査報告」第7集　1978　福岡県教育委員会

36　柳田純孝編「小笹遺跡発掘調査報告書」　1973　福岡市教育委員会

37　馬田弘稔『栗田遺跡（D・E地区）』　1975　三輪町教育委員会
鉄鏃については未公表資料であるが調査担当者馬田氏の御厚意で実測図を使用させて頂き，遺跡の概要・出土土器について御教示を受けた。

38　中牟田賢治・中間研志「樋田山遺跡の調査」『九州縦貫自動車道係埋蔵文化財調査報告』　VI
1975　福岡県教育委員会

39　岡崎敬「日本における初期鉄製品の諸問題――壱岐ハルノツヅ，カラカミ遺跡発見資料を中心とし

て」考古学雑誌42—1　1956

40　藤田和裕「第12試掘壙」『原ノ辻遺跡』Ⅲ所収　1978　長崎県教育委員会

41　坂田邦洋「木坂石棺群」『対馬の考古学』所収　2976

坂田氏はこの鉄鏃を両丸造柳葉型式とされているが，氏の掲載図と写真図版によれば無茎長三角型式の鉄鏃と判断される。

42　鏡山猛・岡崎敬・森貞次郎・小田富士雄他「対馬」　1969　対馬遺跡調査委員会

43　寺島孝一「鉄鏃・土製品・石製品」『京都府舞鶴市桑飼下遺跡調査報告』所収　1975　平安博物館

44　児玉真一「福岡県京都郡豊津町発見の箱式石棺墓と副葬品」九州考古学55　1980

45　1に同

46　羽田野光洋「松木遺跡の調査」『大野原台地の遺跡』所収　1978　大野町教育委員会

47　鏡山猛「石蓋土壙に関する覚書」『九州考古学論攻』所収　1972　吉川弘文館

48　「朝倉町名隈遺跡」『埋もれていた朝倉文化』所収　1969　福岡県立朝倉高等学校史学部

49　12に同

50　柳田康雄氏の御教示による。

51　47に同

52　中山平次郎「飯塚市立岩運動場発見の甕棺内遺物」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書書』第九輯（史蹟之部）　1934および小田富士雄註1文献

53　小池史哲「27号甕棺墓」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第9集　所収　1978　福岡県教育委員会

54　4・5に同

55　32に同

56　註32文献に橋口達也氏が伊東昭雄氏の御教示によるとして紹介されている。

57　32に同

58　1に同

59　井上裕弘『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7集上　1978　福岡県教育委員会

60　木下修「鉄鉈」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第12集所収　1979　福岡県教育委員会

61　高倉洋彰「鉈」『宮ノ前遺跡（A～D地点）』所収　1971　福岡県労働者住宅生活協同組合

62　42に同

63　小田富士雄氏は註1文献の中で，幅広の鉈を吉ケ浦型，幅い狭い鉈を立岩型とされている。

64　高橋徹「109号住居跡」『菅生台地と周辺の遺跡』Ⅳ所収　1978　竹田市教育委員会

65　近藤義郎・渋谷泰彦『津山弥生住居址群の研究』津山郷土館考古学研究報告2　1957

66　川述昭人「唐人塚遺跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XⅦ所収　1977　福岡県教育委員会

調査担当者の川述氏によれば，2号墳丘内の12基の埋葬施設相互の時期差はほとんどないと考えられる，とのことである。

67　弥生時代の鉈で断面が浅いU字形を呈するものは現状では北九州を中心に分布しているようで，岡山県沼遺跡や兵庫県会下山遺跡出土の鉈は断面が矩形か，それに近い形で前記両遺跡の報告書掲載図によればU字形の鉈は存在しないようである。すべての資料に当たってみたわけではないが北九州を中心とした地域と中国地方・近畿地方の弥生時代の鉈の断面形はかなり歴然とした違いがあるようで，断面U字型の鉈を〝北九州タイプ〟として一括できそうである。

〝北九州タイプ〟の鉈の下限は唐人塚2号墳で確認されたように少くとも4世紀後半頃までは遺存し，検証を要するがこのタイプの鉈の消長はいわゆる「畿内型古墳」の成立と定着していく過程に関

係がありそうである。

68　岡崎敬・森貞次郎・小田富士雄他『福岡市老司古墳調査概報』　1969　福岡市教育委員会

69　橋口達也『池ノ上墳墓群』　1979　甘木市教育委員会

70　金鍾徹「高霊池山洞第45号墳調査報告」『大伽倻古墳群発掘調査報告書』所収　1979　高霊郡

素環刀地名表

註　①　児玉真一「鉄器」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XXⅧ—所収　1979　福岡県教育委員会

②　酒井仁夫「B地区の調査概要」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XXⅧ—所収　1979　福岡県教育委員会

③　小田富士雄「鉄器」『立岩遺跡』所収　1977　立岩遺跡調査委員会

④　永井昌文・小田富士雄・橋口達也「福岡県中間市上り立弥生墳墓群調査報告」九州考古学33・34　1968

⑤　藤田等・川越哲志「弥生時代鉄器出土地名表」『日本製鉄史論』所収　1970　たたら研究会

⑥　山崎純男「宝満尾遺跡」　1974　福岡市教育委員会

⑦　中原志外顕・石井忠・下條信行「丸尾台遺跡報告」『宝台遺跡』所収　1970　日本住宅公団

⑧　柳田康雄「三雲遺跡」第1集　1980　福岡県教育委員会

⑨　原田大六「実在した神話」　1966　学生社

⑩　柳田康雄氏御教示。出土遺構は支石墓となっているが，同氏によれば箱式石棺墓の可能性があるとのことである。

⑪　「朝倉町大字須川山田石棺」『埋もれていた朝倉文化』所収　1969　福岡県立朝倉高等学校史学部

⑫　岩崎光・松岡史・小田富士雄「亀ノ甲遺跡」　1964　八女市教育委員会

⑬　1960年，当時小倉高校教諭田頭喬氏調査
山中英彦「郷屋遺跡」『北九州市の埋蔵文化財』所収　1976　北九州市教育委員会

⑭　19∠9年に北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が調査を実施し，藤丸詔八郎氏，調査担当者栗山伸司氏の御好意により地名表に入れさせて頂いた。

⑮　田頭喬「長行小学校庭の原始遺跡」『西谷その歴史と民俗』所収　1965　小倉郷土会
田頭氏は本遺跡石棺出土の素環頭剣の寸法を全長25㎝と記され，註⑨文献ではこの素環頭を参考例として引用して全長 24.5 ㎝ とされている。ここでは調査・報告者であられる田頭氏の記述を採用する。後日，実測して正確を期したいと思う。

⑯　前田山遺跡調査会「福岡県行橋市前田山遺跡の調査」　1978　考古学ジャーナル12月号
調査担当者長嶺正秀氏の御好意で，実測図を提供して頂いた。長嶺氏と実測者である九州大学文学部大学院水島稔夫に心から感謝致します。

⑰　1979年下稗田遺跡調査会が調査し，調査担当者酒井仁夫・木下修，長嶺正秀氏の御好意で資料を使わせて頂くことができた。三氏に感謝致します。

⑱　福岡県文化課松岡史氏の御好意で資料を使わせて頂き，柳田康雄氏に実測図を提供して頂いた。両者に感謝致します。

⑲　福岡県文化課松岡史氏の御好意で資料を使わせて頂き，柳田康雄氏に実測図を提供して頂いた。両者に感謝致します。なお，遺跡の詳細については，新原正典編「松ケ迫遺跡」（糸田町文化財調査報告書第1集　1980）に依られたい。

⑳　金関文夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』所収　1961　日本考古学協会

㉑ 橋口達也「佐賀県脊振南麓における弥生社会の発展」九州考古学41～44　1971
㉒ 田平徳栄「鉄器」『二塚山』所収　1979　佐賀県教育委員会
㉓ 木下之治「付，桃島山遺跡」『勇猛山古墳群』所収　1967　佐賀県教育委育会
小田富士雄「佐賀県桃島山石棺の出土遺物」古代学研究51　1968
㉔ 木下之治「妻山石棺遺跡」新郷土２月号（通巻157号）　1962　佐賀県文化会館
㉕ 坂田邦洋「トウトゴ山墳墓群」『対馬の遺跡』所収　1975　長崎県教育委員会
㉖ 国分直一・藤田等「山口県豊浦郡田部・鍛冶屋迫遺跡」日本考古学年報14　1966　日本考古学協会
㉗ 村上忠「第１号箱式石棺墓」『朝田墳墓群Ⅰ』所収　1976　山口県教育委員会
㉘ 辻田耕次「第４号箱式石棺墓」『朝田墳墓群Ⅰ』所収　1976　山口県教育委員会
㉙ 辻田耕次「第13㐀箱式石棺墓」『朝田墳墓群Ⅰ』所収　1976　山口県教育委員会
㉚ 鏡山猛「環溝住居阯論巧」『九州考古学論巧』所収　1972　吉川弘文館

土　器

汐井掛遺跡の墳墓群から出土した土器は極めて少なく，それらは即，墓地群の年代を示すものとして把握できなかった。

墓壙埋土中出土の土器

墓壙埋土中からの出土例は38基の埋葬施設に見られるが，いずれも少片で器形の推定できるものは少ない。器形の推定できたものは高杯の破片が多くそのほとんどは弥生式土器である。高杯の破片には口縁部片と脚部片が多い。口縁部は，杯部の境で割れたものが多く，復元によって，杯部との境いで大きく屈曲し，口縁部が外反するもので弥生時代後半にみられる特徴を示している。脚部も後期後半ごろのものが多く含まれている。土師器は，D169・D171・D169・D213から少片が出土したが，詳細は不明である。埋土中出土の土器は，弥生時代後期後半～終末に属するものが多く，それ以前の特徴を示すものはみられない。

供献用土器　（図版60―１・２）

供献用の土器と考えられるものに，D64北西側・D68北東側の配石から出土した二重口縁をもつ壺形土器（２）と，D219墓壙上面中央から鉄製鋤先とともに出土した直口壺（１）がある。

二重口縁壺は，器高15㎝を測るもので，下段の口縁部にはヘラによる刻目が施されている。胴部の最大径は中位よりやや下にもち底部は丸味をもつ。底部には，ヘラによる隅丸長方形の焼成前の穿孔が行なわれている。

直口壺は器高 9.9㎝を測り，やや内傾して立上がる短い口縁部と，上下に押しつぶされたように丸く膨らむ胴部を持つ。底部はややとがりぎみの丸底である。器壁は全体的に厚く仕上げられている。

二重口縁壺と類似するものはいまのところ出土していない。直口壺は，福岡市野方中原遺跡第６号箱式石棺墓の供献土器の中に類似したものがあり(註１)，古墳時代初頭に位置付られている。汐井掛遺跡の壺形土器は弥生時代終末期と前後する時期のものと推定する。　（池辺）

註１　柳田純孝　『野方中原遺跡調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第30集　福岡市教育委員会　1974

玉　類

汐井掛遺跡の調査を通じて出土した玉類は，勾玉８点・管玉29点・水晶玉10点・ガラス製小玉802（＋２）点・虎珀小玉１点の６種がある。

玉類の供出関係は表16で明らかなように，

◦勾玉だけの副葬のものD47（２）・D176（１）

◦勾玉と管玉がセットで副葬されたもの　D108（勾玉２・管玉３）・D 224（勾玉１・管玉16）

◦管玉だけ副葬されたもの　S10（１）

◦小玉だけ副葬されたもの　D68（323＋α）・D91（327＋α・虎珀小玉１）・D188（90）・S31（27）・１D19（10）

◦勾玉と小玉がセットで副葬されたもの　D74（勾玉１・小玉24）

◦勾玉・管玉・水晶玉がセットで副葬されたもの　D115（勾玉１・管玉９・水晶玉10）

がある。この内出土状態から着装位置が推定できるものは，D74・D91・D115・D118・D 224に見られる。

D74は勾玉１と小玉24のセットで，棺内頭位部床面から検出した。首飾と推定される。一連の糸に通すと約12㎝の長さになる。

D91は小玉 328個が検出された。その出土状態から３群に分かれ，１群は頭位部床面が検出した 203個の玉で一連の糸に通す長さ96㎝となり首回り二重の首飾と考える。ただ木口部近くに分布しているため髪飾の可能性も考えておかねばなるまい。２群・３群は棺内中央部床面両側で検出され腕飾と考えられる。一連の糸に通すと２群（62個）は 26.5㎝，３群（45個）は 20.5㎝を測る。

D 115は異形勾玉１・碧玉製管玉９・水晶玉10セットで副葬され，玉は頭位部の右側から斜めに並んで状態で出土した。勾玉を前面の中心にして，管玉と水晶玉が交互に連らねて使用した首飾と考えられる。

D 188は頭位部床面から検出された。90個の小玉で一連の糸に通すと41.3㎝を測る首飾と考える。

D 224は勾玉１・管玉16のセットで副葬されており，床面床面中央部に集中して出土した。一連の糸に通すと19.5㎝を測り，腕・胸飾として使用されたものであろう。

これらの出土例はいずれも遺体に着装されたまま埋葬されたと考えられる。D 47・D 176・S10の勾玉・管玉だけの副葬例はペンダントとして着装された可能性も考えられる。

他の副葬例と出土状態が異なるものにD68がある。床面のほぼ全面にちらばった状態で２種323個 のガラス小玉が検出された。中には床面から若干浮いた状態で検出したものもある。出土状態から推定して埋葬時に意識的にばらまかれたものと考えられる。

埋葬施設の総数280基のうち玉類が副葬されていたものは，わずかに13基である。このことはこの地域の人々が容易に入手できるものではなく，また日常的に用いられたのではないことが推定できる。

玉類の内勾玉・管玉，ガラス玉は弥生時代後期なって広く分布し，埋葬施設からの出土例も多い。本遺跡の様に他の遺物を伴なわず，土壙墓・本棺墓・箱式石棺墓からの副葬例はその所属時期と決定することは難かしい。ここではD115出土の異形勾玉・水晶玉について他例と比較してみよう。

異形勾玉

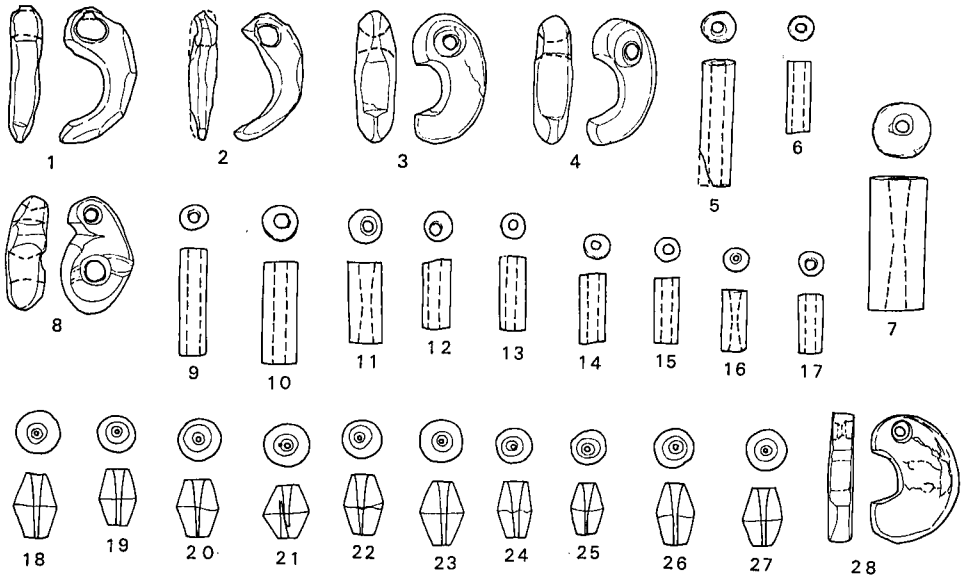
当遺跡から出土した勾玉は8点である。形態的にみると3種に分けられる。

Ⅰは全体的に丸味をもつものでC字形を呈すもの（D108・D176）

Ⅱは全体に扁平なものでC字形あるいはく字形を呈するもの（D74・D224）

Ⅲは異形の勾玉で，楕円形に研磨した石材の上部⅓の所に抉りを入れ頭部と胴部に分け，従来の勾玉に見られる尾部がない。頭部・胴部に面側からの穿孔があるもの　（D115）

Ⅰ・Ⅱの勾玉は 1.6㎝前後の小形で形態からみても弥生期の特徴をそなえているが，Ⅲの異形勾玉の出土例は知られていない。県内に出土例をもとめれば，4世紀末頃に比定される一貴山銚子塚古墳の出土例によく類似している。報文によれば，「長さ 17.7㎜，幅 14㎜，厚さ6.4㎜。縁色半透明の硬玉製で扁卵形の體の中央に 径 3.6㎜の貫孔を穿ち，外周を勾玉の頭尾が連結した形状に加工した珍らしい形のものである。勾玉としての頭部には別に外口径2㎜，内径1㎜の盲孔を両面から穿っているが貫通していない。」（註1）とあり，当列は長さ1.5㎝，頭部幅1㎝，厚さ5㎜を測り，銚子塚の例よりやや小ぶりであり，2孔とも貫通されている点で当



第137図　汐井掛遺跡出土玉類（実大）

1・2　D47出土　　3～6　D108出土　　7　S10出土　　8～27　D115号出土　　28　D74出土

例と異なるが形状そのものはよく類似している。

水晶玉

水晶玉の名称はその形状から次の３種に分類できる。

Ⅰ類　扁球形を呈しナツメの実に形が似たもので，いわゆる棗玉。

Ⅱ類　截頭円錐形を二つあわせた形の玉で，いわゆる算盤玉。

Ⅲ類　截頭角錐形を二つあわせた形の玉で，いわゆる切子玉。

D115から硬玉製異形勾玉１，碧玉製管玉９とともに出土した水晶玉10は胴部の中央に稜線が入るⅡ類の算盤玉である。透明で穿孔はすべて一方から行なわれている。大きさは，最も長いもので8.5㎜，胴部は最大のもので6.1㎜，最小のもので4.3㎜を測り，10個の平均値は長さ7.8㎜，胴部幅5.3㎜で，古墳時代に多くみられる水晶玉に比べて小さい。

弥生時代の水晶玉については副島邦弘氏が高木遺跡の報告の中で類例をあげ考察されている。（註２）ここでは墳墓の副葬例を中心にふれ，当遺跡の水晶玉と比較してみよう。

墳墓の副葬例としては現在６遺跡28例がある。

１　福岡県鞍手郡鞍手町高木遺跡（註３）

７号土壙墓から碧玉製管玉11とガラス小玉とともに床面から出土している。出土した水晶玉２個はⅠ類の棗玉で長さ2.2㎝，最大胴部は1.8㎝を測る大きなもので，穿孔は両行から行なわれている。時期は弥生時代中期中葉に考えられており水晶玉では最も古い時期のものである。

２　福岡県春日市日佐原遺跡（註４）

E墓地群第15号石蓋土壙墓から四葉座長宜子孫内行花文鏡（径13.5㎝）・小形の硬玉製勾玉２個，細身の碧玉製管玉14とともに水晶製の玉が21個出土している。内わけは水晶棗玉８・水晶算盤玉11・水晶小形丸玉２である（註５）。E墳墓群の時期は弥生時代後期，一部古墳期のものを含むと推定されている。

３　長崎県上県郡峰町木坂遺跡（註６）

木坂遺跡の箱式石棺墓からは多くの青銅器類とともにⅢ類の切子玉が出土している。長さ11.8㎜，幅11.5㎜を測る。時期は弥生後期終末のものである。

４　長崎県上県郡上対馬塔ノ首遺跡（註７）

第２号石棺墓棺内から水晶棗玉が１個出土している。0.6㎝の長さの小形勾玉で中央部に鈍い稜がある。時期は弥生後期前半とされている。

５　岡山県倉敷市西尾辻山田遺跡（註８）

北地点土壙墓10から青銅断片，小形硬玉製勾玉・碧玉製管玉・ガラス小玉とともに，水晶玉が３個出土している。形は汐井掛のものと類似している。時期は弥生時代終末とされている。

墳墓の中で最も古いものは高木Ⅰ類で中期中葉に位置付けされ，塔ノ首Ⅱ類は後期後半，他

は後期終末に上限が考えられている。

生活遺構からの出土例はⅡ類の玉は，春日市大字上白水字門田・辻田の門田遺跡辻田地区第18号竪穴住居跡の床面からの出土例がある。時期は後期終末のものである。（註9）

その他の出土例として三雲遺跡八龍Ⅰ—18の古墳時代初頭の住居跡群の東側隅の不整土壙から，小形の硬玉製勾玉1個・細身の碧玉製管玉6本とともにⅡ類の水晶玉が4個出土している（註10）。汐井掛のものと類似するがやや小ぶりで水晶の質がよい。

現在のところⅡ類の水晶玉の上限は塔ノ首の弥生時代後期前半におかれ，下限を三雲遺跡の古墳時代初頭とすることができる。福岡県下では弥生時代後期終末から古墳時代初頭に出土しており汐井掛の水晶玉もこの時期におかれるものと推定できる。

九州においては現在のところ弥生時代の水晶玉作工房跡は確認されていない。しかし三雲遺跡仲田Ⅰ—16からは水晶の原石が3個出土しており興味深い（註11)。古墳時代初頭の例としては松江市平所遺跡で確認され，玉作工程も理解できる遺物も出土している（註12）。

註 1 小林行雄・有光教一・森貞次郎「一貫山銚子塚古塚の調査報告書」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第16輯』1952 福岡県教育委員会

2 副島邦弘「福岡県鞍手郡鞍手町所在高木遺跡の調査『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XⅢ—』1977 福岡県教育委員会

3 註2に同じ

4 鏡山猛・渡辺正気「福岡市日佐原の弥生時代の墓地」『日本考古学協会第24回総会研究発表要旨』1959

鏡山猛 「環溝住居址論攷」『九州考古学論攷』 1972

5 九州歴史資料館渡辺正気氏教示 日佐原E—15号出土遺物は現在所在が不明である。汐井掛遺跡の水晶算盤玉を見ていただいた所，非常によく似ているが日佐原の算盤玉は本例より少し短い印象をもっておられた。

6 坂田邦洋『対馬の考古学』 1976

7 小田富士雄「塔ノ首遺跡」『対馬』 1974

8 間壁忠彦・間壁葭子「辻山田遺跡」『倉敷考古館研究集報第10号』 1974

9 井上裕弘編「門田遺跡辻田地区の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集』1978 福岡県教育委員会

10 柳田康雄氏教示 昭和53年度福岡県教育委員会調査。

11 柳田康雄氏教示 昭和年51度福岡県教育委員会調査。

12 松本岩雄「平所遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書—Ⅰ—』1976 島根県教育委員会

鏡

汐井掛遺跡で出土した鏡は，小形仿製鏡１（D186），舶載鏡の内行花文鏡片３（D175・D203・S６）・方格蕨手文鏡（S４）・飛禽文鏡片（D28）の計６点である。

舶載鏡で鏡片副葬されていたものは４点ある。この内D175・D203出土鏡は棺内副葬で頭位部床面から検出した。D28出土鏡は棺外副葬で，二段掘込の木棺墓の一段目墓壙底から検出した。S６出土鏡は棺外の副葬で，頭位蓋石の南側の粘土目張り中から検出した。

完鏡を副葬されたものはS４の棺内から検出した舶載鏡と，D 186の棺外副葬の小形仿製鏡の２点である。S４出土鏡は，鏡本体のほとんどが頭位上部に置かれ，縁の一部が足位側から検出した。蓋石及び上部の標石は破壊を受けた形跡がないこと，鏡の割れ目が磨滅していることから考えて，埋葬以前に二つに分割されていたことは明らかである。D 186出土鏡は他の棺外副葬とは異なり，墓壙上面の標石面と同レベルから出土し，埋葬後できたと想定される低いマウンド上に副葬されたものと考えられる。

以上の鏡はいずれも先述のように遺構を伴っており，鉄器とともに当遺跡の墓地群の年代を明らかにする上で重要な位置を示すと考えられる。

小形仿製鏡

D 186出土鏡は，外側から幅広の平縁とその内側に櫛歯文帯・双線に鋳出された花文帯・鈕からなり，面径7.27cmを測るものである。本鏡の特徴は，双線５花文からなる内行花文帯とその外側をめぐる斜行というより直行に近い櫛歯文帯にある。現在のところの鏡と同様の文様構成を示すものはない。

小形仿製鏡のうち，もっとも多いのは内行花文を主文様とするもので，本鏡もこれに属する内行花文は，小田富士雄・高倉洋彰氏によって次のように分類されている（註1）。

Ⅰ式　周縁が高く狭縁で，左捩りの細目斜行櫛歯文帯の内側に浮彫りの内行花文帯をめぐらすもの。

Ⅱ式　周縁は低く広縁で，粗目斜行櫛歯文帯の内側に内行花文帯をめぐらすもので，A類の浮彫りのものと，B類の弧線表出のものとがある。

Ⅲ式　Ⅱ式B類の系統で，やや異なるもの。

に分けられ，Ⅰ・Ⅱ式は北九州を中心とする出土鏡に，Ⅲ式は北九州以外の地域の出土鏡にみられる。本鏡はその文様構成からⅡ式B類に属するものと考えられる。

しかし，Ⅱ式B類の弧線鋳出の内行花文帯は７個の例が多く，６個がこれに次ぎ，９個が１例あるだけで，現在の出土例の中では５花文を有するものは本例だけである。本鏡は花文数の減少により，一個の花文が大きくなり，当然のことながらその弧の中心は鈕にせまり，円座は抽

き出されていない。

福岡県内で墳墓出土例は，13例を数え，すべてⅡ式の仿製鏡である。この内B類に属するものは，

1. 粕屋郡粕屋町酒殿箱式石棺墓，弥生時代後期後半頃（註2）
2. 朝倉郡朝倉町山田ウラ山箱式石棺墓　時期不明（註3）
3. 浮羽郡吉井町大井箱式石棺墓　時期不明（註4）
4. 田川市位登前方後円墳（箱式石棺）古墳時代前期（註5）

がある。酒殿鏡は花文数を除けば，本鏡とよく類似している。幅広の平縁で，櫛歯文帯は斜行というよりはしろ直行に近づく，その内側に双線で鋳出された6弧からなる内行花文帯をめぐらし鈕も大きめに作られており，円座は認められない。面径も7.2㎝ほどで本鏡とほぼ同大である。

県外の出土例で本鏡と同じ5花文を有すものに石川県昨市次場遺跡出土鏡（第138図）がある。古墳時代初頭の土器包含層中から検出され，面径6㎝を測る鏡で，幅広の平縁をもち，斜行櫛歯文帯の内側に3～4本の弧線を重ね内行5花文としている。これはⅡ式B類の系統で先の分類ではⅢ式に属する。本鏡との類似点は直行に近い斜行櫛歯文で，その方向を通例と逆にする（右捩り）点にあり，花文数とともに非常に注目される。これらの点から本鏡はⅡ式B類からⅢ式への移行を示しⅡ式B類の中では新しい時期に位置付けされるものと考えられる。

第138図　次場・吉崎遺跡出土
小形仿製内行花文鏡

小形内行花文仿製鏡の時期については，先学の諸氏によって集成と検討がなされており，Ⅱ式は後期中頃から終末にかけて盛行し，一部古墳時代に降るものとされ，Ⅲ式については，その地域における古式土師器の時期に属するとされている。

以上のことから考えて本鏡は，弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期のものと推定される。

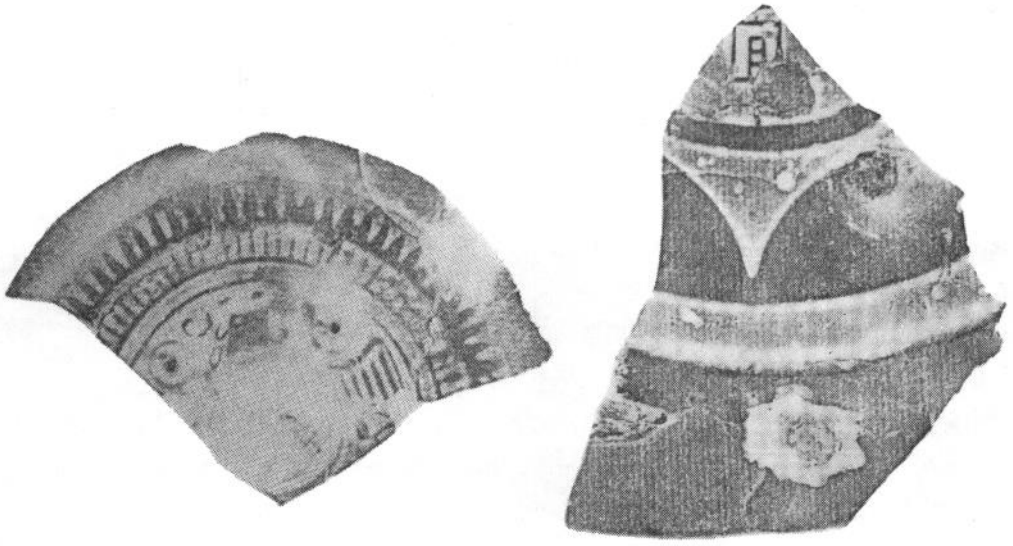
漢 式 鏡

汐井掛遺跡から出土した漢式鏡は５面（破片も１面とした）である。漢式は，後漢末期から三国代にわたるものである。鞍手郡内，犬鳴川流域においては漢式鏡の出土例は始めてのものである。ただ宮田町鶴田（あるいは磯光）から長宜子孫内行花文鏡が出土したと伝えられるが（註6），遺跡の詳細は不明である。

出土遺構は，土壙墓から１面（D203），木棺墓から２面（D28・D175），箱式石棺墓から２面（S４・S６）である。

鏡を出土した埋葬施設は，分布的に見ると２ケ所にまとまって存在する。墳墓群は前述のように４ラインを境に東西に大別され，その中の西半部B－５区を中心とする１群に２面，東半部C－２区南東側・D－２区北側を中心とする１群に３面出土している。これらの埋葬施設は墳墓群の全体の構成からみて，東側・西側の１グループに存在し，この両グループに狭まれた他のグループには鏡をもつ埋葬施設はなく，鏡を所有する墳墓の在り方は扁在している。鏡を副葬した埋葬施設の構造は他と極わだった点は認められない。ただ箱式石棺墓の構造では他の成人棺に比べてやや丁寧に造られた印象をもつ。

漢式鏡は，長宜子孫系内行花文鏡３面と飛禽文鏡１面・方格蕨手文鏡１面である。



第139図　飛禽文鏡片・内行花文鏡片

内行花文鏡

D175・D203・S 6から出土した鏡片で，前二者は棺内副葬，後者は棺外副葬である。

D175出土鏡

鉋1本とともに出土した，長さ約4.5㎝，幅約2.5㎝ほどの縁部片で，内側に直行する櫛目文が残る。面径は復原から約18㎝前後のものと考えられ，黒淡色を呈し，鋳あがりは良い。大部分を欠くもので，鏡式の断定はできないが，斜縁をなす縁部及び櫛目文から，鈕座の四葉間に長宜子孫の銘を有する鏡式と推定される。

D203出土鏡

鈕・内区・外区の大部分を欠く約⅛の片である。残存部は平縁と素文帯・花文帯の一部であるが，復原によりほぼ全体の文様構成が推定できる。復原面径約16㎝程で8花文で構成する花文帯をもつ。鈕・鈕座については不明であるが，他の文様構成からみて蝙蝠形鈕座を有するものと考えられる。

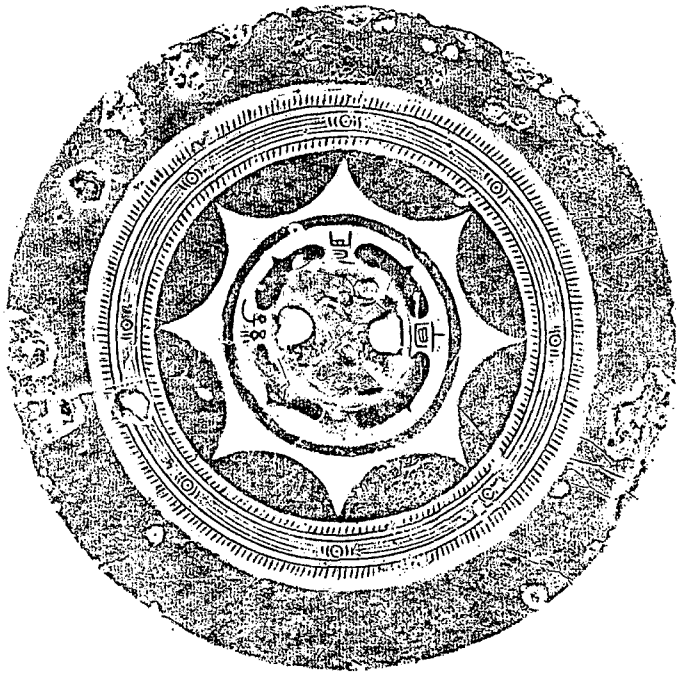
S 6出土鏡

鏡は細片の状態で出土した。残存部は平縁・素文帯・花文帯・平頂素圏帯の一部で約⅙の片である。復原によりほぼ全体の文様構成を知ることができる。面径約16.9㎝を測る内行8花文鏡でD 203出土鏡とほぼ同様の文様構成と考えられる。鈕・鈕座の部分はなく詳細は不明であるが，「宜」の字が残り，蝙蝠形鈕座の間に「長宜子孫」の銘が配いされていたと考えられる。

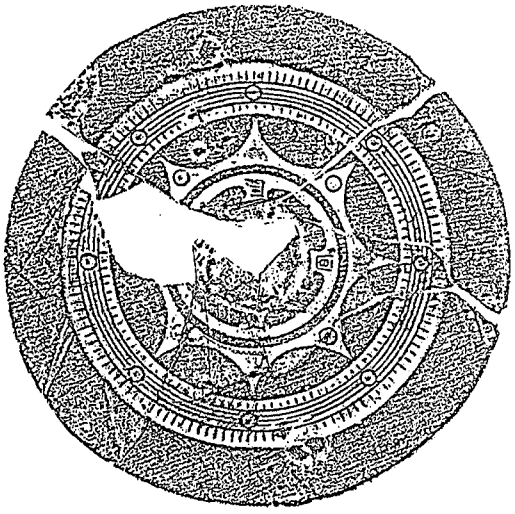
D175出土鏡は，四葉座鈕を有する内行花文鏡と推定される。径18㎝前後を測る内行花文鏡の文様構成は次の二種が多く見られる。内側から鈕―四葉鈕―櫛目文帯―素圏帯―内行花文帯―櫛目文帯―斜角文帯―櫛目文帯―平縁からなるものと，素圏帯の内側に櫛目文帯のつくもの。前者は16㎝以上，とくに20㎝を越える大形に多くみられる。後者は径17㎝～13㎝の中形のものに多くみられる。前者の福岡県における出土例は，京都郡勝山町上所田石蓋土壙墓出土鏡片(註7)，後者の例では，福岡市南区上日佐日佐原E群第15号出土鏡(註8)，嘉穂郡碓井町飯田笹原箱式石棺出土鏡(註9)，田川市伊田町伊加利出土鏡（第140図）(註10)，行橋市稲童石並出土鏡（註11）が知られている。本鏡は平縁や櫛目文の特徴から伊加利鏡とほぼ同様の鏡式と考えられる。

四葉座内行花文鏡は，洛陽焼溝漢墓の出土例によれば（註12），第五期にあらわれており，本鏡は後漢中期の作と想定される。

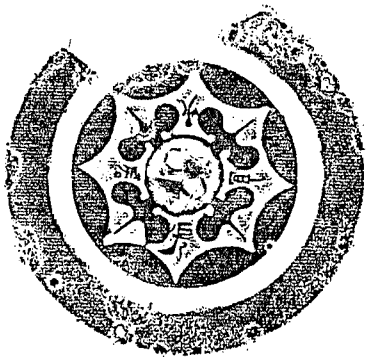
D 203・S 6出土鏡は，蝙蝠形鈕座を有す内行花文鏡と考えられる。外帯が素文帯をなし，中帯に平頂素圏をもつ例で，福岡県からの出土例では嘉穂郡頴田町西佐与谷頭出土鏡（註13）が知られる。また中帯の平頂素圏がなくなった鏡式では，行橋市前田山遺跡出土鏡（第142図）がある（註14）。谷頭鏡，前田山鏡はは径12㎝前後を測る小形のもので，D203・S 6出土鏡はともに16㎝前後に復原され他の出土例に比べて大形のものである。



第140図　伊加利出土鏡（½）



第141図　日佐原出土鏡（½）



第142図　前田山出土鏡（½）

このことからD175出土鏡は，D203・S６出土鏡よりも古い鏡式であることが考えられる。

蝙蝠座内行花文鏡は，洛陽焼溝漢墓の出土例によれば，第五期（後漢中期）にあらわれ，第六期（後漢晩期）に盛行するとされ，本鏡も後漢中期から晩期の作と想定される。

方格蕨手文鏡

S４から出土した。ほぼ完形で，面径8.9㎝を測る。内区は鈕を方形格で囲み，方形格四辺に「T」字形をおき，方形格の角には細線で表出された蕨手文を２個背中あわせにならべ計８個を配している。さらに櫛目文，鋸歯文帯があり縁につづいている。

現在のところ本鏡と同様の鏡式を示すものは出土例がない。「L」・「V」を省略する鏡式は，洛陽焼溝漢墓の出土例によれば，第五期（後漢中期）に２例の出土例が知られる。第六型銅銅鏡（規矩鏡）の第三式のもので，文様に関して見れば細部においてやや異なる程度で，面径も点からも類似している。しかし本鏡は，円座に方形格角に向った短い突起があり，縁は三角縁に近い特長を示し，方格規矩鏡の鏡式では，もっとも新しいものに属すると考えられる。鋳造の時期としては，後漢末から三国初期にかけてのものと推定される。

飛禽文鏡

D28から出土した鈕を含むほぼ½ほどの片で三角縁四乳飛禽文鏡片である。鈕のまわりに一圏をめぐらし，乳座間に飛鳥の図柄が半肉彫で抽き出されている。外区は素文帯，そのまわりを櫛目文帯，さらに鋸歯文帯があり，三角縁へとつづく，復原面径約80㎝を測る。全体に磨滅がみられる。

飛禽文鏡は珍らしい鏡式で，現在のところ本鏡と同鏡式の出土例は知られていない。類似するものでは，古墳からの出土で京都府成陽市上大谷六号西墳出土鏡がある。面径9.6㎝を測り，斜縁鋸歯文帯の外区をもつもので飛鳥文は薄肉彫に表現されている（註15）。線描きされたものでは，湖南省随県唐鎮三号墓出土鏡・湖南省長沙市花亭八号墓出土鏡（註16）などがある。年代をきめるものがないが本鏡は，後漢代は類例はなく，三国時代の作と推定される。

以上，小形仿製鏡，舶載鏡の鋳造時期についてみてきた。次に副葬時期についてふれてみたい。汐井掛遺跡で鏡の出土した土壙墓・木棺墓・箱式石棺墓からの伴出遺物は，D 175の内行花文鏡とともに出土した鉇が一点出土しただけで時期を確実におさえられる土器を伴っておらずその時期の決定は困難である。

小形仿製鏡は，Ⅱ式B類で，後期中頃から終末にかけて盛行するものに属するが，本例はその中でも新しい形式で弥生時代終末期とするよりも，古墳時代初頭に降る可能性が強い。

内行花文鏡は，弥生終末頃に副葬される可能性が考えられるが，現在の所弥生時代のものだという確かな根拠をもつ例は知られていない。終末の時期を上限とされているものに，日佐原

E—15石蓋土壙墓出土鏡・宮原箱式石棺墓出土鏡・佐賀県二塚山Ⅰ—26号土壙墓出土鏡（註17）・前田山9号箱式石棺墓出土鏡等である。本報告が明らかにされていないため詳細は不明であるが，前田山遺跡の墳墓群は「それらに伴うと考えられる祭祀遺構出土の土器から弥生時代後期後半に比定される。」（註18）とされ弥生時代のものとして可能性が強い例として注目される。

汐井掛遺跡出土内行花文鏡は，いずれも鏡片で，折損面に磨滅がみられ，S6出土鏡は割れ口を丹念に磨かれており，折損後の長期にわたる使用が認められる。

福岡県内での鏡片副葬の例は現在のところ汐井掛遺跡の4例を含めて13遺跡16例がある。このうち内行花文鏡は7例で，古墳以外の墳墓，土壙墓・箱式石棺墓・石蓋土壙墓から出土した例は，汐井掛の3面と，京都郡勝山町上所田出土鏡(註19)，朝倉郡朝倉町山田後山出土鏡(註20)がある。上所田鏡は石蓋土壙墓からの出土で，径19cmほどに復原される。四葉座内行花文鏡の鈕を含む内区の¼ほどの片で折損部は磨滅されている。他の石蓋土壙墓から三角縁鳥文鏡が出土している。後山鏡は箱式石棺墓からの出土で，四葉座内行花文鏡は約14.9cmに復原できる⅕ほどの片である。他の箱式石棺墓からⅡ式B類の小形仿製鏡が出土している。いずれも年代を決定ずける確実な遺物は伴っていない。共同墓地を形成する埋葬施設の副葬例の時期を，そく弥生時代後期・終末とするには確実な資料がとぼしい。副葬された鏡片には磨滅がみられ，特にS6は丹念に磨かれている。折損後の長い間の使用と伝世が考えられ，埋葬時に至るまで期間をかなり長期に見込んでおく必要がある。以上のことから汐井掛遺跡の内行花文鏡は，後漢中期から晩期の作と考えられ，その舶載時期は，後期終末頃と推定されるが，墓地を形成した「世帯共同体」が配布ないし供給を受け，副葬された時期は古墳時代初頭まで降る可能性が強い。

方格蕨手文鏡と類似するものは，現在のところ副葬例は知られておらず，時期で決定する資料はない。しかしその鏡式からみて，後漢末～三国初期の作と推定され，舶載の時期は弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられ，副葬された時期は古墳時代初頭と思われる。

飛禽文鏡は方格蕨手文鏡と同様に新しい鏡式で，中国においても確実な年代はおさえられていないが，三国代の作と推定される。日本における副葬例としては，前述した大谷六号西墳出土鏡にもっとも類似している。このほか同鏡式の例として数例あるが（註21），いずれも，古墳時代の副葬例で，共同墓地からの出土例としては最初のものである。本鏡の舶載副葬の時期は方棺蕨手文鏡と同時期か，やや降るものと考えられる。

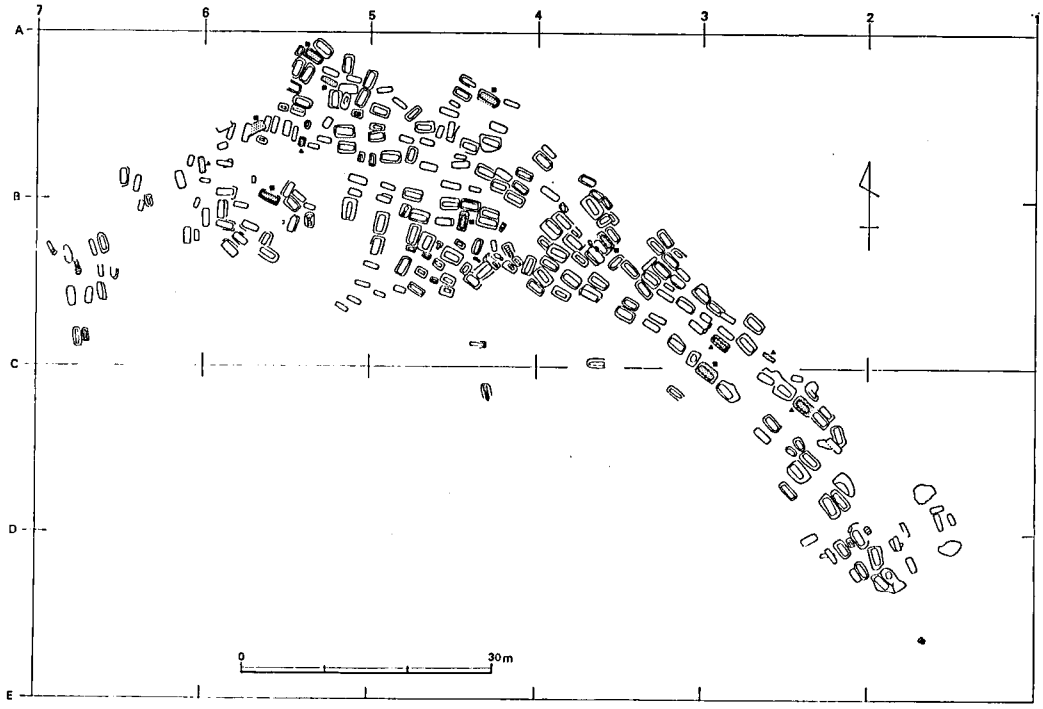
以上，鏡の鋳造・舶載・副葬時期についてみてきた。それを整理すると次の関係が推測できる。

D186出土鏡

D175出土鏡 ⟶ D203・S6出土鏡 ⟶ S4出土鏡 ⟶ D28出土鏡

（池辺）

註 1 小田富士雄 「日本で生まれた青銅器」『大陸文化と青銅器』古代史発掘5 講談社刊 1974
高倉洋彰 「弥生時代小形仿製鏡について」 考古学雑誌58—3 1972
2 高倉洋彰 同
3 柳田康雄氏教示 『埋もれていた朝倉文化』所収 福岡県朝倉高等学校史学部 1969
4 註2と同じ
5 青木庄一郎 「豊前猪位金村位登古墳」『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第9輯』 1934
6 清賀春人氏蔵
7 定村貴二・渡辺正気 「福岡県京都郡勝山町上所田の石蓋土壙墓群」 九州考古学7・8 1959
8 鋳山猛・渡辺正気 「福岡市日佐原の弥生時代の墓地」『日本考古学協会第24回総会研究発表要旨』 1959 第141図は松岡史氏提供による。
9 藤田等 「嘉穂地方史先史編』 1973
10 田川市史上巻 1974 第140図は柳田康雄氏手拓による。
11 註2と同じ
12 中国科学院考古研究所編『洛陽焼漢墓』 1959 科学出版社
13 註9と同じ
14 前田山遺跡調査会「福岡県行橋市前田山遺跡の調査」 1978 考古学ジャーナル12月号
第142図は柳田康雄氏手拓による。
15 田中琢 「古鏡」日本の原始美術8 講談社 1979 P.74
16 樋口隆康 「飛禽鏡」『古鏡』 新潮社 1979 P.204・205
17 高倉洋彰 「漢式鏡」『二塚山 佐賀東部中核団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』 1979
佐賀県教育委員会
18 註14に同じ
19 註7に同じ
20 註3に同じ
21 註16に同じ



第143図　舶載品を副葬する埋葬施設（▲は鏡、■は鉄器を示す）

舶載遺物から見た汐井掛遺跡とその下限

汐井掛遺跡はA・B両地区にわかれ，大規模な墓地であるA地区で 280基，規模的には小さなB地区で24基の埋葬施設を検出した。副葬品・着装品を有するものはA地区34基，B地区4基で，このうち，鉄製品を持つものはA地区20基，B地区4基である。その種類は武器・馬具・農具・工具におよび，中には舶載品と推定されるものが含まれている。それらは後漢末～三国の作と思われる鏡5面（破片も一面とした），素環頭刀子・刀7本，茎の細い刀子1本（図版65，第図―1，D76出土），馬具（しおで1対，D 200出土）で，あるいは，B地区D8，D14，A地区D35出土の茎が細く身幅の広い刀（図版66，註1）も，現状では報告例がないようであるが舶載品と考える余地は残されている（註2）。

舶載品のうち特に鏡はその鋳造時期が割と明確で，埋葬施設に副葬された時期の上限をおさえることができ，また，漢代に流行した素環刀類についても，前節で推定したように，鏡との関係でおよその舶載時期を知ることが可能である。よって，舶載鉄器や鏡の面から汐井掛遺跡の性格とその営造時期，とくに下限について考えてみたい。

A地区において，舶載鉄器と推定されるもの，舶載鏡を検出した埋葬施設は13基で，方格規矩蕨手文鏡を出土したS6の2基の箱式石棺墓をのぞいて，他はすべて木棺墓・土壙墓からの

出土である。これらは墓地全体の中で割と散漫なまとまりを見せながら，グループ分けができそうな在り方を示している。すなわち，D－2区北半，C－2区南半の一群（Aグループ－D28・D37・C4・C6），C－3区北半（Bグループ－D76），C－4区北半（Cグループ－D109），B－4区（Dグループ－D143），B－5区を中心とする一群（Eグループ－D 167・D175・D184・D189・D203）である。そのうち鏡はA・Eの二つのグループにのみ副葬され，両者にはさまれたB～Dグループには見られない。素環頭刀子・刀はAグループに1本あるほかは4ライン以西の墓域の西半部－C～Eグループ－に限られる。茎の細長い刀子はBグループに馬具はEグループに副葬され，舶載品と推定する鉄器は墓域の西半に偏在する。このような在り方は副葬遺物を有する埋葬施設全体の墓地内での在り方と対応し，国産鉄器を含めて鉄器全体の分布も墓地西半部にかたよった在り方を示している。それは，この墓地を形成した背後の集団関係を反映していると想定される。この墓地は，墓道（ハカミチ）と想定される空間部が存在し，副葬品の墓地内での分布の仕方と埋葬施設のまとまり方等を勘案して，4ライン以東のグループ（1群），4ライン以西からC－6区北東部までのグループ（2群），C－6区西半部のグループ（3群）に大別される。1・2群は更に2～3の小群にわかれそうである。その中で1群は小児棺が比較的少い，副葬品・着装品を持つ埋葬施設は1群の総埋葬施設数に見合った数が存在するが鉄器副葬の埋葬施設数は2群と比べてかなり少ない，埋葬施設が整然と配置され，明確な墓道（ハカミチ）としての空間部分が存在する，などの特徴がある。2群は，小児棺が多い，副葬品・着装品を持つ埋葬施設自体が1群より多く，なかでも鉄器を副葬するものが多い，埋葬施設は1群ほどは整然と並ばず，墓道と想定される空白部分は存在するが1群のようには明確ではない，舶載品と思われるものを副葬する埋葬施設が1群より多い，などの特徴を持つ。3群は，あるいは2群に含むべきかもしれないが，小児棺がない，舶載品や武器を持たない，埋葬施設の主軸の方向に統一性がある，などの特徴がある。すなわち，この墓地は「世帯共同体」がいくつか（註3）集まっていわゆる「農業共同体」を組織し，その共同墓地と思われる。よってその下部組織の「世体共同体」での鉄器の所有の在り方の差が，結果として，先述の鉄器の偏在性をもたらしたと想定される。また，鏡については，鉄器以上の偏在性を示し，このことは恐らくこの共同墓地を形成した集団がゆるやかながら大きく二つ程度にわかれ，各々その内部に3～4の「世帯共同体」をかかえこみ，その中でリーダーシップをとった「世帯共同体」の首長の埋葬施設に鏡が副葬されたと推測する。しかしながら，鏡を持つ埋葬施設は必ずしも他の埋葬施設より卓越した構造のものではなく，特に鏡を持つE群の埋葬施設は他のそれよりも貧弱な印象すらうける。この時期にあっては，墓の違いよりも鏡を持つことに意義があったのかも知れず，汐井掛遺跡周辺では首長墓の墳丘化への歩みを明確な形で見出すことはできない。

さて次に汐井掛遺跡を形成した時期について，とくにその下限の問題を中心に見てゆこう。

鉄器の項で先述したように，舶載品と思われる鉄器（ここでは馬具を除く）の舶載時期について，舶載鏡との関係で推定すれば次のように考えられる。

1群ではD35から素環頭小刀が，D76から茎が細くて長い刀子が出土し，D35に接近したS6・S4・D28からそれぞれ，長宜子孫系内行花文鏡片，方格蕨手文鏡，飛禽文鏡片が出土している。長宜子孫系内行花文鏡は洛陽焼溝漢墓の出土例によれば（註4），第五期（後漢中期）に現われ，第六期（後漢晩期）に最も盛行するとされ，本鏡は斜角雷文を省略し，破片のため紐座の形態や反りについては明確ではないが，紐座は〝蝙蝠〟形を呈すると思われ，後漢末期の作と想定される。飛禽文鏡は三国時代にはいってからの作，方格蕨手文鏡もおよそこれらの時代のものと推測され，舶載時期はおそらく3世紀と思われる。先述の素環頭小刀と刀子がこれらの鏡とあまり違わない時期（あるいはほぼ同時）に舶載されたであろうという前提に立てば，それらは弥生時代後期後半以降に相当すると思われる。製作後，舶載されるまでの期間，舶載後埋納されるまでの期間を見込めば，弥生時代後期終末期頃に副葬されたであろうと推測され，降っても古墳時代初期までの幅の中に納まるだろう。

2群ではD175，D203から舶載鏡片が出土しており，長宜子孫系の内行花文鏡片と思われ，その鋳造時期，舶載時期はS6出土鏡と同様に考えてよいと思われる。D175の南・北のD167から素環頭小刀が，D184・189から素環頭刀子が出土し，これらから20～30m東のD143から素環頭刀子が，D109から素環頭小刀が出土している。ここでは三国時代に降る鏡はないが，両鏡片が後漢末期の作であるならば，その舶載時期は3世紀代に降るであろうと推測され，鉄器の舶載についても1群と同様に考えることができれば，副葬時期は弥生時代後期終末を前後する時期から，古墳時代初期頃と推測される。

1・2群でさらに時代が降ると思われる出土品の中に，1群ではD76出土の有茎鉄鏃，1号甕棺が，2群ではD200出土の馬具がある。鉄鏃については先に三雲遺跡出土例との比較で述べたように，布留式併行期のそれに近い形をしている。甕棺も副葬土器等から4世紀代のものである。両者とも他の埋葬施設を切って営まれており，4世紀代においてこの墓地の形成はまだ終焉していないことが知られる。

2群のD200出土の馬具はさらに時期が降ると思われるものである。先述したように北九州での初期の馬具は，現状では5世紀初頭のもので，乗馬に必要な一式が揃っている。汐井掛例はしおでだけで馬具の一部が副葬されているにすぎず，乗馬の風を伴っていたかどうかは疑問である。初期の馬具を出土した，老司古墳は全長90mの前方後円墳（註5），池ノ上6号墳は径8～8.8mの不整形の墳墓であり（註6），汐井掛遺跡とは埋葬型式が異なっており，三者三様で各々の間に歴然とした格差が存在する。よって汐井掛遺跡出土例をそれらと同列にあつかうことはできないが，現状では5世紀初頭をさかのぼらせることはできないだろう（註7）。

汐井掛遺跡はこれまでに見てきたように，弥生時代終末期頃～5世紀代と想定される副葬品

が認められ，馬具の評価に変化がなければ，本遺跡の終焉時期は5世紀代に求めることができるだろう。それは，同一丘陵を利用して形成される汐井掛古墳群のうち，初期の5世紀後半代の竪穴系横口式石室を内部主体とする円墳群が汐井掛遺跡を避けるかのように丘陵下部に構築されていることからも了解されるだろう。そしてこの遺跡を形成した集団は，鏡や素環頭刀子・刀に代表される舶載品を多く持つことに一つの特徴があり，おそらく，周辺の平野部内では卓越した集団であったと思われる。しかし，この周辺の平野での初期前方後円墳は汐井掛丘陵には成立せず，丘陵を一つ隔てた犬鳴川左岸に剣塚古墳が成立し，汐井掛遺跡を形成した集団の首長の政治的な成長は「前方後円墳」に直接的には結びつかなかったのであろう。（児玉）

註 1　酒井仁夫「B地区の調査概要」，児玉真一「鉄器」以上，『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』―XXⅧ―所収　1979　福岡県教育委員会

2　この種の刀は，筆者の知る所では報告例は存在しないようで，その意味では国産品ではない可能性はある。しかし，中国・朝鮮でこの種の刀が存在するか否かについて筆者は知らないので，素環頭刀子などと同列に舶載品と推定することはできない。弥生時代～古墳時代初期に長さ40㎝前後，幅4～5㎝の刀を国内生産し得る技術を獲得していたかどうかについて，積極的に肯定し得る判断材料が乏しい現在，消極的に舶載品の可能性を推定するにとどめておきたい。積極的な論処に欠けるので以下の記述において，この種の刀は舶載品の可能性の強い鉄器から除外し，今後の課題として残しておきたい。

3　1群は視覚的に3あるいは4つの小群にわかれそうで，2群は1群ほどの明確さはないが副葬品をもつ埋葬施設のまとまり具合から少くとも3つの小群にわかれそうである。この小群が「世帯共同体」に対応すると仮定することが許されるならば，ひとつの群は3～4の「世帯共同体」の共通の墓域と判断される。

4　中国科学院考古研究所編『洛陽焼溝漢墓』　1959　科学出版社　P237～P239

5　鏡山猛・岡崎敬・森貞次郎・小田富士雄他『福岡市老司古墳調査概報』　1969　福岡市教育委員会

6　橋口達也『池ノ上墳墓群』　1979　甘木市教育委員会

7　広開土王碑によれば西歴391年に倭軍が高句麗軍と交戦しており，可能性の問題として，朝鮮半島侵略の前進基地である北九州に四世紀代にさかのぼる馬具が発見される余地はある。

汐井掛遺跡の上限

発掘調査では，丘陵部を全掘し，遺跡のほぼ全容を明らかにすることができた。しかし墓地群は調査区外の西側及び南側の緩斜面につづいており，この丘陵に構築された墳墓群は約350基程に達するものと推定できる。

墳墓群の形成された時期の決定については非常に困難であった。犬鳴川流域においては後期終末から古墳時代初頭にかけての墓地及び，生活遺構の発掘例がなくこの実態が明らかにされていない。現状にある。当遺跡は切り合い関係や出土土器が極めて少なく，鉄器や玉類などの副葬品のみで時期を決定するには危険が多い。

しかし幸いにして，副葬品のうちで最も珍重されたと思われる銅鏡が6点出土し，その鏡式

からおよその時期を知ることができた。

鏡は小形仿製鏡1点と漢式鏡5点で，小形仿製鏡はⅡ式B類で弥生時代後期中頃から終末にかけて盛行したものに属する。舶載鏡は後漢鏡で，後漢晩期に盛行する内行花文鏡と，後漢末から三国代に鋳造されたと推定される方格蕨手文鏡と飛禽文鏡である。これらは後期終末から，古墳時期までの時代にもたらされ，副葬されたと考えることができる。

九州における小形仿製鏡，後漢鏡の分布をみると，筑前・豊前を中心としており，前漢鏡の分布よりいっそう拡大されている。後漢鏡を出土した遺跡は，田川郡香春町宮原・行橋市前田山・京都郡犀川町石ケ坪・北九州市岩屋・京都郡勝山町上所田などが知られている。

これらの鏡を入手するには十分な社会的基盤ができていなければならず，汐井掛遺跡の墓域の中にも鏡を所有する以前の段階の埋葬施設が当然存在するとみなければならない。このことは汐井掛遺跡を形成した時期，とくにその上限の問題が重要になってくる。

汐井掛遺跡から出土した土器は，その大半が弥生式土器で，器種の判明したものからみてその時期は，後期後半～終末に属すると考えられ，それ以前の特徴を示すものは出土していない。この点からみて汐井掛遺跡の墳墓群の上限は，後期後半の時期に考えられる。

13基の埋葬施設から出土した玉類は，他の遺物を伴わない，土壙墓・木棺墓・箱式石棺墓からの出土例でその所属時期を決定するのは難かしい。勾玉・管玉，ガラス小玉は弥生時代後期になって広く分布し，その出土例も多く，当遺跡の玉類も弥生時代後期に属するものが含まれていると考えられる。管玉の内，S10出土のものを除けば，一様に細手のもので弥生後期にもっとも多く見られるものである。勾玉はいずれも 1.6㎝前後の小形のもので，全体的に丸味をもつものと偏平なものがあり，いずれもC字形，あるいはく字形を呈し，弥生期の特徴をそなえている。ここで問題となるのはD115出土の異形勾玉と水晶玉であるが，異形勾玉は，4世紀末頃に比定される，一貴山銚子古墳の出土例に類似しており，当例も古墳時代前期に降る可能性がある。しかし水晶玉は，現在のところ福岡県下では，終末から古墳時代初頭のものと推定され，異形の勾玉もこの時代のものと考えたい。ガラス小玉は後期後半頃から多くの出土例が知られており，当遺跡のガラス小玉も後期のものと推定される。D47出土のガラス勾玉は，1.8㎝を測るほぼ同大のものである。表面は風化が著しく残存していないが出土当時勾玉の周辺には土色の変化が認められこれによると 2.2㎝ 前後のものと判断された。福岡県下の出土例では三雲遺跡南小路甕棺出土（中期後半），大南遺跡住居跡出土（後期），樋田山遺跡箱式石棺墓出土（後期）が知られる。前二者は鉛ガラス製である。D47出土例は風化の状況からみてアルカリ石灰ガラスの可能性が強く，後期後半のものと推定される。

以上みてきたように汐井掛遺跡の墓地の形成は後期後半ごろに，B－4区・C－4区周辺から始められたと考える。（池辺）

勝浦41号墳出土の
繊維製品について

布　目　順　郎

勝浦41号墳出土の繊維製品分析結果報告に際して

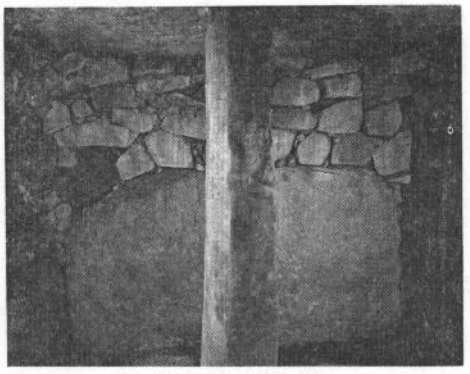
主要地方道若松・芦屋・福岡線の建設に伴う緊急発掘調査が昭和50年度国庫補助事業として昭和50年11月17日から，昭和51年１月26日まで実施された。調査対象となった遺跡は勝浦10号墳と同41号墳（いずれも前方後円墳）である。調査の結果10号墳は前方部にも石室を包蔵する事が判明し，41号墳は，天井石を支える石柱が２本所在するという他に例を見ない構造の石室であることがわかった。41号墳は調査時には既に後円部を半壊されていたが石室は破壊から免れ，また10号墳は当該関係機関と協議の結果，前方部の先端を一部削られたものの，石室はかろうじて破壊されずにすんだ。

勝浦41号墳は宗像郡津屋崎町勝浦字井ノ浦に所在する。墳丘は開墾等により削平されているが，復元すると全長97m，高さ6.8mの大型前方後円墳であり，宗像郡内20数基の前方後円墳のうち最大規模のものである。葺石をもち，埴輪片を検出している。後円部に主体部を包蔵し，南南西方向に開口する単室の横穴式石室である。石室の規模は長さ4.3cm，幅は奥壁部2.5m，玄門部2.15mを削り，いわゆる板子板状の平面形態である。壁はほぼ垂直で1.8m。低い石積みの墓道が開きぎみに3.15m程構築されている。玄門部には一枚の板石を扉状に立てかけて閉塞している。内壁はもちろん，墓道の石積みにまで赤色顔料を塗布している。

石室の中軸線を３等分する位置に，床面を掘りくぼめて立てられた石柱が２本，天井石を支えている。恐らくは我国初見の特異な石室形態と思われる。奥壁寄りの石柱は，これを要として，奥壁と平行に高さ約30cmの屍床をもうけている。石室は古式の横穴式石室であり，その平面形態は，佐賀市関行丸古墳に近似しており，築造年代は５世紀後半に比定される。

盗掘を受けてはいるものの，多数の遺物を検出した。即ち，鏡片７面分（画文帯神獣鏡・内行花文鏡・珠文鏡），鹿角製装具付き大刀40振以上，鹿角製装具付き剣４振，素環頭大刀又は剣１振，銀製鞘尻金具１，鉄鏃300本以上，短甲片，鹿角製装具付き刀子６本，鉄刀子21本，銅釧１，ガラス玉10,565個，ガラス連玉６個，琥珀製棗玉92個，琥珀製勾玉８個，碧玉製管玉４個，翡翠製勾玉１個，瓔珞５片，ガラス管玉１個などである。

当該古墳出土の鏡及び大刀に付着していた繊維製品についての分析を布目順郎先生に依頼し，その結果を頂いてから久しいが，今回，ようやく掲載する機会を得ることができたのでここに発表させて頂き，お詫びとともに感謝の意を表します。　　（福岡県教育委員会）



玄室奥壁（中央部石柱）

勝浦41号墳出土の繊維製品について

福岡県宗像郡津屋崎町大字勝浦所在の勝浦41号墳（5世紀後半期とされる）から，半円方格帯神獣鏡及び大刀に附着して繊維製品が出土した。それらについて調査した結果を以下に報告する。

(1) 半円方格帯神獣鏡面に附着する平織物とその繊維（図版1）

この織物（第1図A）の織り密度は第1表に示すごとく，1cm当たり経糸が200本，緯糸が140本といういたって細密なものであり，かって調査された古墳時代を通じての最大密度のもの（経100本，緯60本）よりも格段に細かい（註1）。これだけでも絹であることはほぼ確実と思われるが，念のため繊維断面を調べてみると，断面の形は経，緯ともに正しく絹のそれである（第1図B，C）。

しかし，繊維の断面計測値は経，緯ともに小さく，特に断面積において，同じ時代の他のいずれの絹製品での値よりも小さい。このことは，あるいは弥生時代の蚕品種が未だに飼育されていたことをあらわしているかもしれない。その反面，機織技術は著しく向上し，細密な織物が織れるまでになっていたと考えられる。

(2) 大刀の鞘外面に附着する平織物とその繊維（図版2）

この織物についても，上記鏡面附着の織物の場合と同様のことがいえる。繊維の断面形よりみて，その材質は絹に相違なく，その断面計測値は鏡面の絹においての値よりもさらに小さい。ただ，1cm当たり経糸数が鏡面の絹とほぼ同数であるのに対し，緯糸数の方は半分以下であり，あたかも畝織りのような外観を呈する（第2図A—C）

(3) 大刀の柄外装の平織物とその繊維（図版3）

この織物（第3図A）は前記の2者に比べてかなり粗いので，一見麻織物かと思われるものであるが，念のために繊維の断面形を調べてみると，経糸については明らかに絹糸である（第3図B）。その断面完全度は前の2つの絹に比べて幾らか大きいが，断面積の方は逆に前の2つの絹におけるよりもさらに小さく，我国では史上最小の部類である。緯糸については繊維断面形はすべて崩壊していて，材質の確認は固より，繊維の断面計測もできなかった。

(4) 大刀の柄外装の一種の繊維製品とその繊維（図版3）

大刀の柄外装には，上記平織物のほかに織物とはみえない一種の繊維製品が附着している（第4図A）。

このものは，円筒形の物体を2本宛繊維束でもって巻き束ねた紐状物の並列であって，おそらくこの紐状物でもって大刀の柄を千段巻きにしてあったものと思われる。

今，その円筒形物体2本を巻いている繊維束の断面を調べてみると，(第4図B)にみるごとく明らかに植物性のものである。その繊維断面形は麻のそれに似ているが，断面の大きさは麻に

比べて著しく大きい。その材質については今のところ判定し難いが，麻の一種ともみられる。

上記(1)〜(3)の平織物の糸に併糸は認められない。したがって，これらは縑ではない。

そのうち(3)に記したものは，その経糸が右撚りに撚られていることから，この織物は紬といえるかもしれない。しかしまた，繰糸によって得た生糸の束を，補強のために撚ったと考えることもできる。

(1)と(2)に記したものは絹というべきものである。

これらの平絹が日本産かそれとも舶載品かについては，その何れとも決め難いが，当時の日本人はこのような織物を作る技術は持っていたとみられるから，日本産としても差し支えはないであろう。

なお，(1)に記した絹の経・緯糸及び(2)に記した絹の経糸の断面に，それぞれ大麻の繊維断面らしいものを幾つも観察した。それらは，偶然混入（もしくは附着）したものか，それとも意識的に交ぜたものかについての判断は難しい。

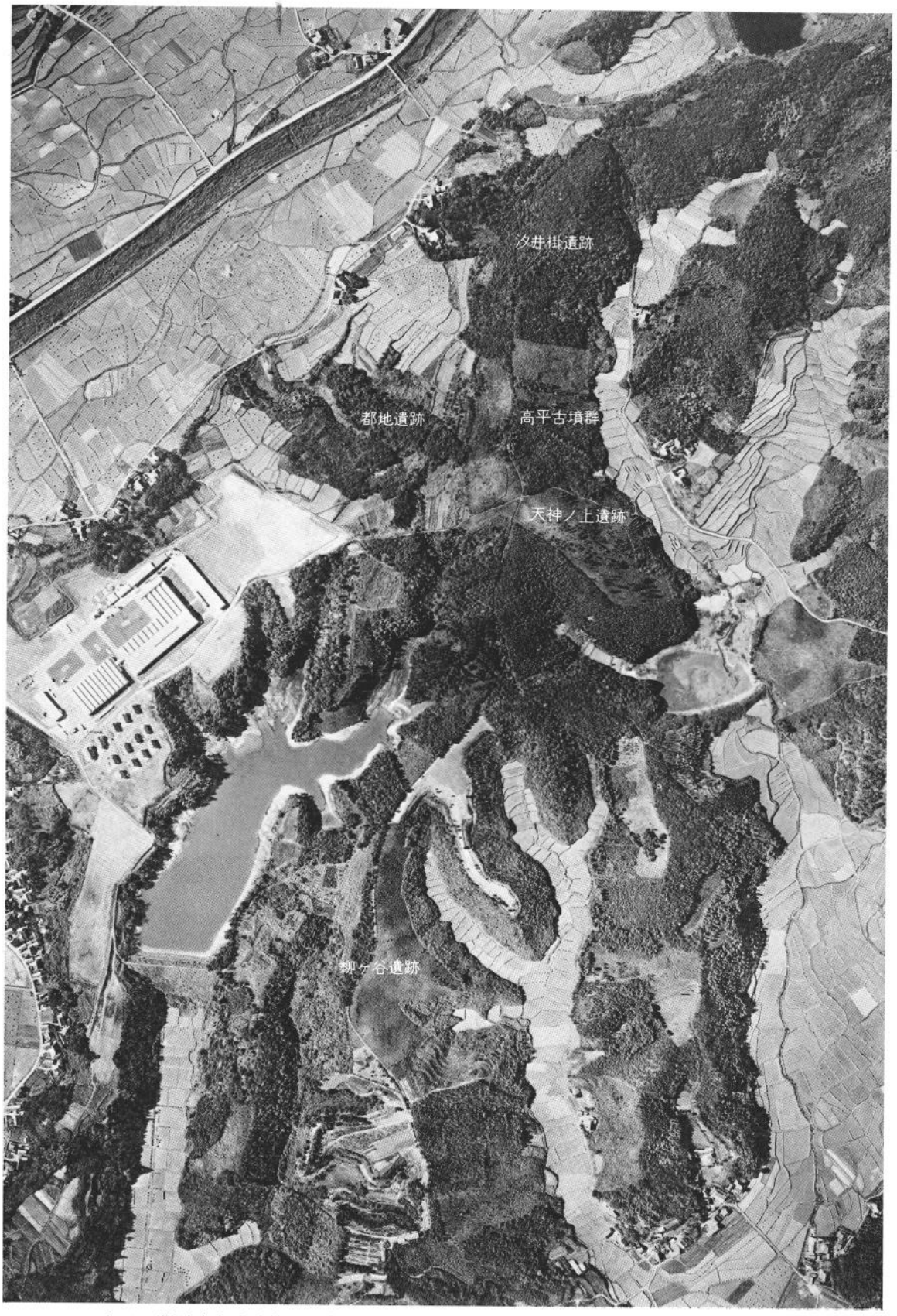
稿を終えるに当たり，貴重な遺物の発掘に当たられ，出土品の一部を研究用に御提供下さった福岡県教育庁文化課の諸氏に対し敬意と感謝の念を表したい。　（布目順郎）

註1　布目順郎「養蚕の起源と古代絹」第4章 1979 雄山閣

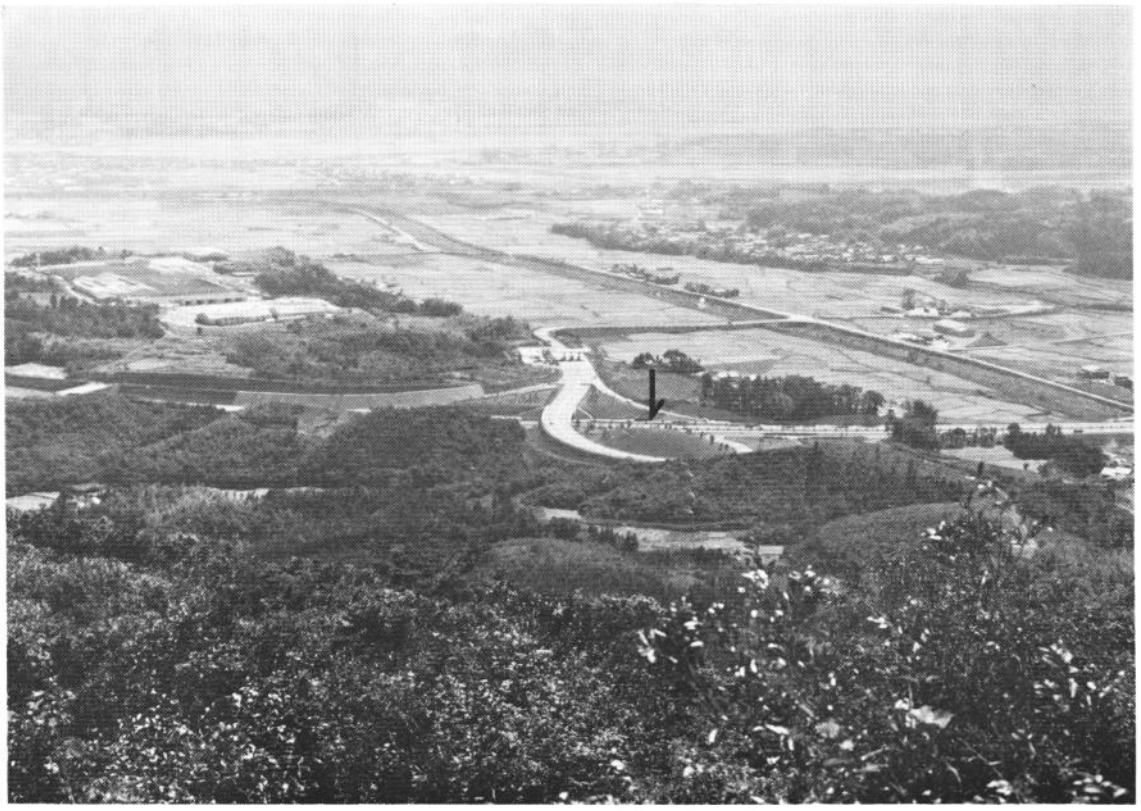
第1表　勝浦41号墳出土の絹製品とその繊維についての調査

原資料	経緯の別	繊維横断面についての計測値			経・緯糸本数
		完全度(%)	面積(μ^2)	供試繊維の数	(対1cm)
半円方格帯神獣鏡面の平絹	経	44.3±2.99	46.8±3.78	26	200
〃	緯	47.5±3.33	50.5±4.06	26	140
大刀の鞘外面の平絹	経	43.1±4.12	38.2±3.99	33	190
〃	緯	45.4±3.57	43.1±4.61	32	60
大刀の柄外装の平織物	経	50.1±3.65	32.4±4.03	30	25(緯は7)

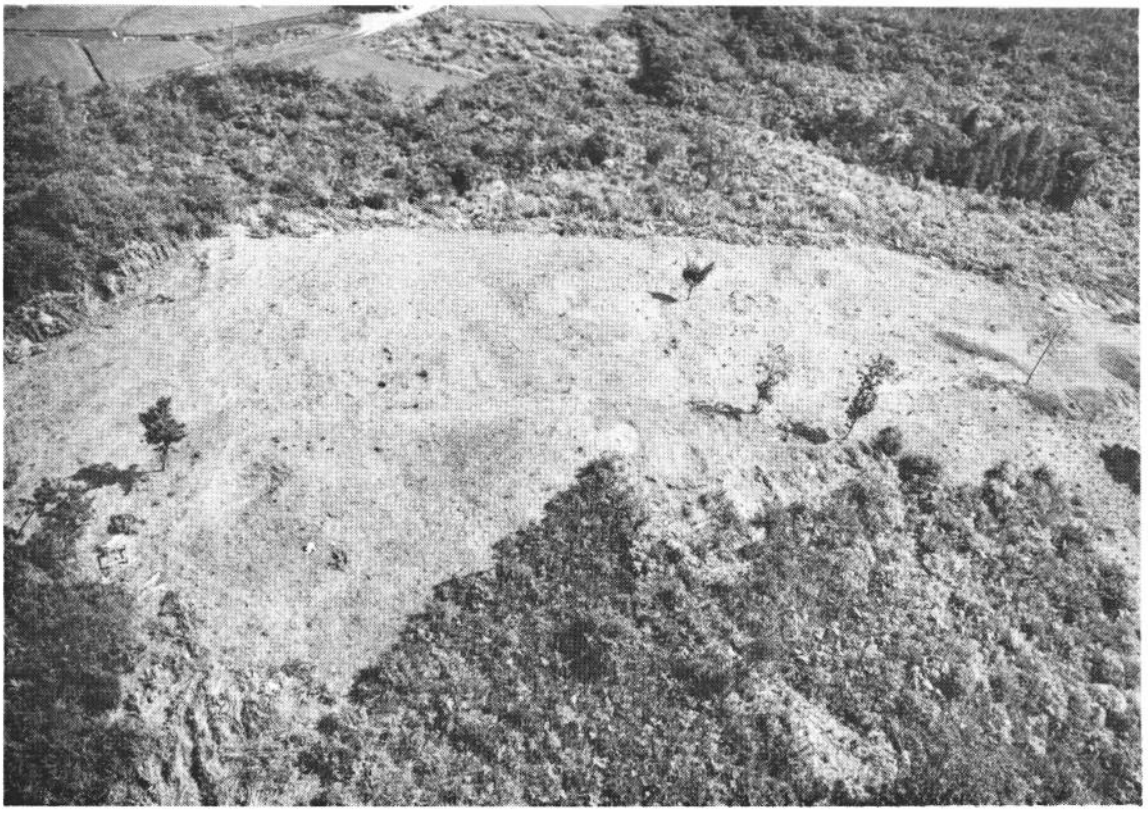
図　　版



宮田工業団地内遺跡航空写真（調査前）

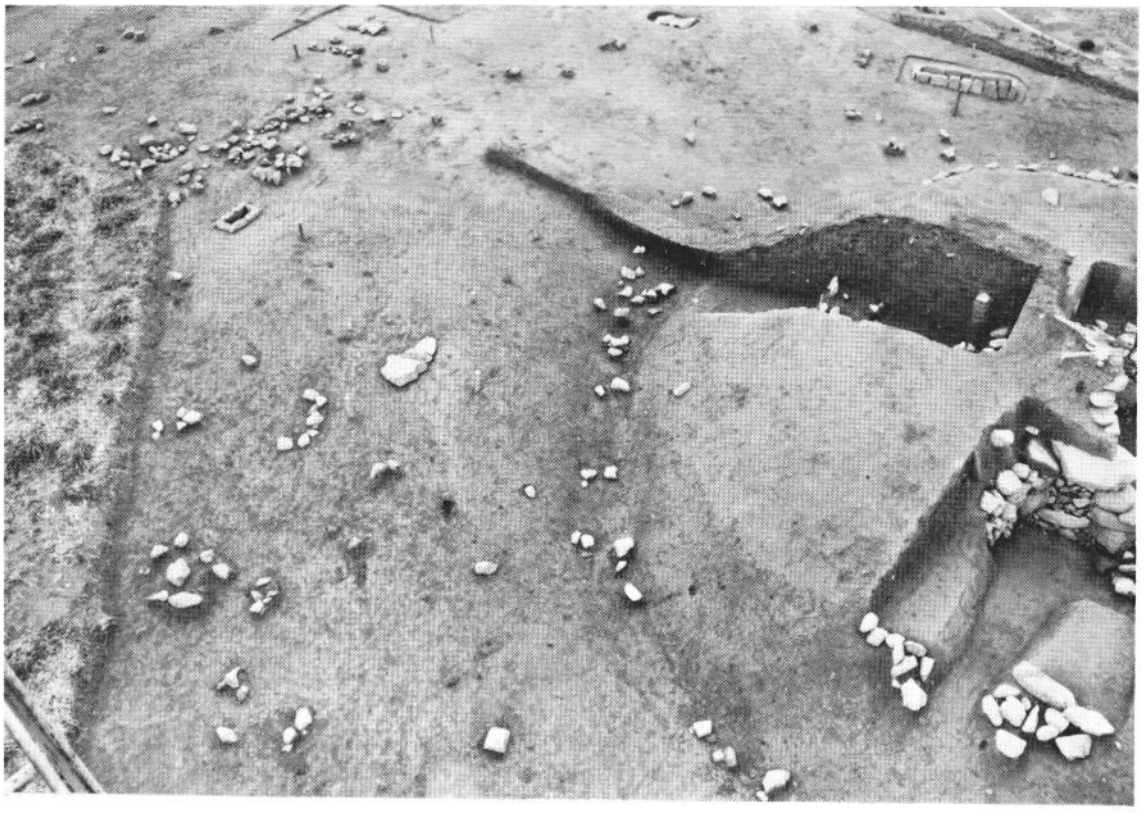


1　汐井掛遺跡遠景（北方靡山山頂から）



2　汐井掛遺跡航空写真（南から）

1　汐井掛遺跡標石（北東から）

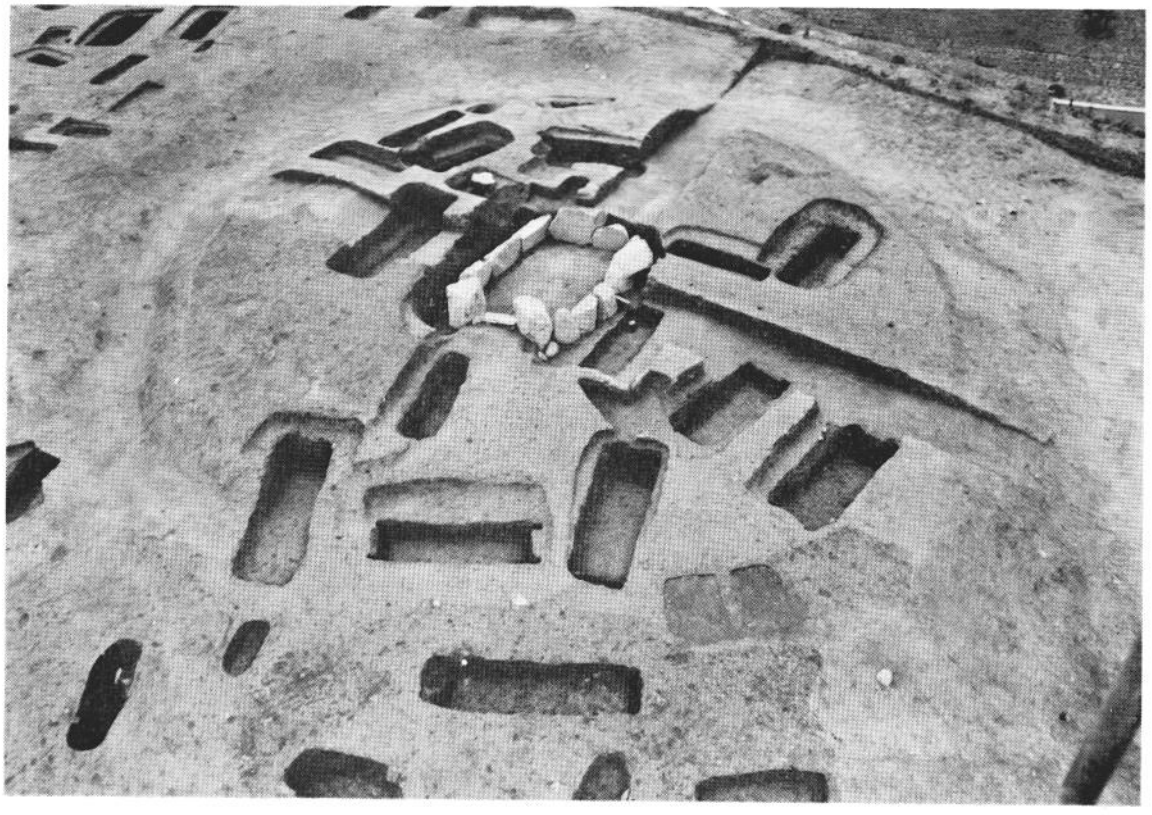


2　汐井掛遺跡標石（南西から）

1　汐井掛遺跡遺構確認状況（北から）

2　汐井掛遺跡発掘調査状況

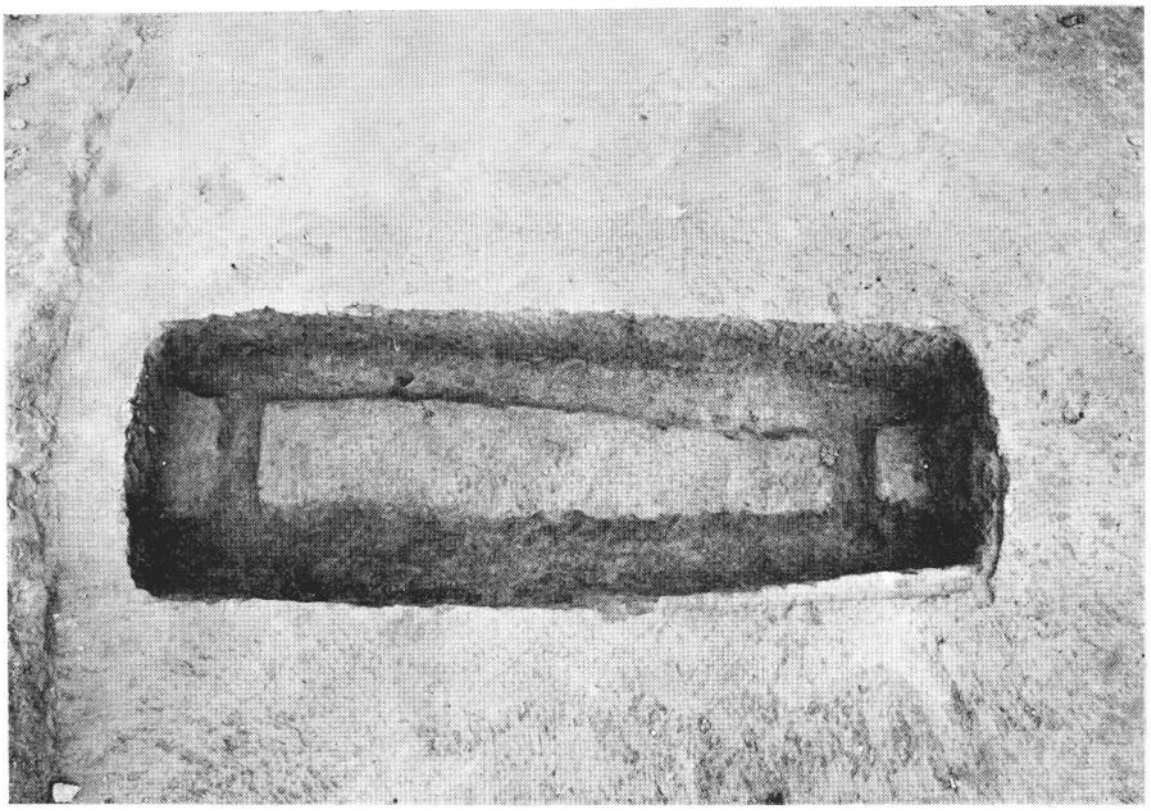
1　汐井掛遺跡北半全景（北から）



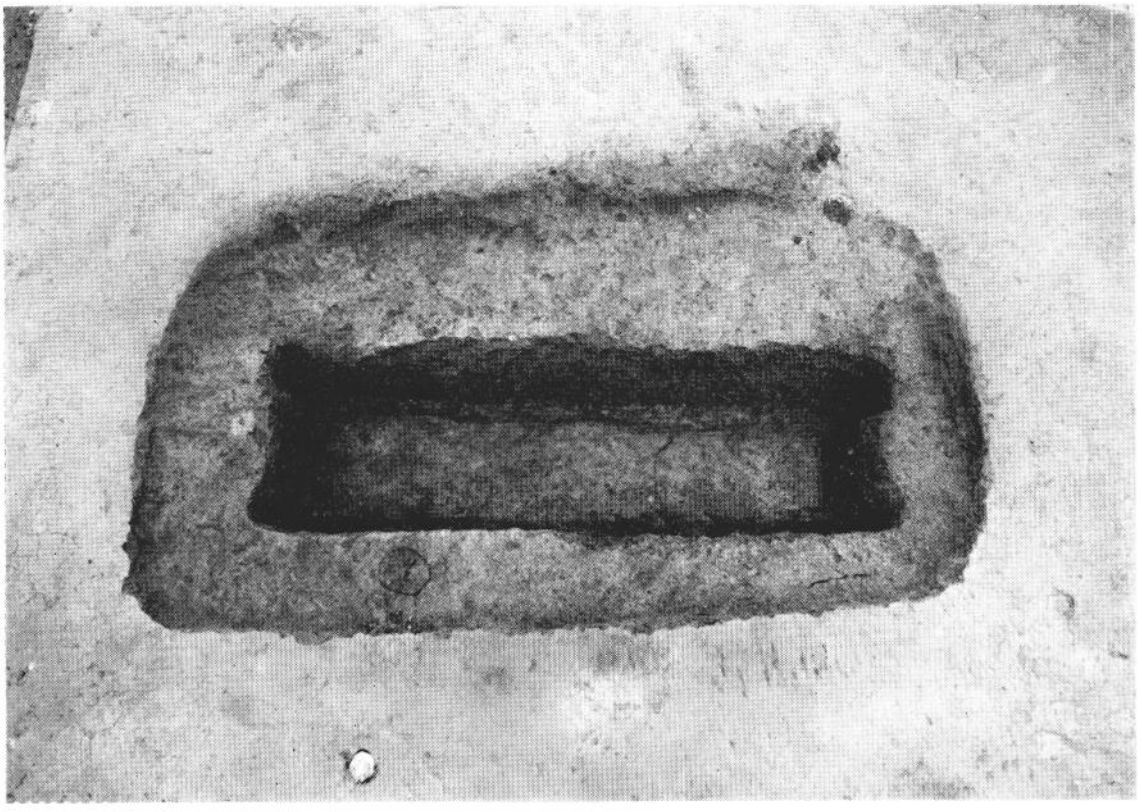
2　汐井掛16号墳盛土除去後の土壙群出土状況（西から）

汐井掛16・17号墳および汐井掛遺跡発掘後全景（北東から）

汐井掛16号墳および汐井掛遺跡発掘後全景（北西から）

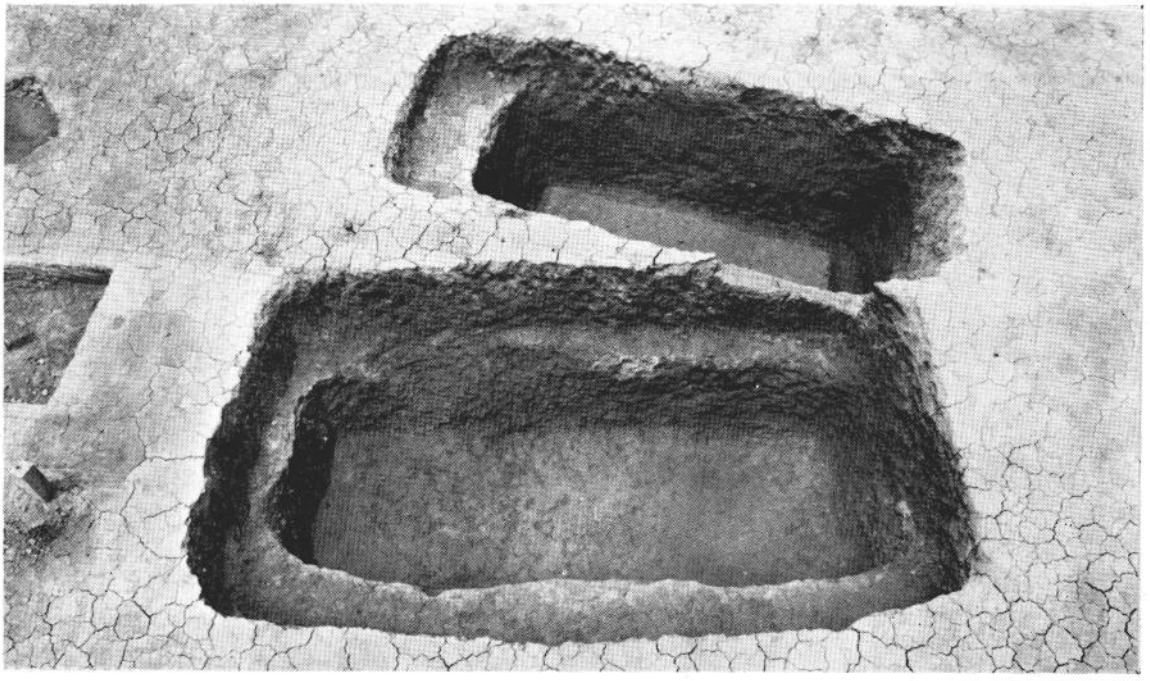


1　153号木棺墓

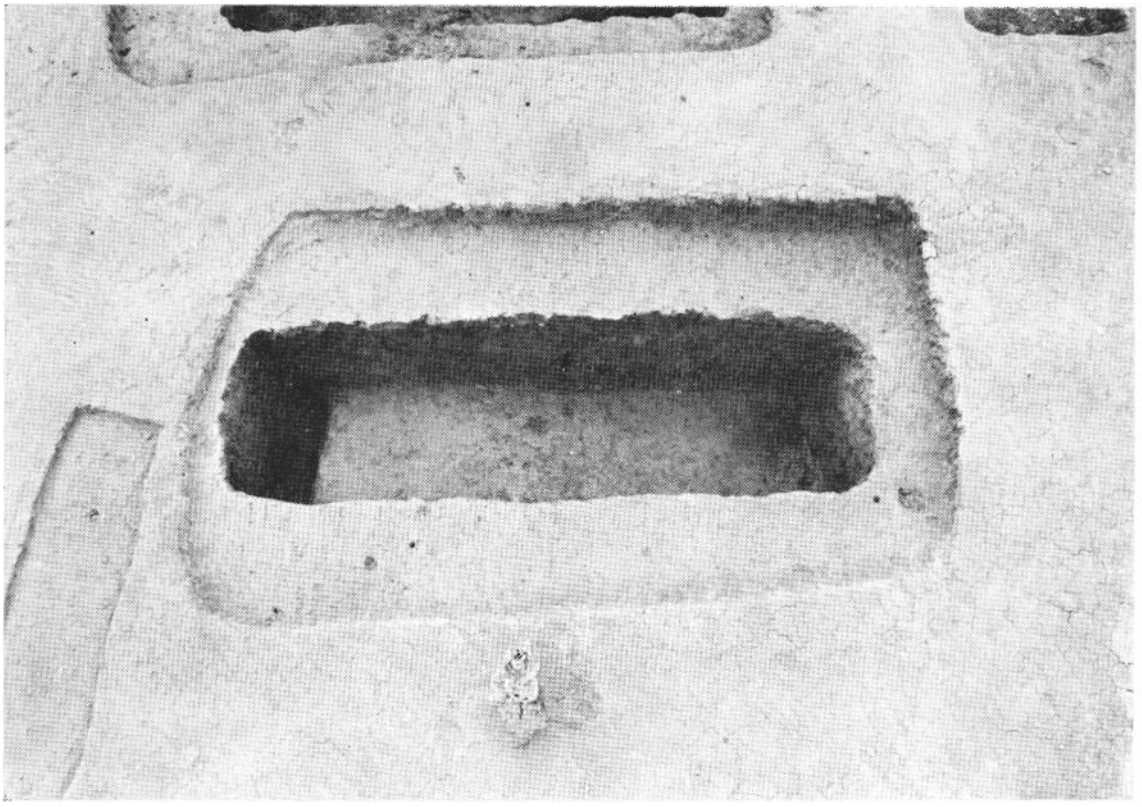


2　156号木棺墓

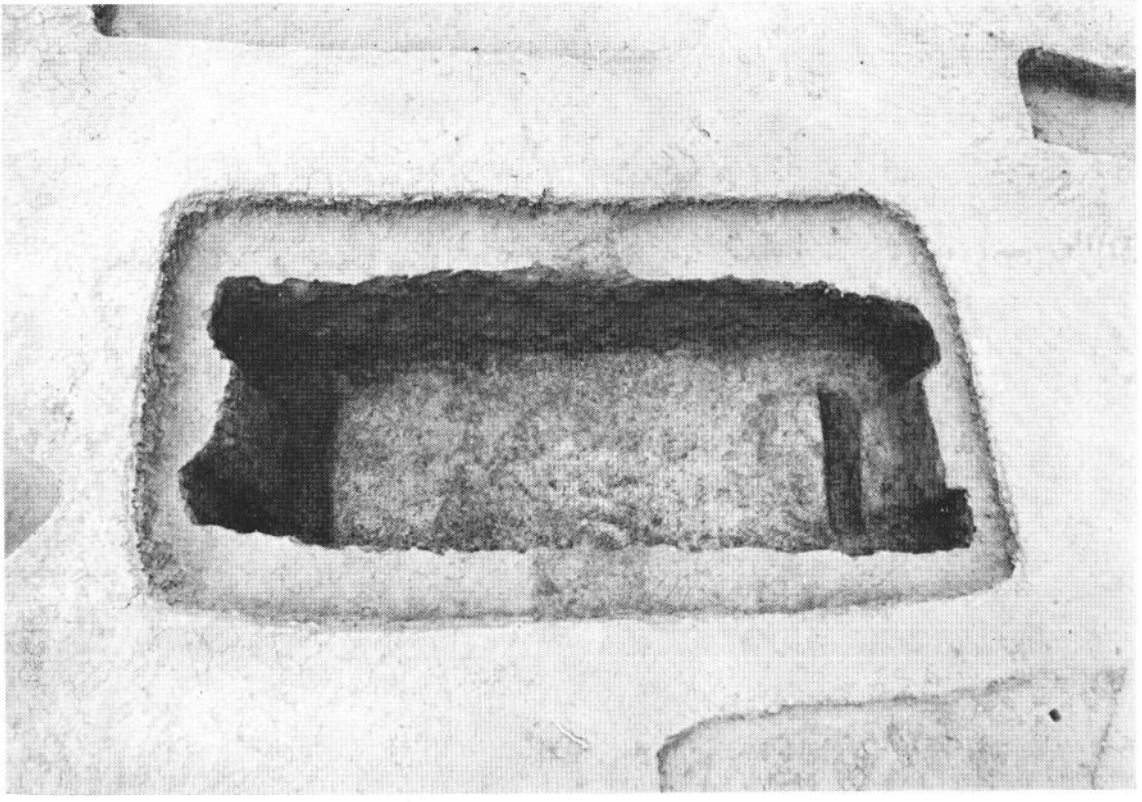
1　157号木棺墓



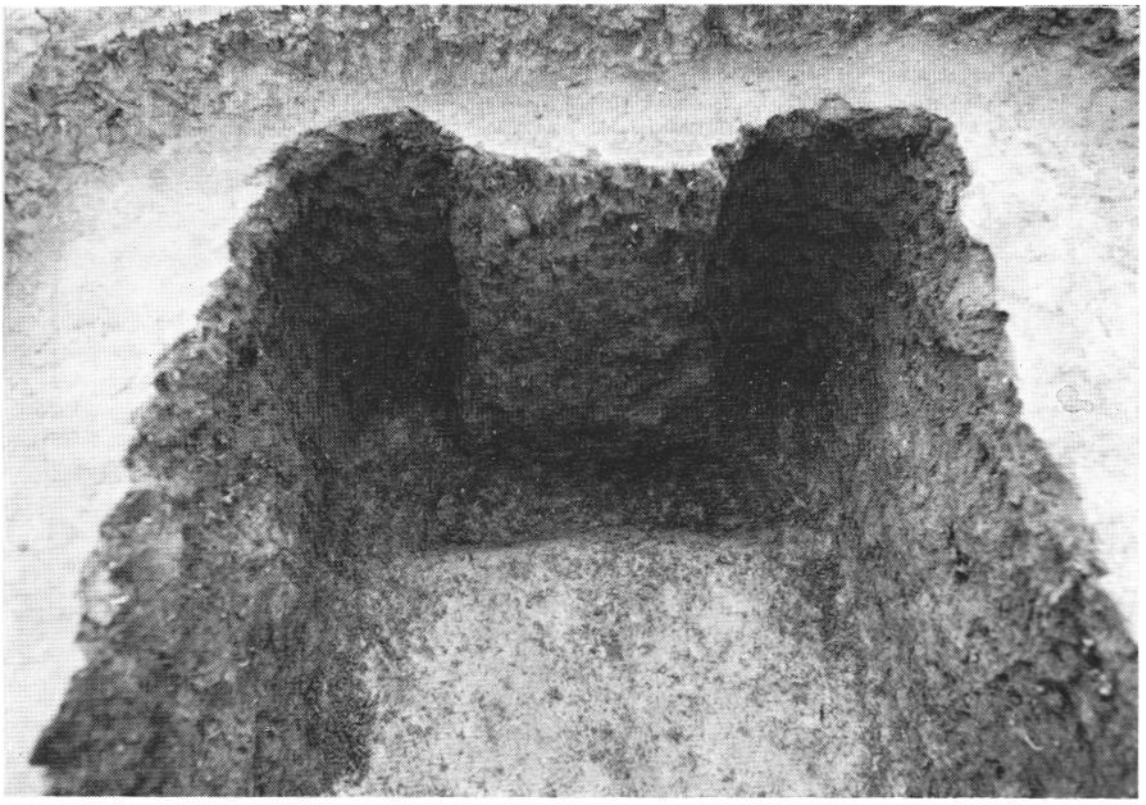
2　上　157号木棺墓・下　158号土壙墓



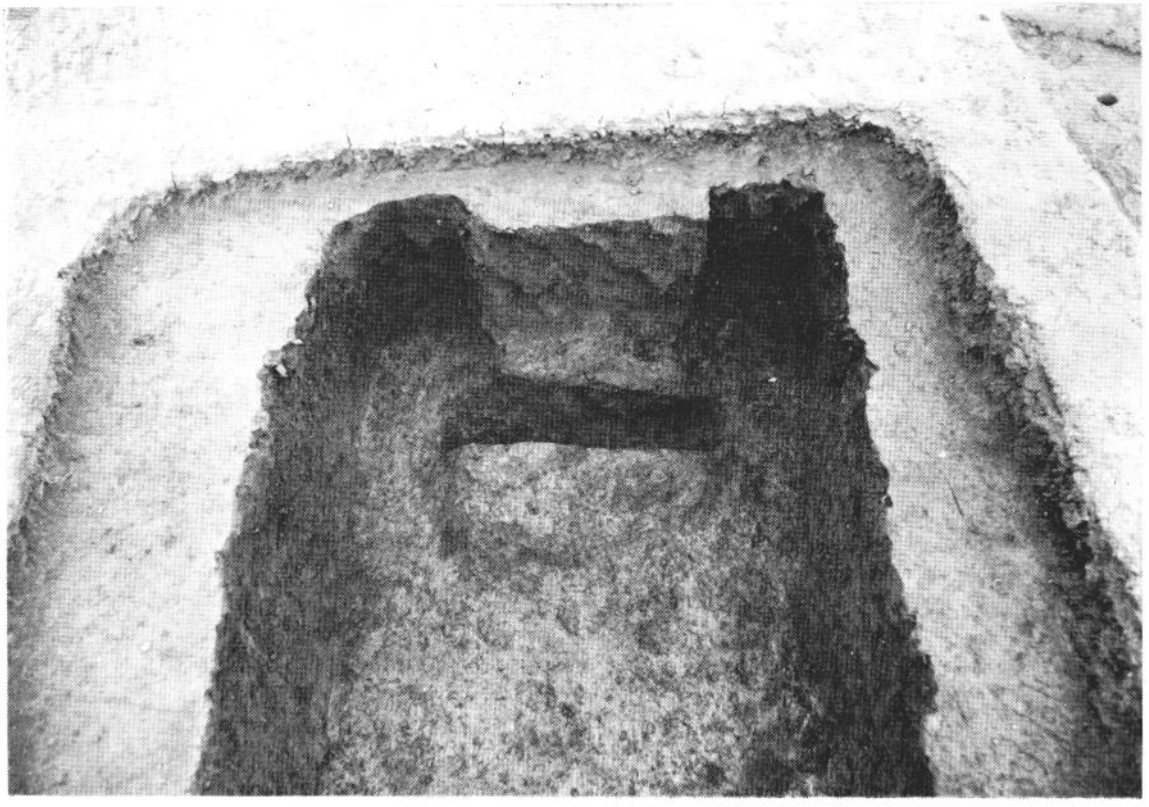
1　159号木棺墓



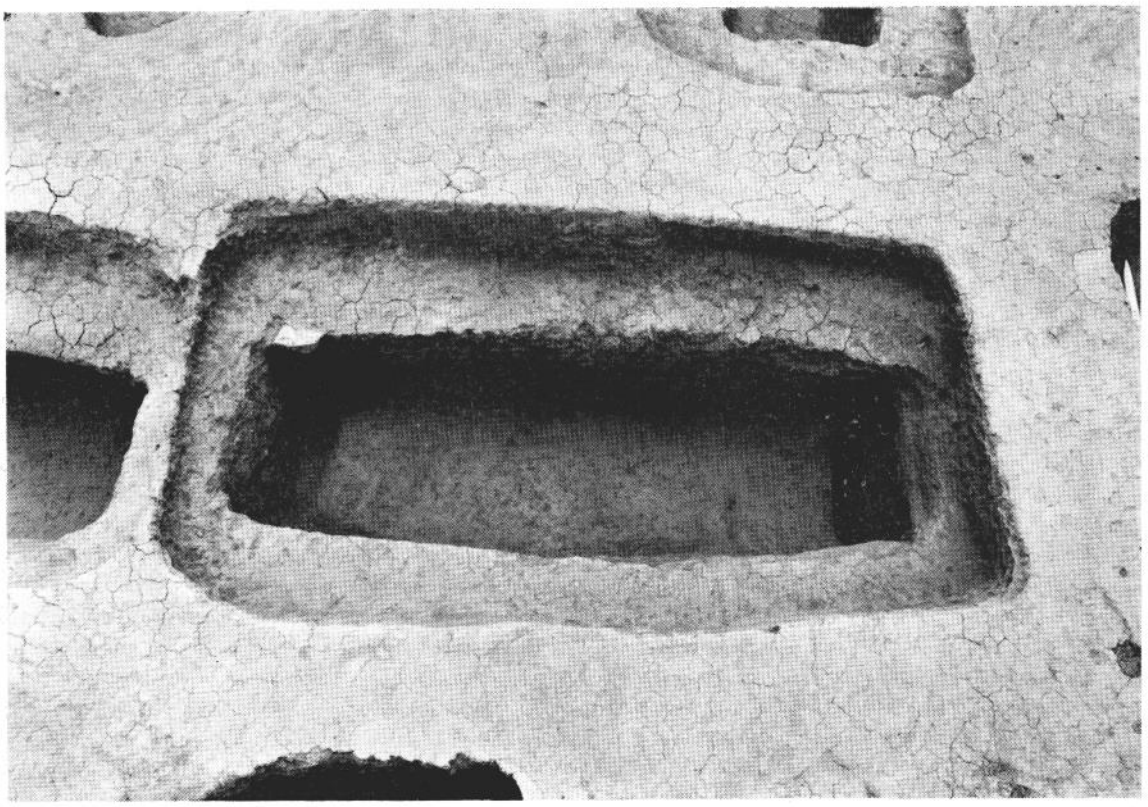
2　160号木棺墓



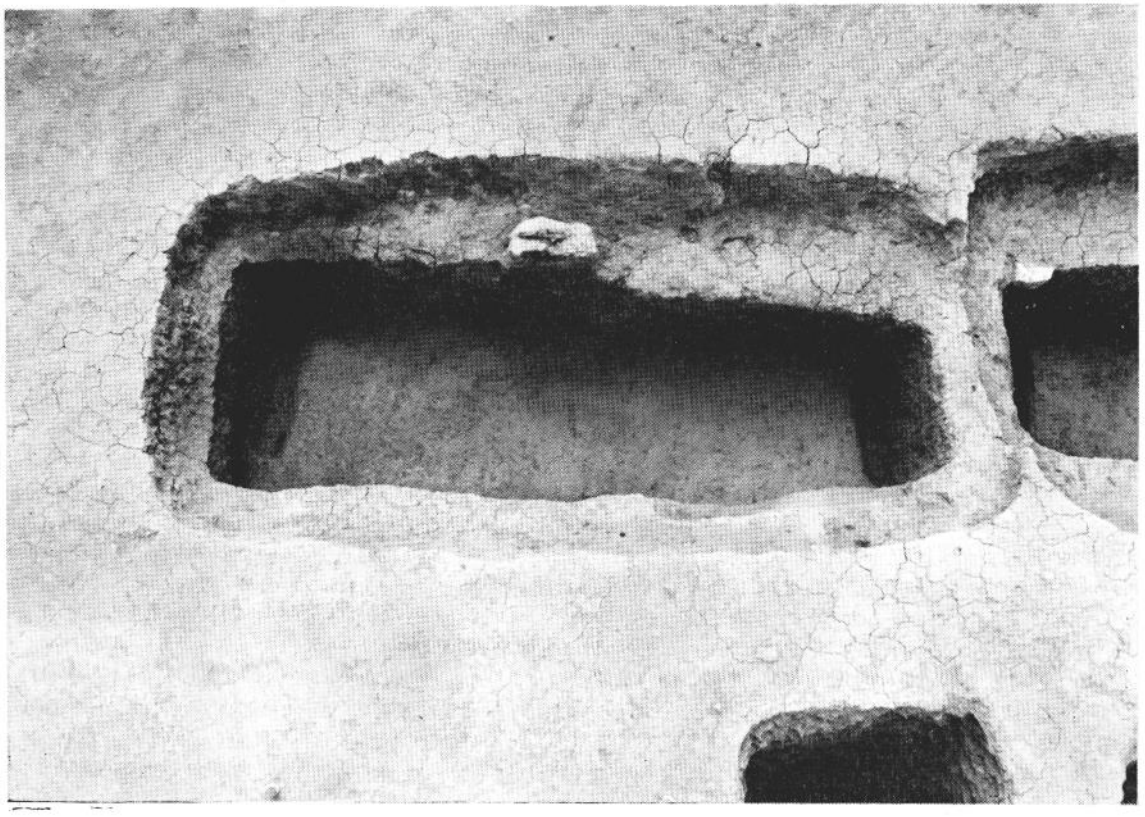
1　160号木棺墓　西側木口部



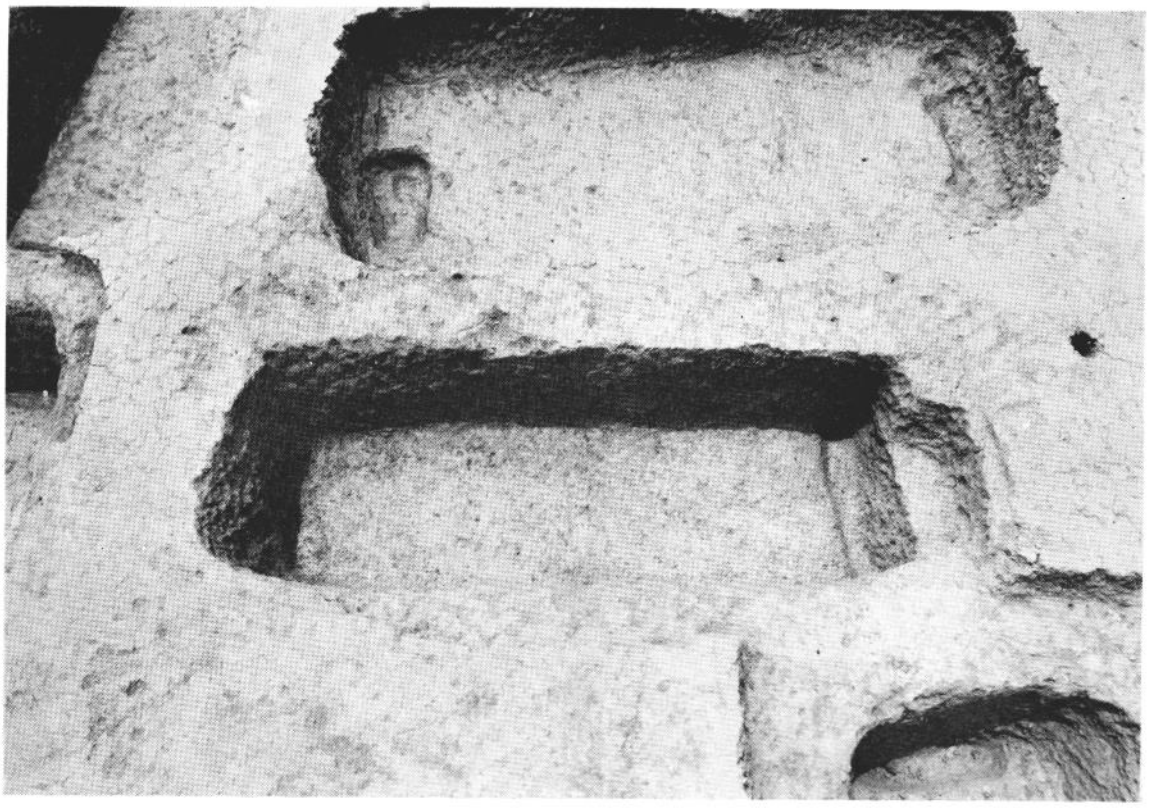
2　160号木棺墓東側木口部



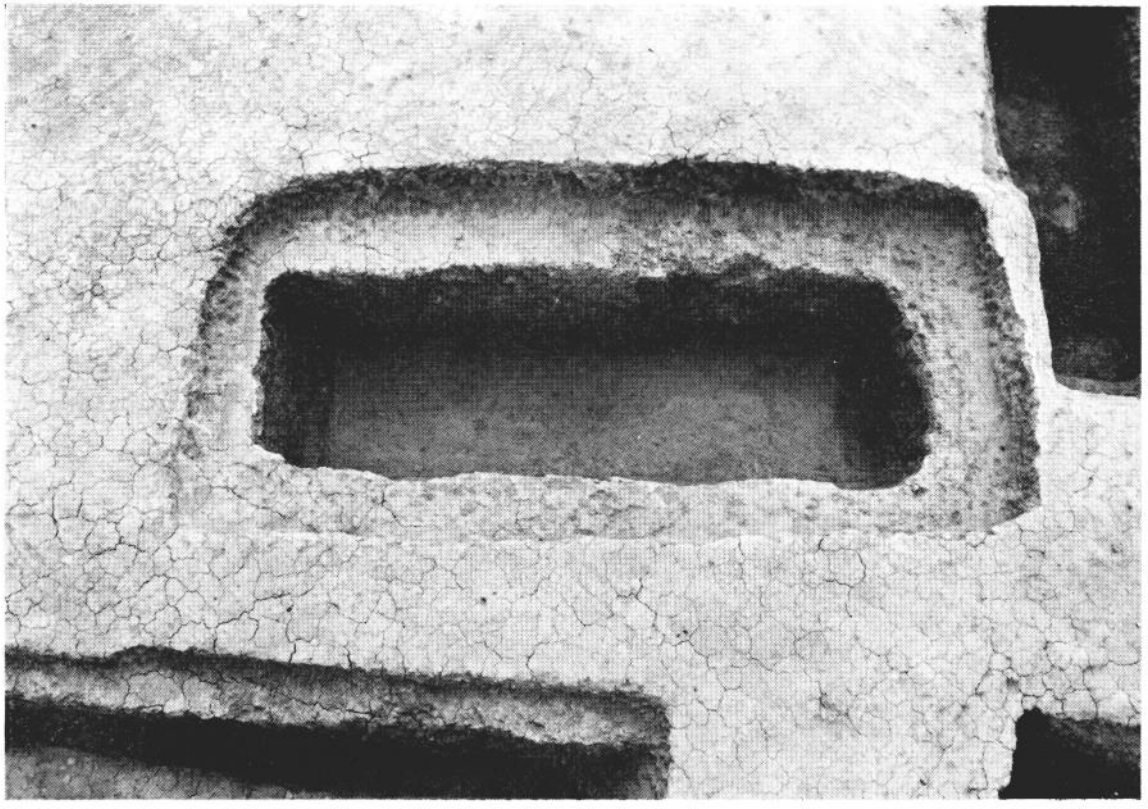
1　161号木棺墓



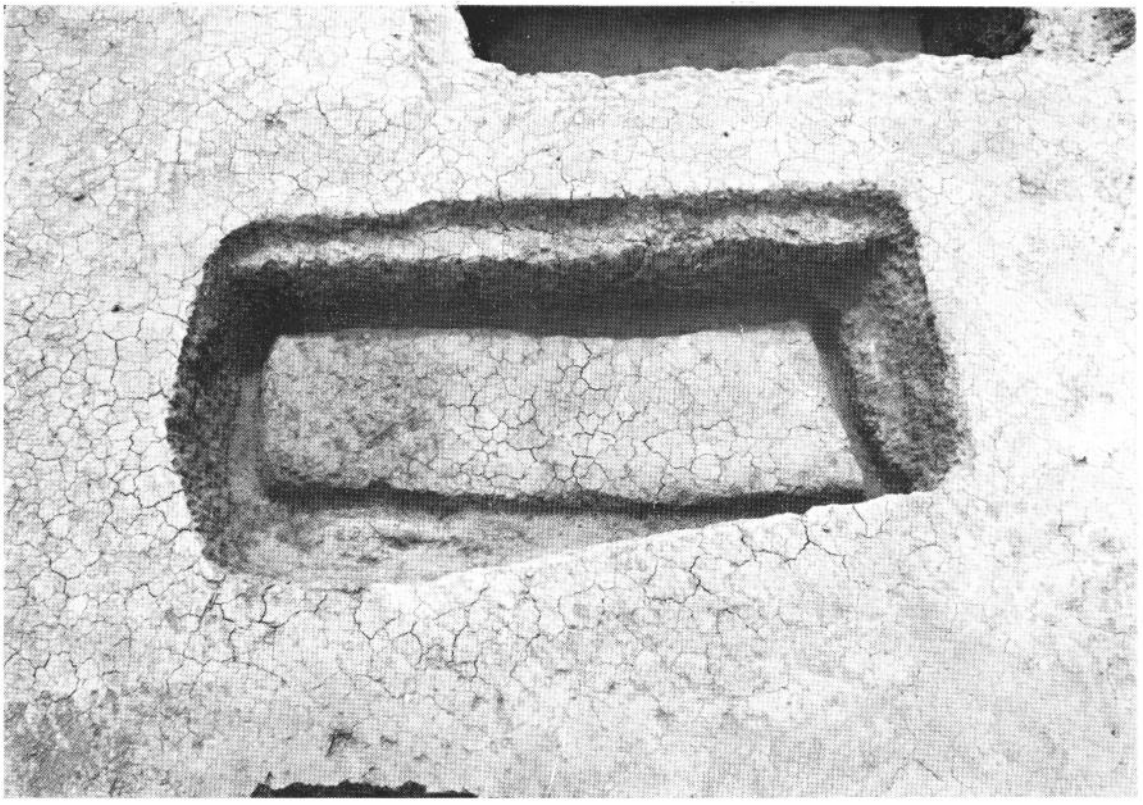
2　162号木棺墓



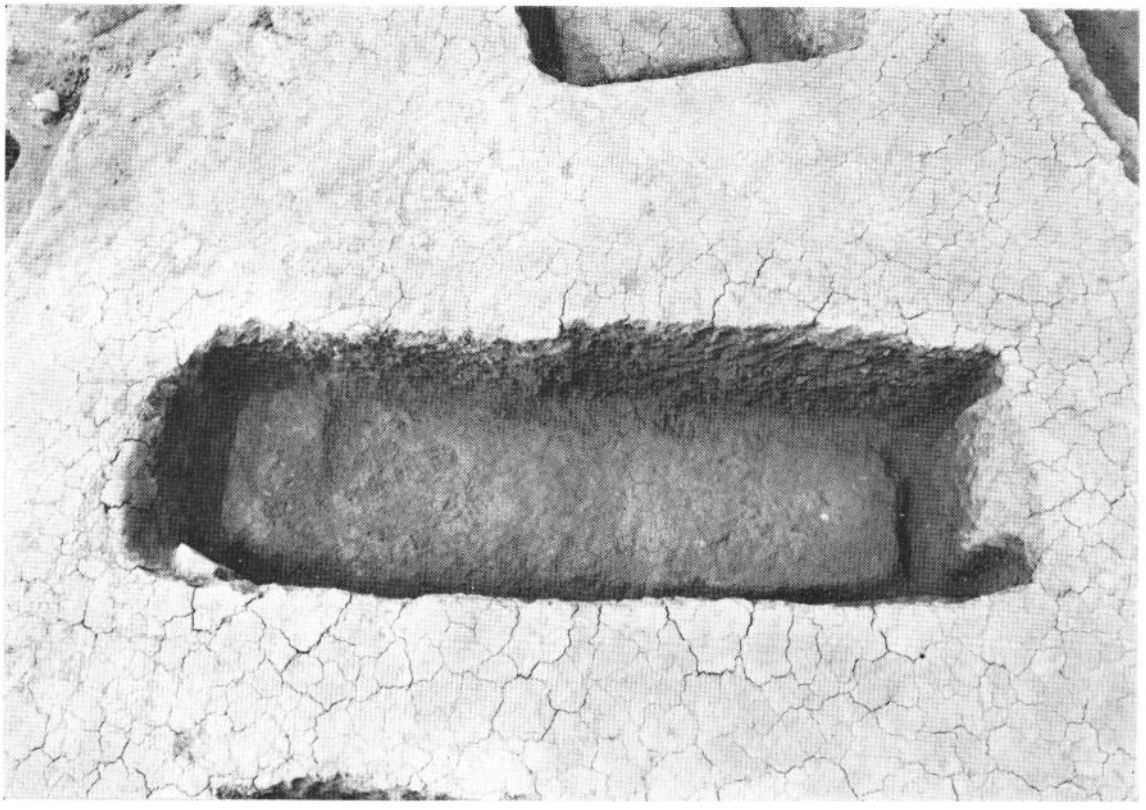
1　163号木棺墓



2　164号木棺墓

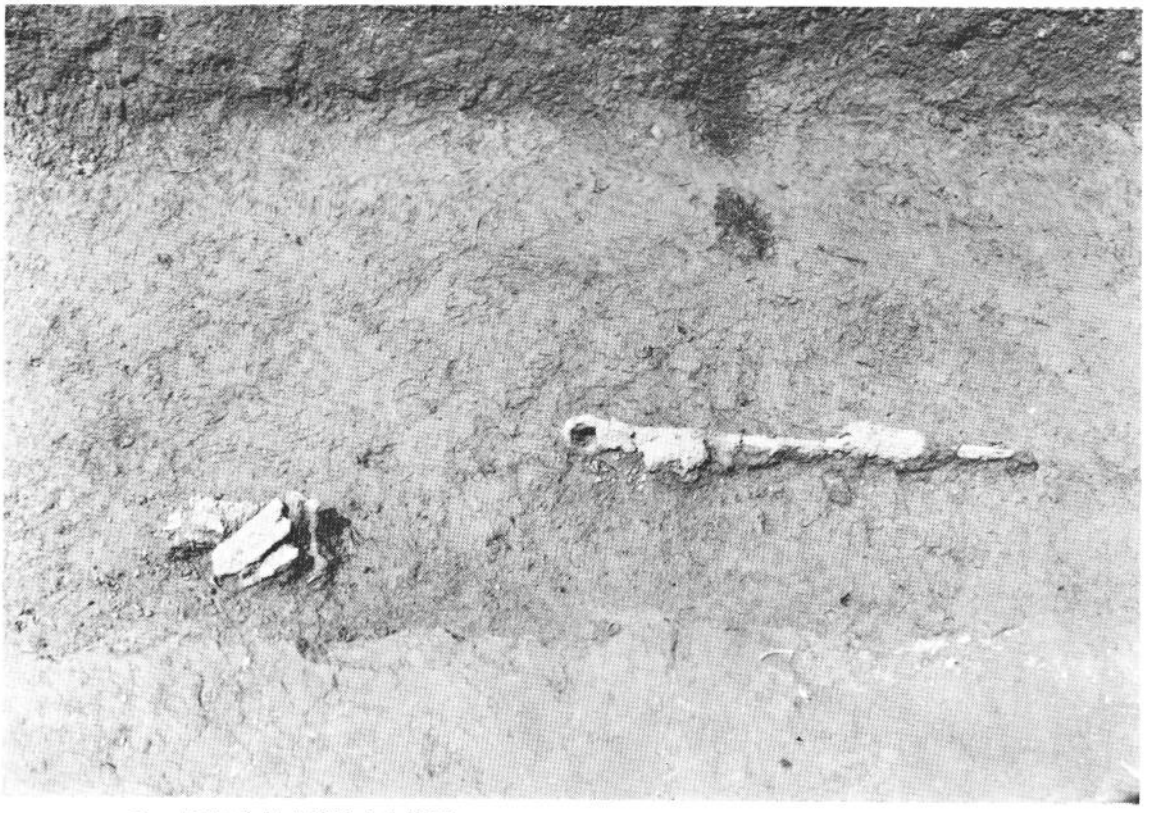


1　165号木棺墓

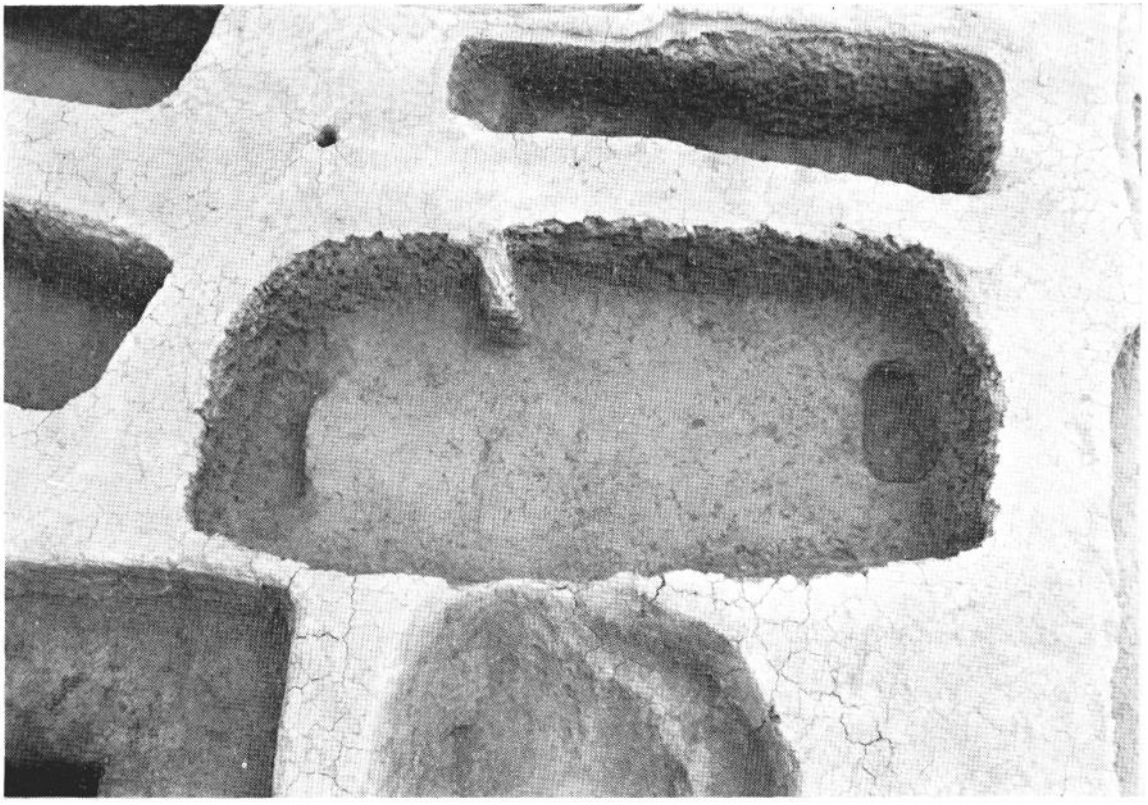


2　166号木棺墓

1　167号木棺墓

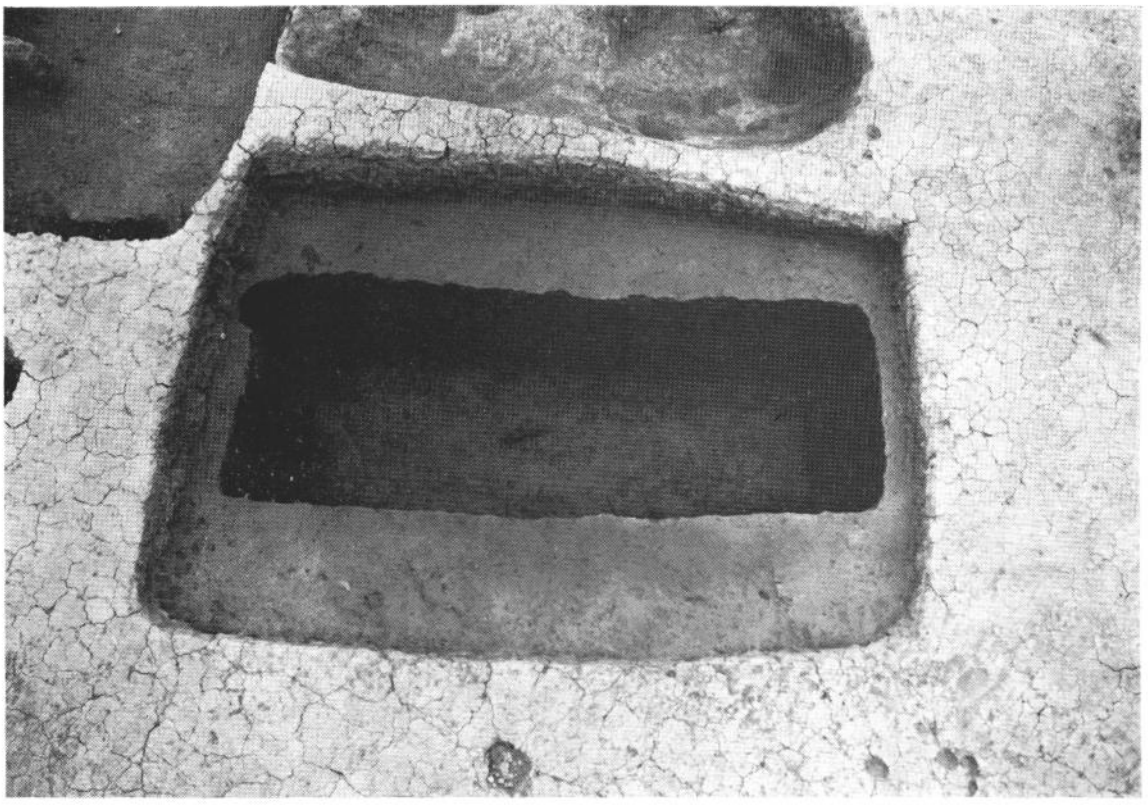


2　167号木棺墓遺物出土状況



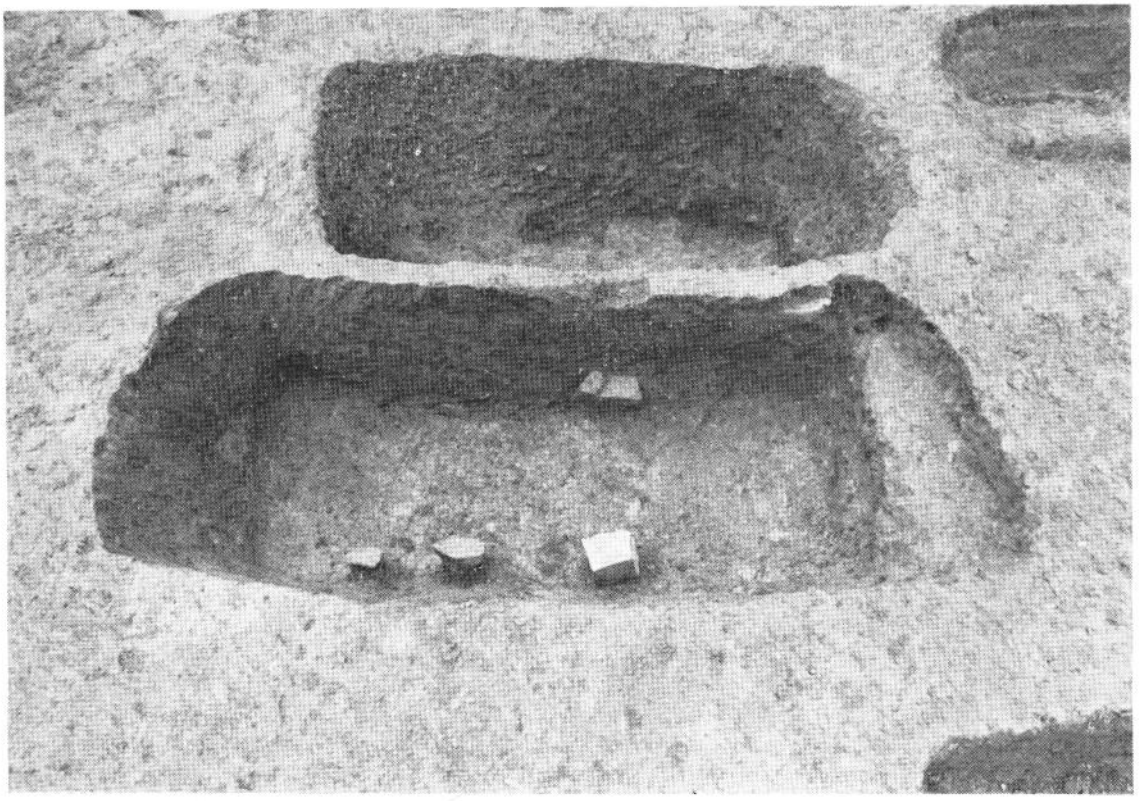
1　168号木棺墓

2　168号木棺墓遺物出土状況

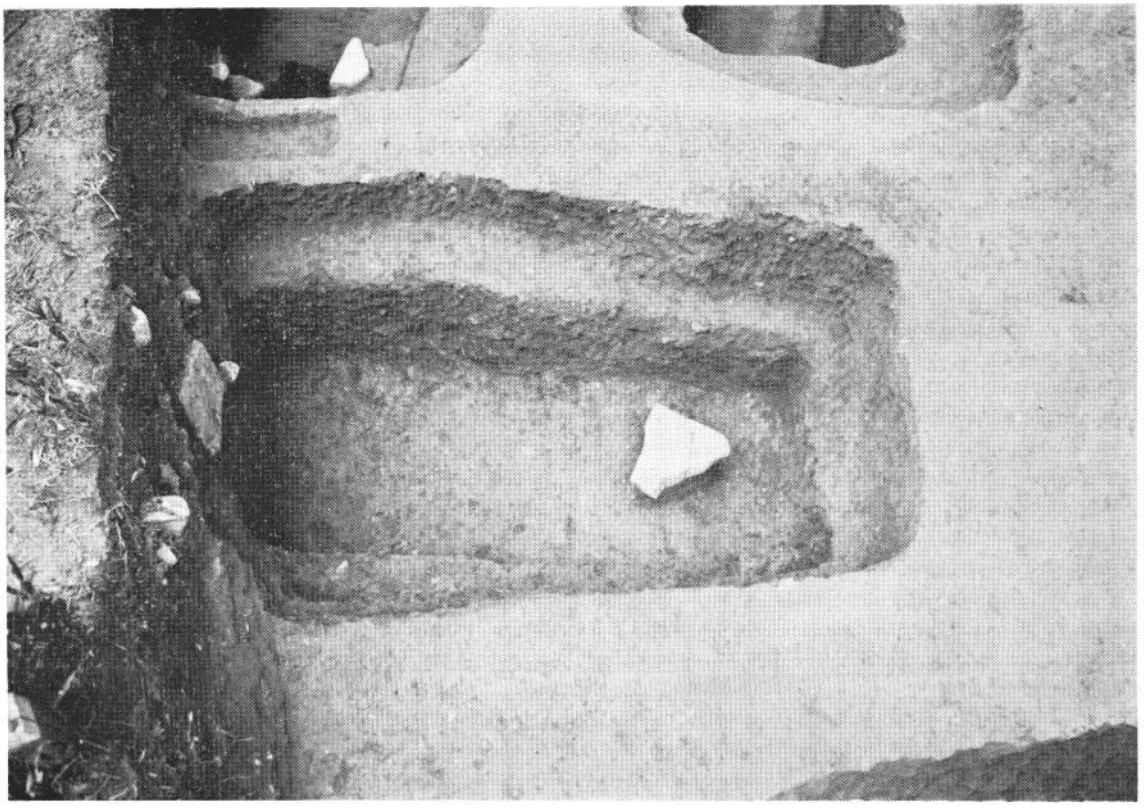


1　169号木棺墓

2　169号木棺墓遺物出土状況



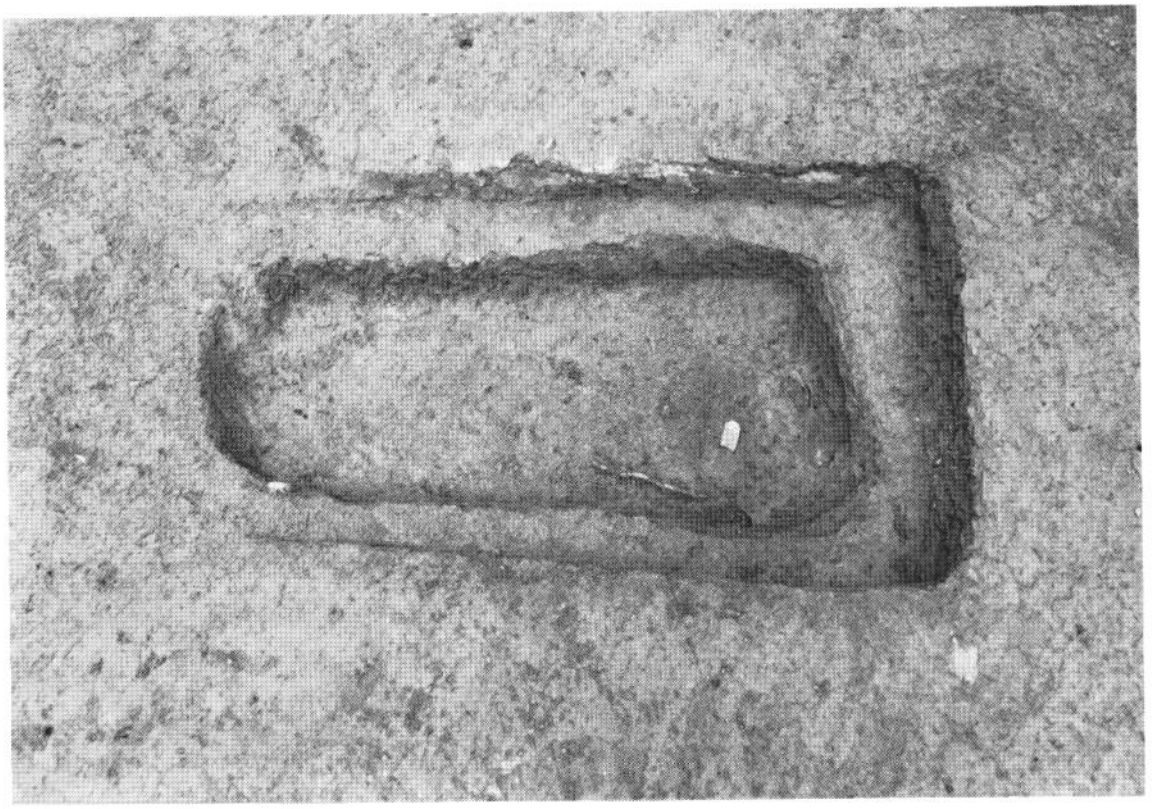
1　170号木棺墓



2　172号土壙墓

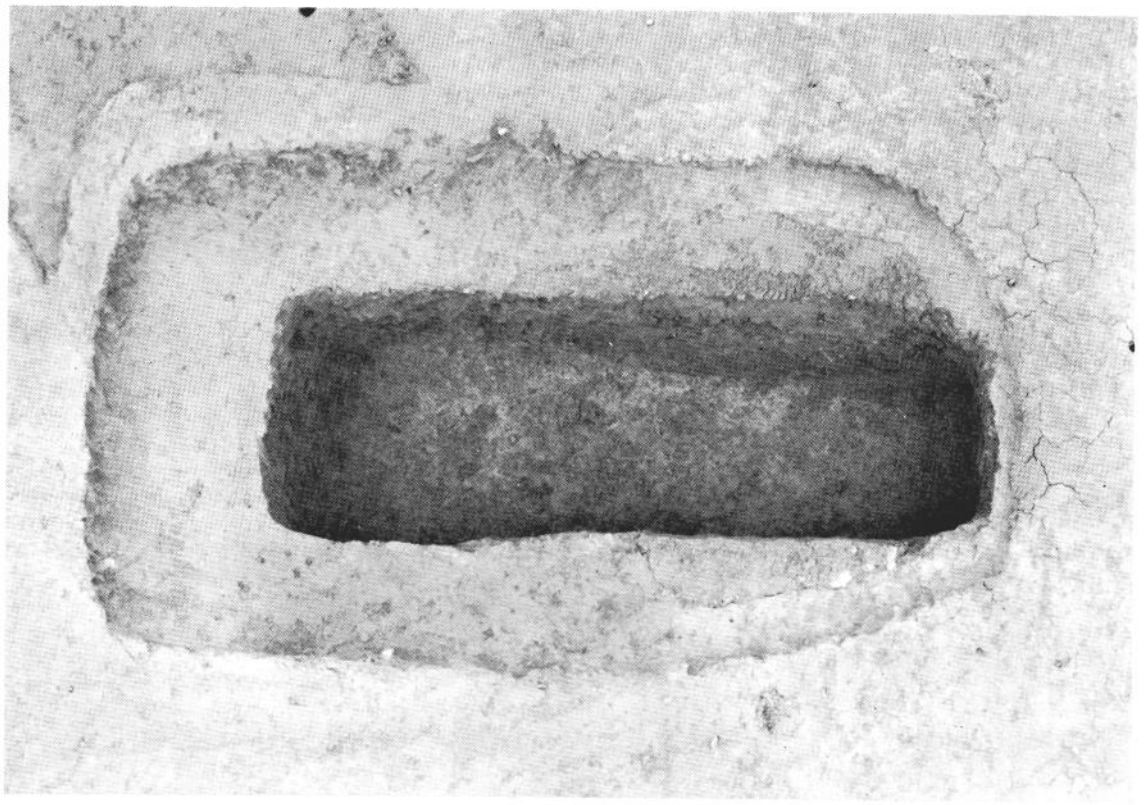
1　上　173号木棺墓・下　174号木棺墓

2　176号土壙墓

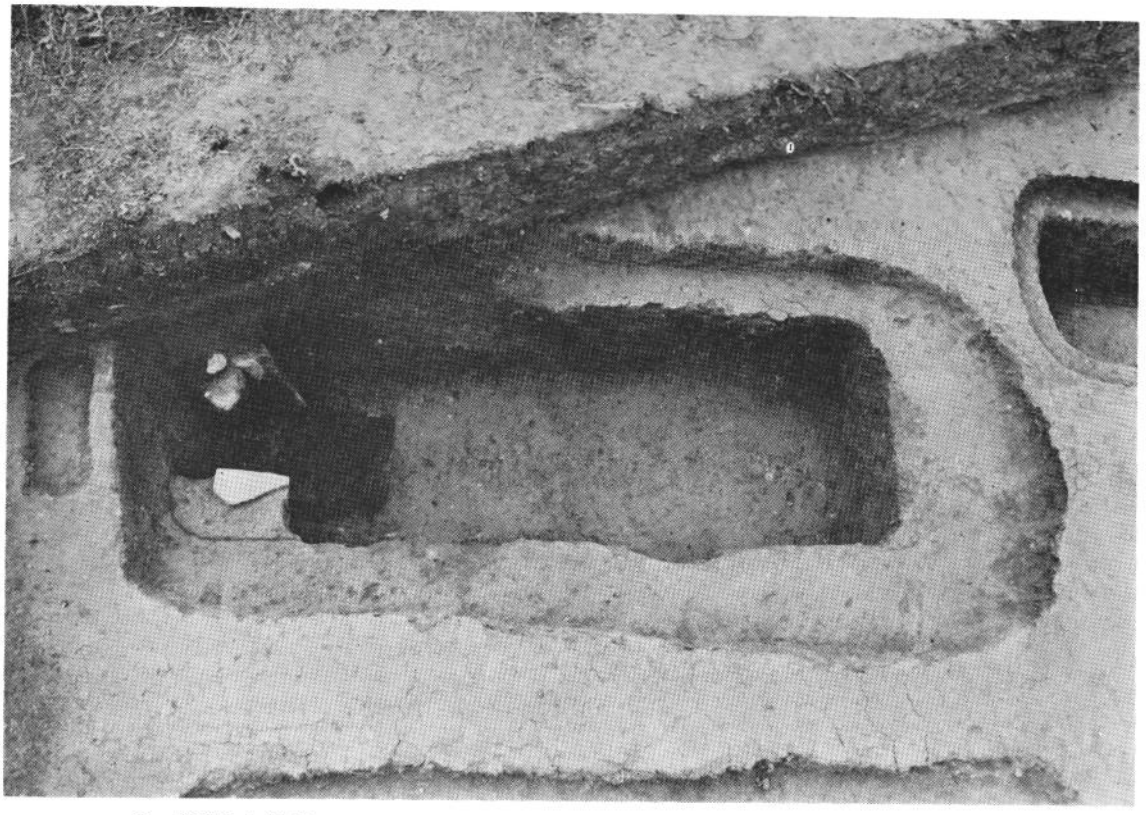


1　175号土壙墓

2　175号土壙墓遺物出土状況

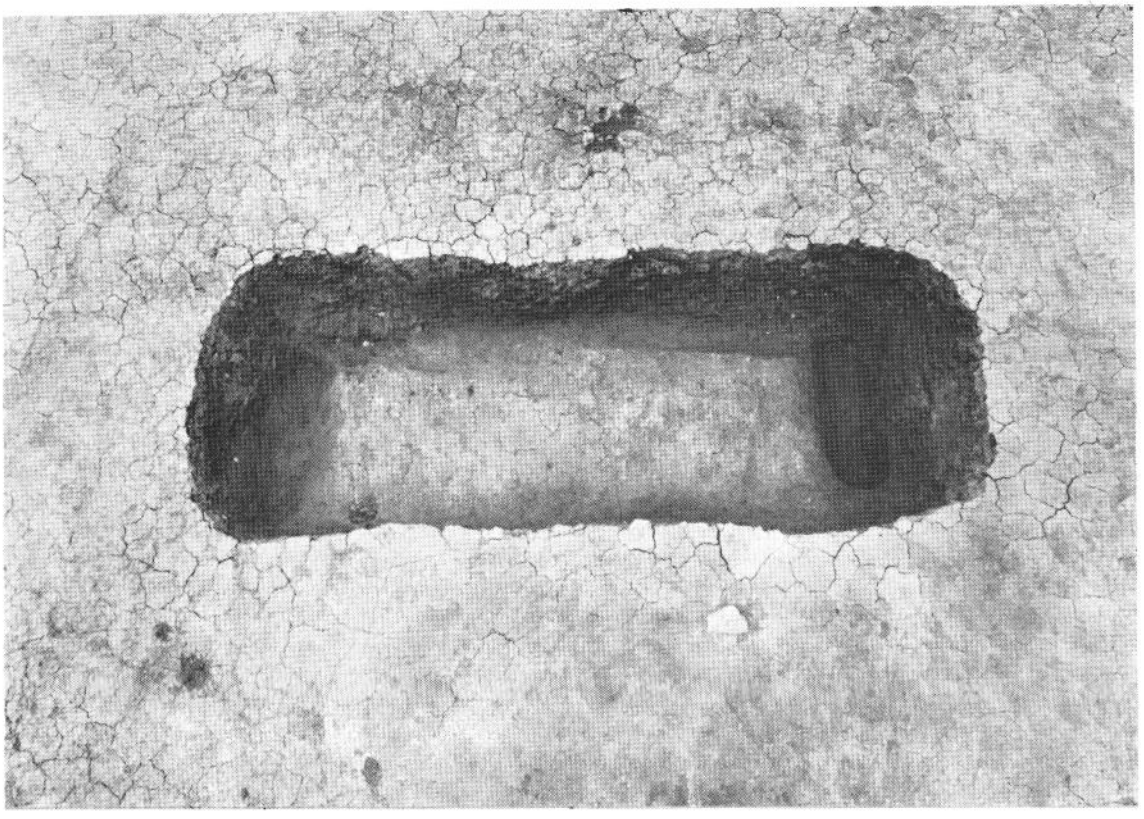


1　178号土壙墓

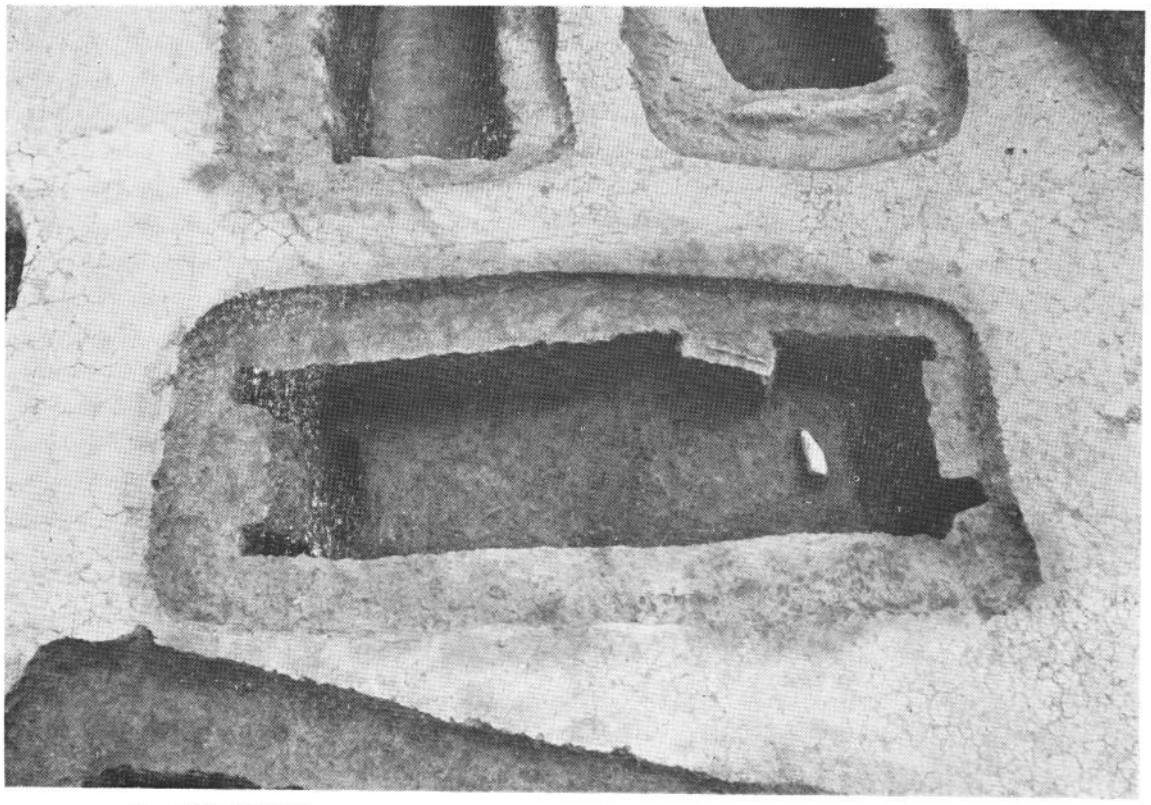


2　180号木棺墓

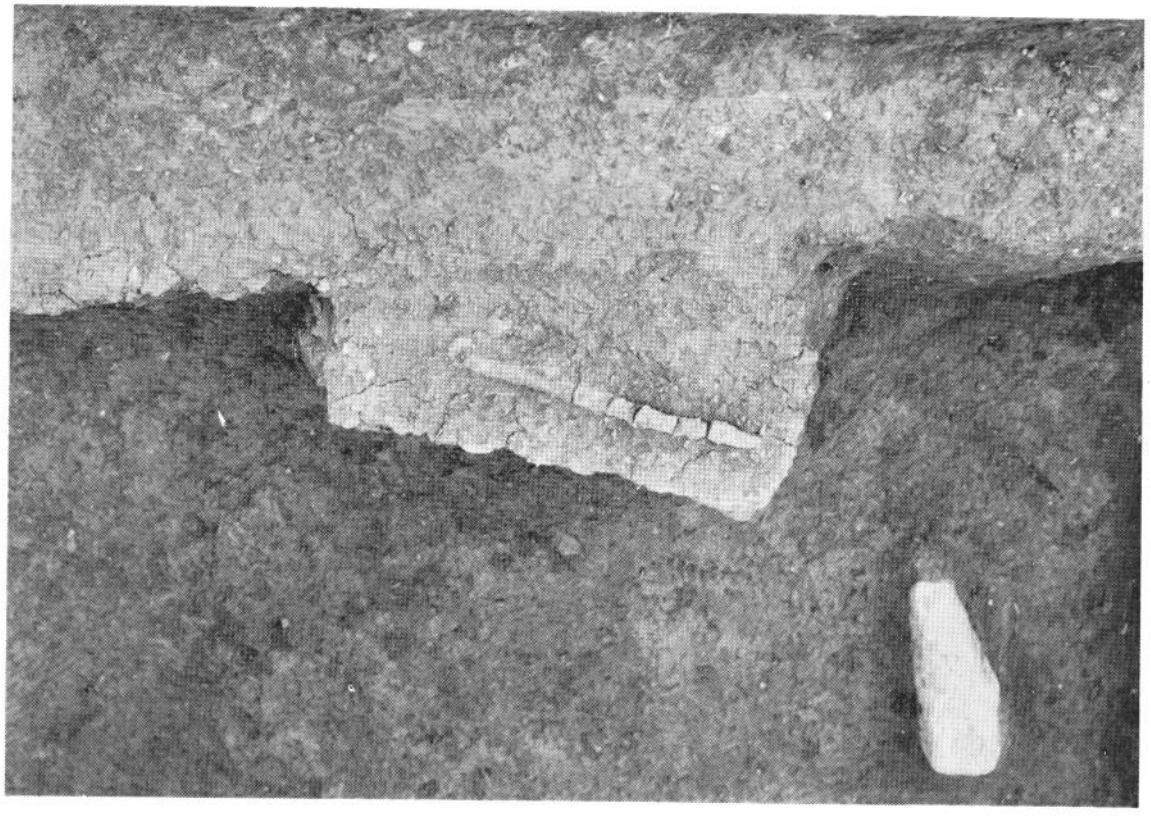
1　181号木棺墓



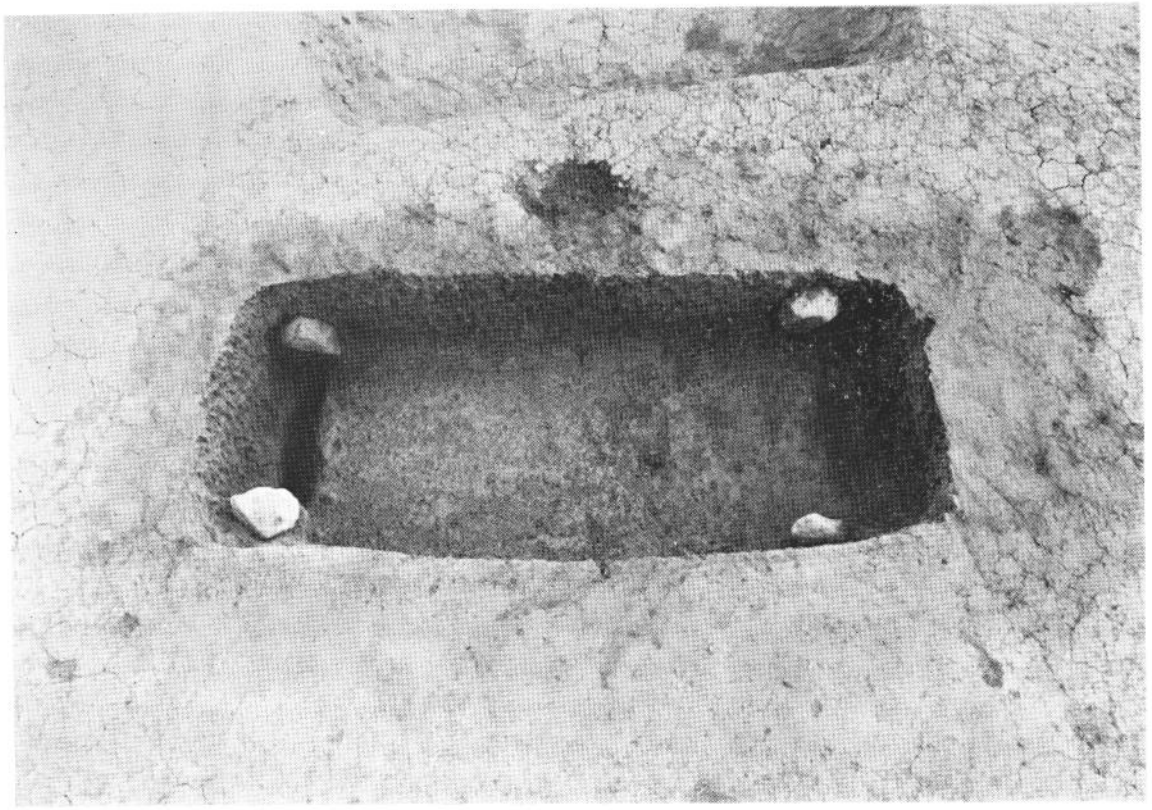
2　182号木棺墓



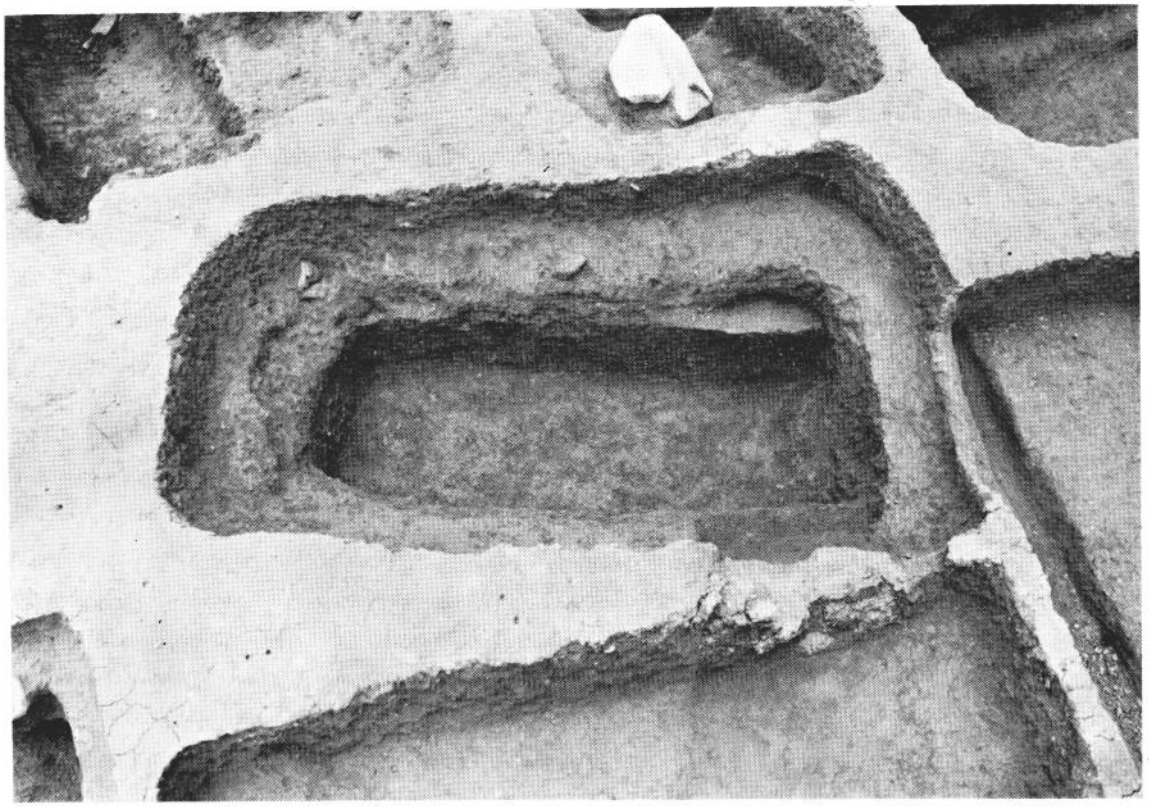
1　184号木棺墓



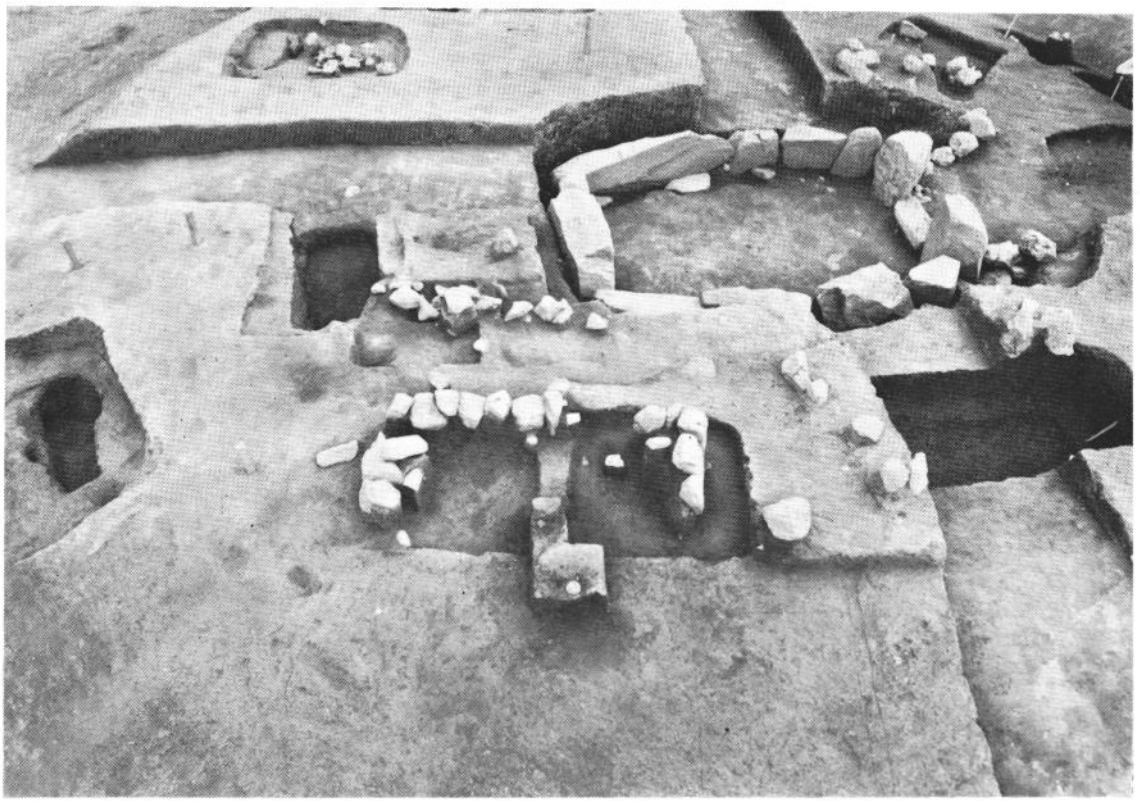
2　184号木棺墓遺物出土状況



1　183号木棺墓

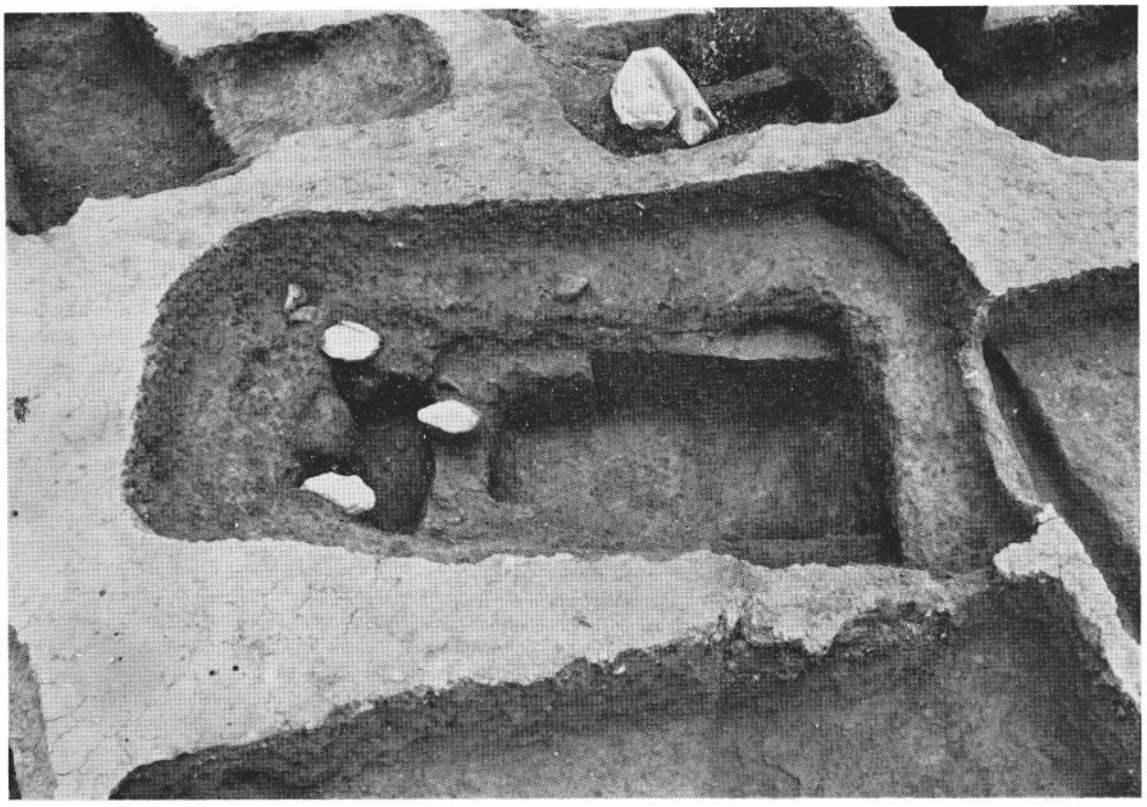


2　186号木棺墓

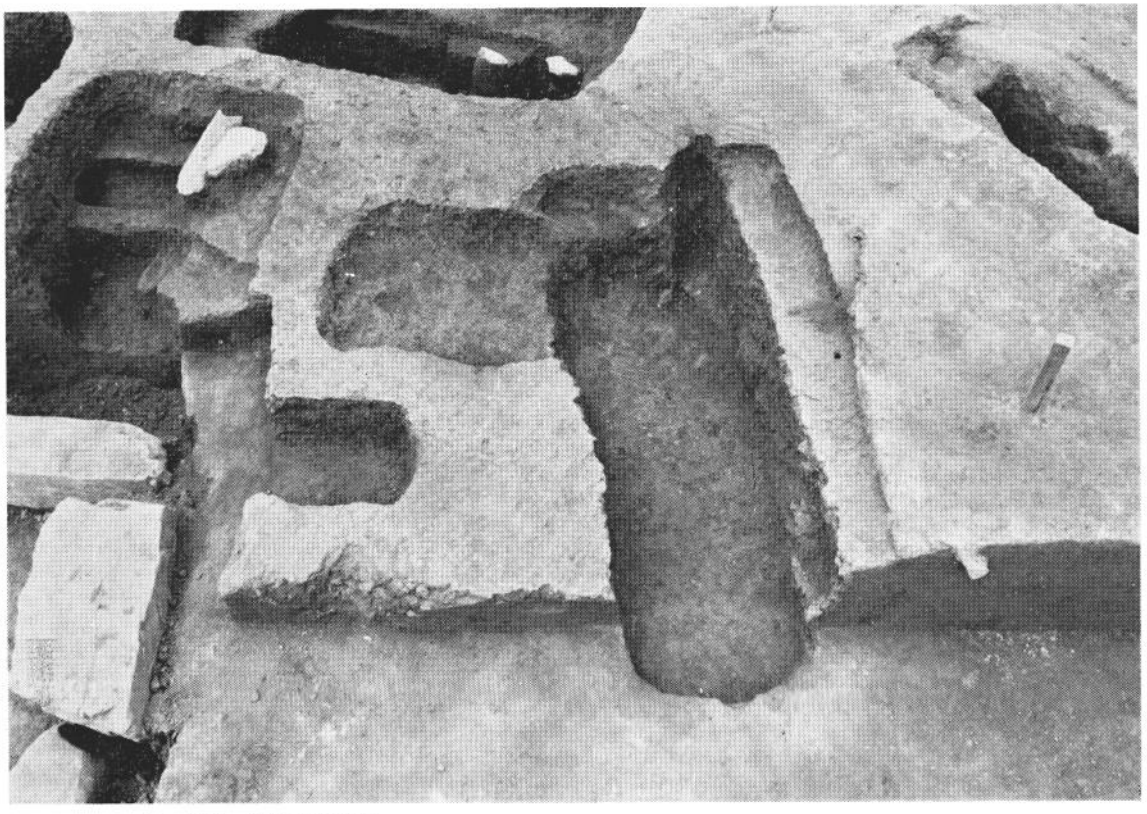


1　186号木棺墓

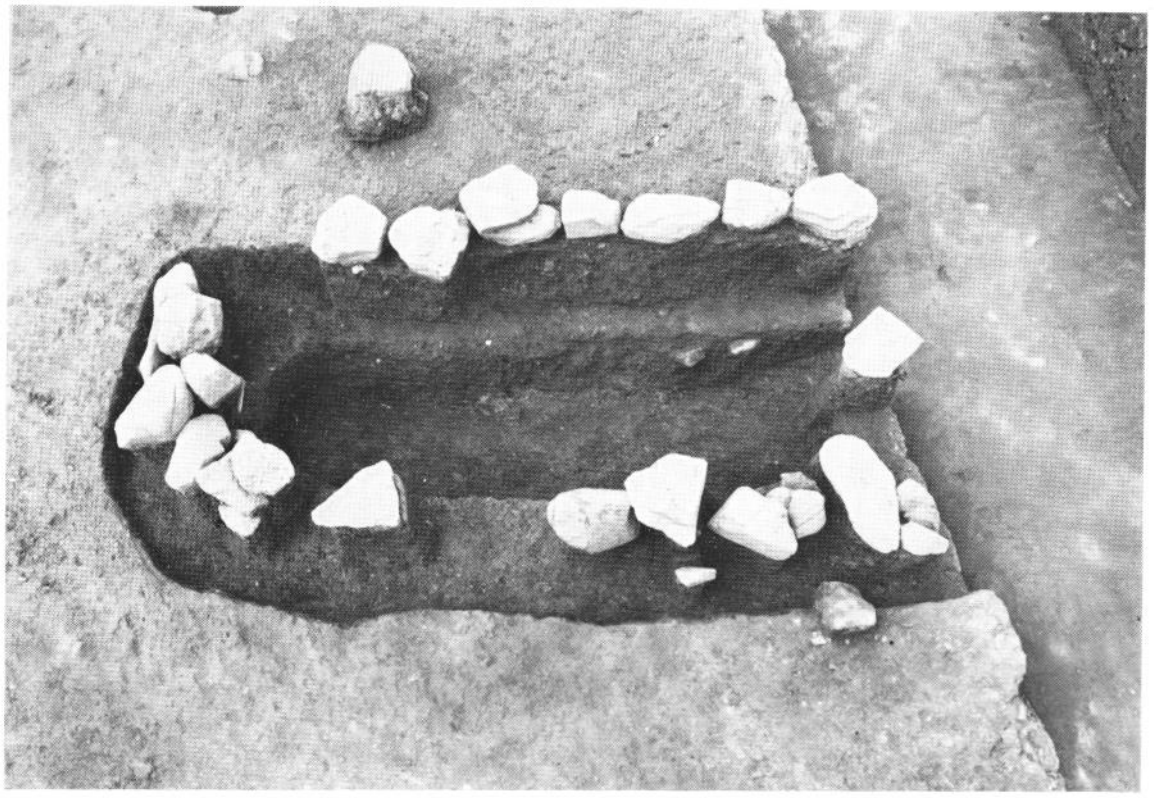
2　186号木棺墓遺物出土状況



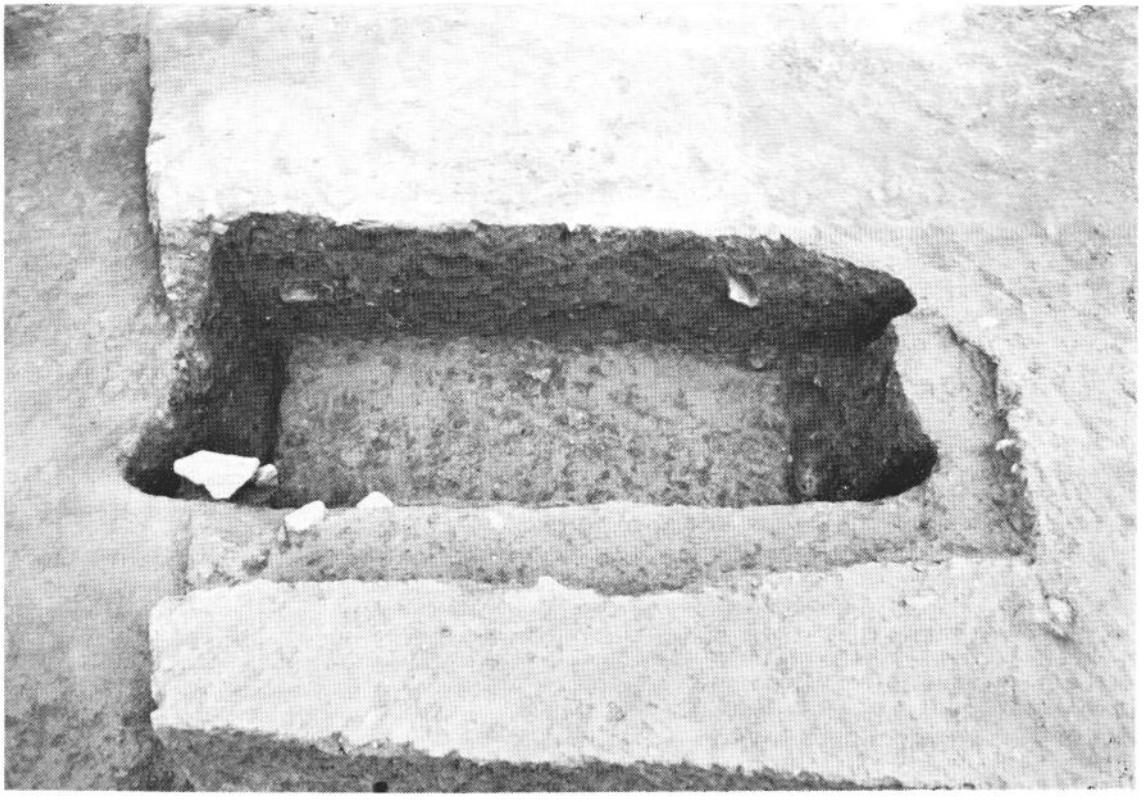
1　186号木棺墓



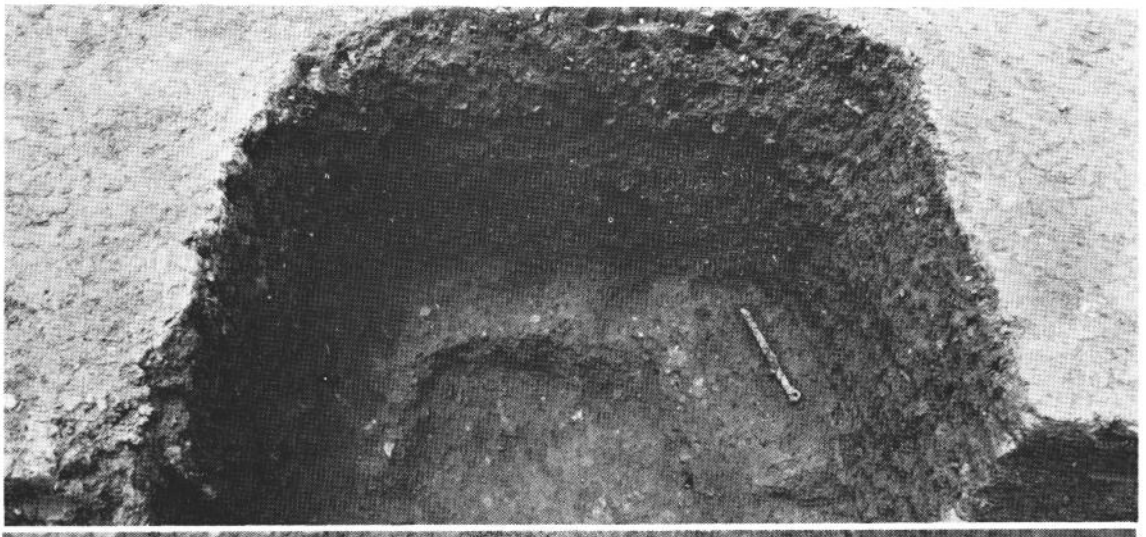
2　187・207号土壙墓



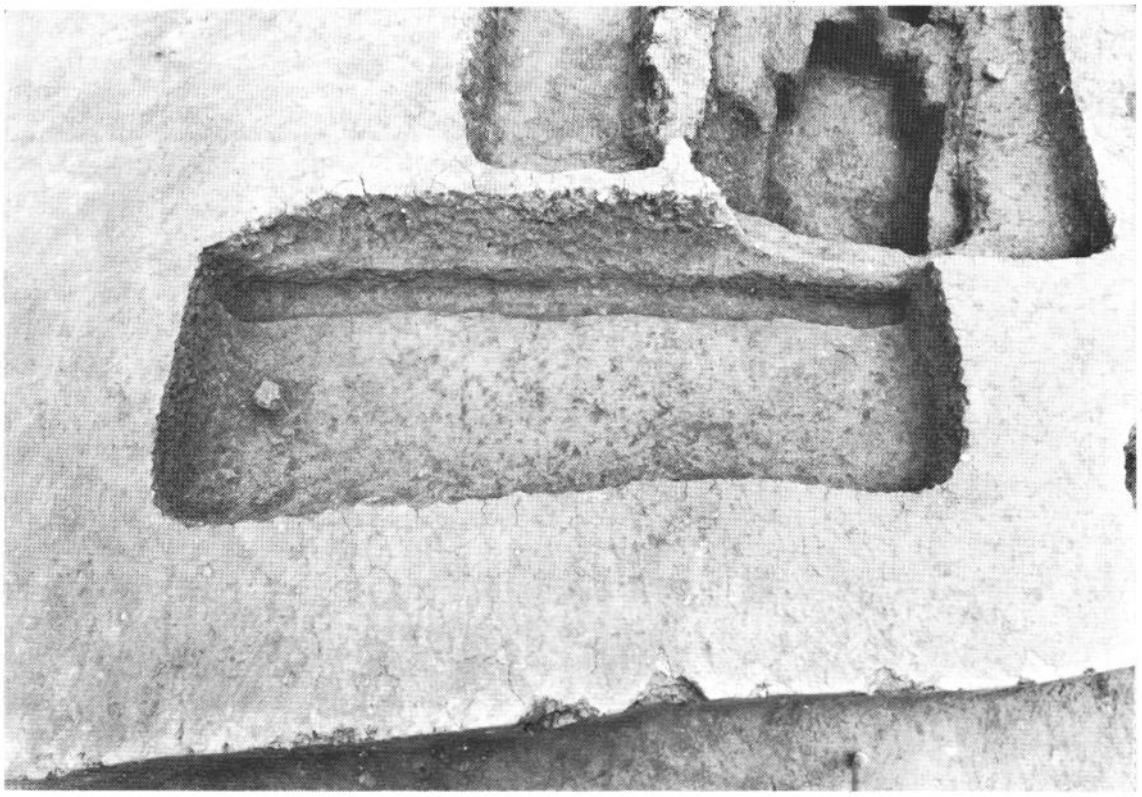
1　188号木棺墓標石



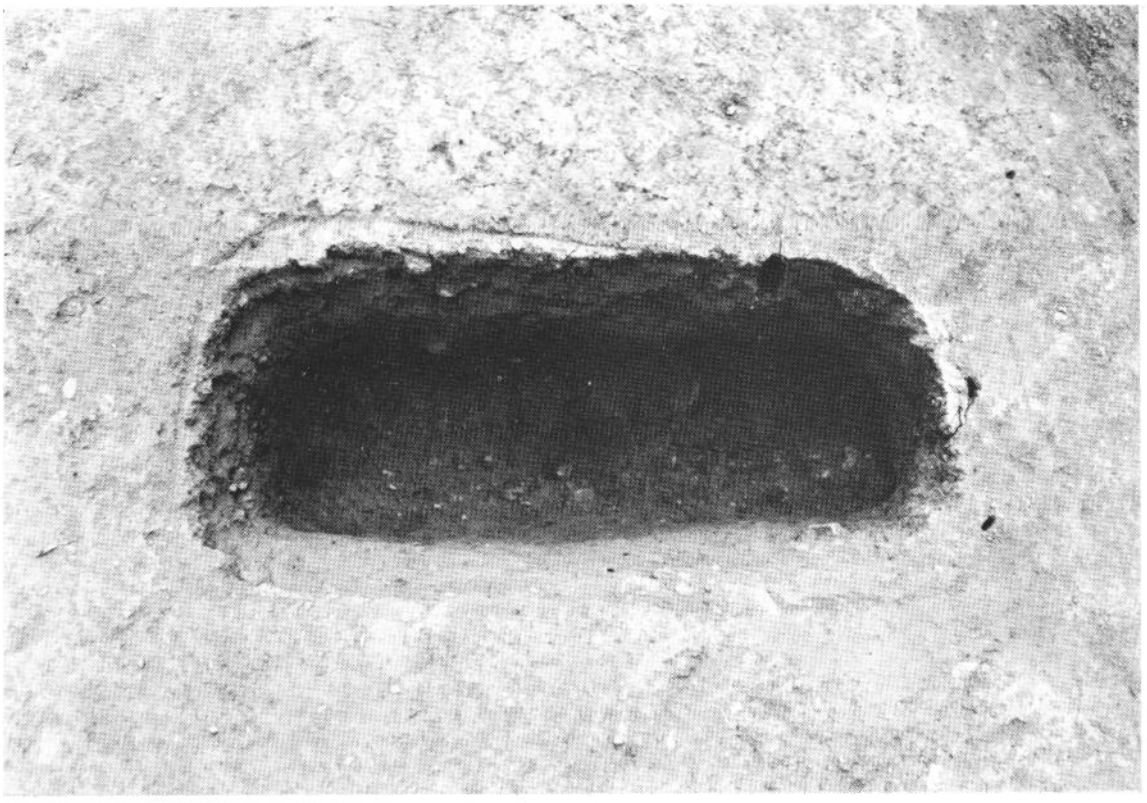
2　188号木棺墓



上　189号木棺墓　　中・下　遺物出土状況



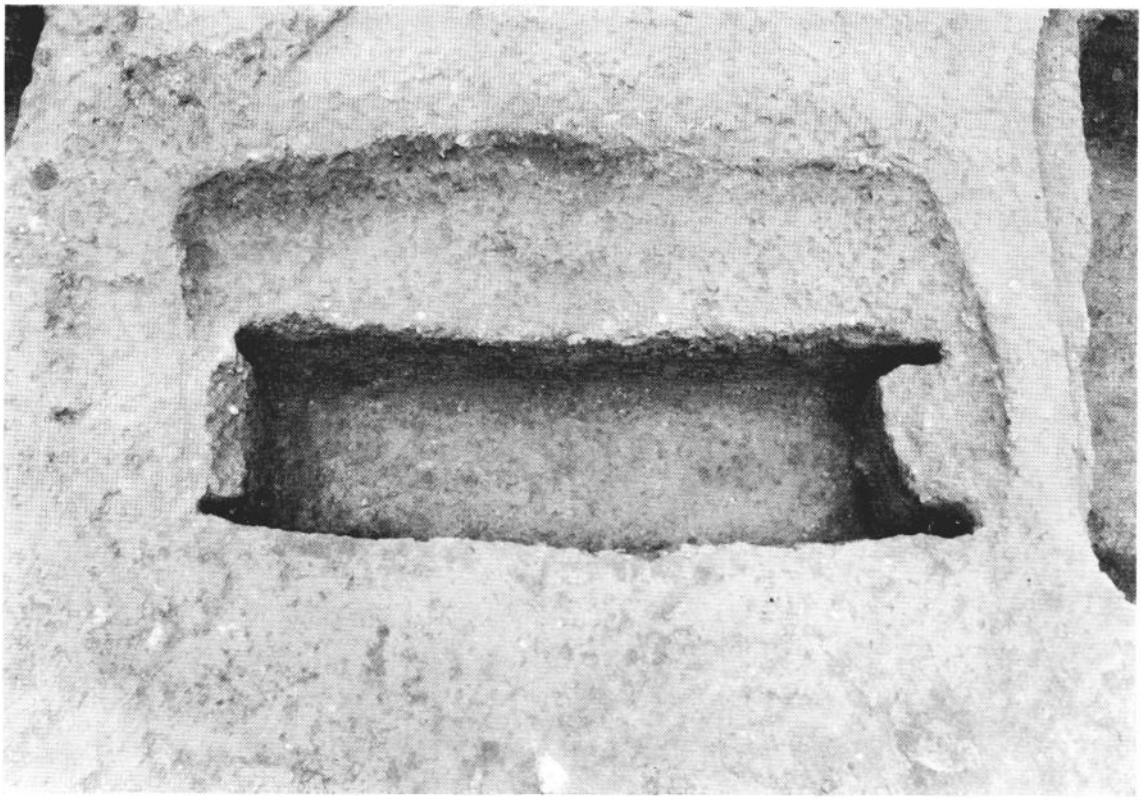
1　190号土壙墓



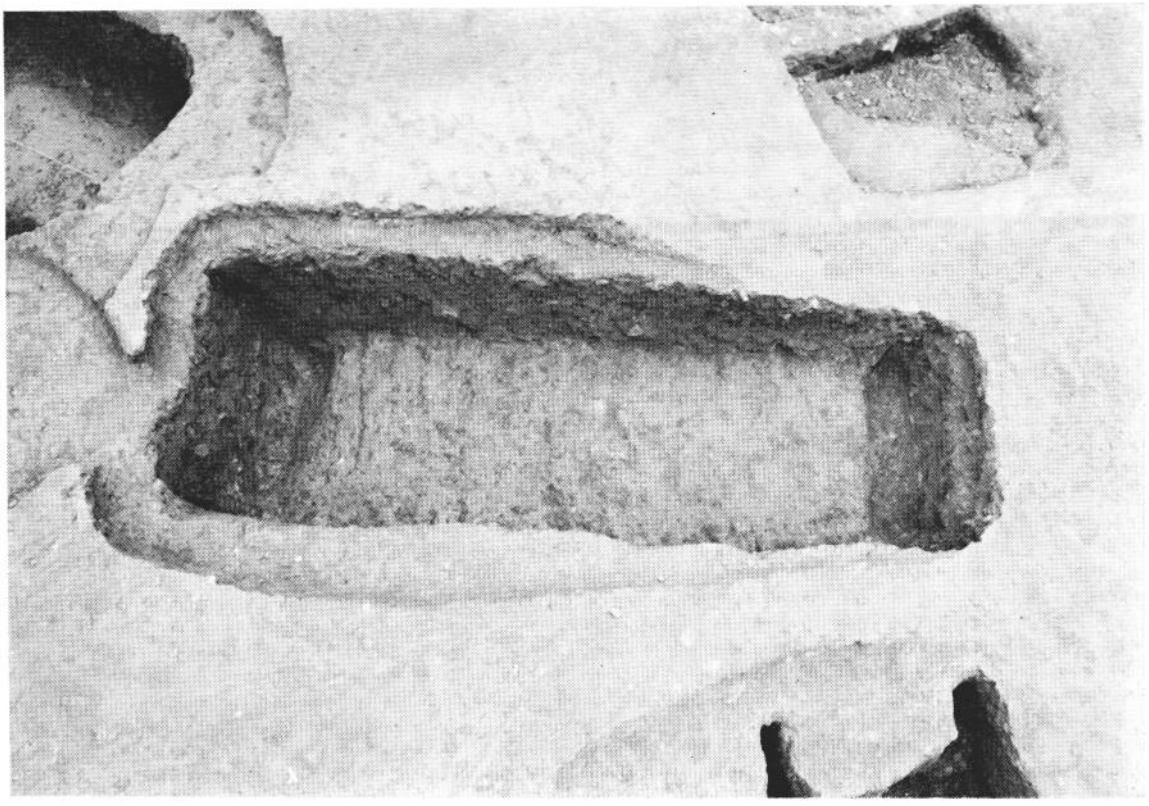
2　191号土壙墓

1　192号木棺墓

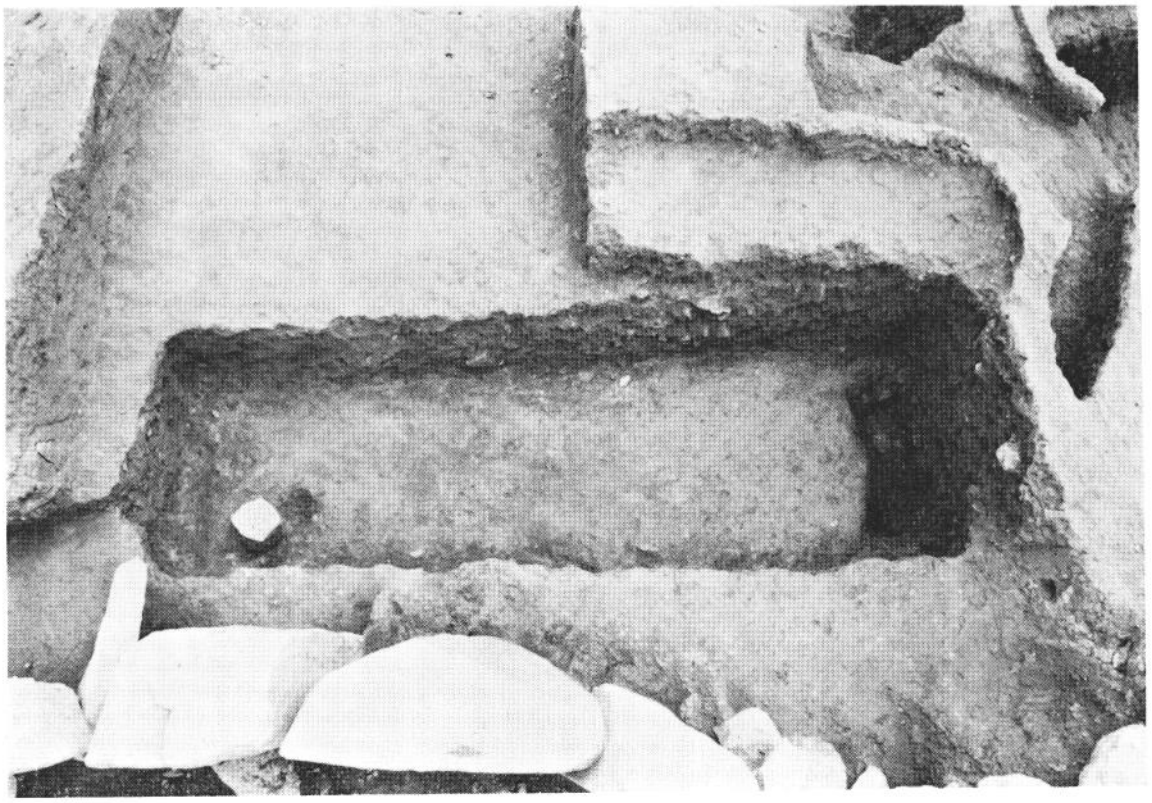
2　193号土壙墓



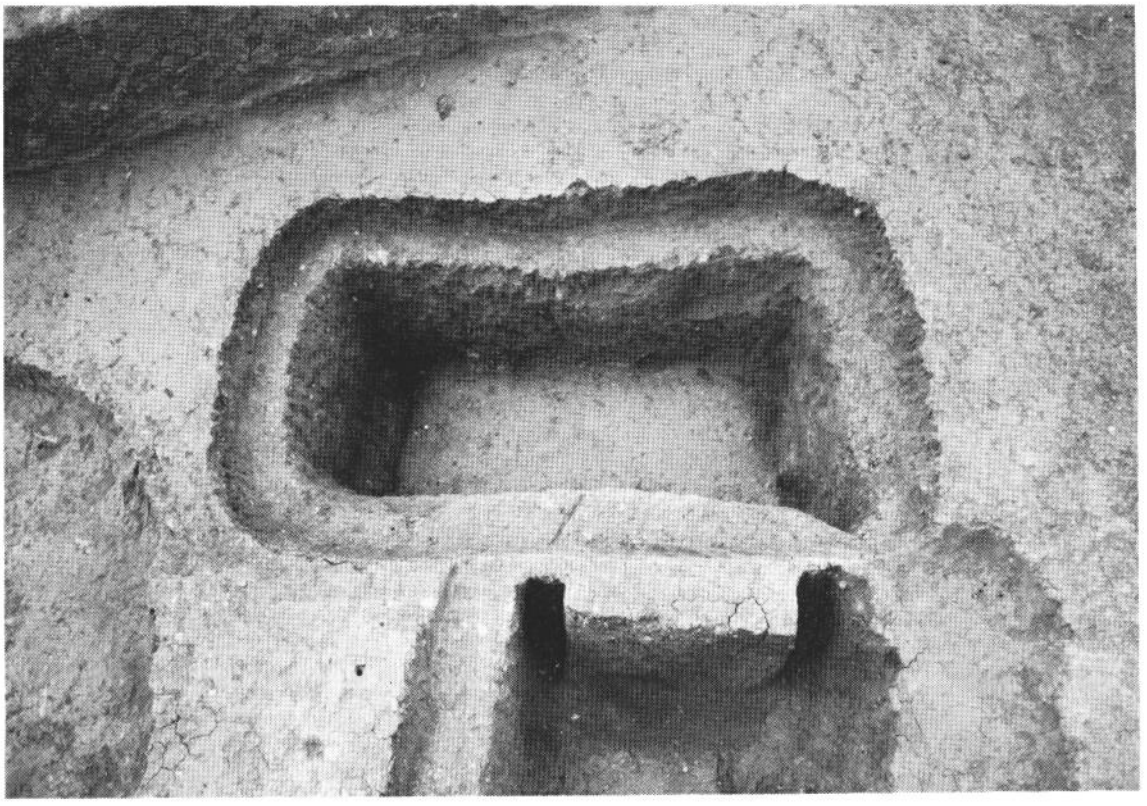
1　194号木棺墓



2　195号木棺墓

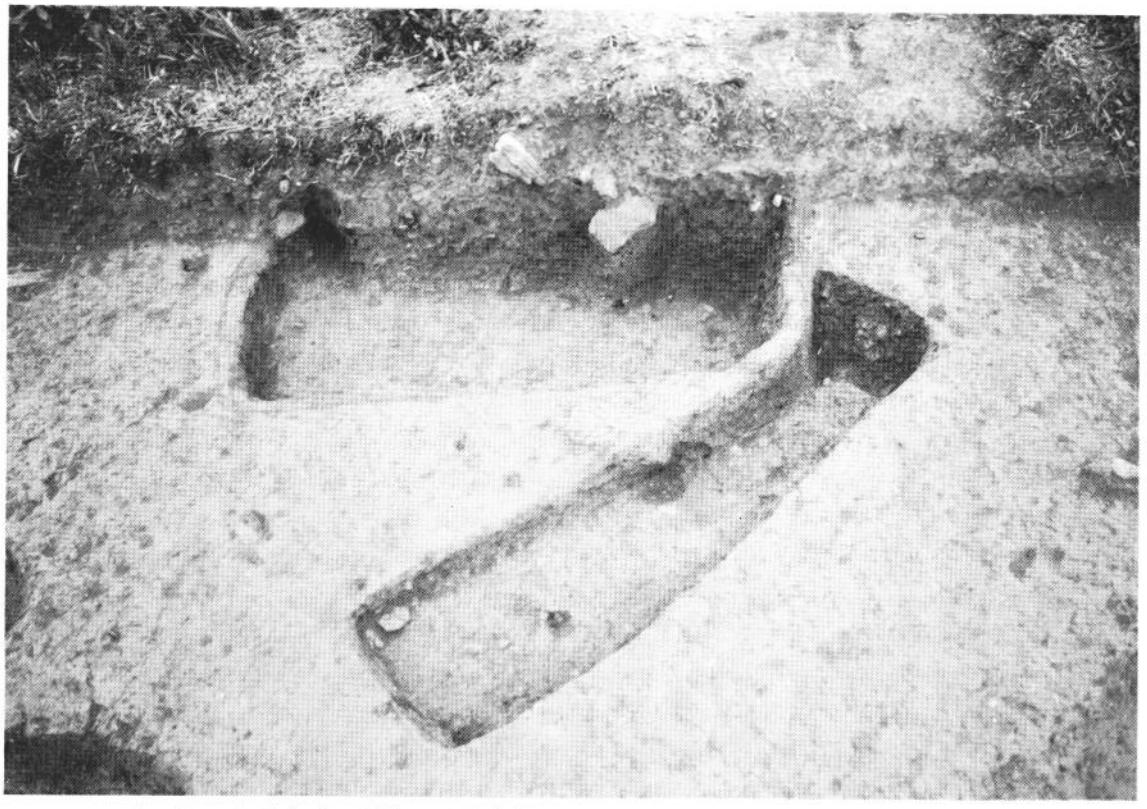


1　196号木棺墓

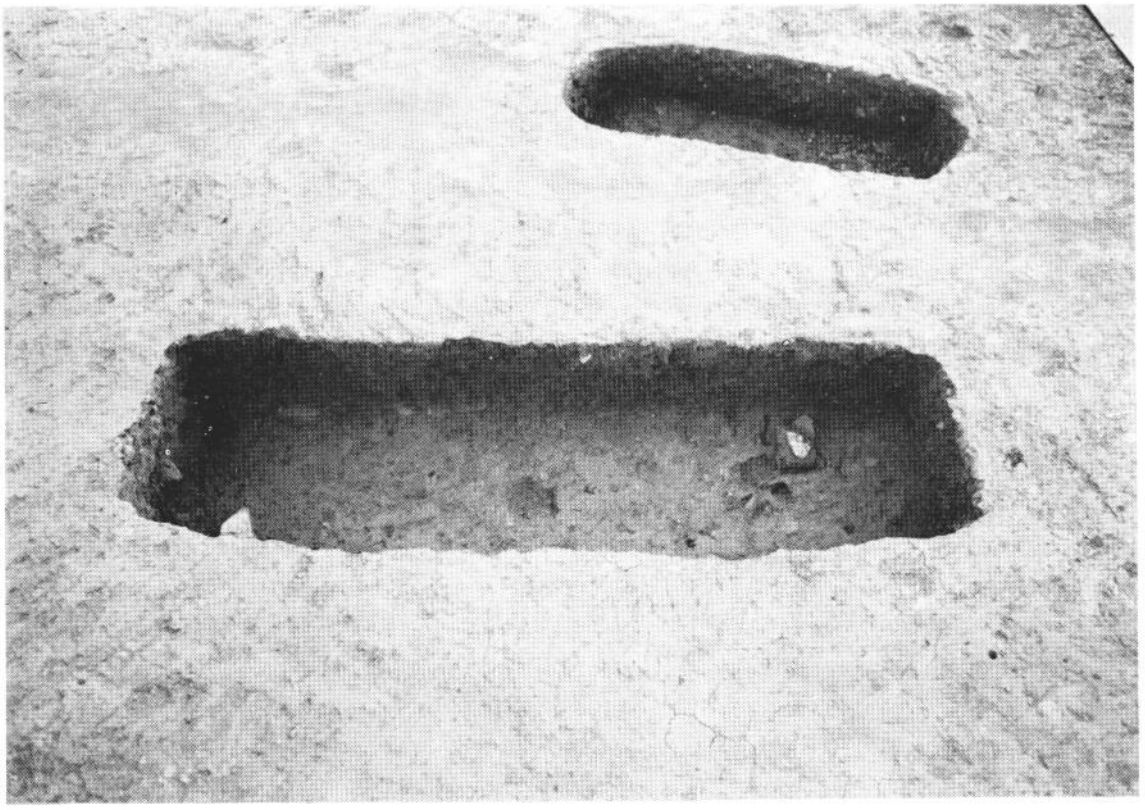


2　197号木棺墓

1　上：200号土壙墓・下　199号木棺墓

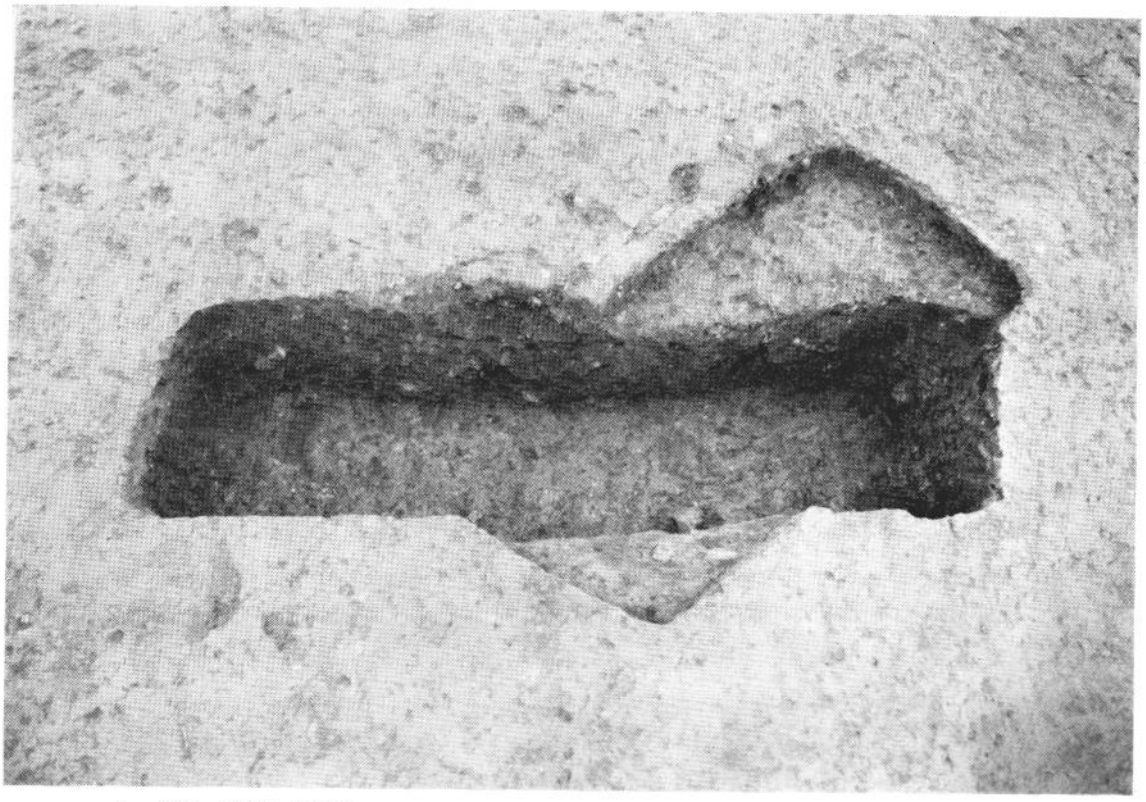


2　上　202号土壙墓・下　201号木棺墓

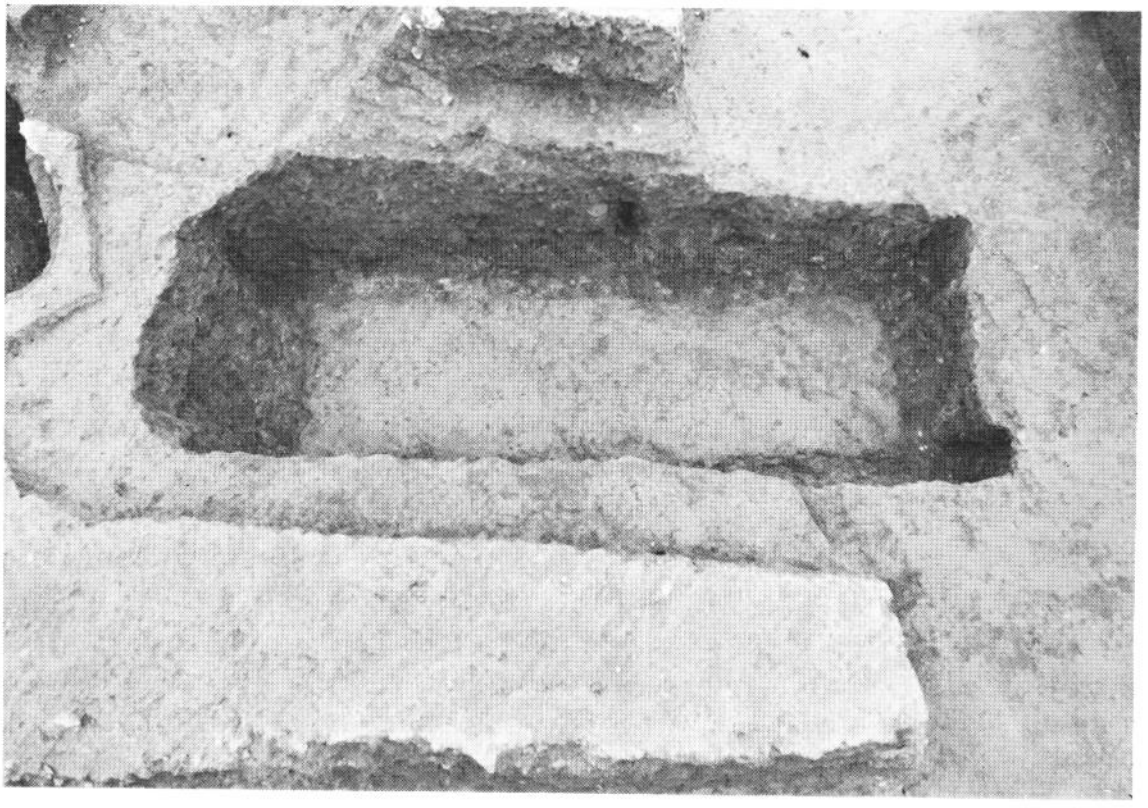


1　203号土壙墓

2　203号土壙墓遺物出土状況

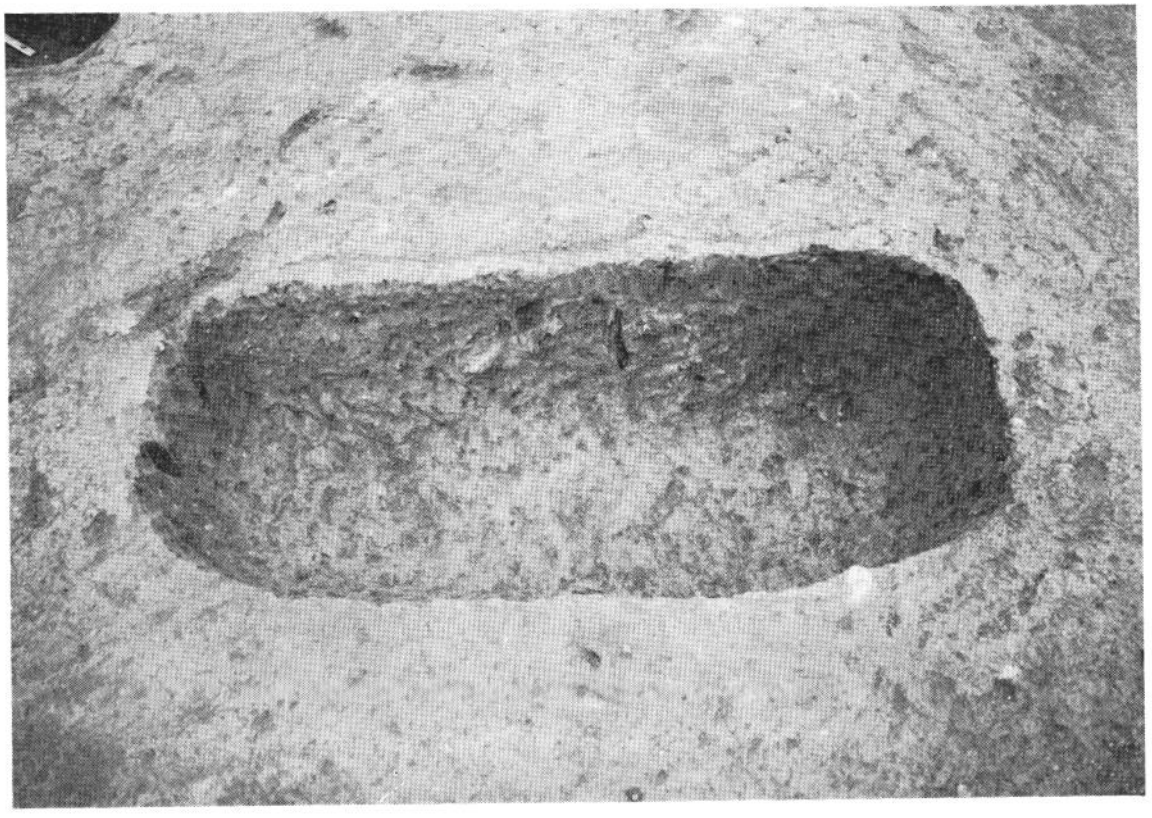


1　205・206号土壙墓

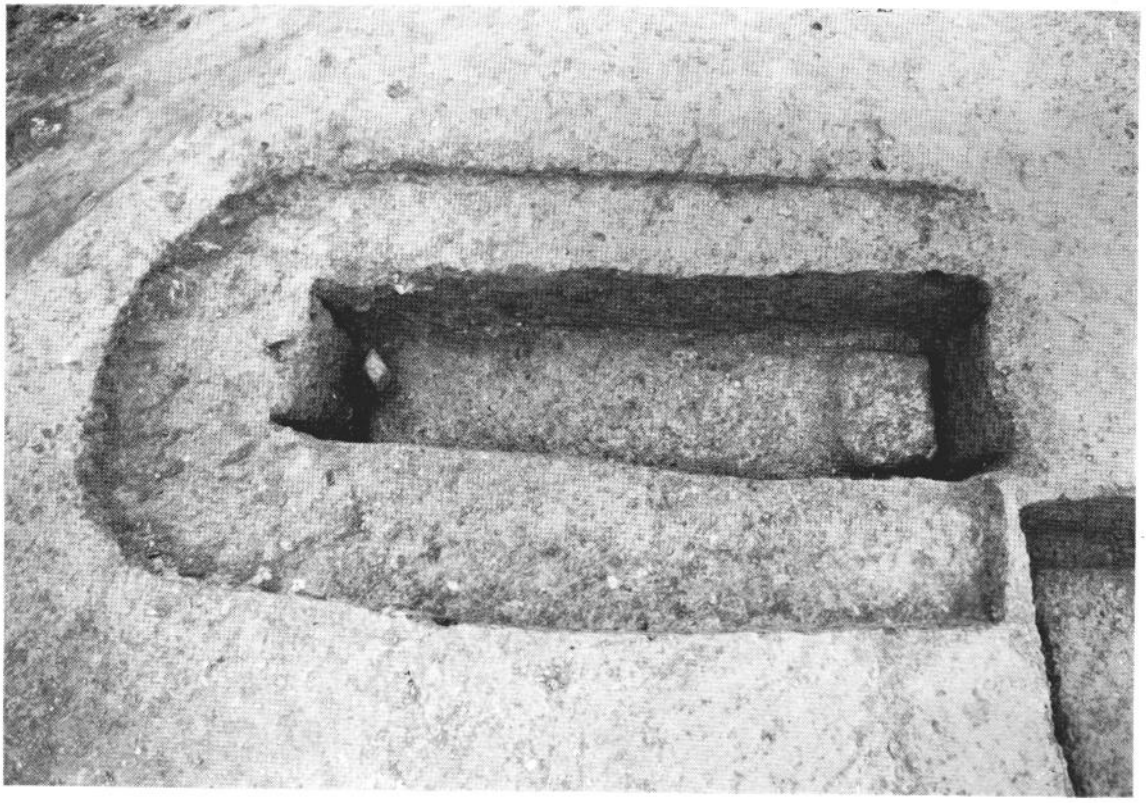


2　210号木棺墓

1　211号木棺墓

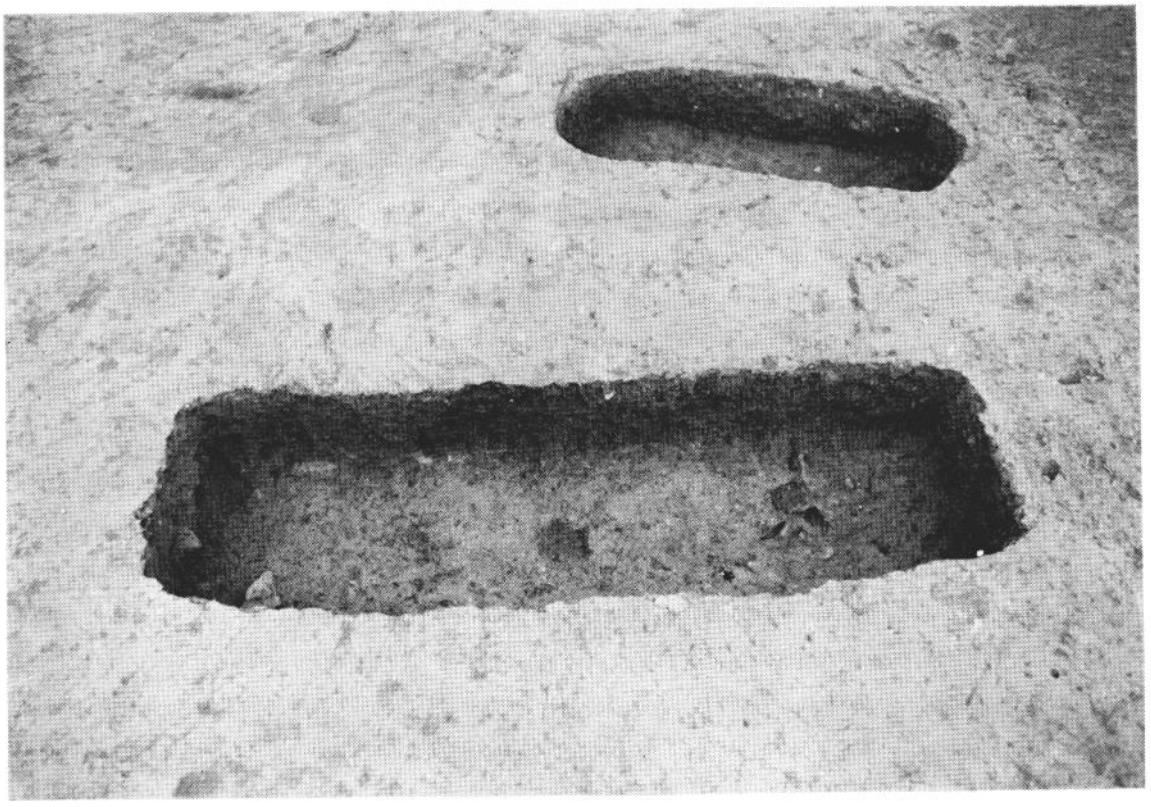


2　213号土壙墓

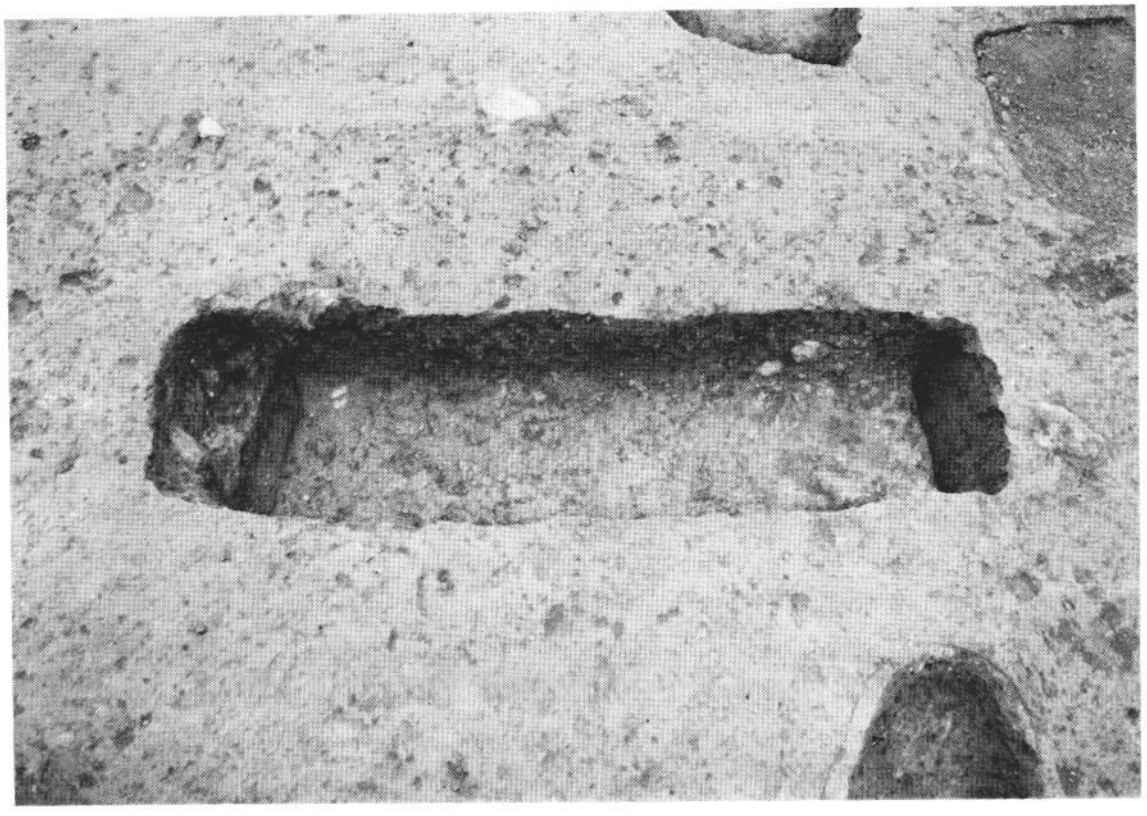


1　212号木棺墓

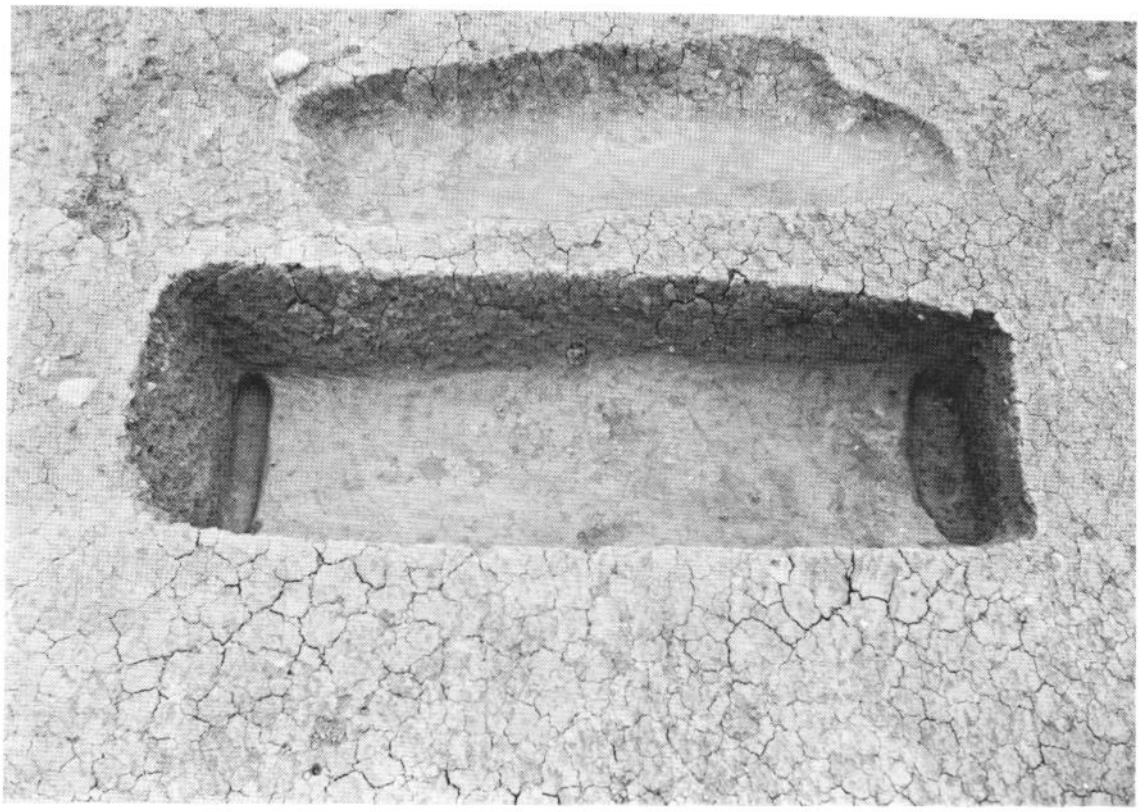
2　212号木棺墓北西側木口部



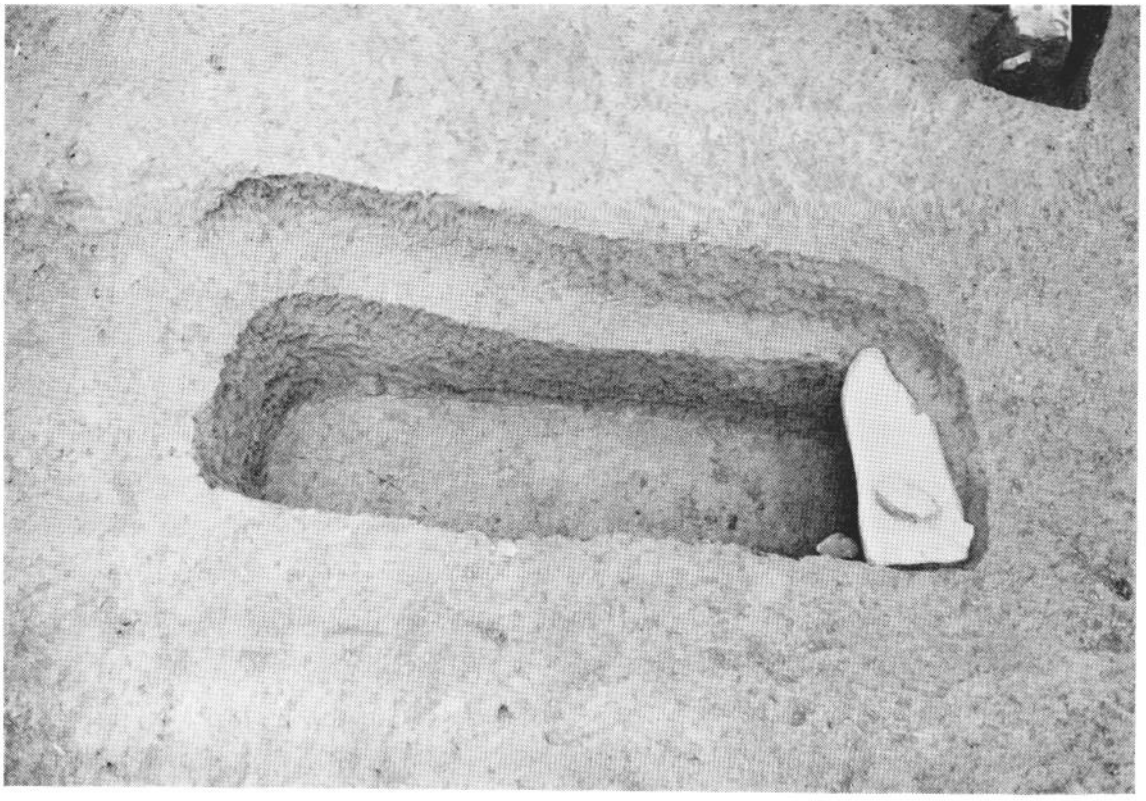
1　215号木棺墓



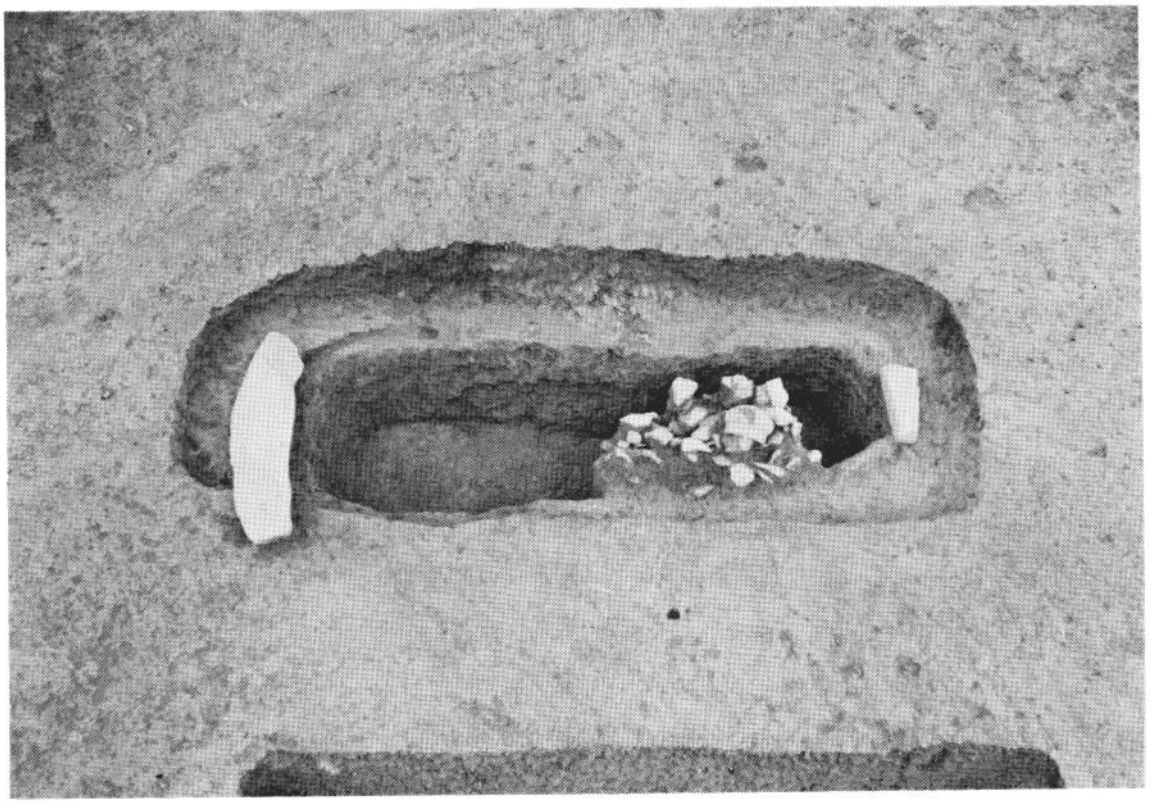
2　216号木棺墓



1　217号木棺墓

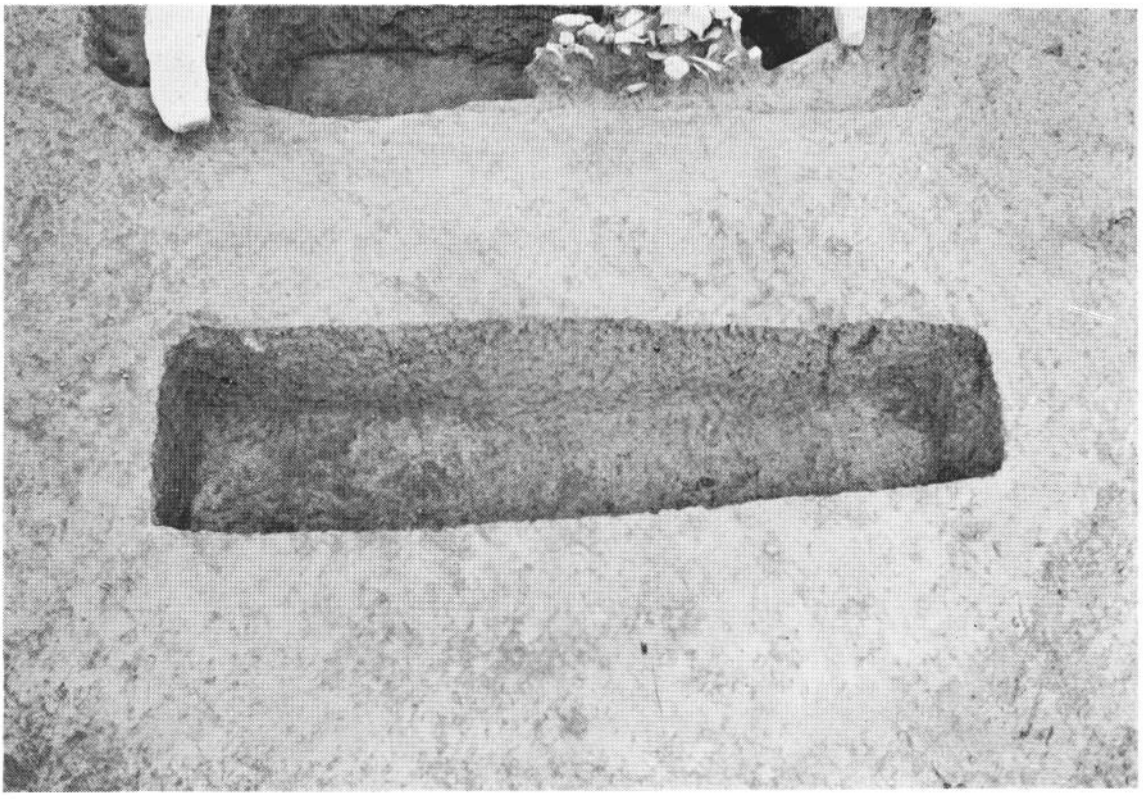


2　218号土壙墓



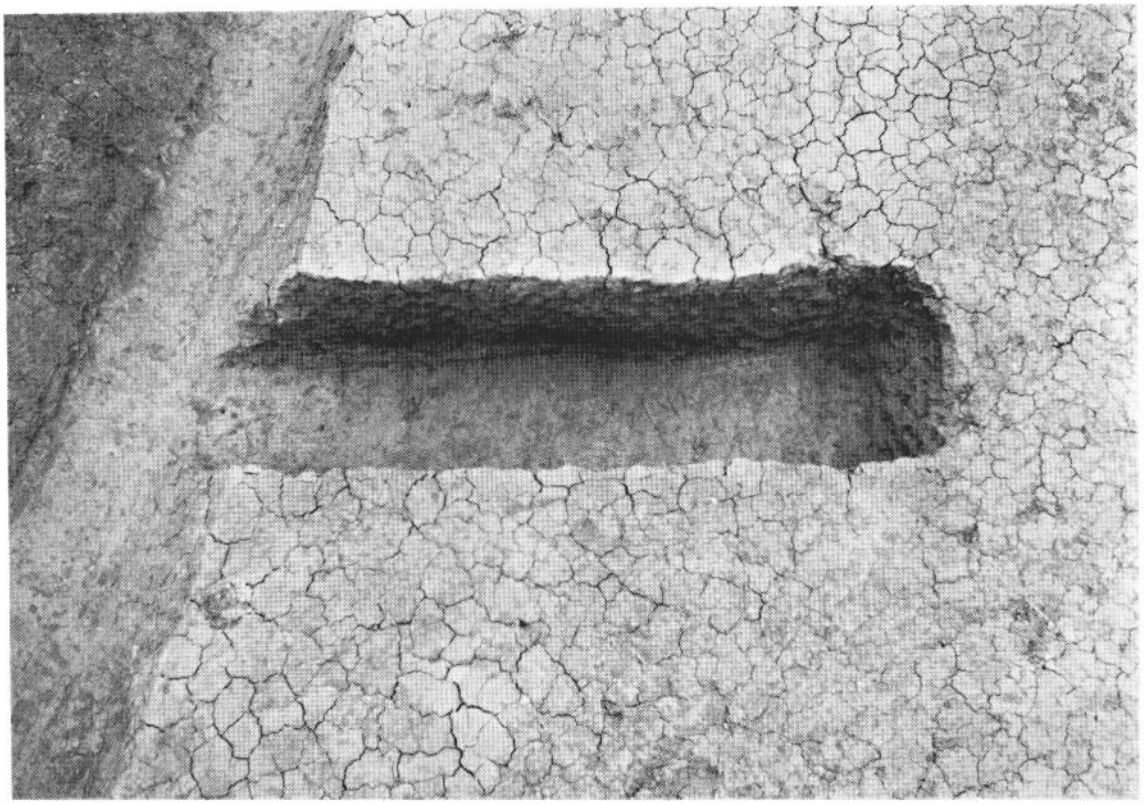
1　219号土壙墓

219号土壙墓遺物出土状況

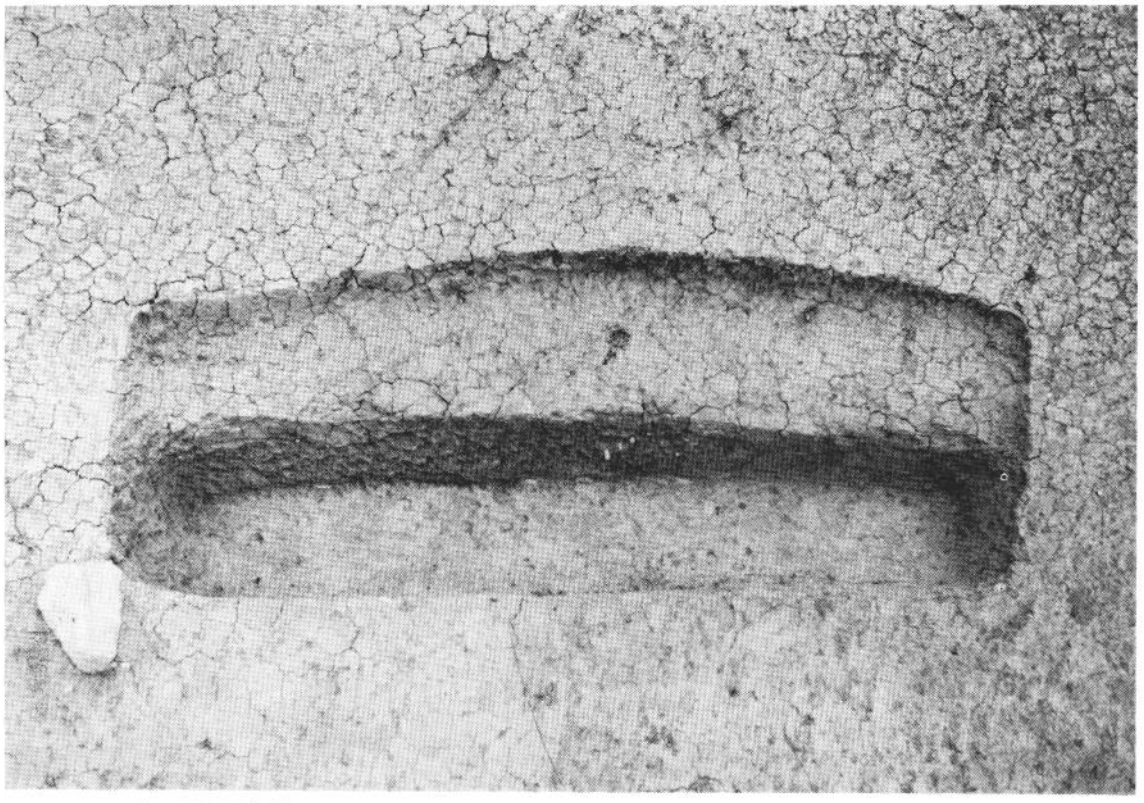


1　220号土壙墓

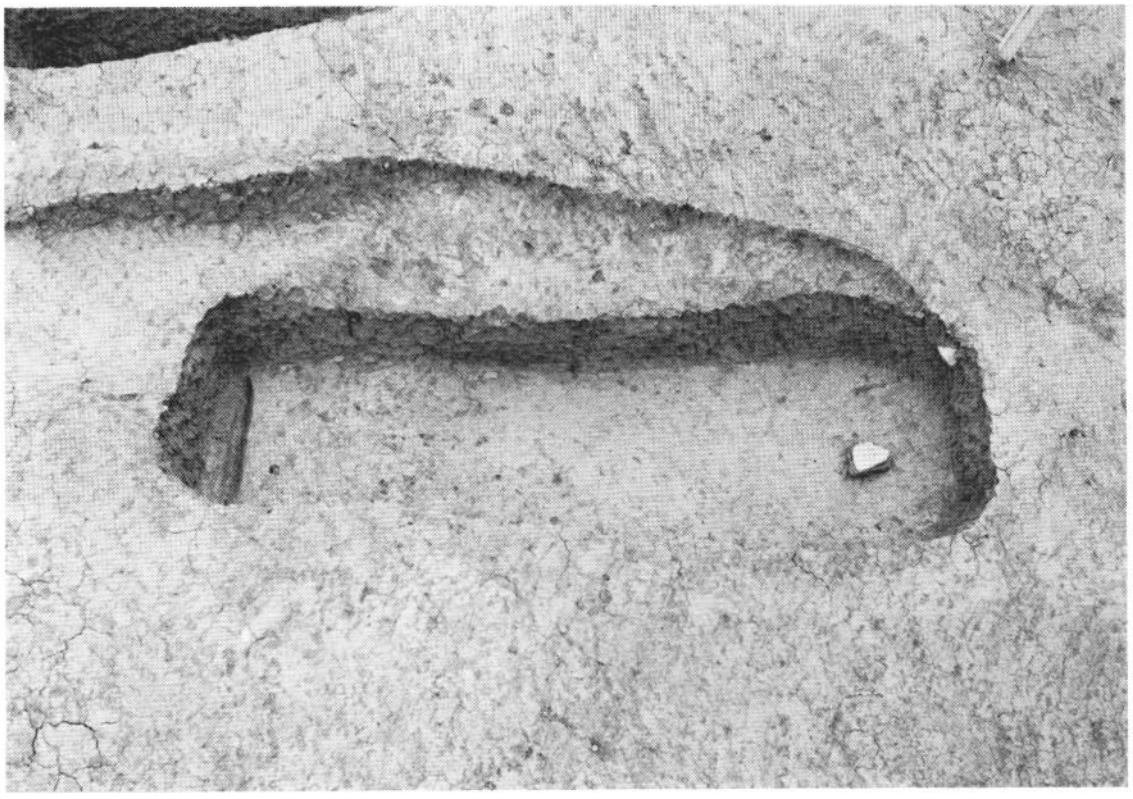
2　221号土壙墓



1　222号土壙墓



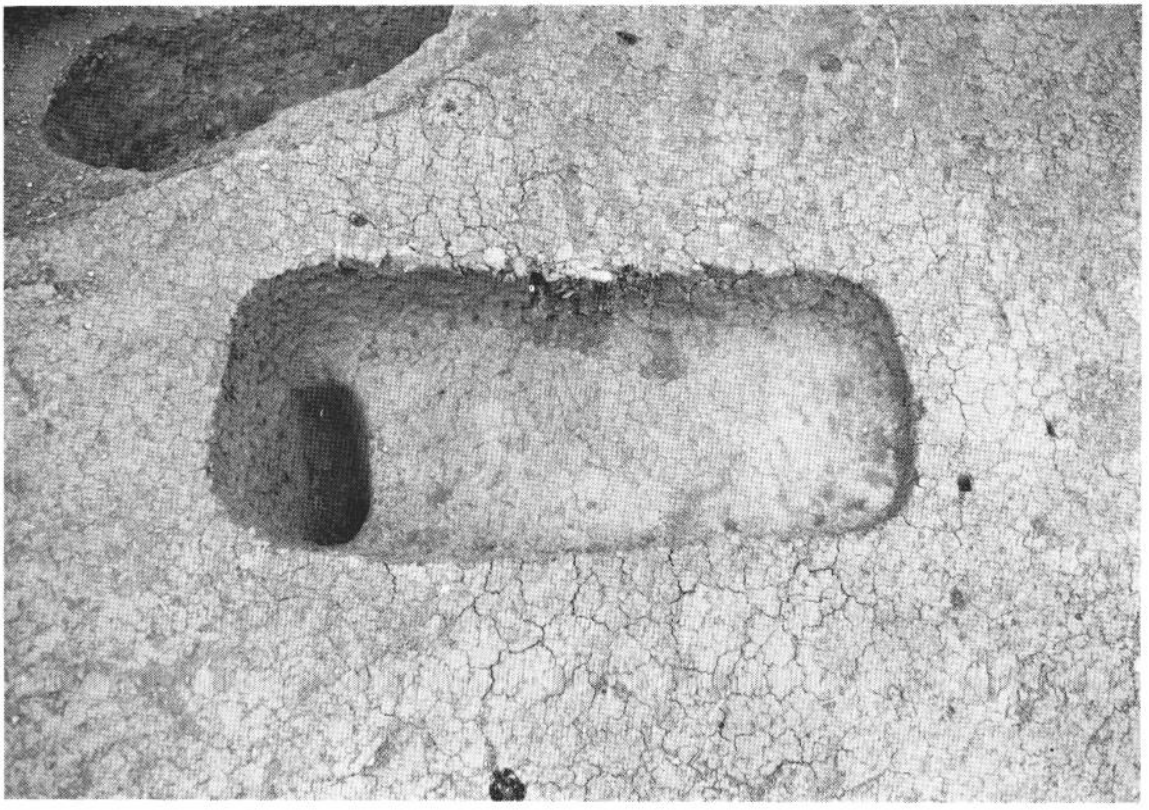
2　223号土壙墓



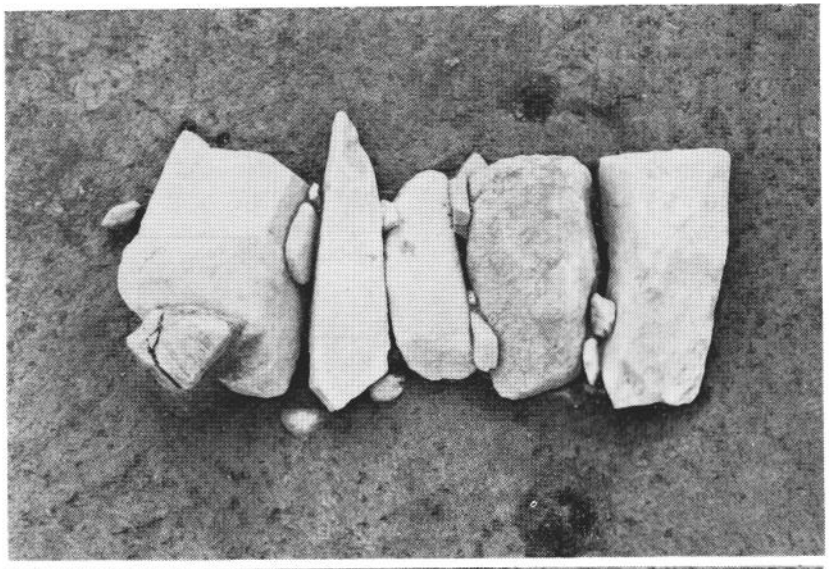
1　224号木棺墓

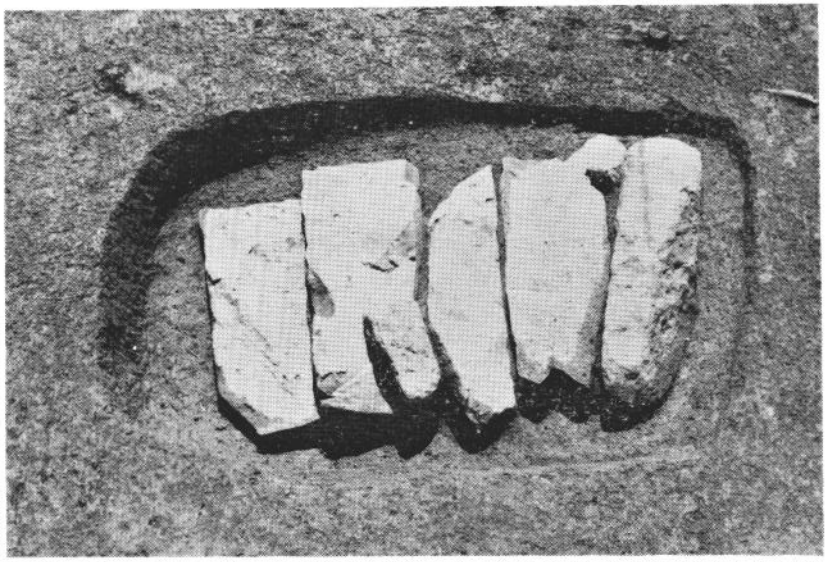
2　225号土壙墓

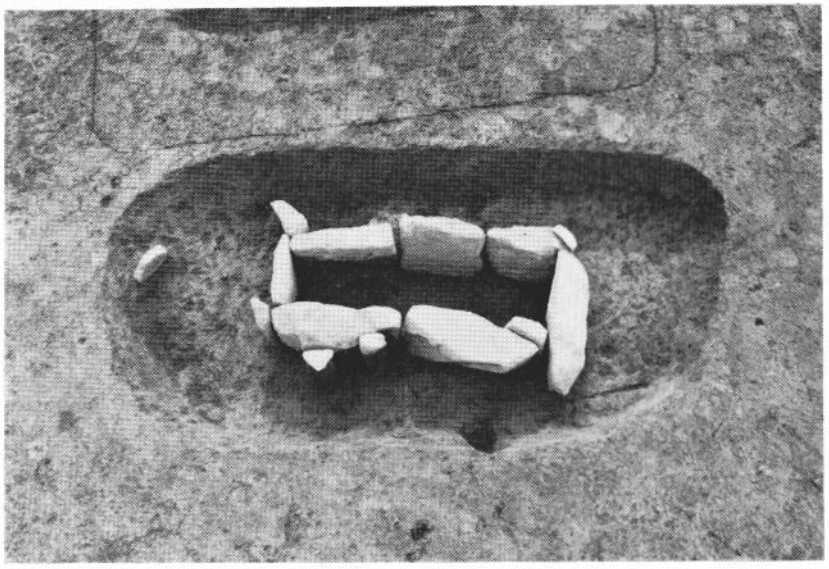
1　226号土壙墓

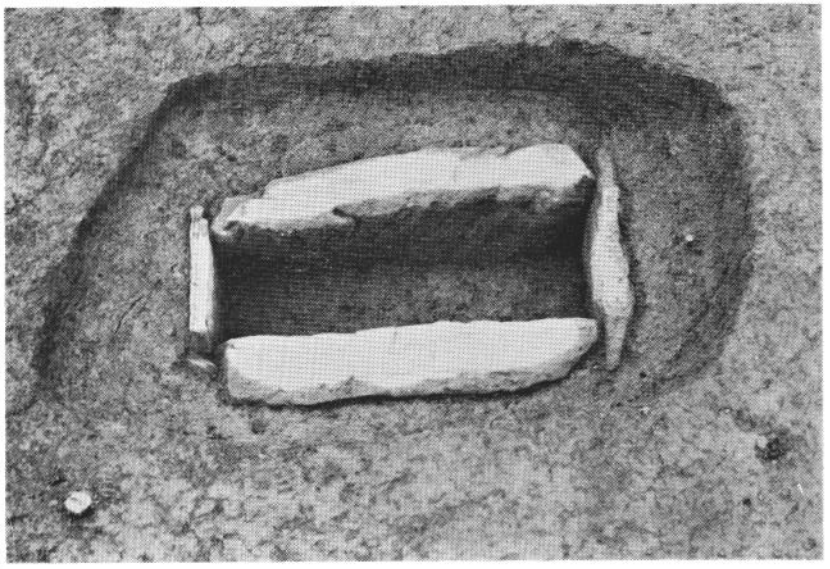


2　228号木棺墓



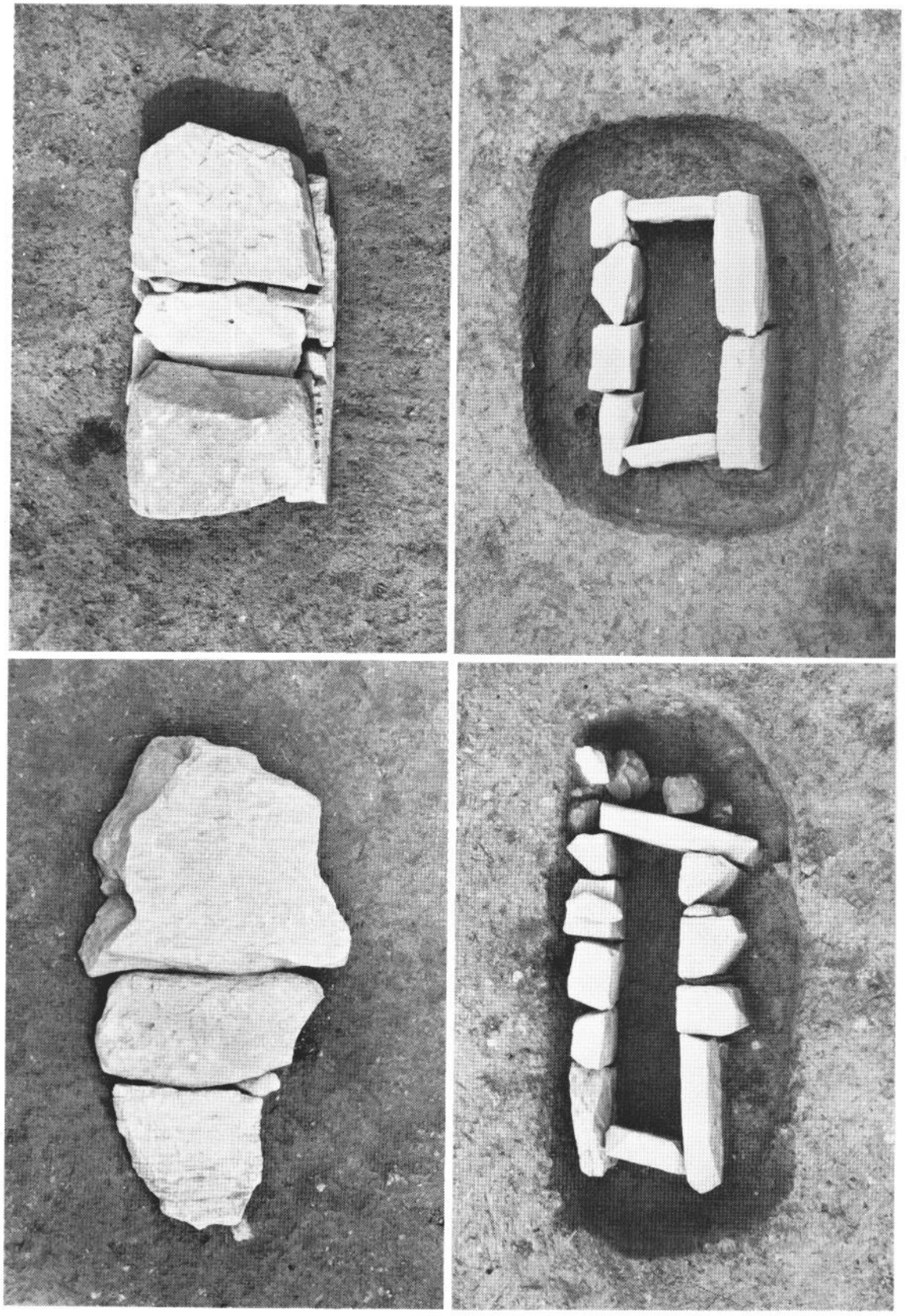




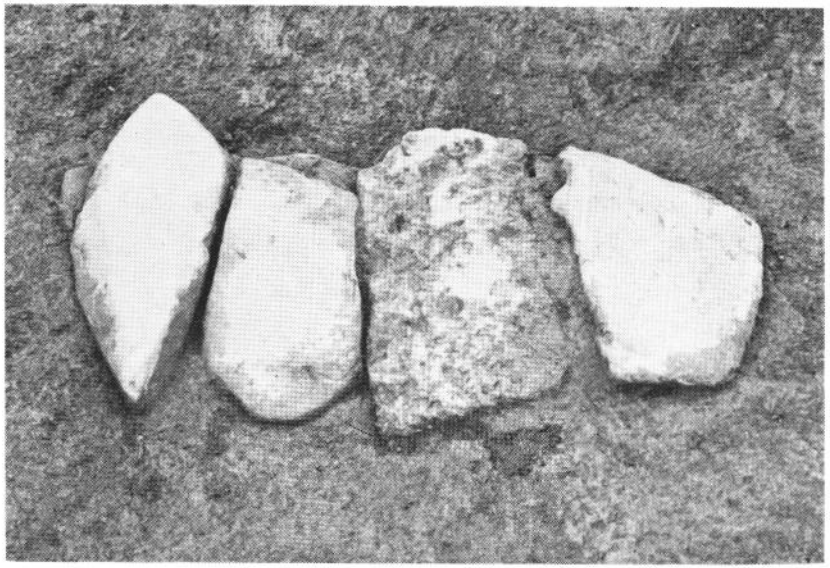


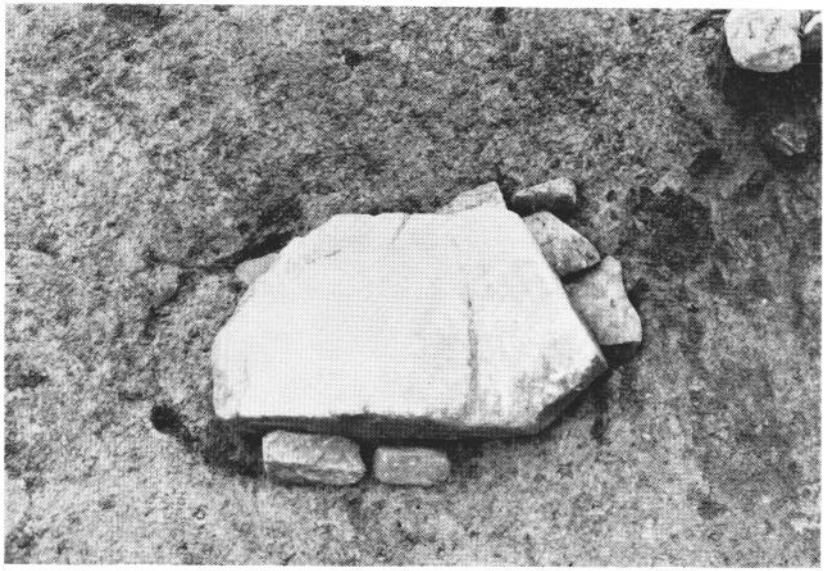
右　上下　24号箱式石棺墓

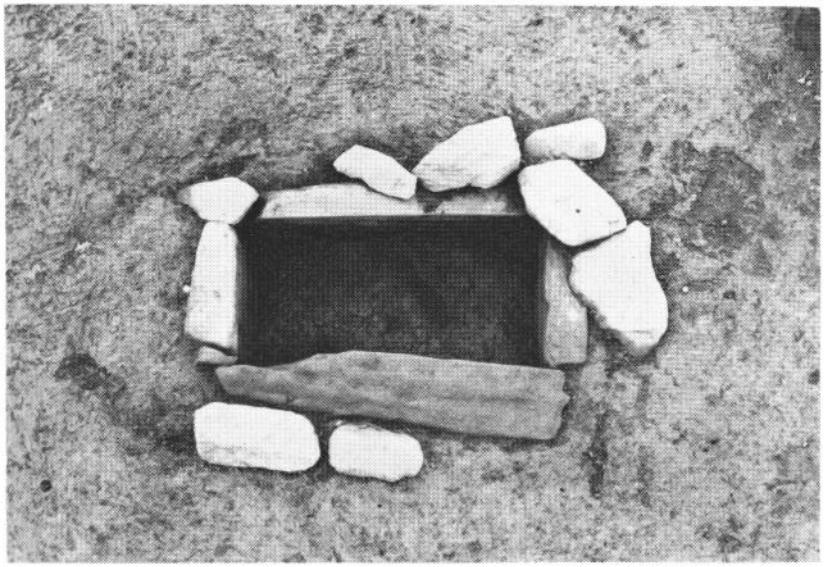
左　上下　25号箱式石棺墓



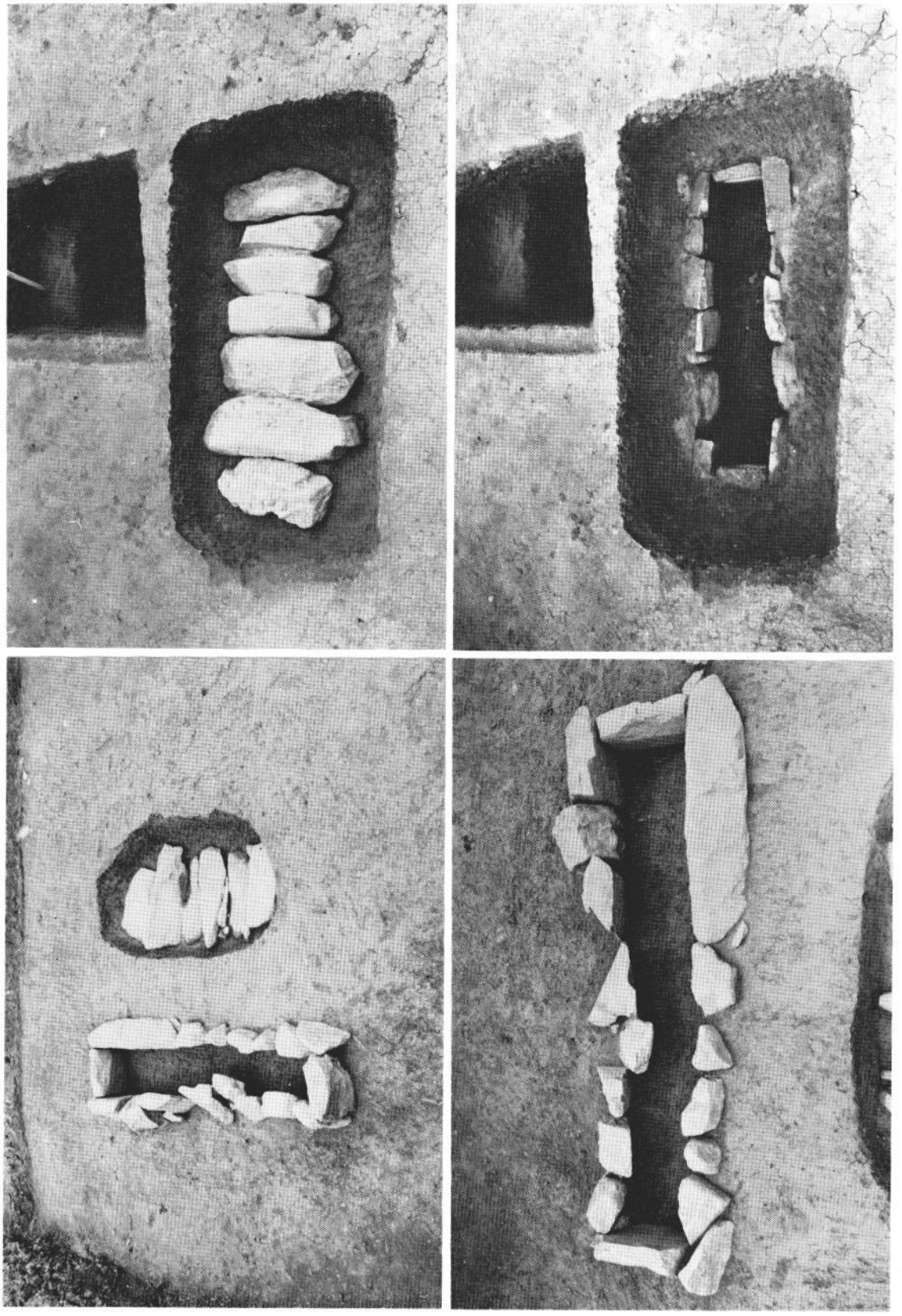
右　上下　26号箱式石棺墓
左　上下　27号箱式石棺墓



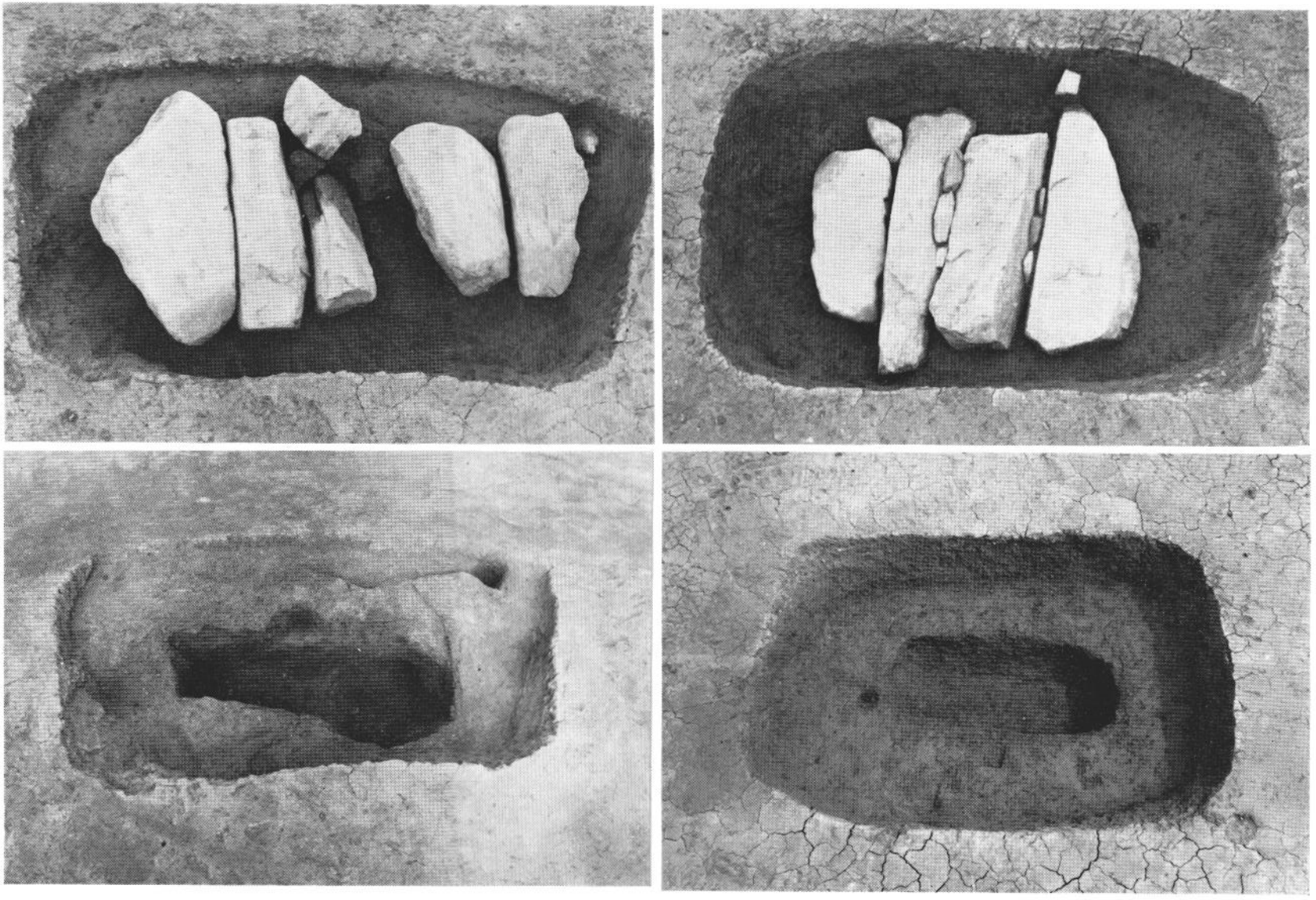




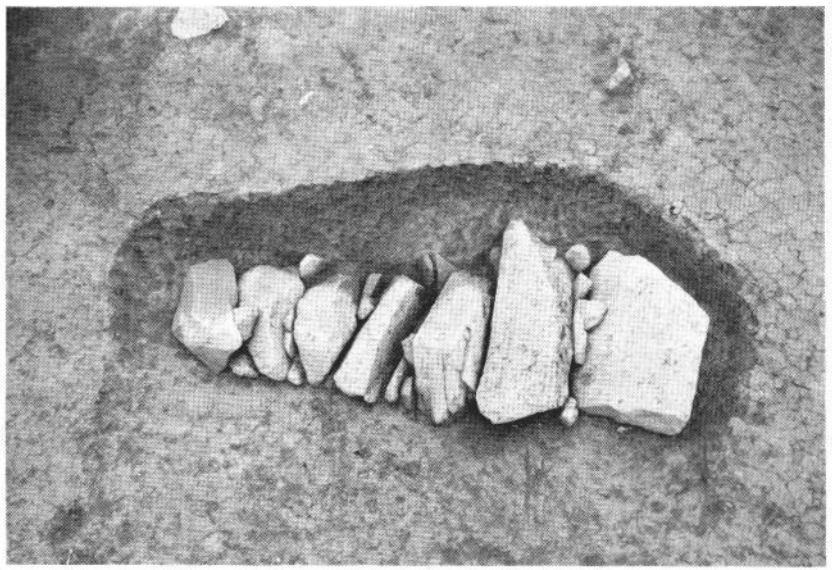
右　上下　28号箱式石棺墓
左　上下　29号箱式石棺墓

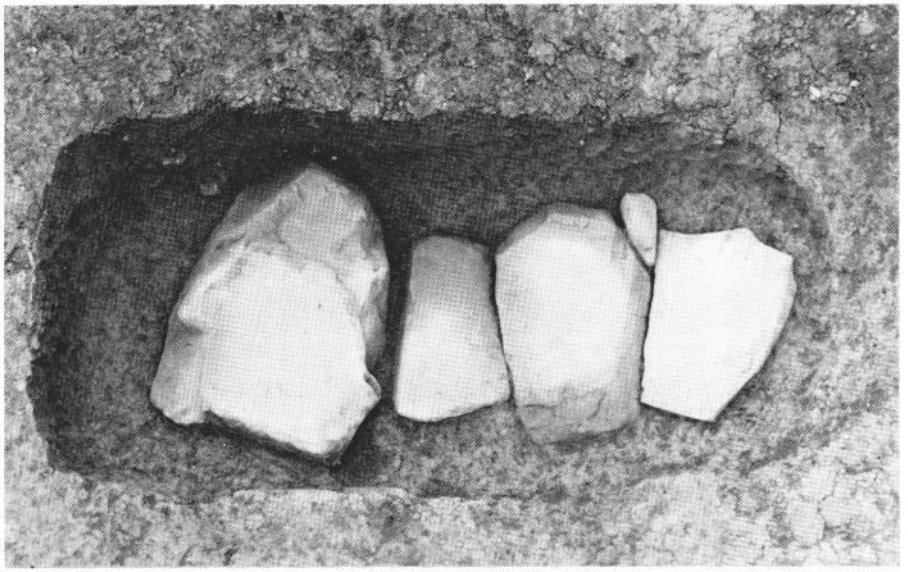


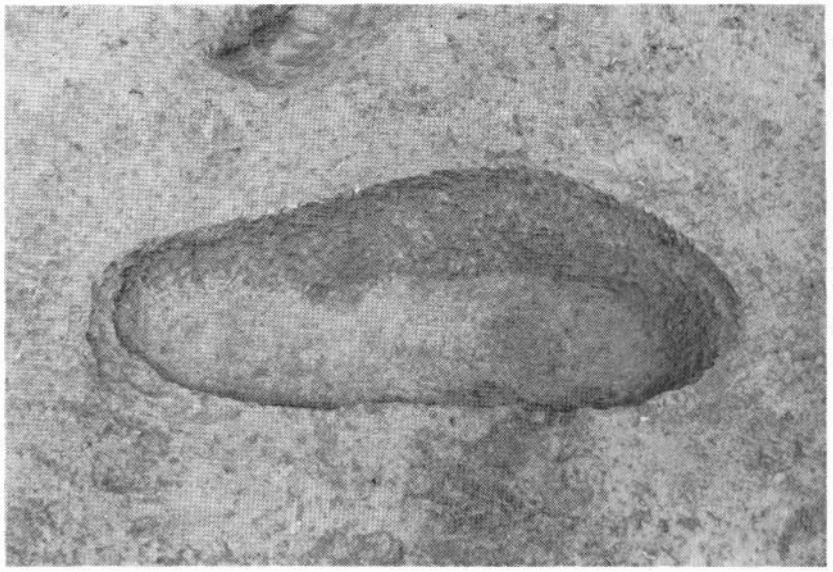
右 上下 30号箱式石棺墓
左 上下 31号箱式石棺墓

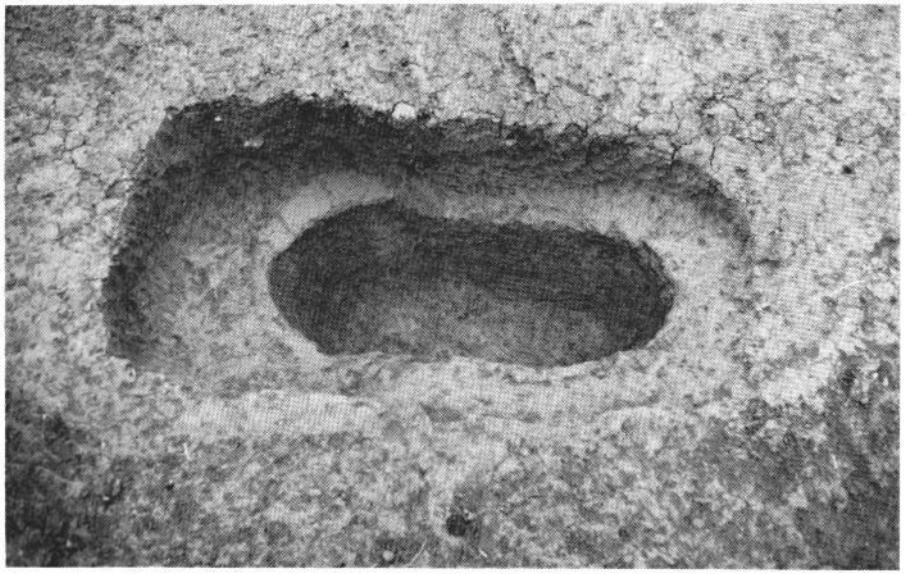


右　上下　15号石蓋土壙墓
左　上下　16号石蓋土壙墓

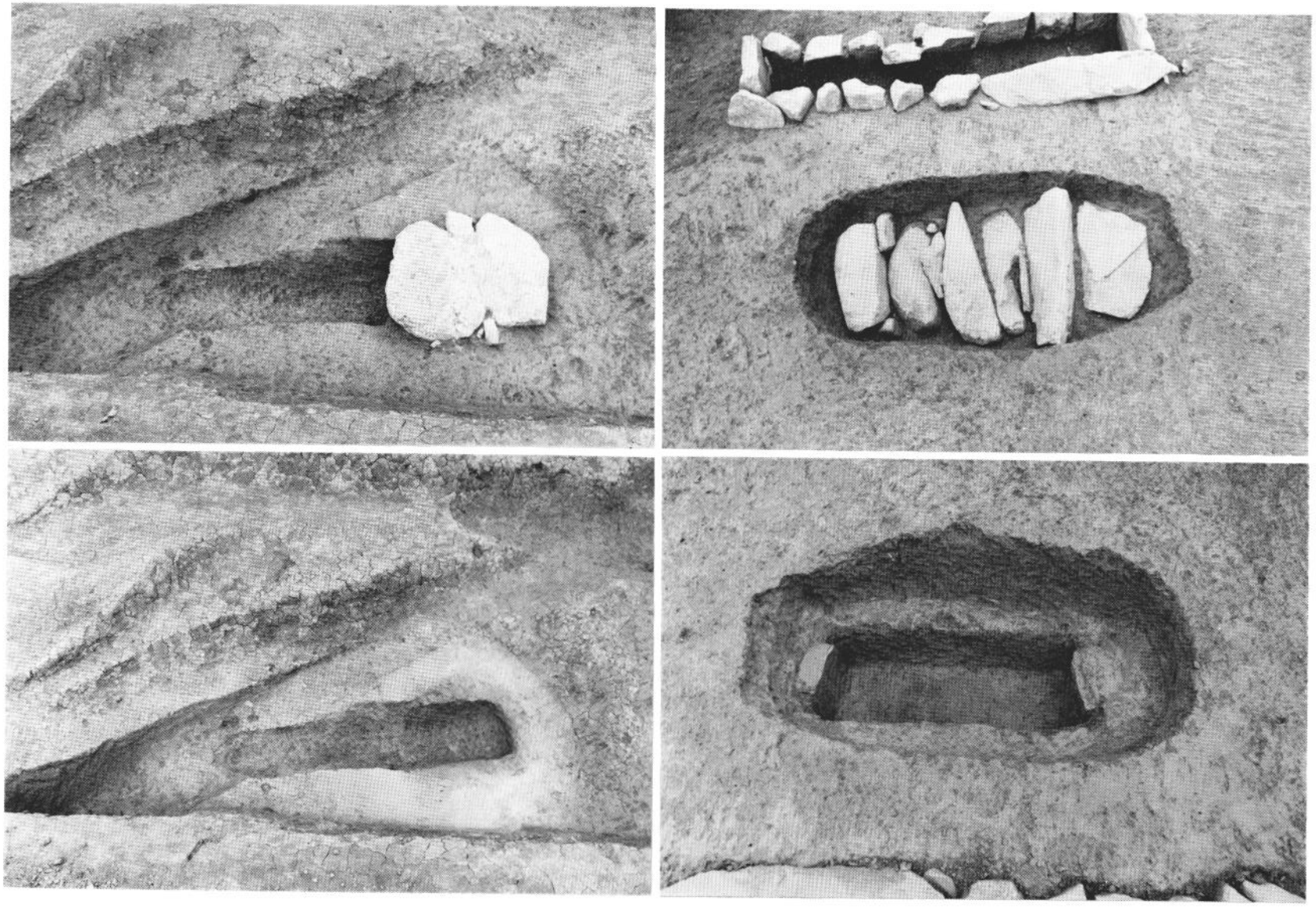




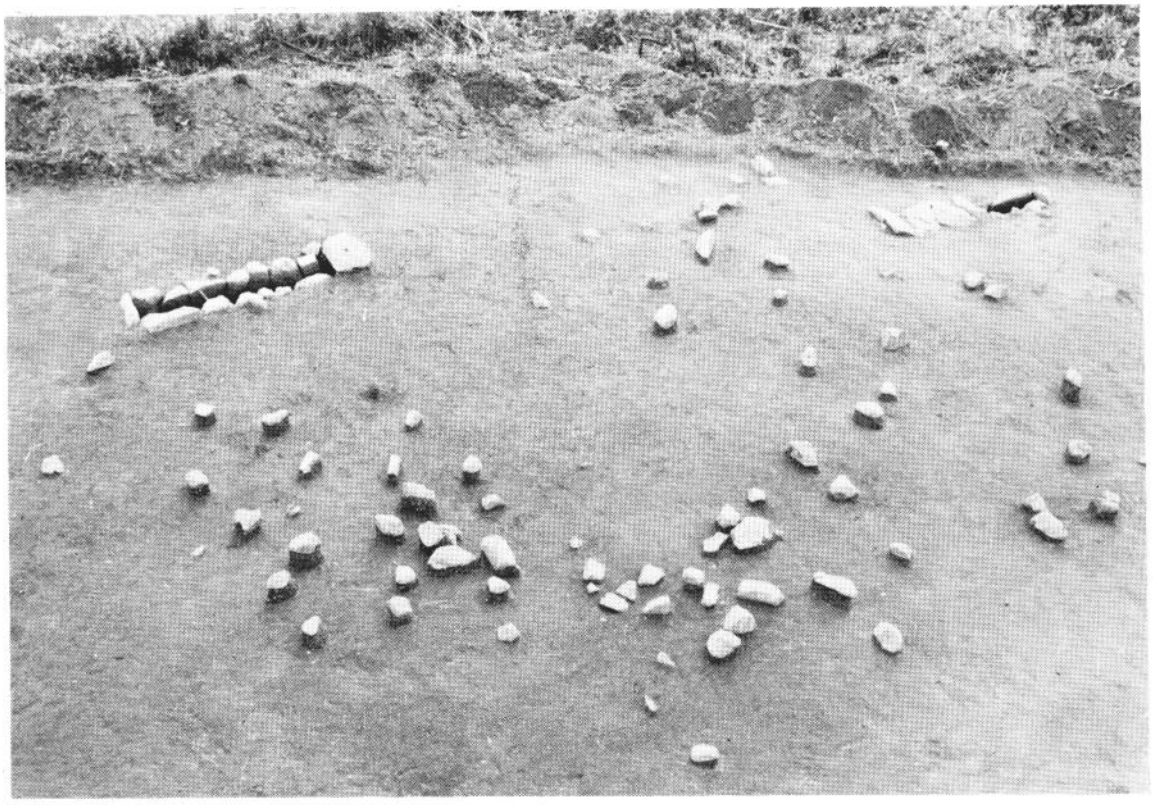




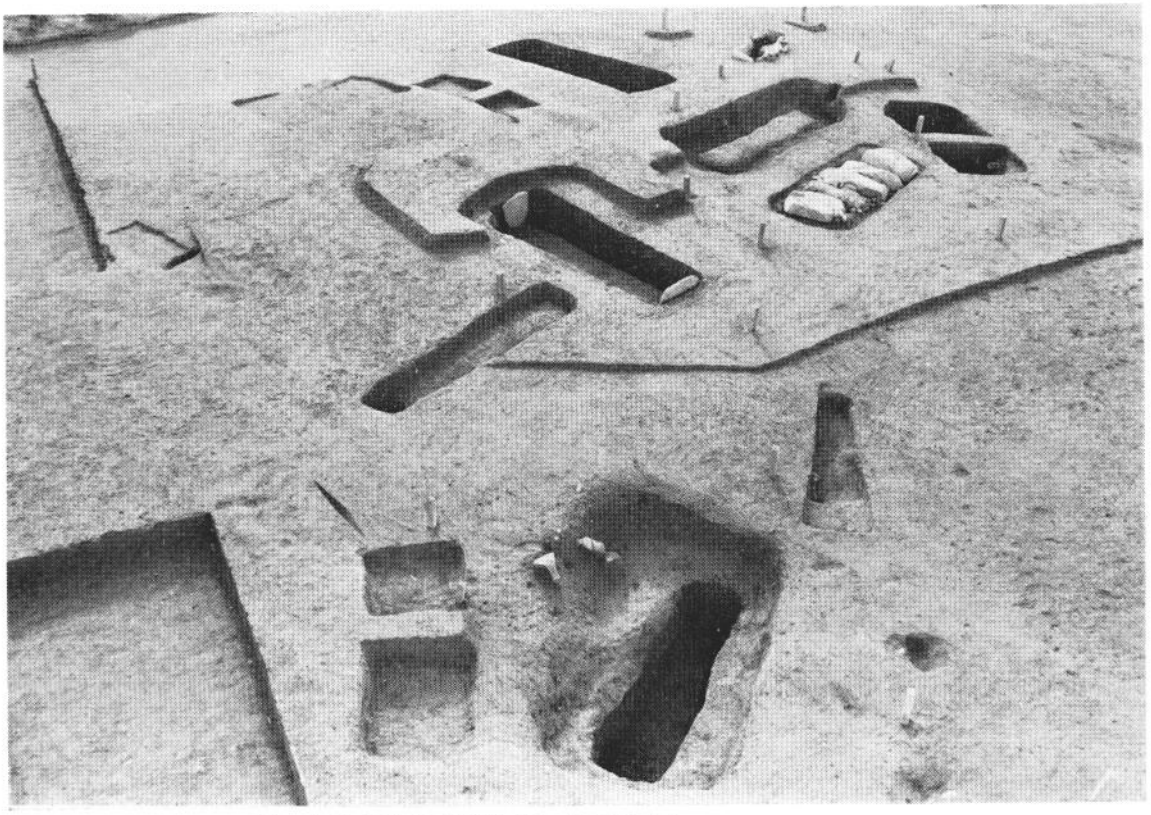
右　上下　17号石蓋土壙墓
左　上下　18号石蓋土壙墓



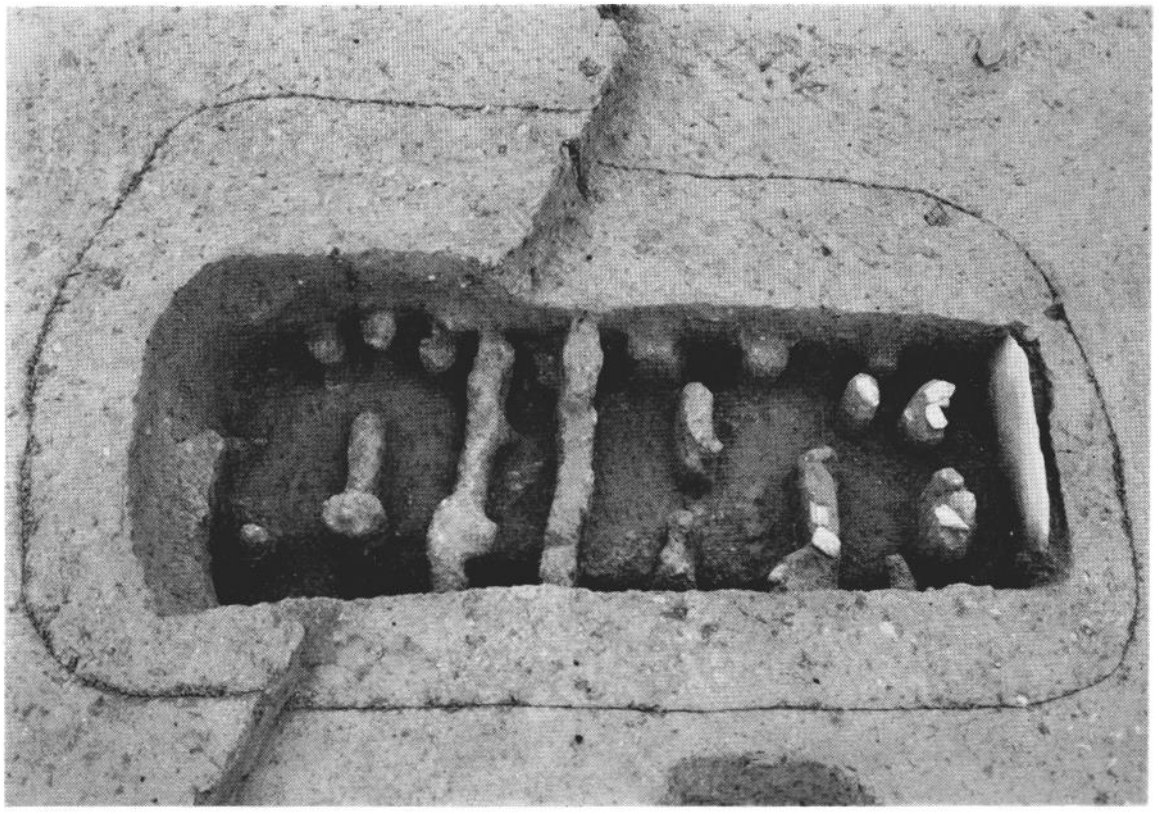
右　上下　19号石蓋土壙墓
左　上下　20号石蓋土壙墓



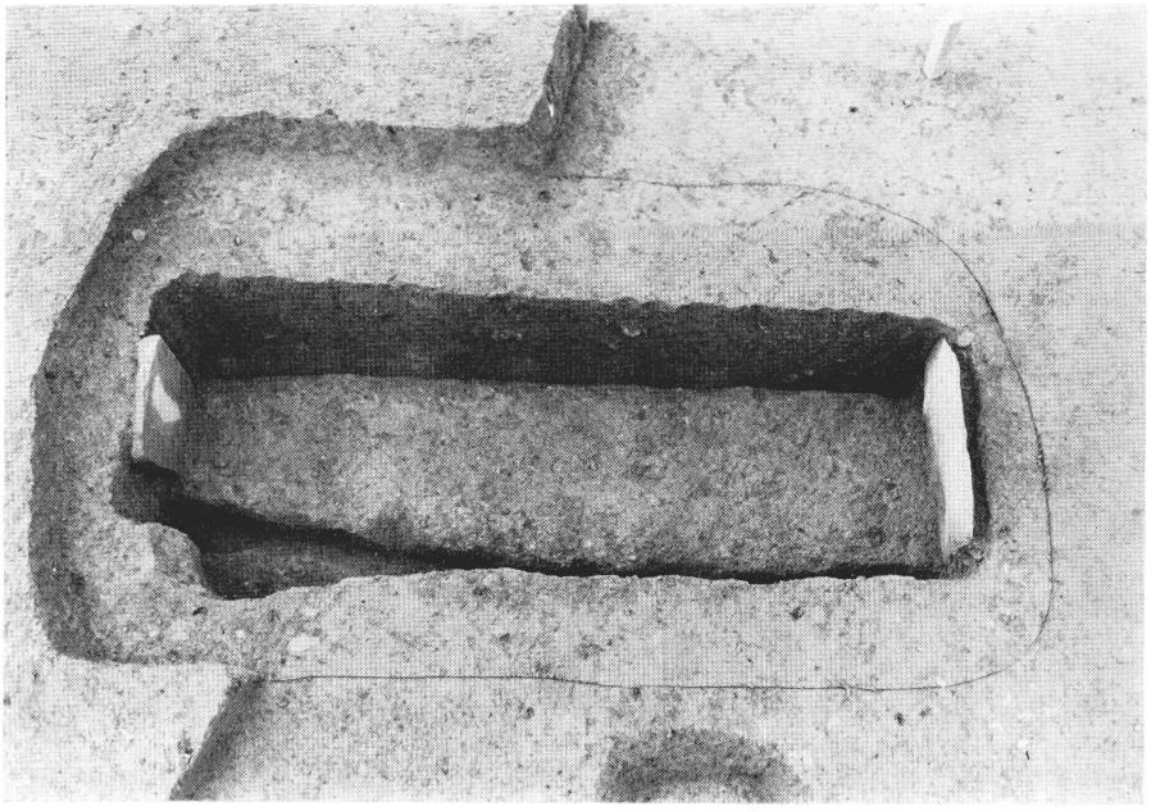
1　　天神の上遺跡標石出土状態（北から）



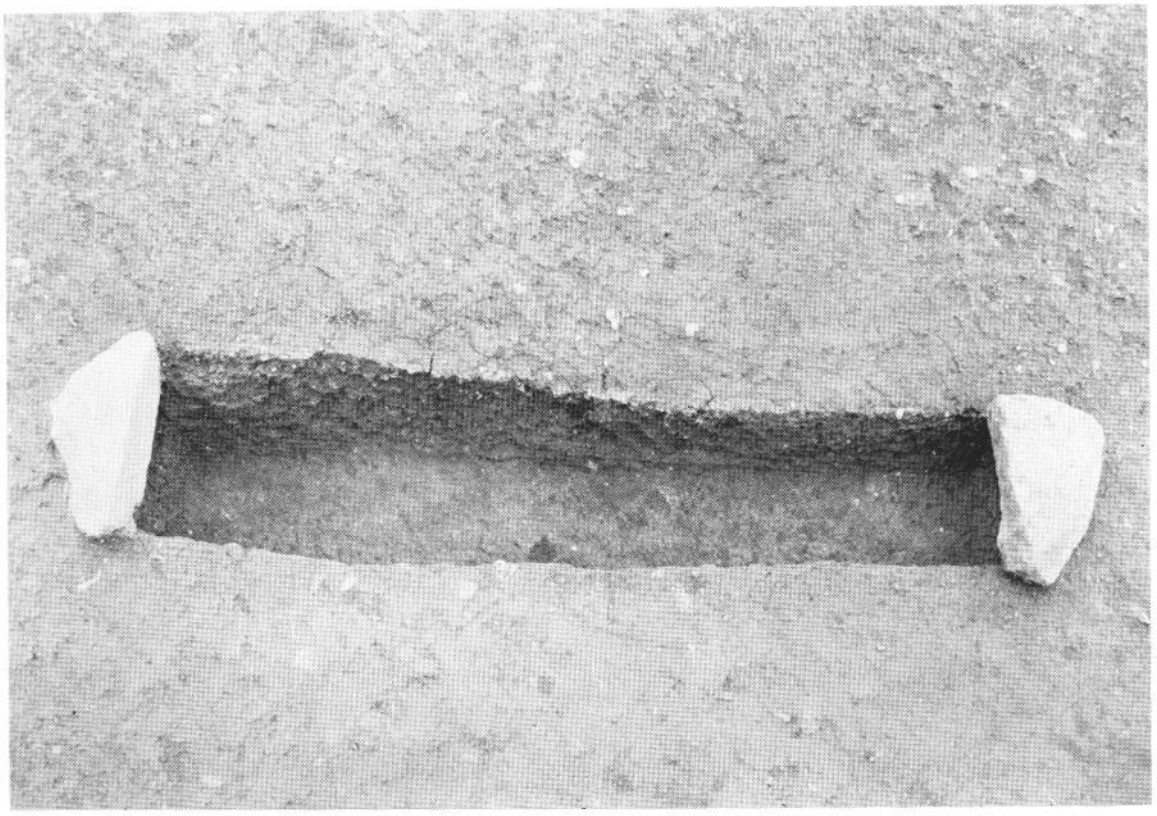
2　　天神の上遺跡調査区全体写真（北東から）



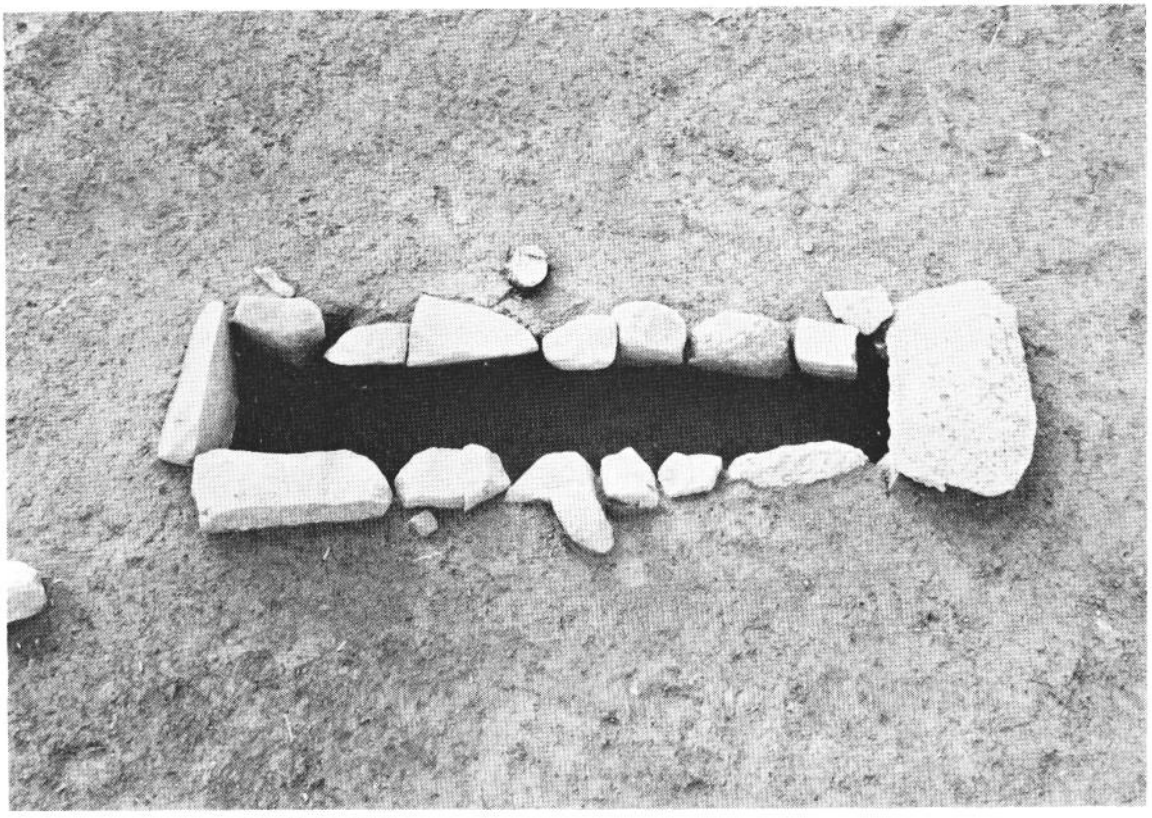
1　　1号木棺墓



2　　1号木棺墓

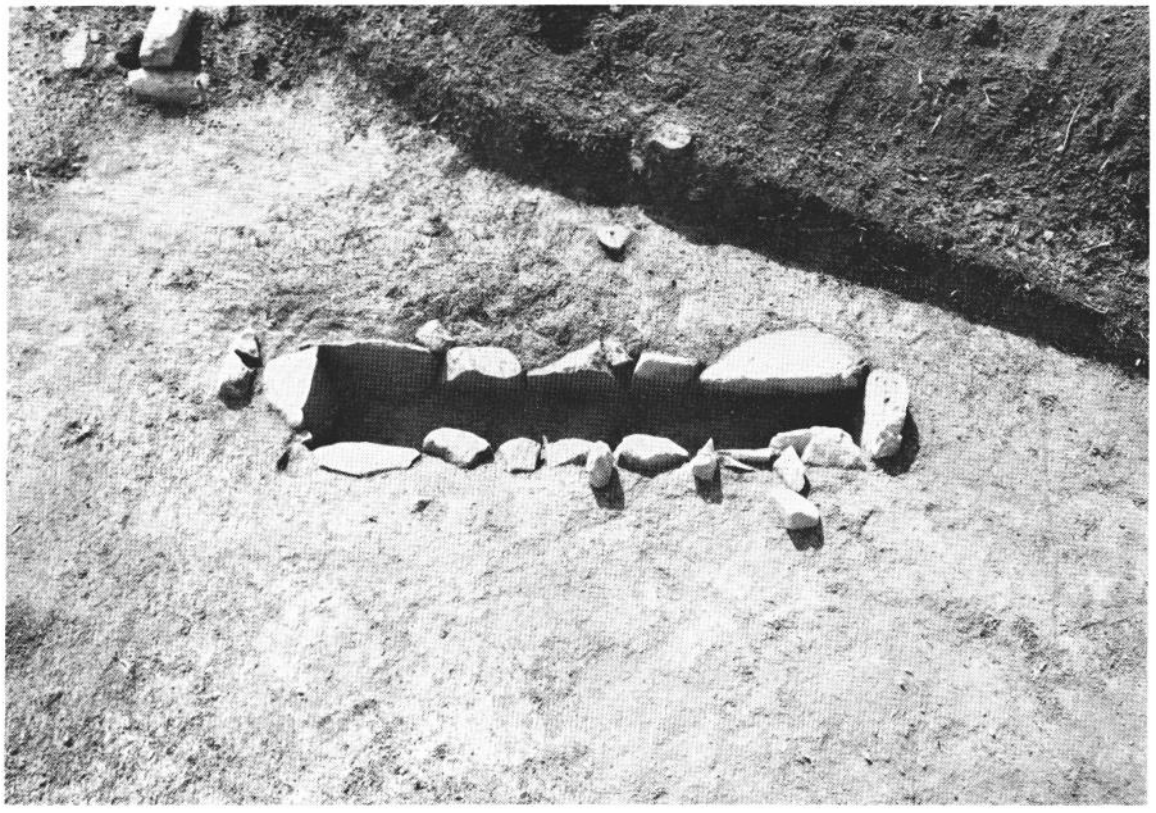


1　　3号土壙墓



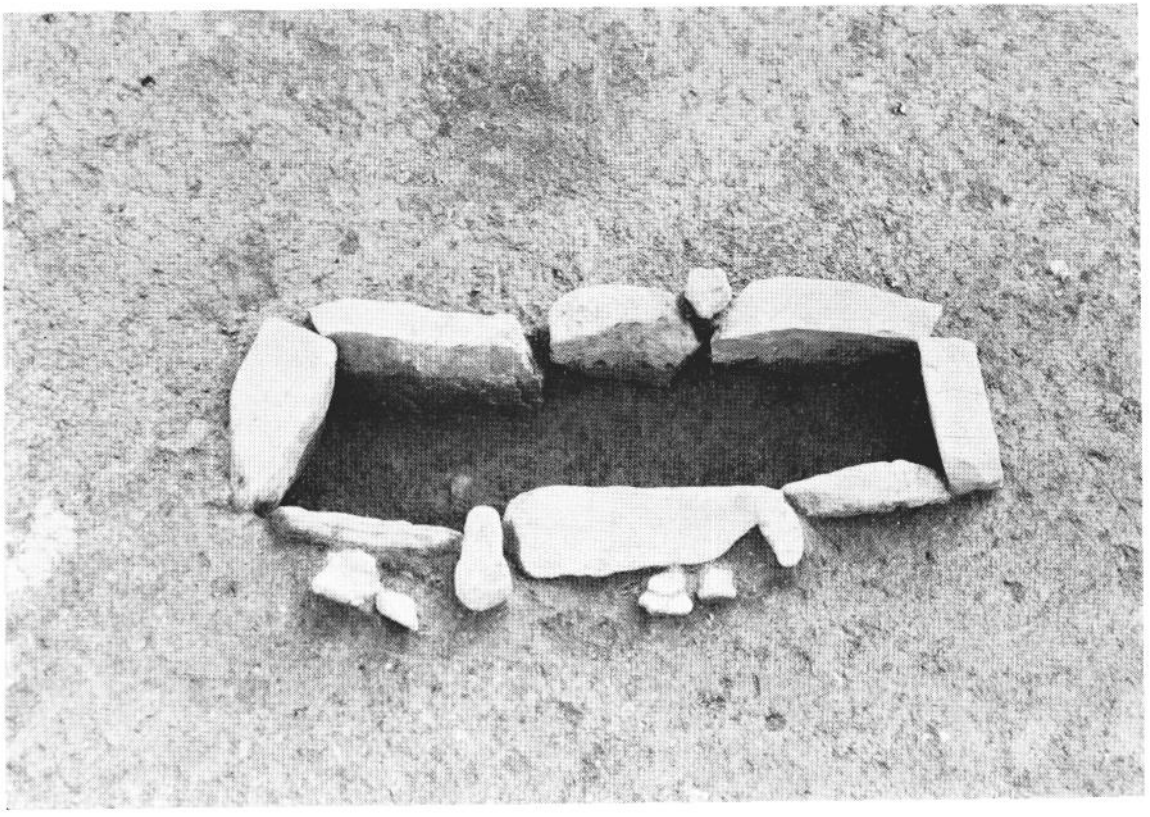
2　　1号箱式石棺墓

1　　2号箱式石棺墓

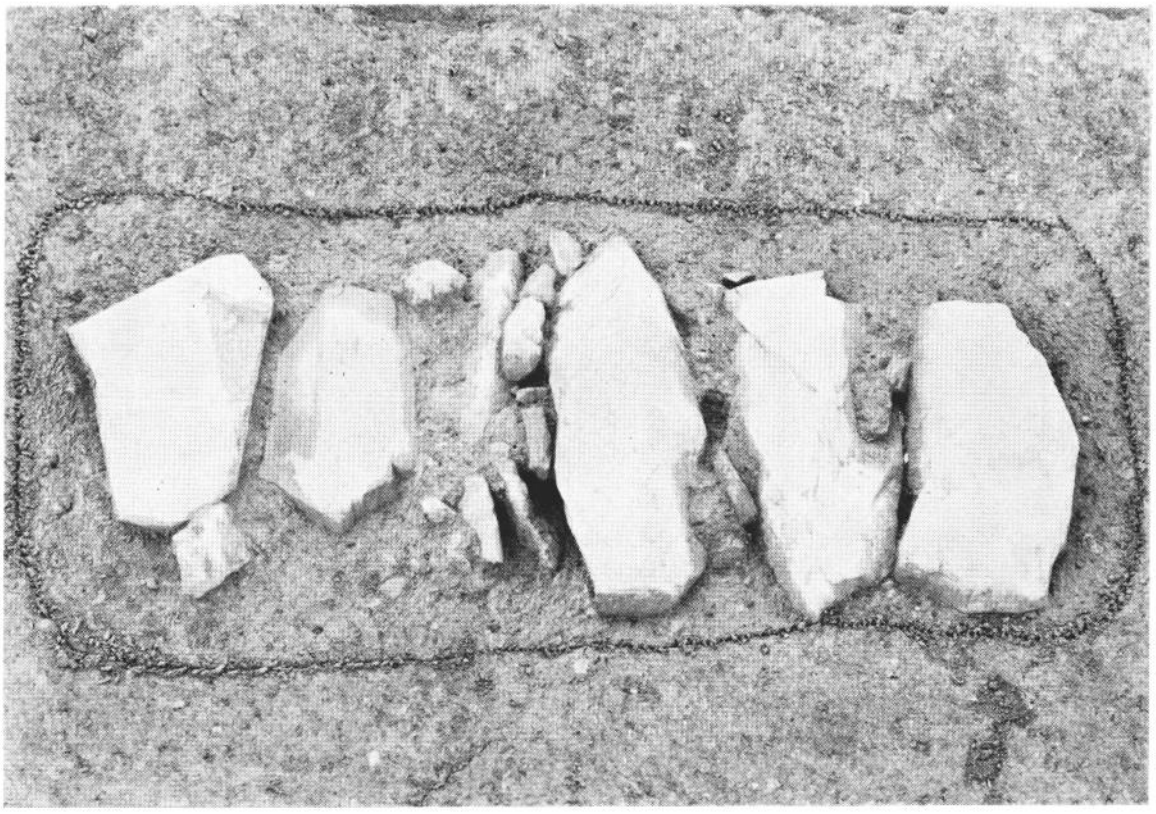


2　　2号箱式石棺墓

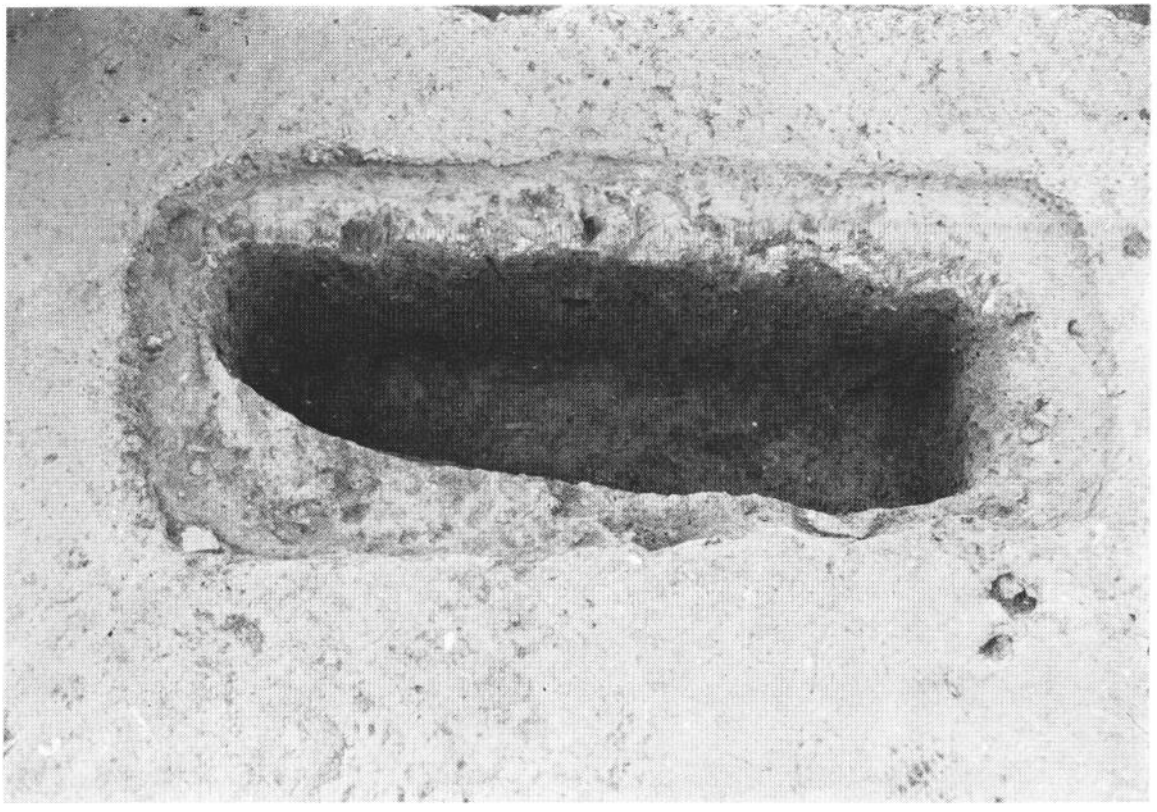
1　　3号箱式石棺墓



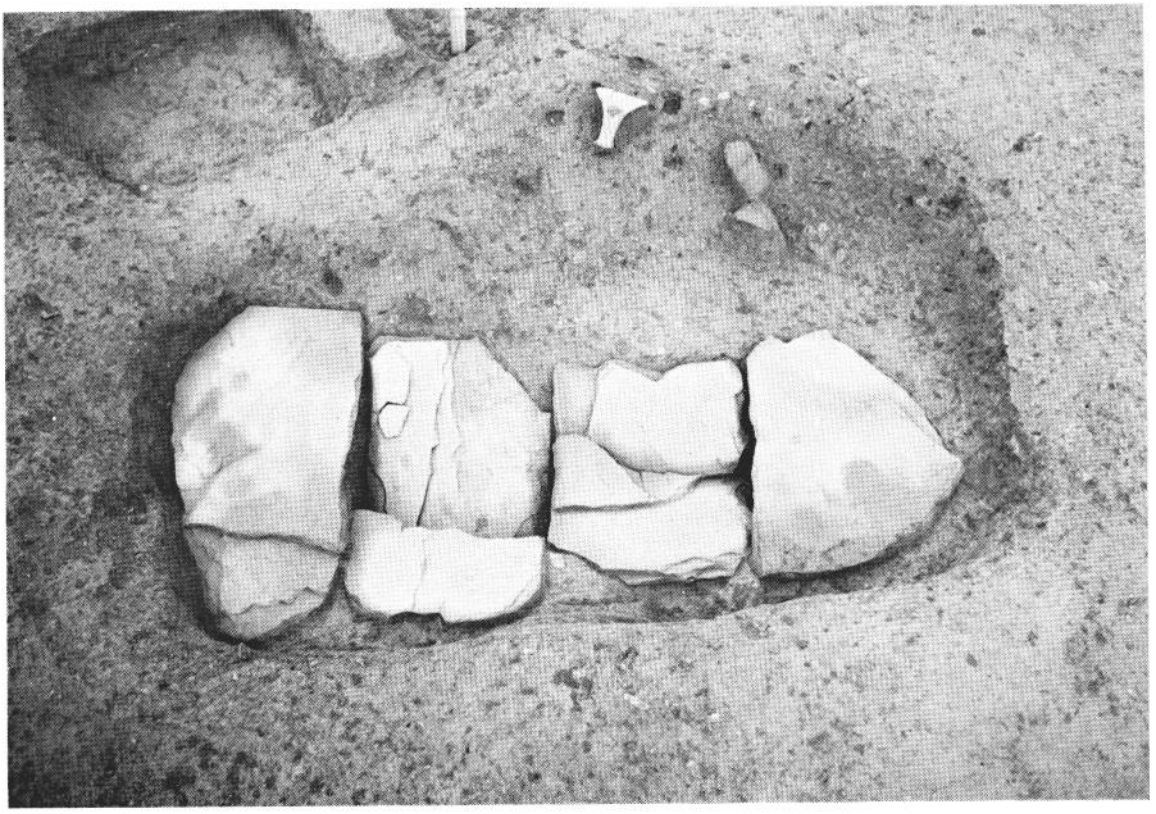
2　　3号箱式石棺墓



1　　1号石蓋土壙墓



2　　1号石蓋土壙墓

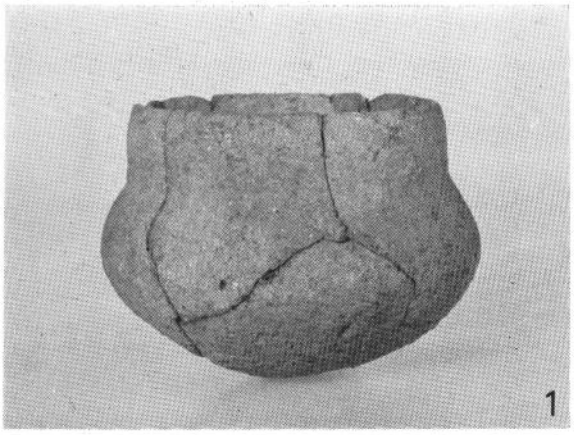


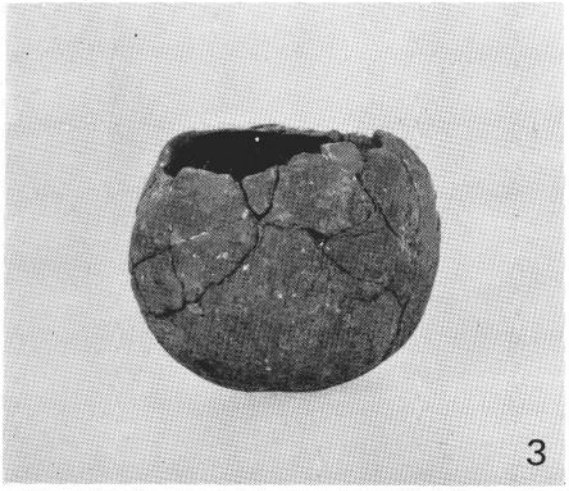
1　　2号石蓋土壙墓

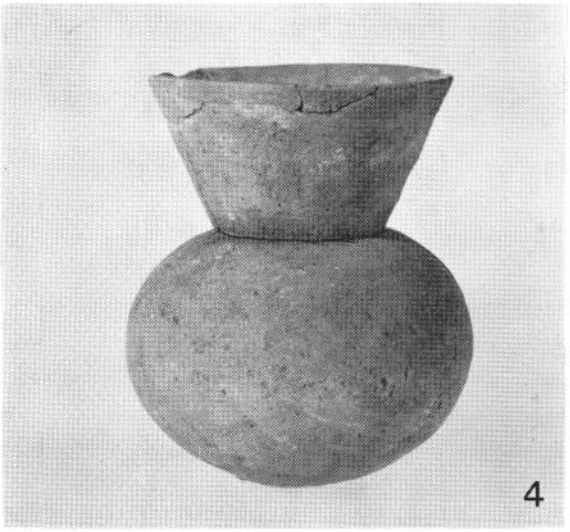
2　　2号石蓋土壙墓

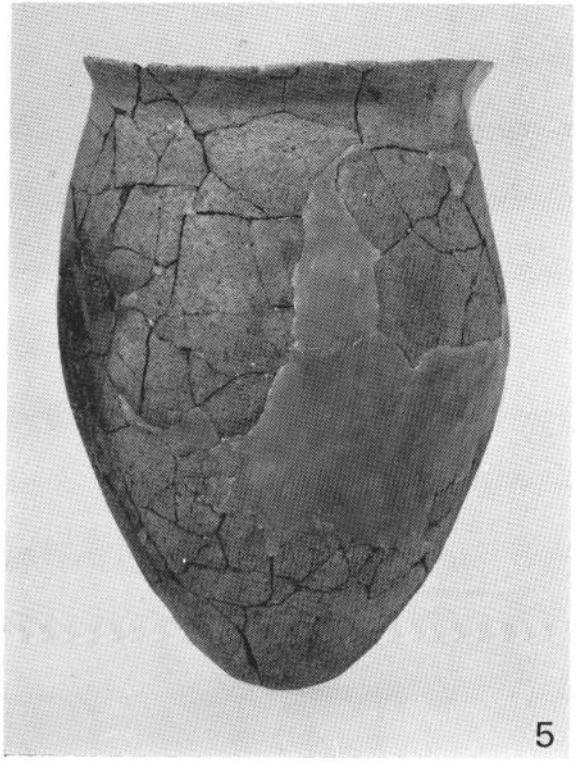
1　縦貫道関係調査地点航空写真（南東から）

2　縦貫道関係調査地点航空写真（北から）









汐井掛遺跡出土土器

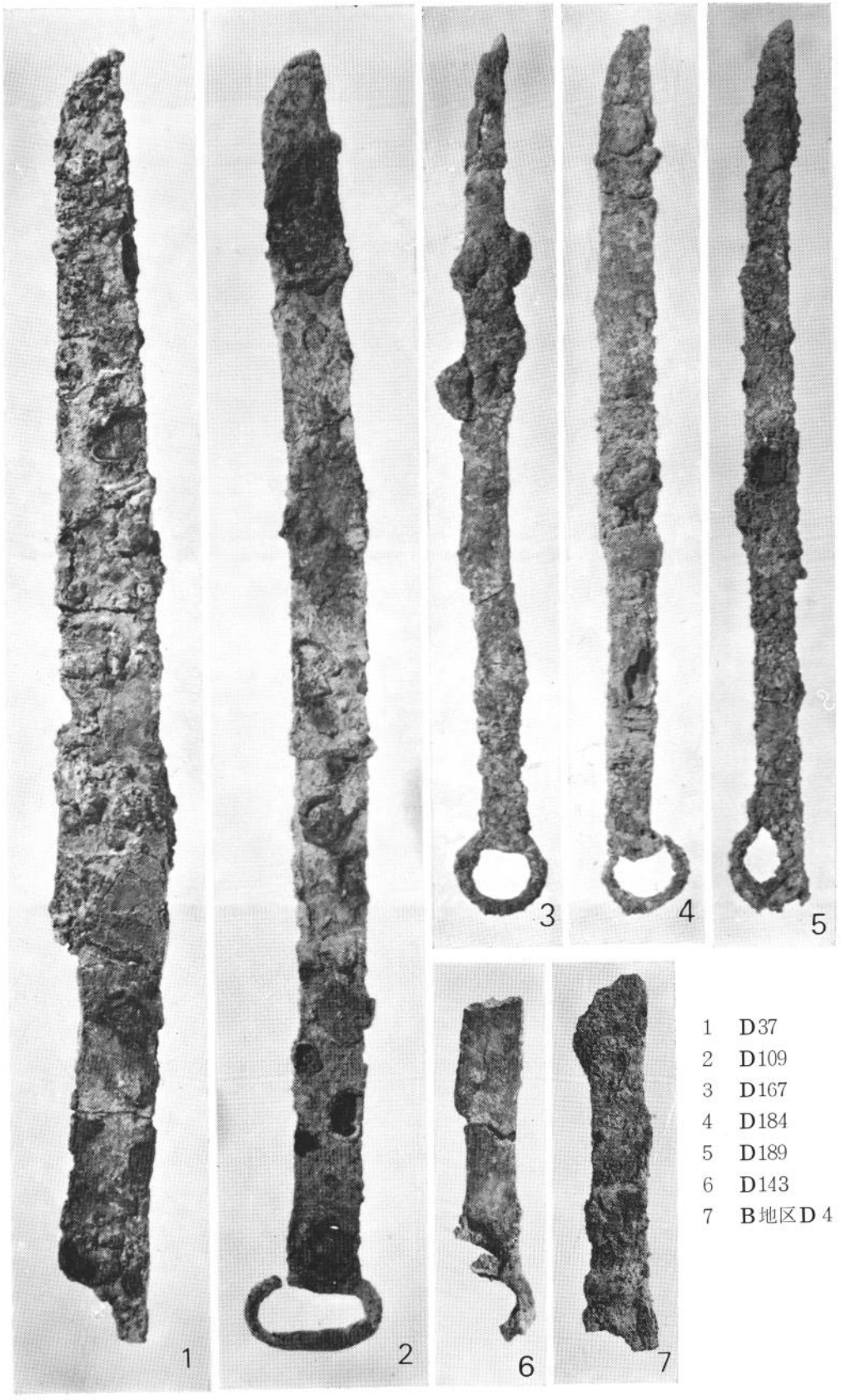
1　D219墓壙上面出土

2　D64北西側出土

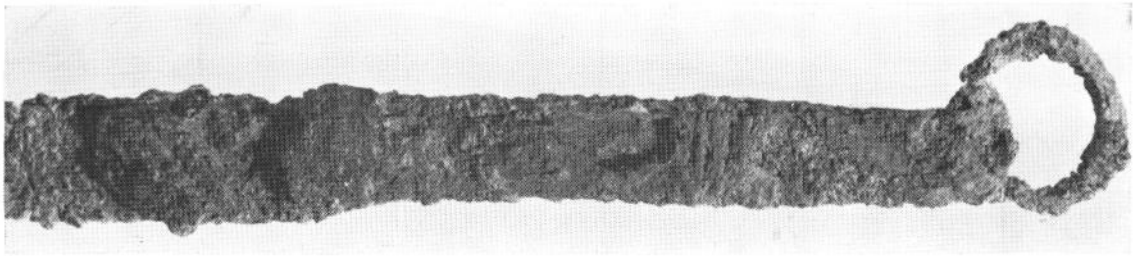
3　K 1 出土

4　K 1 出土

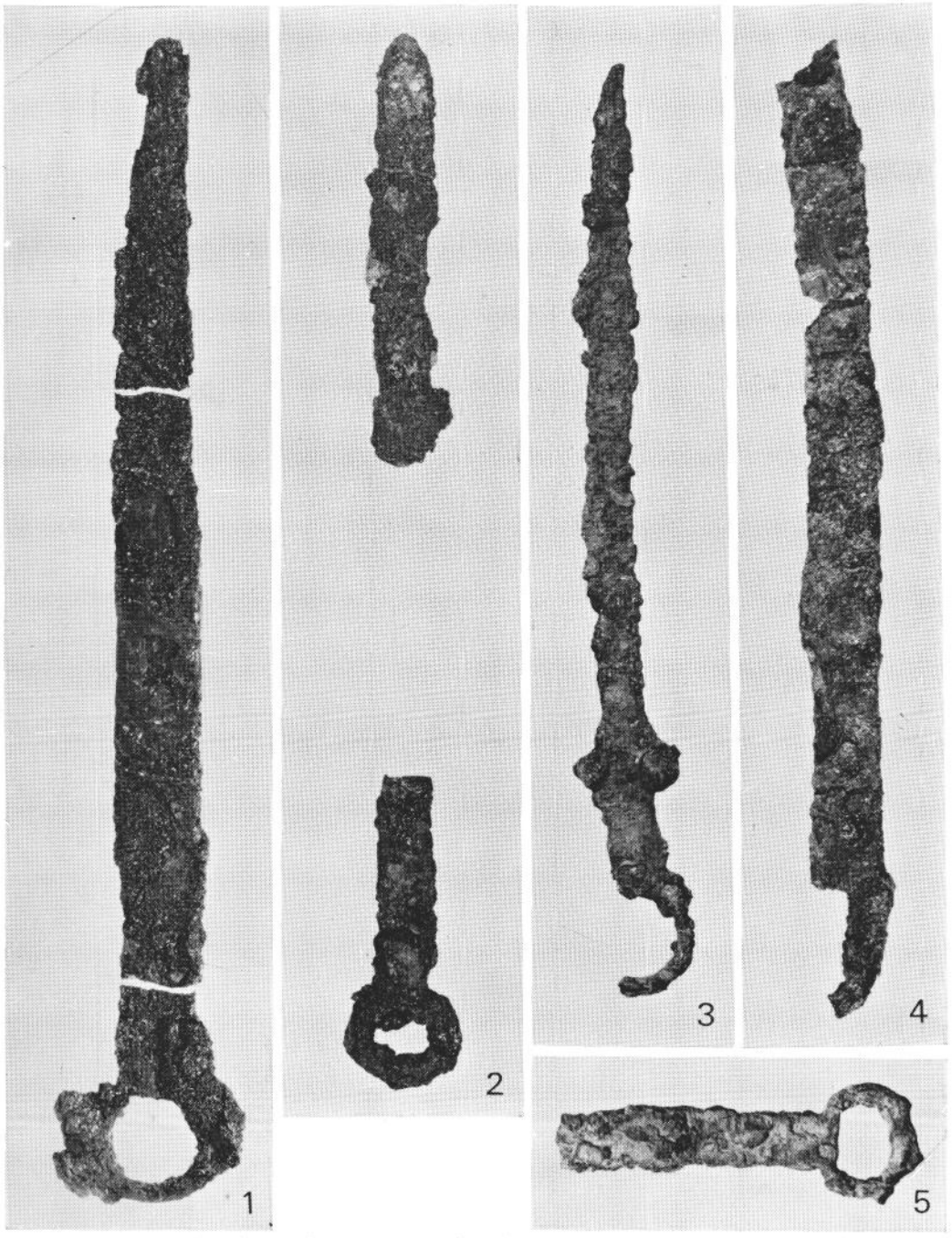
5　K 1 下甕



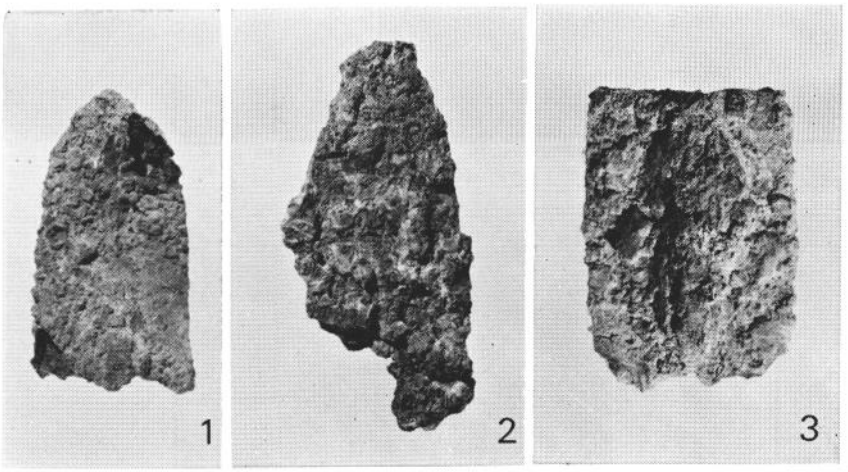
1 D37
2 D109
3 D167
4 D184
5 D189
6 D143
7 B地区D 4



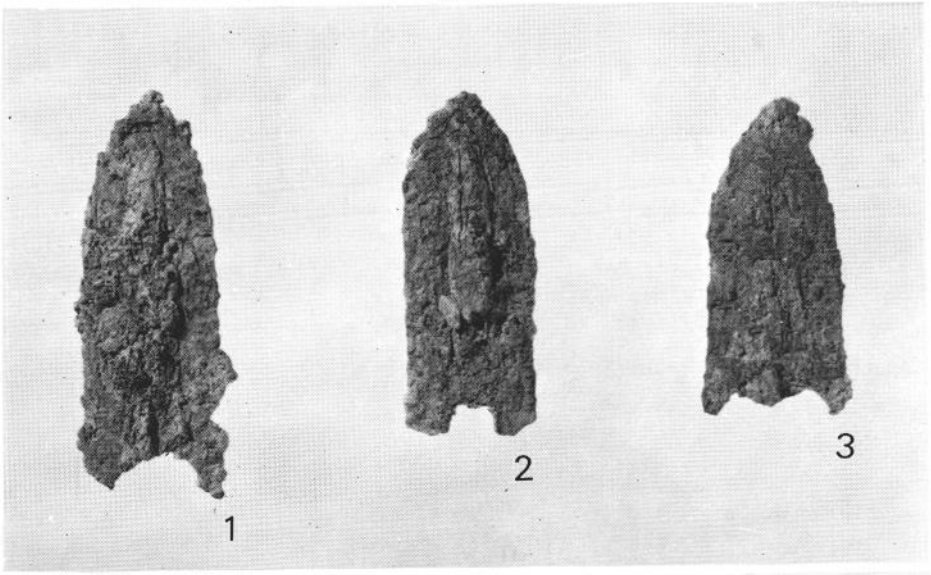
D184出土素環頭刀子把部拡大写真

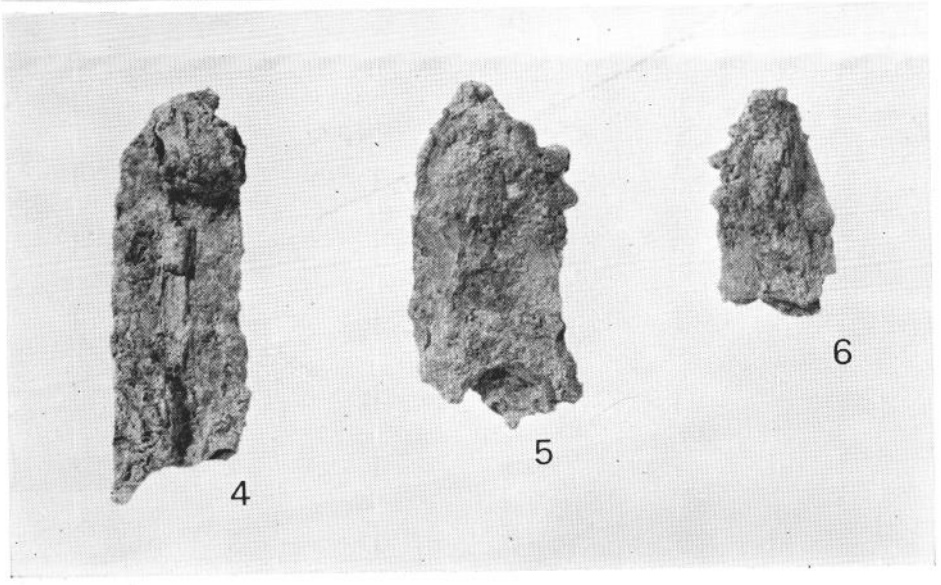


1　北九州市郷屋遺跡　　2　甘木市山田　　3　京都郡松本　　4　行橋市松本
5　田川郡松木

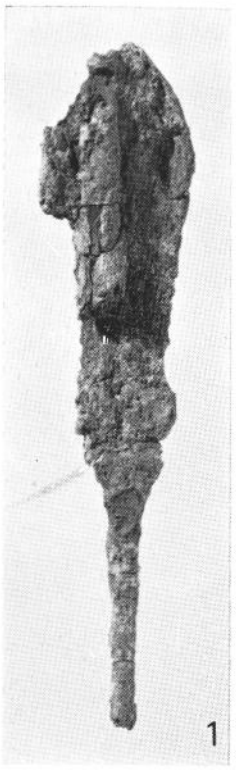


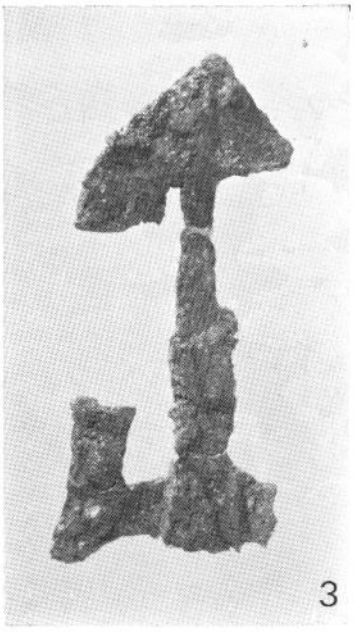
1　D79出土
2・3　S22出土

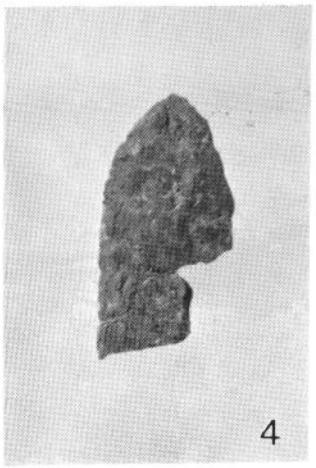




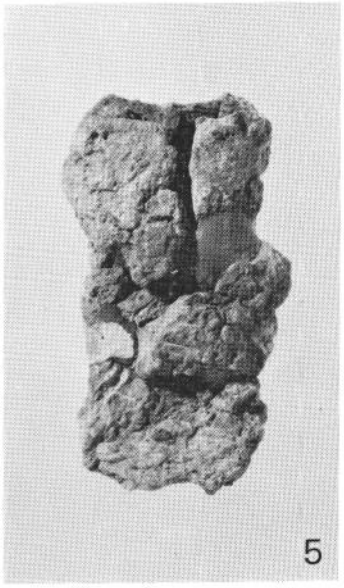
1～6　D147出土

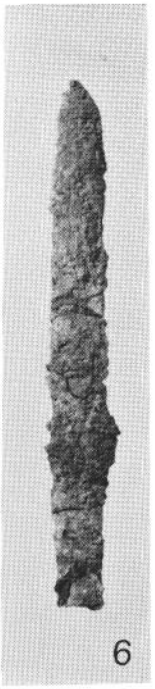


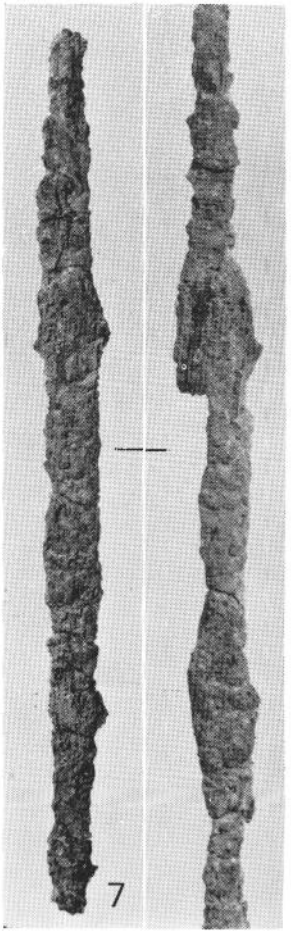


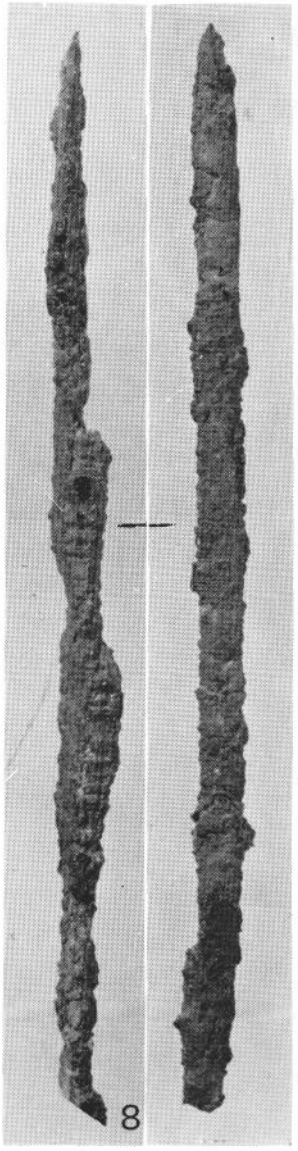


1・3　D162出土
2・4　D169出土

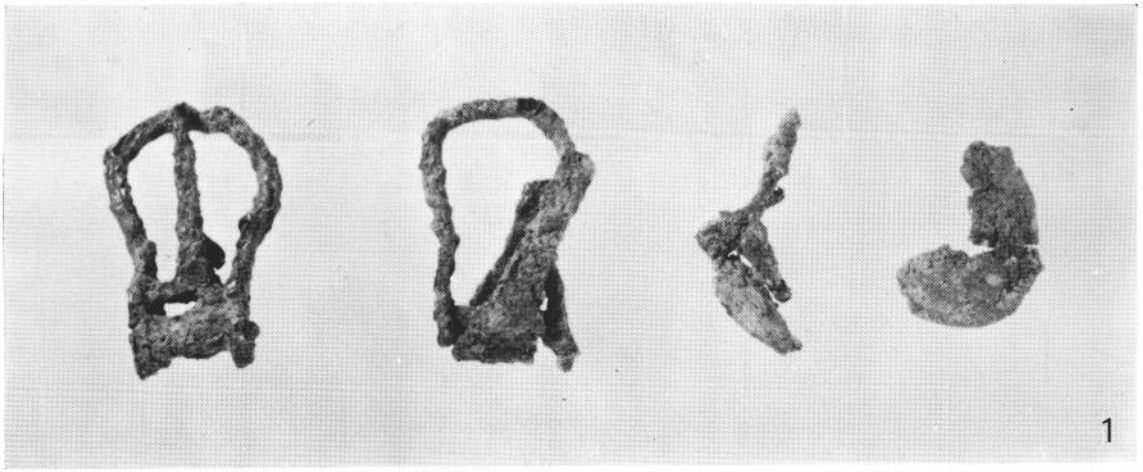


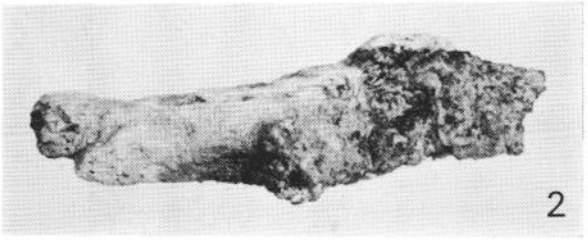


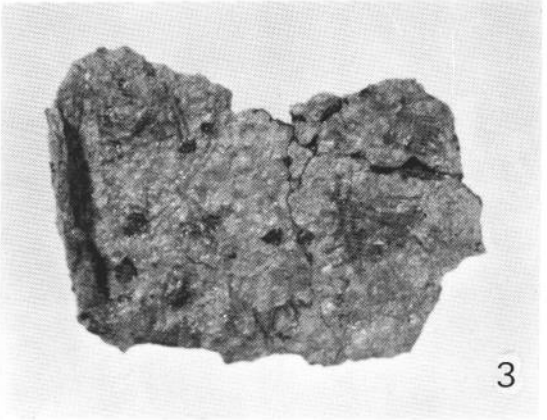




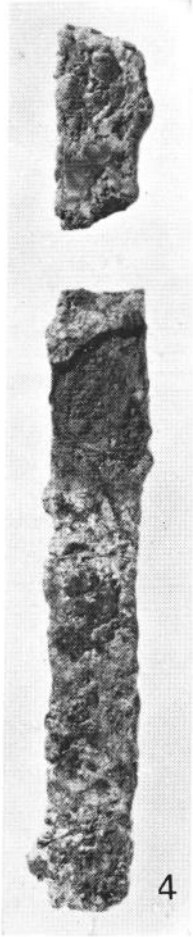
汐井掛遺跡出土鉄器
5　表土
6　D168出土
7　D175出土
8　D 76出土

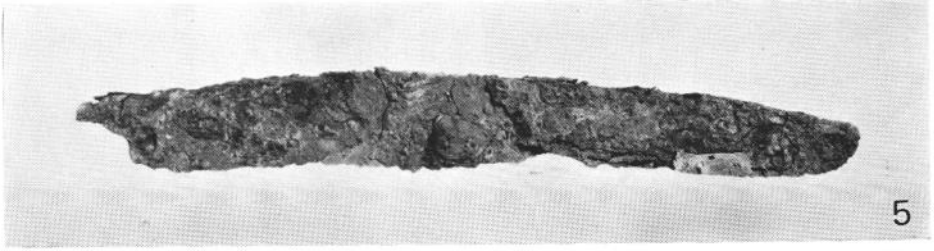


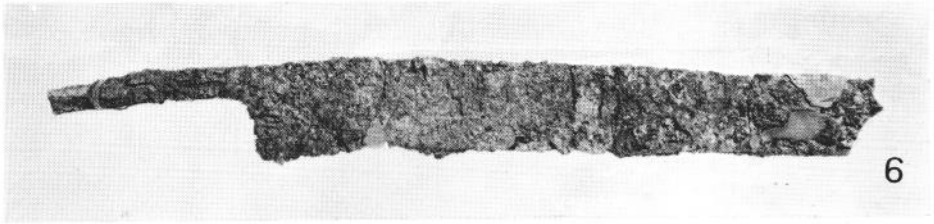


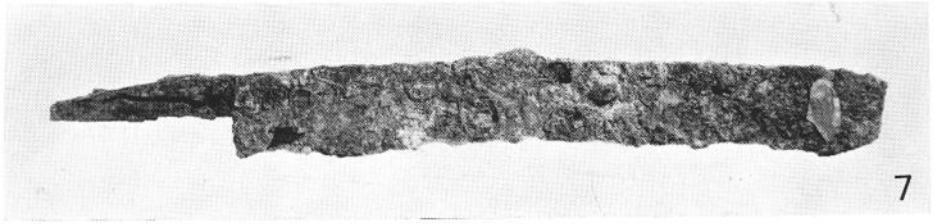


1　D 200出土
2　D 196出土
3　D 219出土

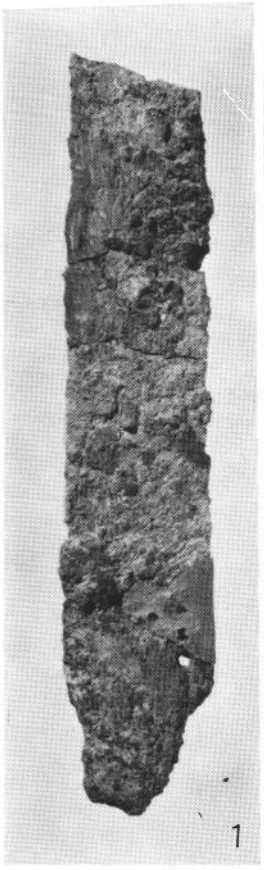


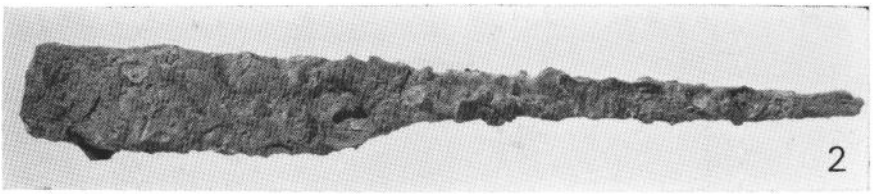


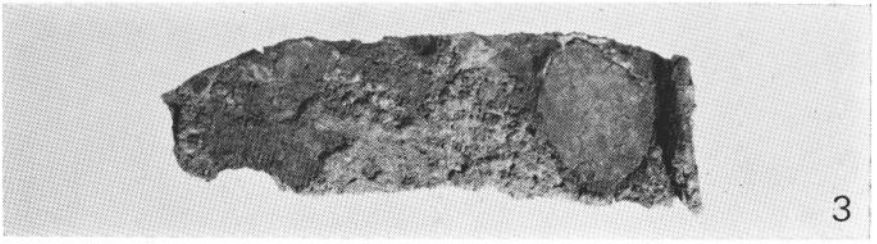


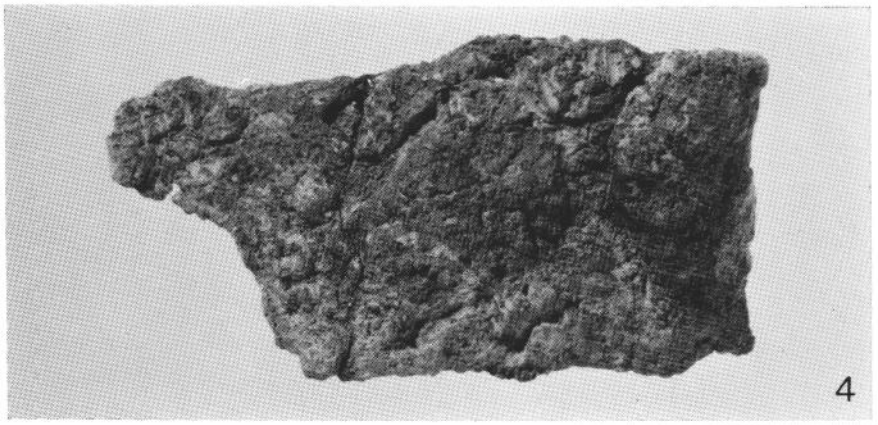


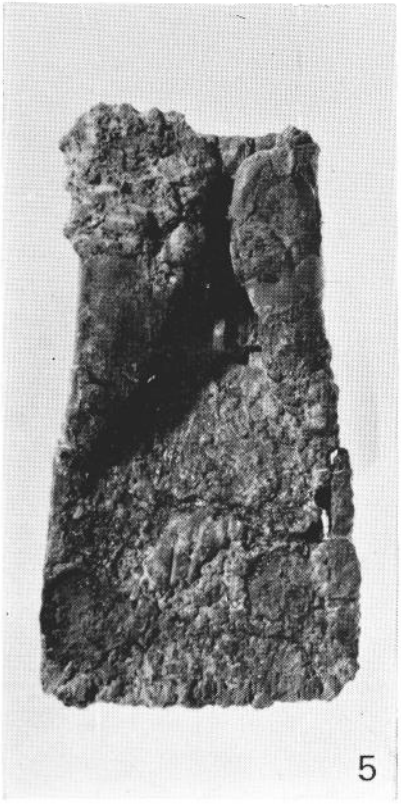
4　表土　　5　D35出土　　6　B地区D８出土　　7　B地区D14出土

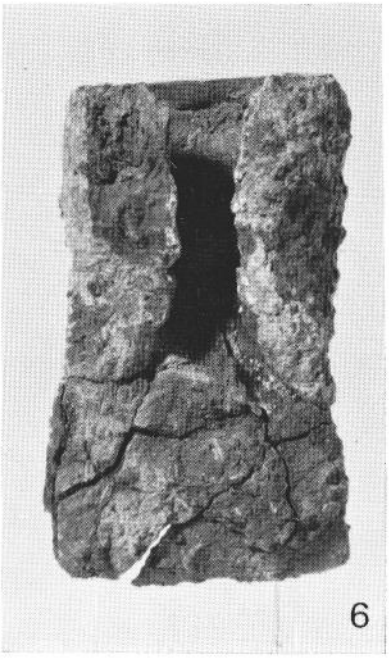






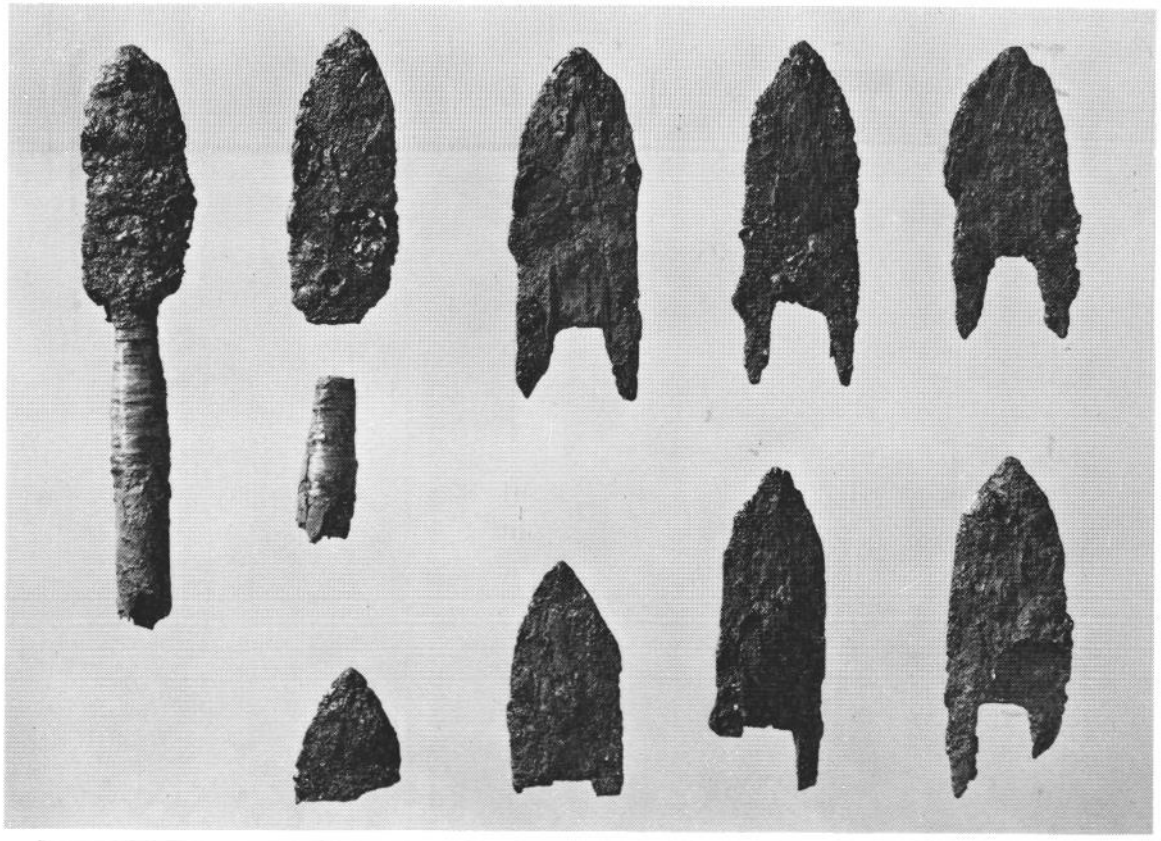


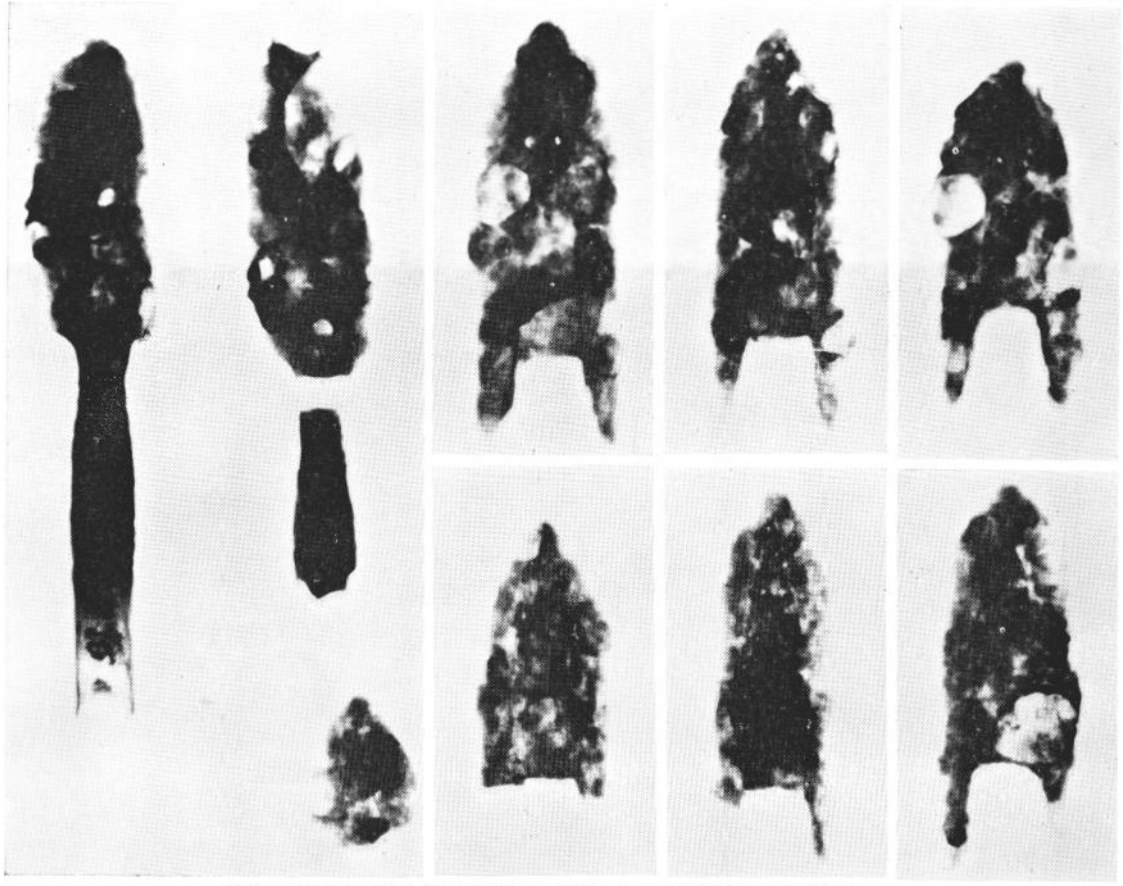




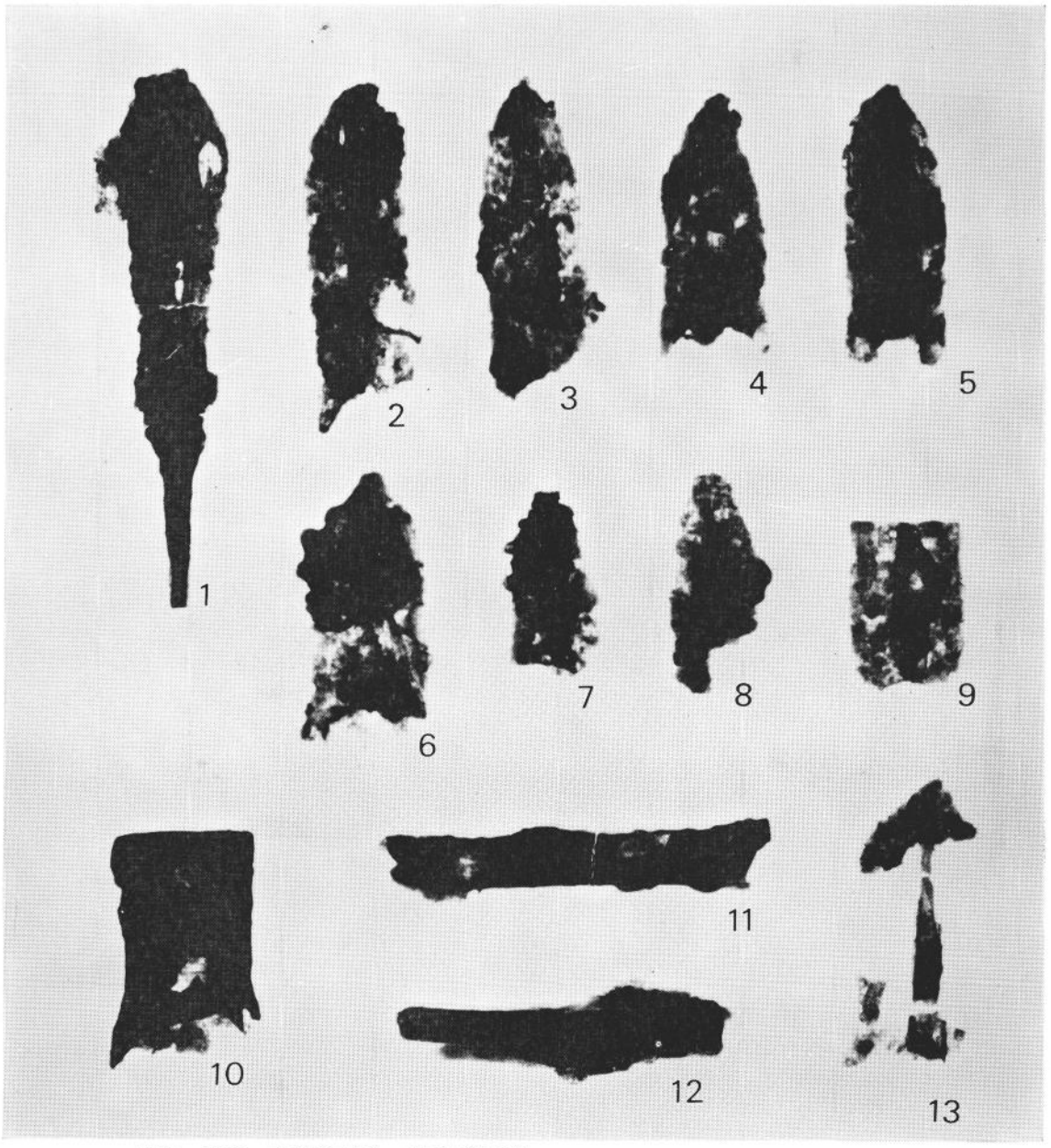
1　D90出土　　2　D76出土　　3　D143出土　　4　D147

5　D79出土　　6　D91出土　　7　S２・３の間

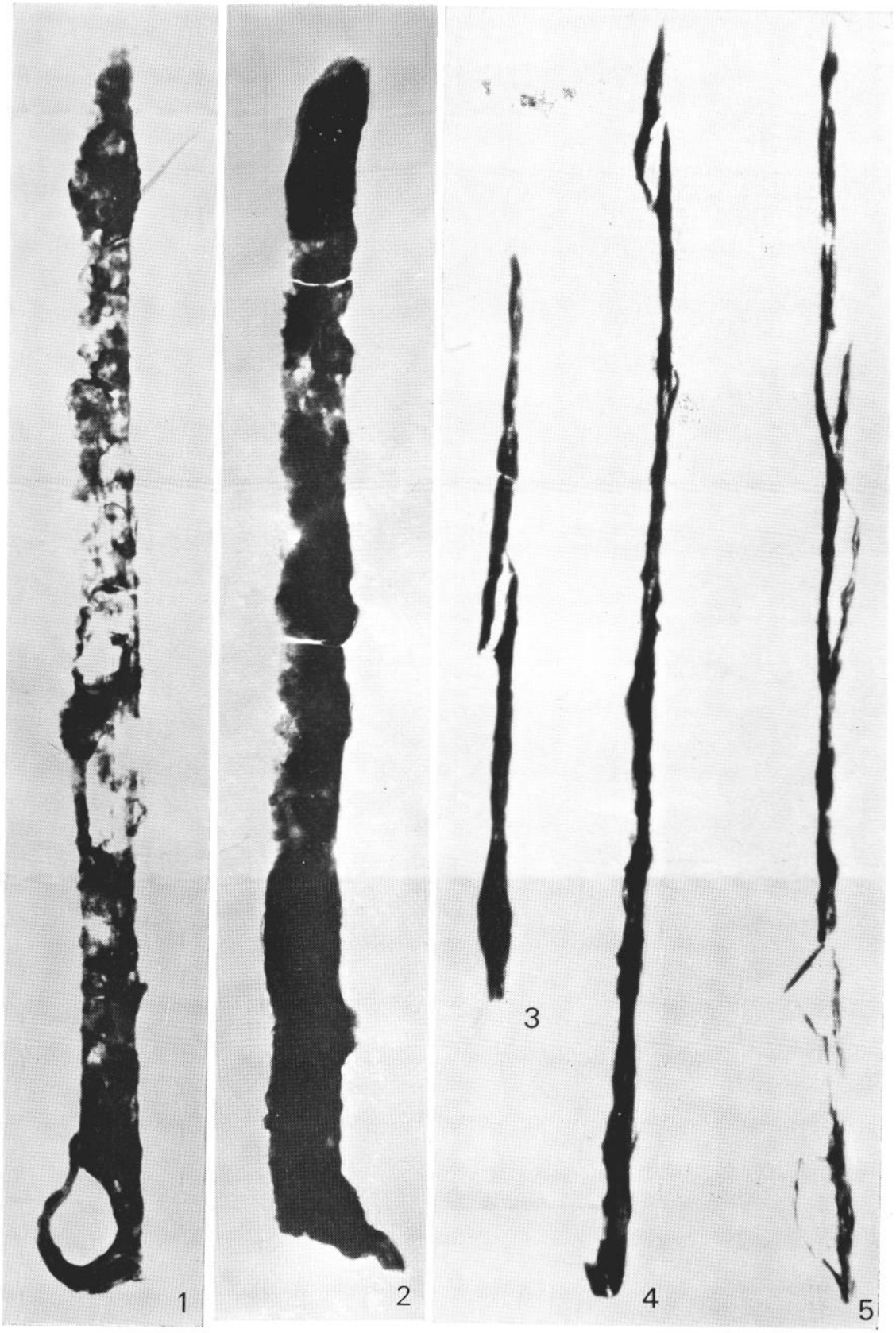




京都郡豊津町平箱式石棺墓出土鉄鏃（下はX線透視写真1/1）



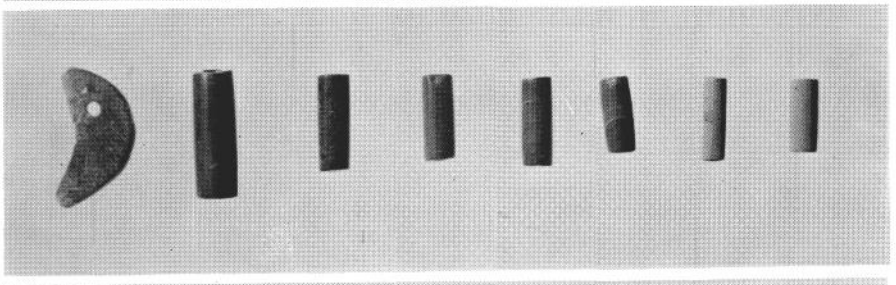
鈇鏃・鉄斧・素環頭刀子・刀子X線透視

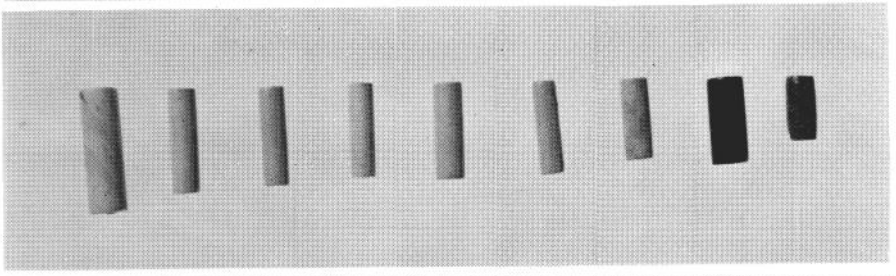


1　D189出土素環頭　　2　立岩遺跡36号甕棺出土素環頭

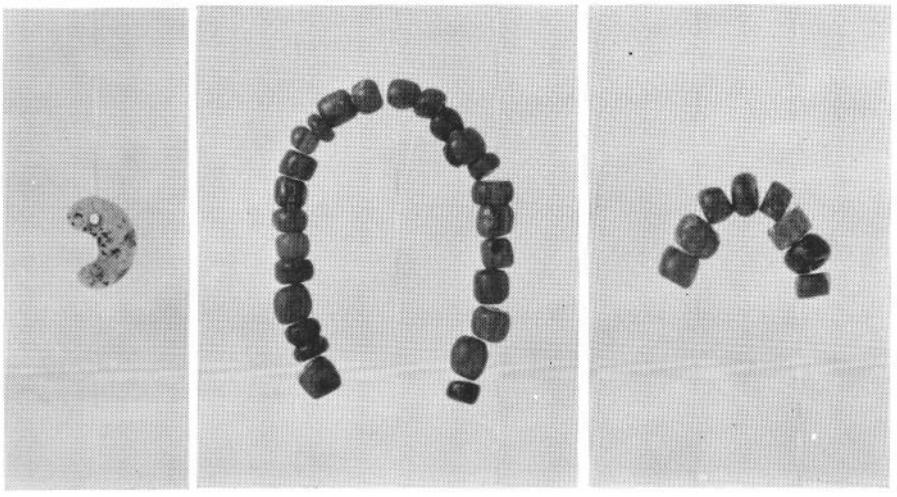
3　D175出土鉈側面　　4　D186出土素環頭側面　　5　D76出土鉈側面

D188出土
ガラス小玉

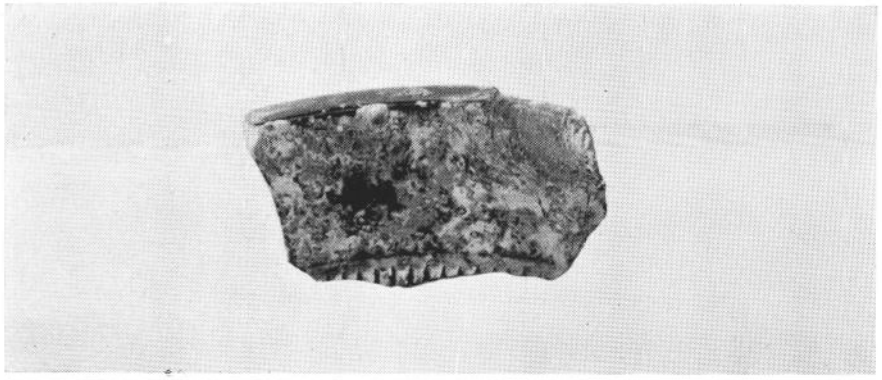




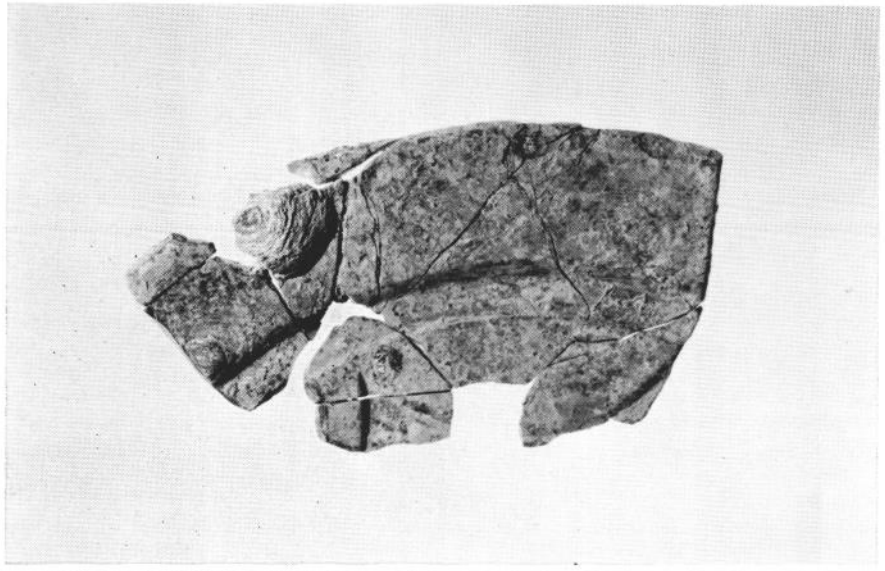
D224出土
勾玉・管玉



左　D176出土勾玉
中　S31出土
　　ガラス小玉
右　1D出土
　　ガラス小玉



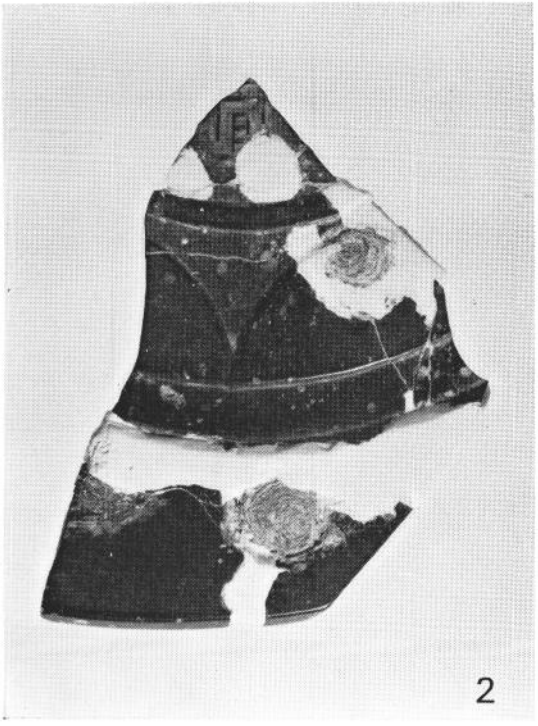
1　D175出土鏡片



2　D203出土
内行花文鏡片

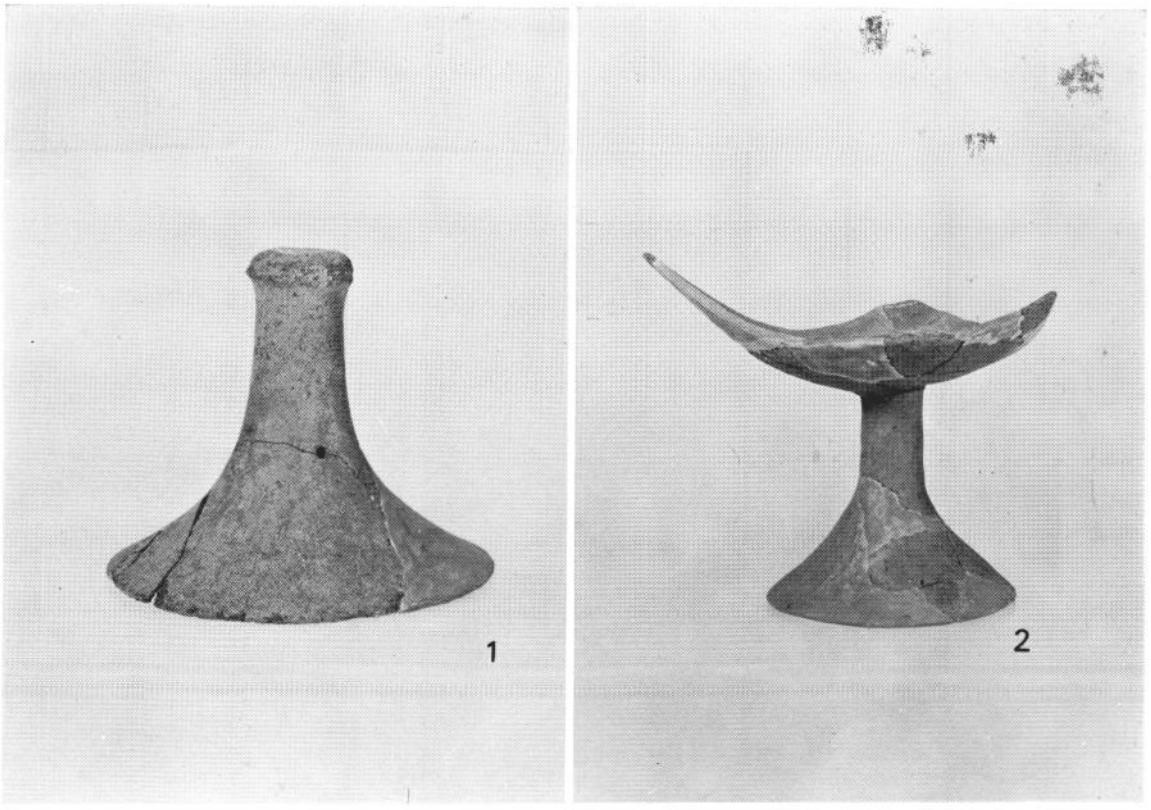
3　D186出土
小形仿製鏡

1　S 4 出土　　方格蕨手文鏡

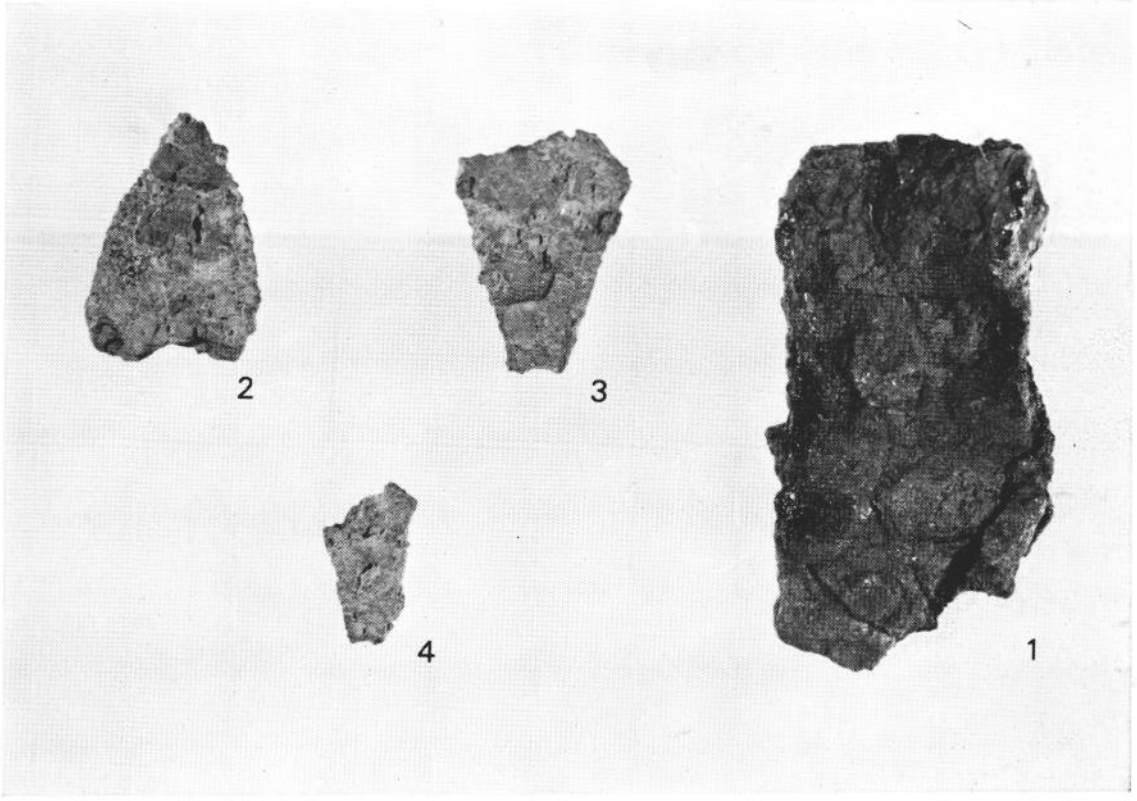


2　S 6 出土　　内行花文鏡片

3　D28出土　　飛禽文鏡

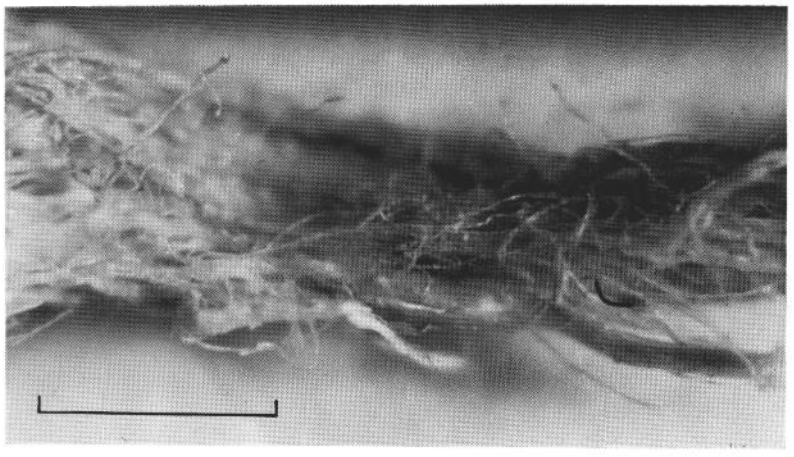


1　天神の上遺跡出土土器

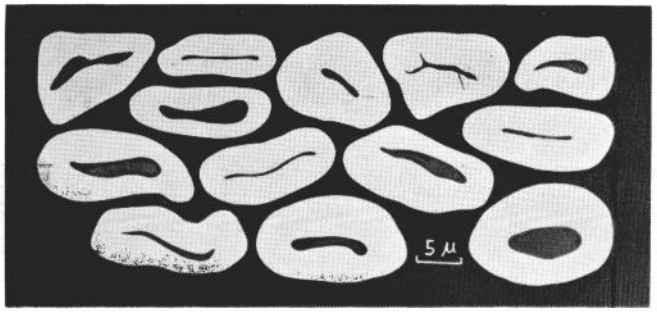


2　天神の上遺跡出土鉄器

1　D186出土鏡　鈕拡大写真



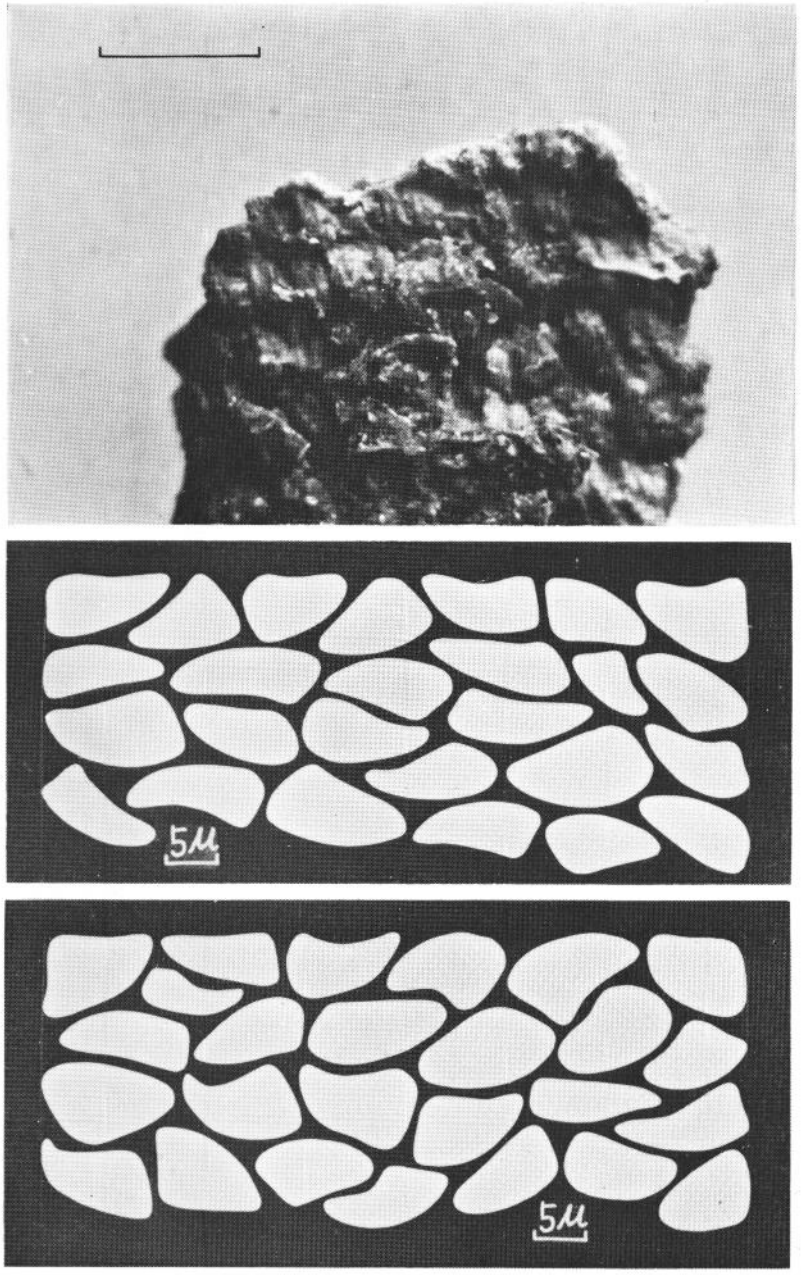
第1図
A　出土繊維製品の一部拡大
（ scale： 1 ㎜）



B　同繊維製品の
繊維断面転写図

付・図　版

図版　1

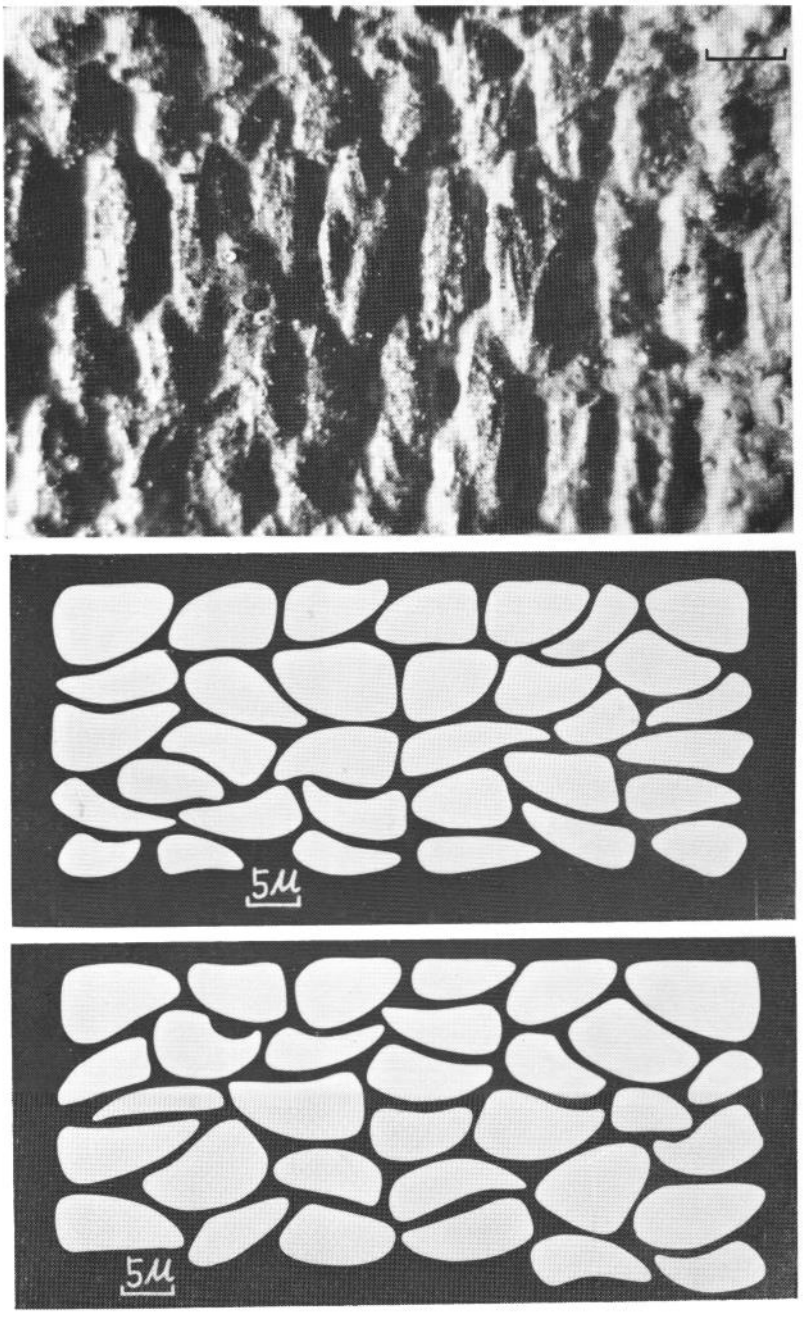


第１図　勝浦41号墳出土，半円方格帯神獣鏡面の平絹

A　鏡面の平絹　scale：１㎜

B　その経糸繊維断面転写図

C　その緯糸繊維断面転写図

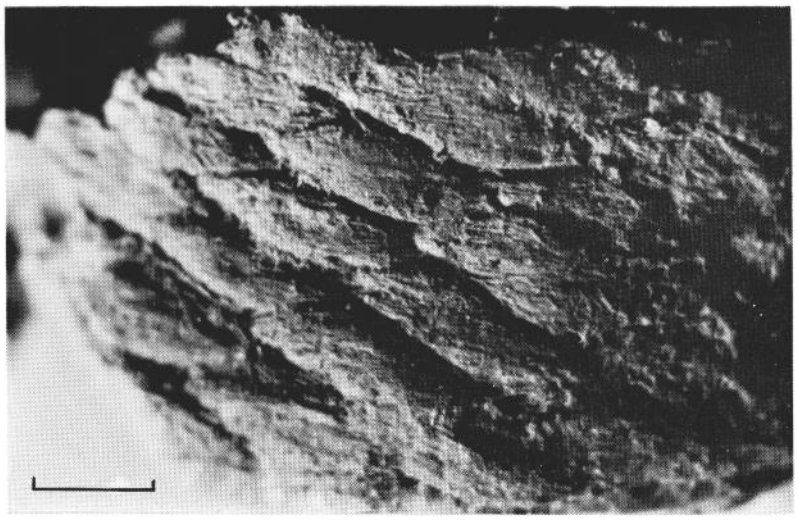


第２図　勝浦41号墳出土，太刀の鞘外面の平絹

A　太刀の鞘外面の平絹，　scale：0.1㎜

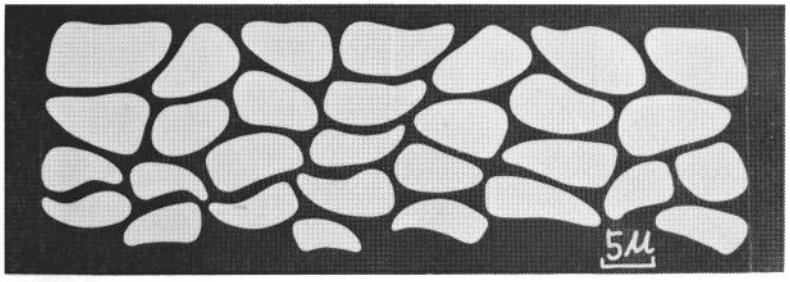
B　その経糸繊維断面転写図

C　その緯糸繊維断面転写図

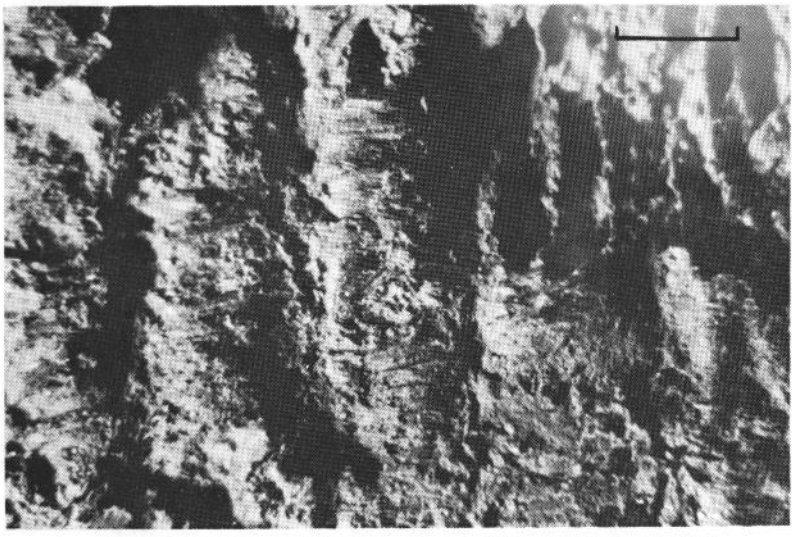


第3図
勝浦41号墳出土，太刀の柄外装の平織物

A　太刀の柄外装の平織物
scale：1 mm

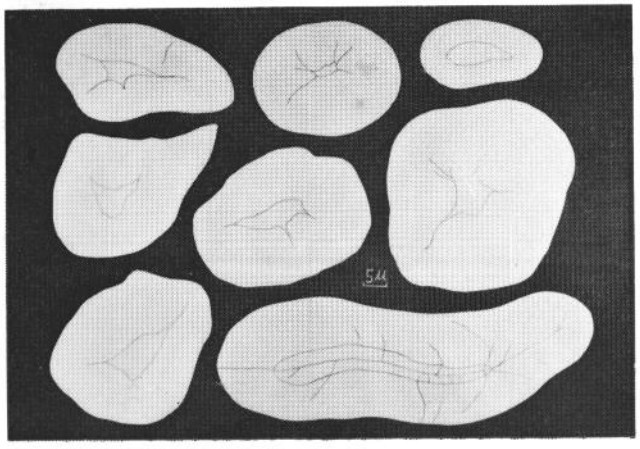


B　その経糸繊維断面転写図



第4図
勝浦4号墳出土，太刀の柄外装の一種の繊維製品

A　太刀の柄外装の一種の繊維製品，scale：1 mm



B　その繊維断面転写図

若宮宮田工業団地関係
埋蔵文化財調査報告
第 2 集
昭和55年3月31日発行
発　行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6-29
印　刷　㈱西日本新聞印刷
福岡市中央区天神一丁目4番1号